

# ピアノは私だ3 2017



裕イサオ

今晚はコンサート。コンサート当日はなにもやりたくない。ぼーとしていたい。当然にして暇だ。といいつつ駄目なのだ。私は働き者体質だからぼーとできない。なんかせかせかとやっていると気が済まない。でも、庭仕事ねえー、家の掃除、こっち方面はやりたくない。結局、7冊目の電子書籍を作った。特に理由もなく、なんとなく一回まとめましょうという感じ。第一、自分で読み返す気がまるで湧いてこない。

さっき気が付いた。どうして去年の3月13日の記事で前回の電子書籍がまとめられたのか。わっ、記憶にないのだ。なっなんと私はブログを閉鎖していた。どうしてなのか思い出せない。まあ、ブログ倦怠期みたいな感じだったのかしら？ そんなとこなんだろう。

私はどちらかという毎日更新系だ。別にどうでもいい記事を毎日書いてどうするの、あーた？ と自問自答はある。などといいつつ結局は書いている。これ、たぶん、酒煙草の世界に突入したと思われる。なんか半分飽きているところもあることはあるのだけれど、酒と一緒に飲んじゃえばルンルンしてくる。「新しく記事を書く」。これをクリックすると、まあ、だらだらと阿保のように書く。うーーん、以前にも書いたけれど、年と共に私はどんどんミュージシャン化している。脳内は音で一杯。そうだな、分かり易くいうとチェスプレイヤーとか将士が1日中、その一手について考えている感じ。こういう平和な脳みそに社会事象は入らない。嫉妬だのそういうものも入らない。どんどん好々爺になっちゃまっている。

「裕さん、今後の世界情勢の見通しは？」

「はい、sus4系じゃないかな」

「小説第十一作目のご執筆は？」

「ノントーナルの世界でトータルことやら」

「我々は若干グローバリゼーションに疲れて来ているのでは？」

「あっ、そうね、ジャズの世界ではあまりペダリングしない傾向がある」

と、やはり、ブログを書くことにより……。日本語忘れちゃったあー。平仮名しか書けない。なにを言われてもニコニコ。こういう禁治産者になる速度が若干遅くなる。と思う。

あっ、そうそう、ついでにブログの総タイトル、テンプレート、サムネイルもすべて変えて心機一転とチラッと思ったのだけれど、テンプレート管理画面を開いただけでやり方を忘れているし超めどう。第一、内容が変わらんものだからタイトル変えてどうすんの、あーた？ となった。やだねえー、親父になると辛気臭くなるだけで新規ってないんだね。

昨晚、まあ、二十席ぐらい作っとけば大丈夫だろうとシャ・ノワールの会場セッティングをした。わっ、お客さんが座り切れない。いつの間にか奥の長椅子が追加されて会場が一杯になっている。一セットが終わった。通常はこれで終了。お客さん、だれも席を立たない。短い休憩。結局、二セットやった。聴きに来てくれた方々、半分以上がミュージシャン。

気心知れたオリビア。サクスのモーガンとは初めて。そして、モーガンが一度だけ共演したことがあるドラムスのデニスを連れてきた。この突然の混合ユニット。しかし、我が師匠沖至がぎゅと締めてくれた。「なあ、イサオ、俺たちな、若い連中にチャンス作って上げんとな。クールクール」と凄い演奏をして下さった。ヤマハの一番安いアップライト、しかもマイクなしでの対抗は当然にしてしんどかった。久しぶりに演奏しながら汗を掻いた。ピアノが揺れ捲り倒れそうだったらしい。しょぼいピアノだからマッコイ・タイナー張りにギンギン演奏したのだ。

シャ・ノワールのバー。ミュージシャンに占拠。打ち上げ。いやあー、ありがたいことに皆口を揃えて「すげえー、演奏だった」と言ってくれた。トランペットの吉田ケイとベースの鈴木ケンタローも聴きに来てくれた。ケンタローさんドラムスのデニスを気に入ったらしく名刺交換。こうやって仲間の輪が広がっていく。ケイさんとオリビア、モーガンはすでにトリオのコンサートが入っている。いい感じだ。

ケイさん、ケンタローさん、「イサオさん、もう、俺たちもここまで来たらやるっきゃないすねえー」。俺はニコニコして頷いた。

もう少し温かくなったらサンラザール駅構内のピアノとオリビアのベース。ケイさんのトランペットでワールドオーダー張りのビデオを作ることになった。若干、「売名」という感じもするのだけれど、パリの人込みの中で絶滅寸前のフリージャズをやるとどうなるのか？ なんか実験してみたいのだ。あんまいつもアンダーグラウンドにいると吸血鬼になっちゃうからね。

先日のコンサートビデオを添付するのだけれど、1時間半。白熱の一夜。ジャズ、フリージャズファンの方が聴かれたら興味深いのかも知れない。そうでない方にはどうなのだ？演奏者も聴衆も皆でハイになっているからいい演奏だったはず。ご興味ある方はご視聴頂けると幸甚です。ステレオ接続かヘッドホーンで。パート1、パート2、最後におまけ映像でコンサート後の盛り上がりのドキュメント3分ぐらい。これはたぶんどなたが見てもおもしろいと思う。パリのライブハウスの蠢きみたいなものが良く映っている。こういう突然の混合ユニットはしばしば凄い演奏になる。なんか未知数の激突火花なみたいになるんだろうね。音楽的科学実験みたいな感じ。

ところで、なんども書いているのだけれど、シャ・ノワールのピアノは超しょぼい。それを弾く男も超しょぼい。演奏までしょぼいとしょぼいの三位一体。これではお話にならん。唯一、わたくしの肘から指先までは鍛え抜かれているから、「本体のしょぼさ」を十二分に乗り越えている。ありがとうっ！ 両腕さんたちっ！ 僕は君たちに支えられているう——っ！

だんだんと私のブログは酒煙草に近付いてきた。どちらも止めるつもりはないから酒煙草化ブログも止めない。今朝、起き抜けに馬鹿な、そう、私をモデルに長寿アイロニーのショートショートを書きたくなった。裕イサオ、御年、百二歳。医学界でどうして？ となる。もしかすると、酒煙草は長寿に有効？ うなわけねえー、とかやる。いや、待てよ。まっ、鍼じゃなくて、まさか、ピアノ？ そうして医学界の重鎮が裕イサオの「ブログの研究」。わっ、酒煙草と酒煙草化ブログに御ピアノ。この相乗効果が長寿の秘訣だったあー、たあーりりいいーんっ！ というアイロニーだ。正夢なんか？ もし、本当にそうなっちゃったら、ごめんね。次世代は裕イサオというパリの漬物石を乗り越えるというシビアな現実が待っとるぞっ！ げっ。

フェアリーさんの今日の記事の中にシャルル・ボワイエの一生が描かれている。私は、彼が自死したことを知らなかった。フランス人だ。カミサンの死後、二日後に自死。ジーンとした。なんか、私も同じことをするような気がばっちりとしたから、余計に突き刺さる。おしどり夫婦の末路なんだろう。本望だと思った。

これから、海老と肉の天ぷらうどんを作る。その前にピアノを弾いた。その前にカミサンと久しぶりに散歩してきた。後ろ姿を見ながら、ずっと、シャルル・ボワイエのことを考えていた。

会社を辞めて間もなく五年。私は五十三歳だった。息子が二十三。娘が二十一。娘の大学卒業と共に去った。私の定年。つまり年金生活。四年後である。辞める当時、「後、九年ぐらいがんばれんの？」という問いが脳内で木霊していた。私は元々アーティストビザでフランスに入国した人間である。会社、課長。こういうことを四半世紀。元々は美術家である。そして小説を書き、ピアノを再開した。「俺は折れねえー」ってずっと言っていた。それは今でも変わってはいない。でも、体力は折れている。これは無理というものだ。旦那、父親、美術、小説、ピアノ。その上に会社の課長。いくらなんでも集約するしかなくなった。美術は休止、小説も休筆……。旦那はやっている。父親は辞表。おっ、整理狂の面目躍如である。旦那とピアノしか残っていない。人生の断捨離は完了している。住宅ローンもピアノのローンも完済。残るのはシャルル・ボワイエとフリージャズ。フェアリーさんしか、たぶん、意味が分からないと思う。

会社を辞す時、六十二歳からなにか始められるのか？ という体力的な疑問があった。カミサンともなんども話した。無理だと。じゃ、今辞めんと先がないとなった。つまり、ピアニストとしての活動の布石を作るのは今が最後だろうという計算。そして、この五年間の収穫は私の技量、人脈、絶大である。正直、定年後の長い長い人生の布石に絶対になっている。別に長い必要はまったくない。でも、私の家系は長寿。医学的にも長寿シフトは作らないと「後が長過ぎる」。延命治療は結構だけれど……。ピアノが弾けなくなった時、競馬馬みたいに銃殺して頂いて結構。カミサンがいなくなった時は俺が自分で考える。

と、馬鹿阿保禁治産者フリージャズメンの俺は考えるのだ。考えていない？ 最低以下と申し上げる。ジャズメンの下にくんなよってっ！ 社会の屑だよ、俺。嫌味かしらね。

たぶん、親馬鹿記事となると思うのでパスして下さい。私的なことをブログに書くってどういうことなのか？ 実は良く分からない。

娘が起業中。工事、ドライバー、コンサート手配……。五年振りに「昔のリズム=多忙」。まあ、私は働き者だからいい感じと言いたい。けれど、やっぱ、年だ。体中痛い痛い。娘の前では、「ほっほほほおー、パパ、慣れてるから、ハードライフ、ほっほほほおー」なあーんてへらまこいて実はボロボロ。やっぱ、年なんだあー、裕さんもおーとローラの声が聴こえる。

トリニテ教会のすぐ横。トリニテ。三位一体のことだ。オリビエ・メシアンが六十年間常任オルガニストを務めた教会。彼はオルガンで「即興演奏」をしていた人。なんというユウコードなんだろうっ！ カミサンとへろへろになって工事している。娘と三位一体。

ちと、休筆。

お客様のご厚意で同じホテルに泊まらせて頂いた。普通は、ずっと格下のビジネスホテルに泊まるのが通例である。日本のお客様方は非常に丁寧で「運ちゃん」と呼ばれたことはない。「運転手さん」だ。そして、それさえ言わない方々も多い。「裕さん」。

西洋の脅威と呼ばれる海上のピラミッドにもっとも近いホテルである。広い寝室に広いバルコニー。愛煙家の私には感涙ものであった。イルミネーションに浮かぶ「その脅威」を私は初めて見た。もちろん、昼間はなんども見ている。

四百キロの運転後、ぼーとバルコニーで煙草を吸いながら見た。脅威というのか狂気のようにも思えた。信仰の力と恐ろしさ。干潮の泥の中をリヤカーで巨石を運んだ人々。狂気であろう。突然の満潮に飲み込まれる恐怖と表裏一体の重労働。しかし、フリージャズなんぞをいい年こいてやっている私には、その熱情はよく分かる。肉体的社会的時代的に当然にして比較対象にはならない。でも、どこかよく分かるのだ。

ガラス張りの寝室の向こうにはその脅威しかない。カーテンを閉めずに午後九時に寝てしまった。寝る前に左に首を傾げると脅威の建造物が視界に入る。フリージャズメンと添い寝してくれんの？ などと呟きながら熟睡した。



私がよく書く音楽的に言えばフレーズ「折れない」。どういう意味なのか？

当然にして、私は暴力は嫌いである。と言うより、撲滅した方がいい。肉体、精神的、いずれも私は受け付けない。私が受け付けないのだから他者に私が「それ」をする。論外である。テロも性差別もいじめも、究極の暴力。理知的でない人間なんぞ人間ではない。しかし、暴力へ対抗する理知はある。他殺は私は受け付けない。

フリージャズという音楽は暴力的な要素を多分に含んでいる。今日のように過労状態でピアノを久しぶりに弾いてみた。とめどなくエモーションが私の指先から鍵盤の上に零れていく。「私は折れない」と叫んでいる。一体、「なにもの」に叫んでいるのか？

具体的に書いてみる。私は一対一の暴力には一対一で対応する。人対人。殴り合いが残念ながら必要であれば選択肢がない。しかし、ぎりぎりまで回避の方向で対応するだろう。しかし、これも残念ながら私への暴力ならその方向で行くけれど、家族が巻き添え。このケースは私は絶対に許せないから暴力の本来の姿が現出する。殺戮しかなくなる。

一人の人間を複数の人間が暴力の対象とする。いじめもそうだろう。その一人が複数にだれしも対抗できるとは思わない。だから、私は若年時に鬱病になっている。一番、質が悪いのは「暴力を振るっている自覚がない」、この「集団」。

自死という悲劇も今もって多い。この自覚のない集団暴力に対抗できる人はそうそうはいない。私も「それ」に対抗できない一人だった。だからこそ暴力の巣窟、フランスに来た。荒治療という治療もある。

集団的暴力、世間という形があることを忘れないで欲しい。すべては1+1=2ではない(Copright Hatsuji KUBO)。ブログる文学振興会会員としては申し上げる。

昨日の記事に複数のコメントを頂いた。あのぉー、すっ、すいませんっ！ 書いた記憶はあるけれど、えっえっえっ、こういう記事なの？ 自分で驚いているから、こりゃー、ジャズ神様と鬱っ君と酒神様の合作と申し上げる。書いたのはわたくしではない。私は過労状態になると「昔の文体が戻ってきちゃったあー症候群」なのだ、よ。尖がってくる。

でね、実は超充実してハッピー親父ドライバーピアノ弾き。忙しいったらありやしねえー。

その日なにをしていたのか認知症。考えたらモンサンミッシェルに行っていた「らしい」。翌日はドゥゴール空港だった「らしい」。その合間に次のコンサートとリールのコンサートの諸々をしていた「ようだ」。うで、プリアリティーナンバーワンは娘の手伝い。これで頭が一杯なのだ。ペンキ塗りだなんだかんだの大工仕事。娘は建築をやっていた。私とカミサンは、前者元美術家、後者現役。プロ集団なのだ我々。着々とオープニングの日が迫っている。いい感じになってきた。

この娘、カミサン、俺。このハイトリニティーは素敵過ぎるっ！ ルンルンるん、春が来るうー。俺にじえねえーけど。

娘のお店の内輪のオープンは3月12日2017年。その世界のルールがあるらしく内輪、つまり、家族、関係者、ジャーナリストをご招待。つまり、お披露目。なんだか、凄く結婚式している。私は父親だからお披露目って言われても「その準備」でレロレロ。ペンキ、大工仕事でレロレロ。そして、一般オープンが15日だ。

お店の名前はカミサン案が当選した。わざと日本語訳にしたけれど、「回り道」。本来の住所との語呂合わせ。イカしている。私の娘も私の娘だから回り道がお好みのものである。親父が35歳でピアノを再開なんちゅう馬鹿なことをしている。

元々あるルール、とりわけ親の代、先代からあるルール、この上を走る。これも一案だし一番リスクが少なからう。私は「それ」をしなかった。そして、娘には元々、そんなもんはなかった。自分で敷いたルールの上を走っていたのに、突然、次の駅で降りてしまった。

お互い、それぞれのやり方で、回り道してんだらう。回り道の豊かさ、ここでの発見は生涯のバックボーンになることを、娘の父親は知っている。こういう優しい理解が親子だし教育というもんだと思っている。意外と理解していない人の方が多い気がなんとなくする。

じっ、時間がないっ！



あまりに時間がないので、どこかの運転手さんの写真をお借りしましたあーっ！ えっ、コピーライト？ 俺だっ！ しかし、老けてんなあーうったくよおっ。

2月27日まで1週間ぐらい暇人していた。娘がお店の鍵を入手したのが2月28日。この日からパパはドライバーの繁忙期。3月11日。そう、大震災の日は息子の誕生日なのだ。28歳。このお祝いを娘の店でやることになっている。12日、内輪のオープン日。ということは10日までに内装工事掃除諸々を終了しないといけない。パパは3月11日まで繁忙期。社長が気を使って3日ぐらい外してくれた。ありがたい。ドライバー業の合間に内装工事。間違えて作業着で行ってしまいそうになった。カミサンは毎日ペンキ。やばいっ！ と思っていたら娘のパートナー軍団が遠方から2度もトラックでやって来てくれた。パートナーの親戚はプロ。パートナーのパパも私と同じく大工仕事のセミプロ。ありがたい。この家族が結集した結晶である。昨日、そう、娘の26歳の誕生日に私は午前7時半から午後6時まで、細部のペンキ、板の間のリノベーション。

どうして午前7時半なのか？ 特注のソファが午前8時「以降」に届くとのこと。娘もパートナーもその出来栄を非常に気にしていた。娘の顔、睡眠不足で白い。限界に来ていることは分かる。パパも限界値が近い。年だし。しかし、「はっはっはっ、お前寝ろよっ！ パパが来るから8時前によっ！ ばっちし、寝ろっ、ばあーか」などと啖呵を切った。追記 届いたの午後5時。ギャ！

いずれにしても、昨日、セミプロパパがいなければ工事は完了しないことを計算上知っていた。元美術家のパパは建築やっていた娘の設計プランが一番よく分かっている。素人ではないのだ。

なんかおまけのように息子が半日手伝いに来てくれた。こやつはじえんじえん優秀な生徒ではなかったのに法律の先生なんぞをやっている。大工仕事感覚ゼロ。カミサン、椅子布のホッチキス外しを命ずる。よく知っているのだ母親は。しかし、息子の名誉にかけてお自慢になっても仕方なし。書いとかなければいけない。日本のパピーの学歴に一族で唯一肉薄している。これは快挙である。今もって一人もいないのだ。

日本の福島県の医者の子がジャズのピアノ弾きになった。しかも、フランスでだ。その娘はフランスの建築大学へ行った。隔世遺伝的な流れだった。私の親父のノーベル賞的脳機能が娘に行った。あっ、ごめん、息子にも。

と、娘、和田江美衣とアドリアン・カショーのミシュラン一星ゲットゲームが3月16日2017年から始まる。

レストラン「DETOUR回り道」のオープン。

## 追記

「お誕生日おめでと」「パパ、サンラザールまで歩いて行こう」「やだよ、疲れてっから」「わっ、800メートルぐらいなのに?」「やだやだ、歩きたくねえー。おっ、サンラザールでさ、オリビア、ケイとビデオ撮んだよ」「パパ、何度も聞いた、それ」「えっえっ、老いの繰り言? わっ、いいよ、ワンちゃん、俺が連れてくよ、サンラザールまで」「パパ、いろいろ、ありがとう」「うなもんっ、大したことやってないよ」「パパのパワー、ずげえーって思ったよ。オルガナイズからまったく休まない。ありがとうおー」

俺は、子犬を引っ張りながら実は少し涙していた。

この記事のタイトル。ジャズファンの方はご存知の通りハービー・ハンコックの名曲のタイトル。正確には、その日本語訳。とても綺麗な日本語だと思う。今日は娘たちの船出の日。快晴。私はなんか久しぶりにゆっくりした一日。のんびりとブログを書くのも久しぶりの感じがする。

昨日は、ドライバーの仕事はなかったのだけれど、娘たちのレストランの飾りをどうするかで家内とややばたばた。オフィシャルオープニングに間に合わせるとなると昨日、今日と我々が人肌脱がないといけなくなる。結局、娘がなんとかすることになった。時間が久しぶりに空いた。ずっと、まとまった買い出しをしていない。それと、フランスの交通法規が変り運転席助手席窓の黒いスモークフィルムが禁止になっている。知っているのにそのままになっていた。警官に止められると罰金135euros。免許のポイント3点マイナス。プロドライバーがこれではみっともない。

ドライヤーで温めてフィルムを剥がす予定。ドライヤー、娘が持って行ってしまった。鉄べらでなんとかかす。剥がれた。窓全面に付着した糊。なんとこれをアセトン(糊剥がしのシンナー)、鉄べら、カッターを使って両窓が綺麗になるまで4時間。痺れた。昼食。家内と買い出し。早めの夕飯。それから北駅近くに、オリビア、モーガン、ケイ、オーギュスタンのユニットのライブを聴きに行った。客席でゆっくりと仲間の演奏を聴きたかったのだ。素晴らしいの一言。そして、本日は、私、真師匠、ケイ、ケンタローとのライブだ。

なんか昨晚、コンサートの後、家までの道すがら考えたことがある。「私は腐葉土みたいなもんだよな」と。私は木っ端芸能人のくせに、自己顕示欲、自己表現、目立ちたい、こういう気持ちのベクトルが限りなくなってきた。ピアニスト裕イサオなんぞ大した技量でもないし大した人間でもない。それで暗い気持ちになるのではなく、清々と明るい気持ちになるのだ。「俺は子供たちの腐葉土。もしかするとパリのフリージャズシーンを今後担っていく若いミュージシャンの腐葉土」。いいねえー、そういう感じいいと本気で思った。彼らの反面教師かも知れないし、もしかすると心の支えかも知れないいい年こいて馬鹿なことやっちょるというある意味、そういう馬鹿がいるという励みになっているのかも知れない。とはいえ、それは彼らの意識の中の話。私の問題ではない。もしそうであれば、それはそれで嬉しい。

ならば、どうして私はピアノを弾き続けるのか？ わっ、いくらおっさんでもピアノ取り上げられたらやる事がなくなってしまうから。腐葉土だってね、質のいいそれってあるでしょ？ そういうことなんだろう。

前回の記事に複数のお祝いコメントを頂きました。ありがとうございました。深謝致します。

本日は自慢じゃないけど軽い二日酔い。滅多にならない。それで「仕方なく」迎え酒。ここ二週間の激動の後のコンサート。ピアノ中毒が燃え盛っていた。午後八時半、お客様ゼロ。わっ、ついに来たあー、ゼロっ！ ゼロレベルでは演奏はしないことになっている。午後八時四十五分。舞踏家が入って来た。一人でもお客様がいらっしゃる。これはやるのだ。ついでに階上のバーの兄貴に「うもおー、無料でいいから下でコンサートやっちょるって言って」。お客様お一人のまま始めた。我々はプロ集団。お一人であろうとも最善を尽くす。演奏終了後振り返ったら沖師匠がにこにこしながら聴いて下さっていた。「皆、凄いなあ、なかなか良かったよ」。結局、お客様お二人。演奏終了後、内輪で打ち上げしていたら、どっどおーっつと若い人たちが降りてきた。わっ、終わっちゃったよ。なんなんだよおー、うったく。

と、こういう日もたまにある。三月後半、真師匠と私はリールでややでかいコンサートが入っている。七十人ぐらいは来るはずだ。四月後半には息子の親友DJマクサンス君との新しいユニットが始動する。ルンルンです。ドライバーの方も忙しいしねえー。

くなどんな=なんとなく、今年は忙しい。くなどんな、家族全員、くなどんな、ルーハー=春に向けて芽吹き始めているんだろな。なんのなんの俺は上質な腐葉土へ向けて一緒に春めいちゃっているのだ。本望だぜってっ！



あえて名前は伏すが、私が敬愛するブロガーさんの一人。サクライ「君」のような文章が書けないのかと毎々思う。えっえっ、名前ばっちり書いてない？ るっせえー、大竹さんっ。文章の後ろにラビシャンカールのシタールの音みたいに詩音が流れている。こういう、名前はあえて伏すがサクライ「君」が倉橋由美子、金井美恵子をしちゃったら、すっ、すごい作品が生まれる。両名を超えると思うのである。アンリ・ピエール・ド・マンディアルグの世界が現出する予感がするのだ。マジで。

娘たちのレストラン。初日昼。十四名。快挙だ。夜ゼロ。めげる。翌日、昼二名。めげる。夜六名、ワインが飛ぶように売れた。翌日昼、四名。めげる。なんの宣伝もしていない新規オープンのお店。静かな小道。観光客は来ない。この状態で、パパの推測以上の動員数である。ノーブロblem。第一、人通りのないところの高級レストラン、気楽に入る客なんぞいない。でも、この数字。まったく悪くない。と分析している。疲労困憊しているから志村けんさんの口調で「大丈夫だあー」。

大分、こちらも春めいて来た。リールへ三月末に真師匠と行く。エリック・ミモザとのトリオだ。私はかつて「Station34」というライブハウス兼画廊をリールでやっていたから大勢の方々が来るはず。まあ、古巣でのコンサート。いい感じである。

延々とリールのコンサートに向けてコードワークの練習。「裕さんみたいにピアノ弾ければなあー」。「はい、どうぞ。練習練習、以上です」となる。一昨日、トランペットのケイとまとまった話をした。なっ、なんとっ、彼は三十五歳からゼロ出発していたっ！ 元ダンサー。私の弟と同年だ。七つ下。三十五歳からトランペットをゼロから独学。稀だ。実にペットが上手いし音程がぶれないしこっちの音をよく聴いているし、完璧である。あんまり書くと拙いのかな？ 放浪人生。自分のトランペットさえ持っていない。これは本当に稀。沖至師匠から借りているヤマハの一番安いペットのみ。正確には持っているもの「マウスピースのみ」。

茫洋としたハンサム親父。お洒落だ。

「ケイさん、ちょっと、ペットいい」「駄目っ。間接キスで俺いろいろうつるんです。歯茎腫れたり風邪ひいたり」「いいよ、じゃ」「ケイさんって、根性あるよな」「特にないっすよ」「ぶっちゃけ、ケイさんのペットずげえーって思うよ」「ありがとござんす」「でね、真子(佐藤真師匠)とも話したんだけど、バビロで、俺と真子と恵子」「なんすか？ 恵子って？」「むむ、真子ちゃんとの遊びなのよ。でね、恵子との沖師匠ツインペットがいいんじゃないあーってなったの。どう？ ムフ」「なんすか急におねえ一言葉。嫌です」「あらあー、真子もすてきいーって言うてるのに・・・」「ねえ、伊沙子なにいちゃつい

てんの恵子と……。ムッ。沖師匠とのツイン、賛成えーっ「じゃ、恵子いいわね」「嫌です。俺、来ねえから」「わっ、そういう手もあるわねえー」「沖さんとの共演、俺、十年早って思ってます」「ねえ、あーった、十年後、俺たち生きてんのか？」真子の台詞。

## 編集部

「裕センセ、なんかカテ変えた方が……」「えっ、生活の糧？」「カテゴリーですっ！ エッセイ部門なのにいー、なんすか、そのおねえー記事は？」「あらっ？」

娘たちのレストランの工事、ピアノの練習コンサート、ドライバー業と三つが重なり重度の肩凝り。首も回らない。痛くて寝返りが打てない。今日は日曜日。明日からまた忙しくなる。コーヒー、煙草の後、ゆっくりと風呂に入った。風呂に入りながら、時々、私の脳内で起きる現象。空はどんより。なんか、もう一人の私がどこか上空から私、私の家族、音楽仲間、ひいては人間全体を鳥瞰している感じになる。私も含めて皆孤独に見える。痛々しい感じ、愛おしい感じ、一生懸命だよな俺たちみたいな感じ・・・が込み上げて来る。

風呂から上がる。肩凝りが大分緩和されている。上空のもう一人の私は地上の私と合体している。不思議な孤独感は、もう、消えている。

男というのか人間は四十歳ぐらいで顔ができるという話はよく聞く。生まれ持った顔の上に、その職業の顔が乗る。そんな感じで顔、その人物が固定される。私という微細な人間を例にとってみると、四十前の方がずっと顔らしい顔だった。詩人顔だったし、美術家顔でもあった。物書き顔の時期もあった。課長顔になった記憶はない。現在、そう、つまり、四十歳を十八年も過ぎている自分の顔。ジャズ顔ではある。ドライバー顔？ そうなのかもしれない。結局、私という人生のプータローに固定された顔はないということになる。残るのは笑顔だけである。好々爺顔と呼んでもいいかもしれない。

うちの娘の彼氏のお姉さん。先日お会いした。弟そっくりだから直ぐ分かった。男の子二人。五歳と三歳だったかな？ ちびどもが、なんか「はびふあの」とか私に言っている。なんとなく「はなはじめ」と言いたくて言えない感じに聞こえる。私はまったくもって似ていない。帰り際、お姉さんが「パピピアノ(ピアノおじいちゃん)に挨拶しなさい」。わっ、私はいつの間にか「パピピアノ」になっていた。

ところで、娘たちのワンちゃん。イタリアン・グレーハウンド黒。名前Voyou。私はちび助、動物に妙になつかれる。顔が優しいのか動物に似ているのか？ Voyou、日本語に訳すとチンピラ。私はVo「YU」と発音する。このワンちゃんも私「おじいちゃん」に超なつく。私はそんなに小柄ではないけれど細身で俊敏、馬面。彼は本気で私をおじいちゃんだと思っている。はずだ。私「おじいちゃんの実家」でお預かりした時は、四六時中一緒。娘のベッドで一緒に寝た。眠いのに午前六時ぐらいに顔ベロベロで起こされた。庭に行きおしっこ。絶対に彼は私を本物のおじいちゃんと思っている。娘に言わせると私がピアノを弾いている姿が彼そっくり。どっちがマネしてんの？ おじいちゃんもスピードピアニストとして若干知られている。

まあ、パピピアノはピアノ弾いて料理して庭の手入れして酒飲んで煙草吸っておばあちゃん(カミサン)と仲良しでいつもにこにこしている。いい人だねえー。次世代の邪魔にならないのだ、このおじいちゃん。便利屋じいさん。特技満載だぞっ！

「おじいちゃん、ピアノ教えて」「うんうん」「ドはどこ」「ド真ん中。ドレミってやってミレ」「こう？」「うんうん、いいねえー、空空ってここだよおーん」「お空って聴こえる」「うんうん。でね、ここを半音下げるとブルーノートでだな、リズムをシンコペーションすとジャズになんだよおーん、これをおチンコペーションっていうだよおーんっ！」「おじいちゃんっ！ ジャズと下ネタ、厳禁いーんっ！」

私の親友エリック・ミモザとのリールでのコンサートが近付いている。真師匠が同行してくれる。このトリオで一度バビロでやっている。それを今聴き返している。沖至師匠が涙が出たとおっしゃったのだ。挑発力。フリージャズの基本。そうだったんじゃね？

年を取ると初心を忘れる。手先芸になってくる。違うんじゃね？ フリージャズってうな程度なの？ 私がジャズ屋になるそもそもの発端が山下洋輔トリオだった。なぜに、それができないのだ？ 年のせい？ 駄目になってきている。エリック・ミモザ。ドレミも知らないリールエレクトロニクス研究所の所長が木っ端ミュージシャンを鼓舞する。彼は私の上いる。

たとえば、ドという音はピアノのど真ん中にある。でも、ドという定義はハ長調、ハ短調という音階でのドである。他の音階ではドの位置は変わるというのか、ピアノのど真ん中のドがドではなくなる。ドレミと発音するならばだけれど……。移動ド法という考えで行けば各音階の初めの音をドと呼んでもいい。その方が分かり易いということもある。

音階といっても長調と短調がある。と、一概に「ド」についてお話をするとしても、一体、どの音階の「それ」について話しているのか？ 不思議な現象が起きて来る。人間との間もほとんど似たようなことが毎々起こる。こちらの善意というドが他者にはうっとうしい、下手をすると悪意音にさえなってしまう。CM音階のドが、いつのまにかA♭のドになってしまう。出している方も、受けている方も結果、不快音になってしまう。残念だけれど、そういう時はセッションの終焉ということになる。その方がいいのだ。

出している方の音階と聴いている方の音階が違う。そういう時は、出している方、聴いている方のご意見なんぞ、音階が違うからどちらも意味がない。結果、物理的に音階が違うという事実だけが残る。続ける意味は本当に平和的な見地から見てもないということになるから、止めるだけ。と、計算するとそうだった。

明日はドライバーの仕事で北フランス。そのままリールに行っちゃいたいんだけど、お客様置き去り。そうはいかん。明後日は真師匠とリール。エリック・ミモザとのトリオ。私の古巣でのけっこうでかいコンサート。ちょっと、凱旋ちゅう感じもなくはないというより、リールの激動の三年間。もう、早いもので六年前。会社を辞めてからの私のド成長をご披露しに行く、わけ。と裕センセ本人の見解。うん、ド成長したぞってっ！ 俺。

今、おでんうどんと明日のコーンビーフ弁当を作っている。不思議なのだけど、テロの影響でうちのカミサンのまったくもって関係がないように思える仕事まで激減していたのに、ドライバー業がなんか忙しくなって来たら、あら、不思議、カミサンまで忙しくなった。

来週頭三日間は暇。その後は四月十六日まで多忙の石と化す。おまけに十一日にコンサートまで入っている。ブログは途切れ途切れになってしまうけれど……。嘘八百人(久保の兄貴)の読者様へはご容赦をお願いしたい。わっ、一度、書いてみたいねえー、こういうフレーズ。

ところで、サクライ君。うちのね、セントラルヒーティングの巨大タンクが半地下室にあるわけ。この石油が切れて久しい。買うお金がない。で、石油ストーブなのね。いいねえー、火の色とか動き。素敵だ。なんか、我々が忘れていたものが脳内を過る。

と、ここまでが前置きなのだ。

フランス人気質の代表的なものに「アイロニー」というものがある。皮肉屋。フランスのお笑い番組。日本のそれとまったく違う。明快な笑いはない。皮肉嫌味、こういう裏返し笑い。急に話が飛ぶ。ジャズ用語で寿司は「シーサー」。山下洋輔のエッセイの中にも出て来る。「シーサー」が日常語になっているから、さらに脳内で転回するという倒錯が起きる。「スーシー」と変な風に元に戻っている現象である。寿司の場合はそれほど部外者に迷惑は掛からない。けれど、「ソーク」「ナオン」「コーマン」という下系が元に戻ると訳が分からなくなる。さまーずの「ドイヒー」「ルーシー」、あら、名前忘れた。「マイウー」も同じだ。

たとえば、私への賛辞がフランス人から送られて来た。当然にして「鵜呑み」は無理だ。真逆意味という解釈。嫌味の転回形という複雑な現代文学をしている。こういう世界に長年いると上記のような倒錯が起きて来る。「そのまま読めば」よいはずが、裏返しになる。オオカミ少年の悲劇である。純粋な賛辞がまったくもって脳に入らないという病気だ。

ところで、考えてみたら、ミュージシャンの世界にはないのだ「それ」が。「すげえー」はそのまんまだし、「芋」、これもそのまんまだ。じゃ、それの方が分かり易い。ところで、考えてみたら、どの音階でもドという音のその音自体は同じ。



と、諸々を考えたというか、この倒錯のそもそもの原因を脳内検索してみた。歯痛だ。ここ数日、まともに食事が摂れない。この五十八年も親密にしてきた「俺の歯」、身内からの容赦ない攻撃。敵は身近にいるどころか口腔内にいたっ！ でね、俺の歯医者。いつ電話してもバカンス。たまぁーにいと予約満杯。緊急だって電話してんのにニースの別荘でヨットだ。とはいえ、わっ、こういうことだったら俺、医者になっててもよかったんじゃね？ 能力はさておき。フランスの一般医。週三日ぐらいしか仕事をせん。しかも半日。医院っても六畳間に水道とベッドと机。以上。これで一般庶民の五倍ぐらい稼ぐ。正直、相対的には効率がいいけれど大した金額ではないよね、日本の医者と比べたら。後者は真逆、お金があっても使う暇がない。気の毒というのか、うな、効率がめっちゃ、わりー。

俺の昔の友達。昼間絵描き。週三日当直医。奥さん、医者、週三日一般医。ノルマンディーの田舎家で仲良くやっていた。こんな感じはいいなぁー。

と、要約すると？ 歯痛のためにフレンチアイロニカルクロニクル病だったという診断を下す。屁理屈にも聞こえるけれど、エブリシングオーケーなのだ。

昨日午後、リールでのコンサートを終え、真師匠とやや二日酔い状態で帰って来た。改めてエリック・ミモザの尋常ではない集中力に圧倒された。常人には真似ができない。

私の親愛なる指さんたちの最高速度はユーロスターぐらいだから、330km/h。リールでの指さんたちは練習不足と疲れのせい、アクセルを踏んでも180km/h。運転している私とすると「ありゃ」となる。でも、でないものはでない。即興演奏にエクスキューズはないのだ。いらしてくれたお客様方。九割が顔見知り。旧交を温めつつ飲み捲って来た。

指さんたち運転手とすれば「不本意な演奏」という見方もできるけれど、私はポジティブシンキング。私は指さんたちを愛しているから、ぶつぶついわんのだ。「ごめんねえー、疲れてんだねえー。無理さしちゃったねえー、うんうん、よおー、がんばってくれたねえー」。コンサート終了後、お客様方が放心状態であることがすぐ分かった。当然にして相当なインパクトがあったということになる。放心から覚める沈黙の後の拍手。いい感じ。

真師匠と帰りのTGVの中で諸々話した。奇抜な演奏法。たとえば、ピアノを弦だけで弾く。パーカッションのように叩く。拳骨で演奏する。奇抜な音。つまり、ピアノ本来の音ではないものを出す。これを即興演奏と勘違いしている奴が多過ぎ。俺たちはフリージャズだ。ジャズなんだよな、エモーションの波のようなもの、これが根源にあるから正攻法で楽器と向き合うのが本筋。と、我々のコンセンサスを確認してきた。

そう、八十八もピアノにはすでに音がある。これでなにができるのか。なんか皆生きて奏者も聴き手も同じ生きた時間を共有している。このなんともいえないエモーションの波こそが、我々の音楽なのだ。なんか上から目線的即興音楽、アカデミーの城。こっちとは一線を画す。楽器の演奏技術はその後だ。

私がこの家を購入したのは三十五歳の時である。キミマロさんの口調で、「あれから二十三年」。二度、「浮気」をしている。リヨンに四年。リールに三年。賃貸で貸していた。この家を購入した頃、よくいえば「絶頂期」だったのだと思う。すべてがパラレルワールドだった。私は美術家、課長、「水の記憶」という小説を執筆。そしてそして、現在の私を支えるピアノを再開した年。

購入した頃の精神状態は、究極ハイだったのだと思う。「俺は折れない」と呪文を唱えていた。親のレールを破壊してフランスに来た男が親になった。この矛盾で潰れそうだった。

三年前ぐらいから、この家の転売を考え始めた。第一、パリから遠ざかった理由が子供たちの環境。ジャズの真逆から始まっている。自立した子供たち。理由自体が消滅している。カミサンとパリにもっと近いバルコニーのある小さなアパートに引っ越しという計画だった。

子供ではなくなった子供たち。まだ、発展途上である。父親、会社は辞した。のに、頻繁に彼らは来る。彼女、彼氏、ワンチャンと人口は増えた。そして、孫の時代が来る。ガルシア・マルケス、深沢七郎を信奉していた私がである。

家族の支柱が言葉そのものであることを、還暦近くなってやっと分かるところがミュージシャンしている。

今日まで暇なので久しぶりにYouTubeのマイチャンネルアナリティクスというのを見てみた。その前にFC2ブログアクセス解析というの覗く。後者の特徴は閲覧数が少ないのに閲覧記事が多い。つまり、溜め読みして下さっている方が多いということになる。偉そうな言い方で恐縮です。プロ作家なら「熱心な読者様」と書きそうな方々が多いということになる。謹んで御礼申し上げます。とても嬉しいです。この傾向は私のピアノにも当て嵌まるのです。少数なのに熱心に聴いて下さる。大切にしております。唯一の支えでもあるのです。

前者。これは曲によって再生回数がまったく違う。スタンダード系および一部のシンセサイザー一曲のそれが多いことが分かる。でも、ギンギラ銀の即興演奏が結構再生されていたりと結局よく分からない。千回近い曲と辛うじて二桁なんていうこの差はよく分からない。演奏者はどちらも私なのだ。

YouTubeも私のブログも、再生とか閲覧回数、非常に少ない方に入っていることは間違いない。弱小個人企業ということで考えれば、なかなかの数字という気もする。どちらでもよいのだけれど、その数で一喜一憂なんてことは私の場合はない。少なからうが多からうが、ポイントは「なにかを発信している」、これだけなのである。引き籠りのミュージシャンではいかんだ。いや、それでもいいのだけれど……。たとえば引き籠って作曲に専念している。これもひとつの発信の形。私の場合は、ライブこそ俺の音楽と頑なに思っているから、引き籠る訳にはいかない。どうして？ 私がそもそも引き籠り系人間だからなのだ。だから、無理矢理ステージに自分で引っ張り出す。自己顕示というより自己啓発みたいな感じだと思う。むむ、自己挑発かも。

この記事は予約投稿だから、これがアップされる頃、私はドライバーの仕事をしている。

昨日、今日と私にしては珍しくとても静かな二日間。娘たちのワンちゃんの孫守り。18h30歯医者。つまり、ピアノが弾けないのだ。ワンちゃんのせいではなく正確には、酒が飲めない。歯医者に酔っぱらってはいけのである。私のピアノの練習はビール、赤ワインちびちびでないとでけん。辛いのだ日々の努力というのは……。酒神様のお力がある。素面でジャズはできない体なのである。

と、なんだかんだ言いながらワンちゃんと戯れ、庭の木々の芽吹きを愛でた。こういう日々もたまにはいいんじゃないの？ どうもいかなあー、ハードライフ人生に染まり過ぎのような気もする。



娘たちのレストランがオープンして二週間が経った。日月と疲労困憊した二人が私たちの家、つまり実家に戻って来た。半分田舎に静養に来たのだろう。娘たちのパリのアパートの四倍のスペース。真南を向いている。さんさんと春の日差しが一日中差し込んでくる。娘たちのアパートは北西を向いている。陽光は入らない。娘、シェフの彼、そして、私の初孫Voyou(チンピラ)、イタリアングレーハウテン種の子犬。春の日差しの中で三匹はぼーとしている。

馬面の私はVoyouにそっくりである。彼は私をおじいちゃん認定している。いつも私の足元にいる。家内が月曜日から木曜まで孫守りを提案する。とはいえ、家内も忙しい。暇なのはおじいちゃんだけである。結局、私がお預かりすることになる。

家内が家を出るのは07h50。暇なおじいちゃんは延々と夜な夜な「サイボーグ009 Netflix2017」を見ている。朝寝坊をしたい。家内が寝室の扉をきちんと閉めずに行ってしまった。孫が飛び乗って来た。顔中ベロベロされる。起きる。庭にうんちとおしっこ。おじいちゃんは半分寝たまま煙草を吸う。コーヒーを飲む。おじいちゃんがうんちに行く。扉を閉めたはずが鍵を閉めていない。孫が取っ手に飛び付きトイレに入ってくる。お尻、膝ベロベロされつつ中腰で拭く。自家製ウォッシュレット、つまりノーパンのまま風呂場に向かう。うんちの付いたおじいちゃんのお尻に孫が鼻を寄せて来る。風呂桶の中でウォッシュレットしているおじいちゃんを不思議な目付きで孫が見ている。

延々と孫とお散歩をし遊んだ。

木曜日、おじいちゃんは珍しく午後仕事に行く。スーツにサングラスで若干元ハンサムな感じがするおじいちゃんは、その姿で孫、孫の餌袋、ビジネス鞆。不思議なハンサムと化しおしっこうんちとなかなか駅に着かない。いいのだ、十分前に出れば行ける距離を一時間前に出ている。

電車、ママ(娘)が待つサンラザール駅へ。十分電車が遅れる。結果、時間に正確なドライバーのおじいちゃんは五分遅刻した。ママを見て孫が飛び付く。おじいちゃんは娘が幼少の頃、おじいちゃんが若かった頃、夜遅く家に帰ると娘が走って飛び付いて来たことを思い出す。一瞬、本当に遠い昔のような気がする。

「パパ、いろいろ、ありがとお。パパのエネルギーって凄い。助かってます」

「お前、指、大丈夫？」

「四針縫った」

「いつやくざになったんだ？」

「はっはは、パパ、まだだよ。パン切ってるときにやっちゃった」

おじいちゃんは疾走している若者に「注意しろ」なんて野暮なことは言わない。ジャズメンな

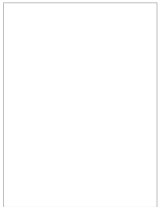
のだおじいちゃんは。

「パパ、いつでも食べに来て。アドリアンと待ってるから」

「うん」

「ありがとう」

娘は未来に向けて胸を張ってすたすたとレストランの方へ向かった。振り向かない。私の孫Voyou、二度、立ち止まり私の顔を凝視した。







私が愛して止まないブロガーさんのお一人、フェアリーさんの昨日の記事の中で「師」について触れられている。私もまったく同感。沖至、佐藤真、この両師匠に私は牽引されてきた。「私をパリフリーズジャズを牽引する次世代の一人」として二十年前からずっと認めて下さっていた。チンピラ独学生意気、フランス日本通運営業統括という重責を担いつつ、ピアノ馬鹿を止めない。その馬鹿振りがたぶん評価の下地になっているとは思う。「フリーズジャズと俺は共倒れで結構です」。やはり、両師匠の目には、こやつは普通ではないと映ったはずである。そう、普通ではないのだ、こういう感覚は。この情熱大陸系の馬鹿は、カミサン、息子、娘から見ても「普通ではない」らしい。カミサンもあんまり普通ではない。私よりずっと芸術家しているのである。家庭内の戦艦大和、キャプテンハーロックである。強大な母性は時空をワープする。凄い人だ。ずっと、夫婦がいると「あらばかりが見える」。この感性は私には理解できない。

娘たちのレストランの飾りを昨日仕上げた。本日、カミサンが持って行っている。何年振りだろう？ なんとなく美術的なものを作るのは？ 娘が自分でやると言っていた。二週間が過ぎている。パパの出番である。元美術家なのだから、ある意味ちよろいもんなのだ飾りは。クリエーションではない。でも、高級レストランのコンセプトは順守しないとイケない。鉄のワイヤーと麻紐とローリエの葉っぱ。自然界の材料だけで作った。

私の家の細長い庭。モネの絵画のようになっていた。ワンちゃんと一緒にいたら、なんだか天国の風景に見えてきた。快晴、スマレ、タンポポ・・・。あまりに気持ちが良いので死にたくなってきた。もう、十分生きたぜ、俺っ、みたいな感じになってきた。Voyouと一緒に体をブルブルさせて家の中に戻ってきた。

私は慢性的に鬱だから春自体が白昼夢のように見えてくる。タンポポ、スマレ、木々の芽吹き・・・、生物たちの交響楽が聴こえてくる。夜な夜な「キャプテンハーロック」「ターミネーター」「ファイナルファンタジー」と人類が滅亡した後みたいな映画を見ている。同時に深沢七郎の「人類滅亡の歌」「笛吹川」が脳内を過る。

娘たちのワンちゃんと数日を過ごした。私と一匹。孤独な老人の様相そのままであった。これも一種の白昼夢的ではあった。ピアニストではない一人の老人の日常をワンちゃんと一緒に垣間見てしまった気がする。こういう男たちは多いのだろう、たぶん。怖くなった、少し。話し相手がワンちゃんだけというシュチエーション。一人映画監督鳥瞰目線で自分を見ていたら本当に怖くなった。

若者、次世代、生物たちの「次へ向かう」交響曲を聴いていると、「老いた私」という現実が迫ってくる。老人ではないにしても高年、その予備軍と化している自分がまざまざと見えてくる。地球の微細なゴミのような、それにすらなっていない私という生物がなんだか悲しくなってくる。

「裕センセっ、急に文学者止めてもらえませんか」

「えっ、文学者してた、俺？」

「はい、顔が文学者顔でした」

「れれれえー、わっははははあー、そういう時もあるぞっ、お若いの。あのね、まっ、俺は明るい方だよな。でもね、その後ろに重い思いがないなんちゅうのは馬鹿だ。明るいだけじゃ、意味ねえー。その明かりがどこから来るのか？ それじゃね？ どこから？ 俺だ。うで、あんたの明かりはあんただ」

あんたがたどこさ はい あんたさっ

一週間、裕センセは多忙の石化するのだ。休筆。

このタイトル、フランス文学に詳しい方々をご存知の通り、ヴィリエ・ド・リラダン「未来のイブ」。ギリシャ神話をベースに十九世紀後半に書かれたSF小説。初めて人造人間、アンドロイドというものが登場する。どうでもいいのだけれど、リラダンが住んでいた町。私の住む町から十五キロぐらいである。

下品を剥き出しで書いてしまうと「男たちの妄想のひとつ」にダッチワイフというセックス人形がある。男は馬鹿であり、でも、その妄想を追い求める馬鹿でもある。正直に、私もその妄想にいい年こいて憑りつかれている。

「理想の女性」。これを「自分で作る」。これこそ「男どもの妄想の極北」と申し上げる。

前置きが長くなった。「サイボーグ009」「キャプテンハーロック」「ファイナルファンタジー」。私は回し者ではない。息子が有料で登録したNetflixというサイトで見た。元々は息子と娘たちが「テラスハウス」とい日本の番組を視聴するために登録したのだ。当然にして有料。息子は父親の思考を読んでいるからパパも見て、となった。

アニメーション映画。私はあまり好きではない。しかし・・・。「現実の人間とちょっと違う感じの人間」が出ている。

さっき帰って来た。自宅に。睡眠不足で脳内ムーミン。

樹齢四百年の桜の木。怖い。ハイランダー(不死の一族)である。

この風景は人の心を謙虚にさせる。いや、謙虚な人は。

やっ、やばい、夕飯まだだ。煙草を銜えて眠り込みそうになる。

そうかぁー、ブログ執筆、外注すればいいのか？ でも、私には寄り付かない。

さっ、夕飯にします。とこいつつ、赤ワインガブガブ。そこまではいかないけれど。

読ンドルは飛んで行かない。

23h30。

私が普段履いている靴はピアノのペダルが踏みやすいもの。今履いているものは近所のハイパーマーケット半額セールで三千元。実に履き心地およびピアノペダルが踏み易い。

時々、家内と近くの巨大アウトレットショッピングモールに「散歩」に行く。アウトレットと言ってもブランド品だから高い。靴屋を覗く。「私の履いている靴と全く同じもの」を見つけた。正確には靴内部の背の部分のブランド名が違う「だけ」である。試しに履いてみた。やはり、私の足は「旦那、同じでっせ、これ」と判断した。アウトレット価格で一万五千元。

しがないハイヤードライバー、本名野渡司。千三百万円のベンツのドライバーというなんとなく見得がなくもない。後席のお客様の靴は一足十五万円ぐらいだろうという推測もある。お金がないのに一万五千元の靴を買った。しかし、残念ながらしがないドライバーという全体像にその金額は打ち消され、どうみても三千元の靴にしか見えない。

しがないジャズピアニスト、裕イサオ。近所のハイパーマーケットでなんの躊躇もなく三千元の靴を買った。「わっ、これ、ピアノペダル踏み易いどおーっ」とご満悦である。ジャズピアニストという全体像からなんとなくお洒落な靴に見えなくもない。なんてことはなく、やはり、どう見ても三千元の靴だ。本人は大変気に入っている。靴内部の背にIsao YUと聞いたことのないブランド名が入っている。

作者の私の見解では後者の方が粋であり、同じ貧乏でも、前者は貧乏臭い。後者は透明な清々とし嬉々とした貧乏と申し上げる。

この記事は予約投稿なんだけど・・・。午前中に一記事アップしたから。久しぶりに普段のリズムに戻り、赤ワインちびちびやりながらピアノを弾いた。練習不足で指が固くなっている。この感触は、敢えてサクライ君のご迷惑を鑑み名を伏せるが、その方には分かるはずである。なんだかドライバーの仕事が忙しいのだ。ピアノを触れん日が多い。

さて、このブログ記事タイトル、蝶懐かしい。私の数少ない読者様方の中で、私の第一ブログ「裕イサオ 筆トーク」をご存知の方は約一名と蝶少ないのだ。やはりご迷惑を鑑みて名は伏すことにする。れれれえー。そう言えば、私の特異な音階はレのドリアンである。レレレのおじさんだった。

なんとなくね、座頭市とか紋次郎のことを車の中で考えたわけ。たけしさんの座頭市も十回ぐらい見た。その後、勝さんのやつを見た。たけしさんの私は大ファンなのだけれど、勝さんの勝ち。その色気と存在感は世界の北野を凌駕している。世界の北野はメディア的にそうなった。それだけではもちろんない。でも、一見で分かる。勝新太郎というアウトサイダーが座頭市を演じているのか本人なのか境がない。たけしさんも同じくそうだけれど、座頭市という土俵では勝さんの存在感は凄い一言。役者としてのレベルが違い過ぎる。たけしさんの素人芸の限界。映画監督もしかり。つまり、私のピアノも素人芸の域を出ない。たけしさんと裕イサオが同レベル？ そう、素人独学という意味では同じことだ。二流なのだ。お断りしておくけれど、たけしさんは超一流のお笑い芸人です。マイルス・デイビスと同レベルだ、俺たちには。私事で恐縮です。やはり、現代美術家であった本名野渡司は一流のベクトルへ向かっていた。彼は今どうしているのか？ はっきりと申し上げる。なんども書いた。本名野は彼の大師匠マルセル・デュシャンの末裔と自負している。彼の師匠が美術界から消えたのは三十三歳。その後は「死後」公開された一作のみ。このダンディズムの継承者なのだ。一切の商業主義、つまり、金に迎合しなかった。

三十三歳で美術界から去った彼は「チェス三昧」。図書館員、フランス語の先生と異国ニューヨークで細々と暮らしていたのだ。本当に五十年後に「美術史を変えた人物認定」をされている。いつもピカソがスターだった。彼がはっきり言っている。「大衆はいつの時代もスターを求めています」。

「私が私のもの(彼は絶対に芸術とか作品とは言わない)を評価出来ません。それは後世が決めることです。そして、美術館という組織、歴史の棺桶のようなところで大切に扱われる。人間の歴史はそういうことなのです。大した意味はありません」

こういう、ある意味、東洋思想を理解していた唯一のフランス人の一人であったと確信している。「大勢の人々の中の一人であることを忘れてはいけません」。こんなことを言うフランス

人は真逆宇宙人である。フェアリーさんの記事を拝読していると、私はフランスの大師匠から東洋思想を逆脳内注入されたことが分かる。

取り留めがなくなってきた。「マルセル・デュシャン」。複数回書いている。美術史を根底から解体創造した二十世紀の唯一の人物である。超絶的に難解な彼の作品。しかし、インタビューを読めば分かる。難解なところは一切ない。実に自然体。禅僧に酷似している。

そう、本名野渡司の作品は……。大師匠のチェス三昧がピアノに変わっただけで、大師匠の「最も美しい作品は、人生という時間の使い方である」。この「教え」を忠実に守っているのだ。

これは薄々感じてはいた。大師匠の人生の時間と本名野のそれがどんどん近似していることを。



この社会のアウトサイダー。でも、剣の達人である。いや、むしろ、達人だからこそ社会に会社、組織に属さない。いや、属さない心の支えがあるということなのだろう。と、パリのリズムゾンドライバー本名野渡司は待機中の車中で考えた。一匹狼的な仕事なのだ。後席に乗られているのはアウトサイダーの真逆。つまり、社会的な成功者なのだ。でも、本名野はそんなことに妬みなぞ抱かない。いいのだ、アウトサイダーで。そういう人生を自分で選んできた。獣道のようなものにしか彼は興味がない。舗装道路は彼にとっては「道」ではないのだ。足跡が後日、「道」になる。そういう意識で生きてきた。金とか成功という足跡ではなく自分の足で歩んできた跡。そういうものにしか興味がない。

本名野渡司は懐からピアノを取り出した。素早い動きだった。

ある有料ネットサイトの番組に「テラス・ハウス」というアパートシェアリングのドキュメントがある。息子娘たちが夢中になって見ていて、パパの脳構造を知る彼らはパパも嵌ると判断。嵌った。脳構造はばれているのだ。

リアリティー番組だからモデル志望俳優志望、当然にしてメディアに乗りたい面々が多い。十八歳から二十九歳まで。男女三人ずつ。これが超面白い。でも、「最近の若者」は本当におとなしいと感じる。ねえちゃんとチューするまでの逡巡がとんでもなく長い。私の様な古い男にはまだるっこいのだ。チューしてから考えるというスタンスだったからねえー。

でね、いつも一人でくすくす笑いをしている。このシチュエーションにジャズメンが入るとどうなるのか？ 「テラス・ハウス」なんちゅうお洒落な感じは吹っ飛ぶ。「ヘラマ・ハウス」になってしまう。朝から酒飲んでねえちゃん口説いて急に真顔で楽器と戯れいきなり握り寿司をテキパキと作りプールに飛び込み草むしり町田康を読み捲り飲み捲りベロベロになって寝る。傍迷惑甚だしい。でも、トイレ風呂とテキパキと掃除するから意外と便利で自然体でもて捲るような気もしなくもない。

明日はコンサートだから予約投稿しちゃう。あーあ、忙しいねえー。お陰様で。あんま寝てねえーのだよおっさんなのに。大丈夫なのか？ カチカチ山指さんたち。三日間のリハビリで最高速度250kmぐれえーには戻ったぜっ！

なんとなく脳と股間にあるものとの関係を考えていたら、野球のピッチャーに例えると分かり易い感じがした。野球選手の選手生命は人生より短いから、若干年代にツレが出るけれど書いてみる。

### 「十代」

球速150kmは出る。しかし、コントロールがめちゃくちゃである。暴投デッドボールの山。ストライクゾーンに玉がいかない。

### 「二十代」

コントロールが若干よくなり、変化球などを混ぜる技術が付いてくるから直球の勢いも増してくる。しかし、後半ぐらいから体力の衰えを感じ始める。当然、変化球が増えて来る。

### 「三十代」

打者の意識の裏を読む技術に長けて来る。球速140kmぐらいになっている。でも、諸々の変化球、コントロールで打者を翻弄する。打たせて取る投球にいつの間にか変わってくる。半ばぐらいから引退という字が脳内を駆け巡る。完投は無理だ。速球投手の面影もない。変幻自在の投球で抑えのエースを目指し始める。

### 「四十代」

本人もしんどい。でも、現役への執着がある。引き際がなかなか見付からない。とうとう戦力外通告が来る。引退する。

### 「五十代」

たまに投げてみることもある。球速120kmが限界。それでも長年鍛えてきたからその数値が出る。しかし、打席にバッターはもはやいない。投げること自体を本人が楽しんでいるだけである。少年野球の監督をし将来のエースの発掘が唯一の楽しみとなった。当然にして、脳の指示を聞こうとしない暴れん坊のコカン君もおとなしい。むしろ、激を飛ばしても昼寝を貪るぐうたらと化した。

作者の弁。幼少期のアンドロジュニユス(両性具有)への回帰のようにも見えるが、むしろ、無性へ向かっているとも思える。つまり、男女というものがない。つまり、理知的人間としての完成形に近付いているのではないか？ 女性という性は私には分からないが男子の脳対コカンの戦いは激烈を究める。しばしば、理性が吹き飛びコカンが先頭を走る。私事で恐縮であるが、作者は明らかに脳が先を走り、振り向くとコカンがぜえぜえ言いながら後ろを走っているという有様である。なんだか家に忘れてきたこともあったのである。だからこそ、このような高尚なブログを今、私は書けると確信して居る次第である。しかし、世の中良くできたものでアルキ変デス理論にて、逆にモテキを迎えるというパラドックス。もてているだけでご満悦の好々爺がいる。

スローボールがかわゆーー

いっ！ なんちゅう女性ファンが儂には居るのじゃっ！

## 2017.04.15 Sat ギネスビールを飲みながら

---

今日は一日だけドライバーオフ日。若干、睡眠不足解消。今晚は「アイアンマン3の続き」「モヤモヤさまぁ〜ず」を見るぞっ！ その前にエビ焼きそばを作る。その前と言っても既に、わっ、もう、過去だ。ギネスビールを飲みながらピアノを弾いた。

でね、何度か書いている、私が「自分で作ったピアノ教本＝ドラゴンへの道」。この「自分で作る」ところが裕センセのすべてを根本的に語っている。えっ、いない？ ふんっ。

とにかくややこしいコードワークが数学の教科書のように書いてある。調性12。長音階短音階となるから計24。

これを一音階ずつ、ピアノを弾ける時にやるから一巡するのに2か月ぐらい。こういうことを延々とミュージシャンは皆やっちゃう。馬鹿だ。でもね、一巡する度に、一流へ2ミリぐらい近付く。人生、なめちゃいかんぞっ、お若いの。日々の修練なしに明日はないという、えっえっえっ、いい加減な裕センセがうなことをっ！ とお若い方々はビックリ仰天。

おっ、それは本当なんだけんちょも、別にやりたくなければやんなくていいのだ。ストイックの快感かしらあー、一人サドマゾ？ 俺はサディストだから自分をしごく。他人には優しい。だって、俺じゃないもおーん。

あれ？ ギネスビールといえばダブリンでダブリンと言えばジェームスとサミュエルの町じゃん。重たいねえー、アイリッシュ。

うなもん読まずに、ベケット、エン、ジョイスっ！

先日、美術の世界にいらっしゃる方とお話をした。たとえば、美術家が毎日「練習」する必要はない。いや、現代美術という範疇では「その」必要はない。音楽は？ という話になった。これはいるのだ。音楽の方がもっと肉体と直結している。スポーツ選手みたいな感じなんですかね、という結論。

ここ近々、ドライバー業が忙しくあまり私はピアノの練習をしていない。これが靦面に指の速度に現れる。指が固まっている。スムーズに動かない。いくら下手なピアニストと言えども脳内の音のイメージと指の速度、動きが連結しない。こういう状態になっている。これはやはり若干辛い。

ピアノ弾きは日々の修練を怠るとこうなる。美術家の方が、それってしんどくないですか？

私、うーん、しんどいと言えはしんどいですけど・・・、でも、私にとっては生きている証みたいなもので止めるわけにはいかないのですよ。場末のアンダーグラウンドミュージシャンといえども。

3月30日から昨日4月17日までドライバー業の繁忙期。合間にコンサートをやった。本来は16日で終了の予定が17日、新規のご依頼。伸び切った体と心のゴムが更に伸びた。この状態で5時起床。15時半に帰宅。張ってピアノににじり寄った。冷えた白ビールを飲みながら弾いた。指は動いているが本体は睡魔と格闘。16時55分、力尽きた。赤ワインを飲む。睡魔。私の18番、スパゲッティ・ボロネーズを眠気覚ましに作る。睡魔。18時20分。夕飯にしてしまう。19時。もやもやさま一ず2を見ようとする。力尽きた。なんと14時間寝た。実は昨日「午後5時、睡魔と戦う私」という大変に高尚な華麗なるブログ記事を書いた。アップしようとした。FC2のメンテナンスなのか機能障害なのか記事は虚空に消えた。たぶん、10年に一度しか書けないであろう私の歴史的な記事が消えた。というのは真っ赤な嘘でどうでもいいいつもの愚記事より更にどうでもいい記事だったから消えちゃって結構なのだ。裕センセの根幹にある根本的な本質についての本質論という冗談論文で、延々と根幹根本本質と同じことが出て来るだけでなんの内容もないという記事だったのだ。

ところでリムジーンドライバー。時間通りに来る。道を知っている。安全運転。基本要素は以上である。とはいえ長距離、および、たとえば2週間専属という時がある。それからリピーターのお客様。当然にして車中にある時間が長い。ここに会話というのが出て来る。パリからドゥゴール空港なんていう時、お客様が無言であれば私も無言。お客様がお話し好きなら私もお相手となる。私はどちらでも構わないし、どちらかというとなら無言の方が楽だ。運転手という立ち位置での会話。結構難しいのである。とりわけ、こういう時の日本語は難しい。言葉を選ばないといけない。疲れる。

とはいえ、長期間お付き合い頂いているお客様には別に隠す必要もないので、会話の流れで私の芸名もピアノ弾きであることもお話してしまう。「本名野さん、どうしてパリへ」とか「なんか別のお仕事なさっているのですか?」とか「美術、物凄く詳しいですね」とか、こういう会話が頻繁にどうしても出て来る。フリージャズピアニスト裕イサオがばれたところでお客様との利害関係は一切ないことと、売れない場末のピアノ弾きがお金がないのでドライバーをしている。これはお客様から見て、なんの嫌味にもならないしなあーるほどおーと自然な感じになる。角が立たないから・・・。

以前にも書いた。このやり取りで失敗して会社を去った多数のドライバーたち。「僕はこう見えても」、小説家なんです、絵描きなんです、音楽家なんです。つまり、「私は単なるドライバーではなく、一角の人物、芸術家なのですシフト」。これはお客様サイドから「うざいマーク」を張られる。おまけに、大して流暢でもないフランス語をこれ見よがしシフト。俺、パリジャンシフト。増長ドライバーである。この感覚は私には理解できない。どうしてお客様と張り合うのか? 「単なるドライバー」、私は超格好いいと思っているのだけれど、どこが拙いのだ?

単なるドライバーが単なるドライバーを蔑視する。馬鹿だ。

私は完璧な仕事をし、いつも綺麗な車。それほど高価な衣装ではないけれどちょっとさり気なくお洒落。パズルのようなパリの道を熟知している。いつも笑顔で安全運転。自分のことをべらべらと話さない。なんとなく訳があってドライバーをしているようにも見えるけれど、どこことなく満足気な感じが漂っている。柔らかい一匹狼感。組織に属さない気概のようなものが笑顔の後ろに敏感なお客様は見て取る。

「本名野さん、ドライバー長いんですか？」

「はい、2年前からです」

「その前は？」

「日経企業で営業マンしてました」

「えっ、そうなんですか」

「いやあー、ドライバー業、お客様の安全という重責を除くと、1日が終わりガレージに帰り車の掃除をしてとその日暮らしで物凄く気に入ってます」

「本名野さん、ぶっちゃけ、俺も会社辞めてえーと毎日思ってますよっ！」

「あらら」

「いいなあー、自由っ！」

これは実際にあった会話。

私信

記事「動かない指」にコメントを頂いた。ありがとうございますわ。

「一番」。そう順位のそれです。一度もないという人もいるのかしら？ うなことはないと思う。結婚式での本人は注目度一番だろう。葬式も。本人には分かんねえーけど。でも、具体的な順位ということだと、ないという人の方が多いはずだ。だって、一番って一つだもんねえー。

でね、自慢話じゃねえーから……。俺は何度かある。小学校六年生。クラスの人数は四十二で四組あったから、学年の生徒数百六十八名だ。勉強、一番。運動、一番。美少年だったから女子にもてたけれど一番かどうかは分からない。意外と美少年系はもてているようでそうでもないのだ。さすが女子、見てくれではないことを幼少期から勘付いている。身長は二番目だった。わっ、自慢しまあーんのじんましんっ！ 痴呆指数は福島県で一番だった。陸上福島県大会、百メートル走と高跳びが二位だった。小学生六年の部の作文で県知事賞をもらったから作文も一番ということになる。でね、自慢したいのは「これ」ではない。「その後」一度もないことを自慢したいのである。

12歳 身長170cm 体重57kg 美少年 勉強運動一位 早熟 高痴呆指数

この十二歳の濁りのない目に映っていた世界は「くだらん」の一言だった。本人も含めてというところが我ながら凄と思う。明日十九日で悟りを開いてから四十六年。ナゲーったらありやしねえーっ！ あっ、予約投稿だから本日でだ。四十六年経って若気の至りでしたあーととつつあんどもは言う。俺の場合は、ますます、そう思う。十二歳の俺は正解だったとますます思う。なんの進歩もしていないところが我ながら凄いっ！ でもよ、後退もしてねえーぞってっ！ とつつあんどもよっ！

明日、あっ、予約投稿だから本日は娘たちのレストランで誕生パーティー。後退はしねえーけど、着々と世代交代はする。オープン一か月で夜は予約なしでは入れんのだ。ほっとしました。親父は。冷や冷やしてたけんあー。まっ、親父の誕生日なんか、どうでもいいけん。めでたくもなんともないぜっ！ 若い世代のお役に立てれば幸甚なのだ。

わっ、急に思い出した。あれ、なんちゅうの？ 壁にね、木の定規が付いていて……。跳躍力？ なんか、そういうのを計るやつね。俺の数値は忍者並みの驚愕の数値だった。と回りが驚愕している風景を思い出した。ああーあ、四十六年後。二センチが限界。断じて悲しくないっ！



昨日は俺の誕生日。もう十分長生きとるぞっと思っている本人はどうでもいい感じなのだけれど・・・。

娘とシェフ。Adrien CACHOTのレストランDETOURにご招待。

手作り海老せんパセリ風味 サーディンマリネの乗った饅頭 どう見ても千切りニンジンにし  
か見えないトロンプユのオランダチーズのオレンジ風味 魚すずぎの喉肉の蒸し焼き白ソー  
スあえ オレンジ色の葉っぱの形をした餡が乗った自家製ファアグラ 子牛の舌の煮込み 蛸足  
の焼き物 地鶏の胸肉 自家製バニラアイスクリーム 自家製オレンジシトロンメロンシャーベ  
ット

ベルギービール 白ワイン 赤ワイン・・・

紺色の調理服を着た彼は、料理をしながら踊り、俺にウインクしガッツポーズ。実に楽しそ  
うだ。娘も同じ紺色の調理服。化粧はあまりしていない。満席の、と言っても二十席をテキパキ  
と回る。俺は背を向けているからあまり分からない。向かいのカミサンと息子がじっと見ている  
。俺の感触では、ちょっと先のパリ劇場の関係者の人々という感じがした。午後十時半に、舞台  
女優五人が予約席、つまり俺たちのところへ来た。

オープン一か月で昼夜満席。やれやれというより、やはり、シェフと娘の力量だと正直思う。フ  
ランス料理が世界遺産認定されていることを改めて認識したのだ、俺は。美味いを通り越して芸  
術品として美味しかった。このフルコースは彼の俺へのプレゼント  
だった。

娘 サイ・トンプリーのミニ画集 日本の二十人の建築家写真集 ミニミニグランドピアノの  
レゴ

息子 日本語の本五冊 パリのブックオフで今日本で話題の小説を日本人スタッフと選んでき  
た これはやばいのだ

「パパ、書けよっ！ 小説っ！」、こういう内なるメッセージでもある  
カミサン 仰け反ったっ！ 超高性能のパソコンっ！ 痺れた

うまあ——っ、裕センスの日頃の行いがいいちゅうことで、めでたしめでたしといいながら  
少し泣いた。

## 2017.04.21 Fri 新しいパソコン

---

本日は4月21日2017年。やっと暇になったから新しいパソコンの初期設定をやった。今まで東芝の一番安いパソコンを使っていた。メールとユーチューブ見るだけだから十分十分と言って買ったのだけれど、ユーチューブ動画を自分で作ることは念頭になかった。その安いパソコンでは動画作成は重過ぎる。起動させるだけで煙草が2本吸えるぐらいの時間が掛かる。ユーチューブ動画のアップは1日掛かり。なんぼ暇なおっさんとはいえあまりに遅い。カミサンが見るに見兼ねて誕生日プレゼントに買ってくれた。

考えてみたら、マイカー。26年の運転歴で3台目。

ピアノ 2台目 電子ピアノ 2台目 パソコン 2台目 カミサンは取り替えていない

まあ、物持ちがいいのだ。マイカーは以前より小さくなったけれど、ピアノは上達と共にピアノ自体も相当グレードアップした。電子ピアノも同じ。パソコンも同じ。いい年こいて結構諸々が進歩している。へへへへへえー。パソコンの初期設定なんぞをちゃらちゃらやれるようになってる。会社のボロパソコンしか使ったことがなかったから仕事のみという感じで、本当の意味のパーソナルコンピュータは5年前から……。結構色々パソコンの使い方覚えたようだ。なんか若干嬉しい。

リラダンの小説「未来のイブ」1886年。ギリシャ神話「ピュグマリオン」を下敷きに書かれた。我々の文学史上、初めて「アンドロイド」という呼称が出てくる作品である。

男子的夢の一つであろうと思う。人造人間、ロボット、アンドロイド……。理想の女性を夢見る。男子が夢見る理想の女性なんぞ、もちろん、いない。どうしてか？ 男子の夢なんぞ卑俗であるから。でも、夢見る。あまりに阿保が積もると「自分で作れないか」という素朴な疑問が沸いてくる。男子は基本馬鹿であるから、こういう馬鹿な発想も生まれる。そして馬鹿みたいにやってみる。

「サイボーグ009 2017」というアニメを見た時に、「これってアンドロイドなんじゃないの？」と思ったのである。その時、脳内に閃光が走る。ピュグマリオンの夢、未来のイブ、アンドロイド……。そして、大変に大変卑俗的助平は検索した。そして、あった。見た。でも、興奮め。「未来のイブ」とは「成就しない恋」とであると結論する。三島由紀夫の「春の雪」が代表例であるし、小説としての「未来のイブ」がその先駆であると申し上げる。あら？ 裕センセ、いつから澁澤瀧彦化したの？

はい、ところで、わたくし自慢じゃないけれど「読書しない人」になって久しい。原因を考えてみる。ふむ、息子がわざわざパリのフランス語ブックオフに行き、フランス語を話す日本人店員を探し、今、日本で話題の小説、日本語五冊を誕生日プレゼントしてくれた。読まなければいけない。

読まなくなった理由。二十八歳の時、自分で書き出した。自閉症の頃、本を貪り読んだ。傲慢僭越というご批判は甘受するにしても、私が貪り読んだ書物を超えているものが見出せない。とりわけ、日本国では。映画のシナリオみたいなもんが多過ぎると感じるから読まなくなった。音と映像中毒もある。映画のシナリオのような本なら映画の方が当然にしていい。傲慢僭越を乗り越えて日本の文学は衰退していると思ってしまうから読まなくなった。言語実験も含めて、もっとコスミックでなければ……。と思う。

人間の本質に抵触することが文学的営為。上手く構築された物語。これではないと、ずっと、思っている。生きていることの悲しみ云々。そういうものを上手く書くことが文学だとは思わない。人生はバラードではないから、そんな上手い物語には絶対に収まるはずがないのである。深沢七郎の「笛吹川」。このとんでもない虚無の世界こそ、それであるし、世界的に稀な文学である。

深沢七郎 富岡多恵子 吉岡実 もっと読まれて欲しいと思う。

金曜日の夜に娘たちの子犬Voyou(チンピラ)が来た。よく見ると歩き方がチンピラそっくり。なぜか彼といると高年になっちゃったあー俺という実感が沸いてくる。初孫の予行演習みたい。そして、昨日、今日と彼と一緒に庭仕事。じえんじえん手伝ってくれない。ちょっとだけ畑を掘った。以上。お陰様で庭が超綺麗。

お天気がいい。じゃれ付く子犬。芝刈り、畑を耕すお爺ちゃん。わっ、ちと早いぞって、好々爺ライフ。で、ピアノを弾く。

「私信」 読み返さないで送っちゃったコメントを頂いた。じえんじえん変じゃない。こっちなんかね、何度も読み返しているのに変なコメント送っちゃう。ケーサ(酒)君のせいにしちゃうのだ。

でね、物語が嫌いなんじゃないと思った。カフカ、ベケット、なにかを物語っている。でも、不可視の物語っていう感じなわけね。イタロ・カルビーノの架空都市。これも物語。でも、レーモン・ルッセルの狂氣的言語実験作品「アフリカの光」。私が非常に危惧しているのは、もし、そういう恐ろしい文学史の金字塔のような作品を「もしかすると知らずに書いている作家」が書いたものは、私は読まない。勉強不足というより文学の深奥を舐めているということになるから出直してとなる。なにかを物語ることが物語という当たり前の公式。でも、物語って映画のシナリオ的なそれだけではない。正直、日本文学は硬直していると思う。物語るのなら三島由紀夫の金閣寺ぐらいのレベルに行って欲しい。凄い物語だし、その筆力は超絶的だ。

なんだか理由が分からない、芸術熱みたいのに脳が侵されている。悶々と芸術論みたいなものが脳内で渦巻いている。渦巻いているものは放出した方が健康のためなので鬱陶しいことは承知で以下書いてみる。

私にとって芸術というこの大仰なものは・・・、新しい価値観、世界観、鳥瞰図の創造。とこういうことになる。当然にして芸術家とは「それをした人」。一番有名ということで、たとえばレオナルド・ダ・ヴィンチのような人となる。

現時点で美術だ文学だ音楽だと携わる人間は、その歴史を掌握していなければならない。と私は思うのだ。積み上げられた人類の英知である芸術の堆積層になにか新しいものを付け加えることができるのかできないのか？　ここがポイントになる。なあーんて偉そうに言っているが、正直、ほぼ不可能である。インターネットとかスマホの方がずっと新しい。芸術自体が終焉しているという気もする。うなことはどっちでもいいのだけれど、芸術の歴史を熟知しつつそれでもやる。仮に新しいものがなにもなくてもやる。ポイントは熟知しているということ。熟知していれば、じえんじえん過去を超えていない凡人であることが自分で分かる。謙虚とかではなく客観的にあらあー、凡人だねえー俺ってとなる。清々する。でもやる。この認識が重要なのだ。だから、たとえば私は偉大な芸術家センセイだよおーんなんて当然にして言えない。

なんか私の不満は、芸術史をよく把握せずに美術だ文学だ音楽だとやっとならる方がいるんじゃないか？　それも多数。そして、その上にわたくしは芸術家なあーんて言っている人がいるんじゃないか？　もし、いるのであれば論外。

好みというレベルではなく、現在美術に携わる人間が避けては通れない人物。マルセル・デュシャン。美術理論を解体終焉させてしまった。理論的には先はない。でも、今、考えると美術理論を解体してしまった彼は通称「大ガラス」「遺作」、2つの大作を残している。先がないはずなのに作品を制作している。これは意味深。まだ、制作は可能という示唆でもある。彼の美術理論を掌握せずになにか作品を作ることは論外。いや、もうひとつ手がある。知っていて棚上げしちゃうという方法。このどちらかであり「知らない」、これは論外だと思うのだ。先日、お会いした高名なデザイナー。「あーん、美術はデュシャンで終わっていることは事実ですね」と本当にサッカー選手の噂話をする感じでおっしゃった。熟知しているのだ、やはり。

文学の世界で同じことをやった人間。レーモン・ルッセル。デュシャン自身が多大なる影響を受けている。ルッセル、クラシックのピアニストで名性欲の塊だったらしい。この世界初の言語実験。自己表現なんちゅうちゃちなレベルを解体してしまった。デュシャンのオブジェと同じく文学とはなんぞやという問い自身の小説化という恐ろしい作品。晩年、本人もちっとも売れないので気が狂ってしまった。売れると思っていたところが、これまた凄い。そしてインプロ・ライティング、ヘンリ・ミラー。もう出来の良し悪しなんぞ念頭にない。単に書き捲りましたあー

、以上。独断なのだけれど、こういう歴史を熟知して書いている日本の現代作家は町田康だと私は睨んでいる。さすがパンク歌手。脳が柔らかいのだ。

わっ、ついでにフリージャズの世界。いや、長くなるからピアノに限定すると、セシル・テイラーである。日本文学は閉塞しているなどと偉そうなことを書いている裕センセはご存じなのか？ 「えーとえーと、エートマン。知っていることは知っているけれどおーー、たーりりん」。あっ、自分もセシルも棚上げパターンである。フリージャズの歴史を熟知せずにあやつはピアノを弾いているのか？ 「えーとえーと、熟知いーーはジューシー、たーりりん」。わっ、知っていて弾いているのか？ あやつはっ！ 質の悪い確信犯っ！ 「えっ、セシルを超える？ あはあはあはげほげほげほ」。やはり、裕センセは場末がお似合いなのだ。でも、「それ」を知っている裕センセはソクラテス理論上やはりプロという逆説も成り立つのである。といい加減な自己防衛を試してみる。

吉田ケイ。トランペット。私の弟と同じ年。七つ下。この七つという数字が微妙。彼らの頃に「新人類」という日本語が発生している。なにを考えているのか分からない人々。ケイも私の弟もそういう意味では似ている。それと、たとえば、私と弟はそっくりなのだけれど、私、六頭身。弟、八頭身。体格がいい。同じ両親、同じものを食べて育てているのになんじゃこれ？

私、つまり、「最後の旧人類」は団塊の世代となんの違和感もない。「俺、生まれた時、テレビなかったぁー」、同じなのだ。で、あやつらの世代はあった。なんか、日本の高度成長の溝のようなものが私と彼等の世代にあるのかも知れない。

うなことを書きたいのではなくて、ケイとデュオコンサートをやる。元アイドルグループにいたのだ彼は。三十五歳からペットを独学で習得。この超絶的に遅いスタート。私のピアノ再開と年齢は同じ。でも、ゼロから始めた。この気概にうるうるする。こういう野郎、私は大好きなのだ。

でね、私にとっては新しい挑戦。暴力スピードピアノで場末で知られる裕センセが、インプロバラードというなんか色っぽいことをする。わっ、発情期っ！ ちゃうちゃう、ケイのペットが色っぽいから、あたしも・・・、それだけなのよ、奥さん。あたしも、マンディアルグみたいな色っぽい小説書いてみたいわ。



Kei YOSHIDA Trompette

Isao YU Piano Duo

30 Avril 2017(Di) 18h00

Babilo

9 Rue du Baigneur 75018 PARIS

ENT Seuros



バンマス、マンモスの誤字ではなくてバンドマスターのこと。この存在なのだけれど・・・。

マネージメント ギャラ 集客 こういう諸々以上にバンドのコンセプトと、それ以上に雰囲気作り

まっ、昔、そんな昔じゃねえーけど、課長をやっていた時と似ている。でね、俺は脳逆系だから逆からやる。まず、雰囲気。コンセプト。集客。ギャラ。マネージメント。

人間関係の悪いバンドはいい音がでない とりわけ 即興というレベルでは芋になる  
バンドのコンセプトは 好きにして 以上  
集客 すいませえー————んっ 以上  
ギャラ えっえっえっ ギラギラ？ ガメラ ギャオス・・・ 俺の仲間たちは金の話は一切  
しない すんばらしい民族  
マネージメント マネーなしのそれはする 俺はとっつあん 時期世代の担い手を育てる年  
になっちよる

と、この動画、やはり、聴いて欲しい。コメントする。

裕58歳 独学 真師匠71歳 独学 オリビア40歳 パリ音大 ケイ51歳 独学 モー  
ガン27歳 パリ音大

独学3 対 パリ音大2 日本の芸大だ

バンマスがすべてを調和する。

LENOVO ideapad 300 intel Core i5

私の新しいパソコン名と搭載しているプロセッサ名。5年前にスーパーで買ったTOSHIBA 299euros。こちらと比べると早い早い。私まで若返った感じ。こんなにも違うのか！ ブログ記事を書くのも起動するのに時間が掛かり、結構ちんたらと書かざるを得なかったのに新しいパソコンだとすばすばっ。とはいえ記事内容が高尚になるわけではないところが難点ではある。

この新しいパソコン。ここ5年間の思い。そうなのです、前のパソコン、せっかく100eurosと私にしては大枚叩いて購入したPinnacle 15という映画作成ソフトが容量不足でインストールでんかった。私の動画はすべてムービーメーカーにての作成となったのだ。これを入れた。つまり、今後の私の動画はもっとずっとプロっぽい感じになる。ユーチューブオフィシャルパートナーと化した裕センスの今後の展開に絶大なる威力を発揮するはずなのだ。うひょひょひょ。

そうなのですよおー、もっとずっとずっと素敵な音楽クリップを作りたかったから若干興奮している。ピナクル君ビデオは次回のケイとのデュオからですねえー。超格好ええやつを作るのだ。貧乏暇なし。いやあー、素敵な映像作り、これは前々から挑戦したかったから超嬉しい。おっ、わたくしの弛んだお顔も修正でけんのかしら？ さらにモテモテかよおーっ！ でも、画面の中だけ……。実態は見せられないというスターの悲しみ？ 馬鹿でねえーの。通りを歩くと「キャーっ」という悲鳴。黄色いそれではなくて、画面内のわたくしとあまりに違う恐怖の叫び。だったりして。

久保の兄貴の記事「知性と感性」を拝読。私なりに再考してみる。

各自が持っている知識内で理解できないものに遭遇した時、2つのリアクションが起きる。自分の知識内で理解ができないから拒絶する。もう一つは、どうして理解できないのかと逆に興味を持つ。兄貴の記事の中の「彼は何でも知っているが、何も分らない」「彼は何も知らないが、何でも分る」。私にとっては同じ公式になる。当然、私の選択は後者である。

自分の知識内で理解できないものを拒絶。こういう知識は色眼鏡的なものでこれはいらんと思っている。脳と心の自由度を拘束する知識は必要なしというより、私にとっては知識とは呼ばない。

自分の知識内でどうして理解できないのか？ 私は当然、理解できないこと自体に興味を持つ。そして、理解しようとする。理解するには自分の知識が足りない。足りないから補充する。結果、知識がさらに増える。色眼鏡的なそれではなく血肉化したものが。「何も知らないと本人が思っている以上の知識の堆積。いや、何も知らないというまっさらな目でものを見れるぐらいの膨大な知識の堆積。その堆積の上に何でも分かる」人が生まれる。と、私は理解するのです。

なんかややこしい文章になってしまった。山下洋輔理論で書き直してみる。実際の私のピアノの習得過程でもある。

とにかく、めちゃくちゃピアノを弾いてみる。とにかく始めてしまう。自分のやりたいように、自分が出したい音をとにかく出してみる。この時点で知識=技術ゼロ。本人が続かなくなる。出したい音を出す知識が必要になってくる。続けるには知識を習得するしかなくなる。めちゃくちゃな演奏をするという逆の知識が必要になってくる。しかも、公の場で入場料を頂くというベクトルなのだ。勉強というより、歴史の中にお手本があるのではないかとなる。セシル・テイラーという人が浮かび上がる。山下洋輔という同国の人物も浮かび上がる。聴く。まったく歯が立たない。めちゃくちゃをするための知識、技術の堆積が自分とは比較にならないことを理解する。ここに分岐点が生まれる。諦めるという手段がある。私のケースのように、俺、諦めんとなる。ひーひー言いながらも彼らににじり寄る。知識、技術を微量ながら蓄積する以外に方途はない。

結果的にフリージャズ史を熟知することになってしまう。知識と書くから語弊があるのかも知れない。続けるための筋肉という感じです。そして、自分の力量も実に客観的に見えてくる。げっ。

久保の兄貴の抱かれた違和感。私の書き方の問題なのかも知れない。私は色眼鏡的＝何でも知っている。こういう知識は不要だと思っています。血肉化したもの以外は信じていない。「歴史を熟知しなければいけない」。訂正、「結果、続けるためには熟知せざるを得ない」と書いた方がいいのかも知れませんが。将棋の名人、釣りの名人。太刀打ちできないぐらいの膨大な知識の堆積。体験、知恵？ 知識という単語がおかしいような気がします。たとえば、ジャズギターの名手ウェス・モンゴメリー。彼は譜面を読めなかった。必要がなかったのでしょうか、彼には。

と考えてみました。

結局、私が最も書きたい事は、セシル・テイラー、山下洋輔の音楽を聴いた時、もちろん、好みでもない音楽を聴く必要はないし、好きになる必要もないけれど、「なんだあれ？ めちゃくちゃじゃん」でクローズするのか、「むむむ、訳が分からんけれど、なんか気になると・・・」とオープンマインドになるのか？ 私は、すべての事象に後者でありたいと思うのです。いや、あらねばならぬということではなくて、私自身が

そっちの方が楽しいのです。詩、美術、小説、フリースタイルジャズ。すべて「なんかよく分からんなあー」から始まり、とにかく、自分でやってみる。自分でやってみないと愚鈍な私は理解できないという逆説人生。やってみるといかに自分の力量が足りないかを思い知らされました！

やんなっちゃうっ！ そして、だれもいなくならなかった。残ったのはオープンマインドのみ。美空ひばりの音分析してみたり、ラップのそれ、DJのそれと貧乏暇なし。

でも、マルセル・デュシャンのいう「無関心の自由」という自由もあるから、世界はさらにややこしくも楽しいですね。

「芸術家」とはなんぞや？ この素朴な問いは当然にして美術だ文学だ音楽だに携わる人間には沸いてくる。久保の兄貴が「芸術家を特別視」と書かれている。私の意見では芸術家という存在は人間の頂点だと思っている。有頂天という意味ではない。理知、知性、人格と諸々のものの頂点だと思うのだ。とはいえ、しばしば人格は破綻、家庭崩壊、カミサングルニカ(逃げる)という有様である。

「芸術家」。世界観を根底から変えてしまう人と私は理解している。我々の凡庸な脳に新しい概念を注入する天才たちだと思う。だから、絵描きとか小説家とかミュージシャンは芸術的なことをしている凡人。私はその代表格である。なんの自慢なのか？

ダ・ヴィンチ以降、風景が「遠近法のように見える」ように我々の脳が改造されてしまった。デュシャンがレディーメイドという美術とは、芸術とはという問い自体を視覚化してしまった。ルッセルが小説という作法を崩壊させてしまった。自己表現などというちやちな世界はとっくの昔に解体されている。ウッドゲンシュタイン、哲学論法を崩壊させている。エイゼンシュタインが映画技法を崩壊。アインシュタインは世界を変えてしまった。ジャリはノンセンスの極北であり、カフカが不可視の物語を再構築した。ベケットが続く。シュトックハウゼン、メシアンと西洋音楽を解体した。ジョン・ケージがデュシャンの哲学を音楽化した。オーネット・コールマン、セシル・テイラーがジャズのコードワークを崩壊させた。中上健司が「アイラーは破壊せよと言った」という書物を上梓した。そして、ボードレールから始まりランボウ、マラルメ、詩法を解体させた。

私はこういう「芸術家たちのバベルの塔」を信じている。芸術家は歴史、世間、他者という長いスパンで認定されるもので、自称するものではない。そんな安っぽいものではないことを認識するしかない。だから、私は断じて芸術家ではない。そんな御大層な人間ではない。と自分では分析しているけれど、まあ、歴史の枠組みの中で認定されることも考えられなくはない。「高年の新しい生き方を創造した裕イサオ」などど、800000年後の歴史の教科書に載っていないとも限らんのだ。

そして、芸術の歴史は前衛の歴史であることは歴史を紐解けばすぐに分かる。美術が「印象派でストップしている方々」、とりわけ、日本に多い。音楽もモーツァルトでストップ。文学もバルザックでストップ。ジャズだ演歌だラップだ、まったくもって脳インプットできないという人々。芸術と教養社会的な作法と勘違いしている人々。若い頃は、本当に反吐が出そうだった。今？ 興味なし。芸術とは途方もない世界、お付き合いしている時間はないし、せめて、芸術とは「そういうもの」であることだけでも理解して欲しい。でも、無理解で楽しい人生。それならもちろんオーケーだし、私が出る幕ではない。うーん、もっと楽しくなるぞっ！ と私は

言いたいけれど・・・。「お呼びでない？」「こりゃまた、すつれい致しあしたあ——っ！」

。

あらら、なんだか連載ブログなの？ 止まらなくなってきた。まあ、私のルーツ確認なんだろう。辟易？ このブログは辟易停車致しまあーす。

しばしばしばし、私のブログに登場する大師匠マルセル・デュシャン。私もそうだけれどレディーメイドについての話が多い。分かり易いから。でも彼は25歳から亡くなる81歳まで2つの大作を制作している。「大ガラス」と「遺作」と通称で呼ばれている。第一、2作しか制作していないこの脅威の寡作。ダ・ヴィンチもびっくり。そして、その正式なタイトル。「大ガラス」＝「彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも」。死後公表された、つまり、秘密裡に制作されていた「遺作」＝「(1) 落下する水、(2) 照明用ガス、が与えられたとせよ」。このとんでもないタイトル通り超絶難解。彼のほとんどの作品はフィラデルフィア美術館にある。これも彼以外にいない。

たまに、ポンピドゥーセンターの近現代美術のコレクションを見に行く。彼のセクションは超小さい。フランスに残っている作品がほとんどないのだ。この小部屋。真空地帯のような感じ。歴史認定はされているのだけれど、だれもまだ解読していないから前衛のままそこにある。恐るべき人である。

東野芳明の労作「マルセル・デュシャン」という書物。なんとか解読しようという試み。でも、デュシャン自身が自分の作品の解説とかまったくしないから分からんのだ実際のところは。「作るの大変だった」「材料が見付からず失敗した」とかそんなことしか本人は言わない。ミュージシャンが楽器の話ばかりするのにそっくりである。

デュシャンは生粋のフランス人という感じがやはりする。理知とか狡猾とか嫌味とか諸々の複雑な思惑で構成されている感じ。難解なのだ。そういう意味でアメリカ人的善良で実に分かり易い弟子と呼んでもいいのかも知れない人物、ジョン・ケージ。私は彼の顔が好きだ。ケージはデュシャン思想の宣教師のように私には思える。音楽界から袋叩きにあうような気もするけれど・・・。

彼の代表作と言われる「4分33秒」1952。蓋を開けたピアノの前にじっと座っているという曲。この曲を聴いた？時の反応。眉間に皺。笑い出す。泣き出す。眉間に皺がもっとも多いはずだ。固定観念の塊である脳が拒否反応を起こす。私はたぶん笑い出すと思うのだけれど、固定観念にヒビが入る快感。うっひょひょひょと私の馬鹿脳が歓喜を上げるちゅう感じ。結構、多いのが泣き出すというやつで、これは西洋世界の人々に多い。東洋系は空白とか無という概念を体感できるのだ。だから泣かない。

「追記」馬鹿脳系が思い付くのは「本文のない本」とか荒川修作と磯崎新がやろうとしていたはずだ「用途のない建造物」とか、私のイメージだとワンフロアしかない高層ビル。こういうものが脳内に浮かんでくる。たぶん、実際にやった方々もいると思うけれど、私はやらない。デュシャンとケージが積み上げたもので十分であるから。

まあ、初期の山下洋輔トリオの演奏を聴いた時の反応も若干似ている。

ジョン・ケージのインタビューなのだけれど、「あんなもんはだれだってできる」という批判に「その通り、でも、私しかやらないでしょ?」。「あんなもんは音楽=芸術ではない」デュシャンのレディーメイドと同じ結論。「そうかも知れませんが、では、芸術ってなんなのですか?」。定義はできないという問いそのものにしかならんのだ。

わっ、俺も言ってみてえー。「あんなびでえーピアノだれだって弾ける」「うん、でも、俺しかやらんでしょ?」。



昨日は、トランペットのケイとコンサート。若干、普段より色っぽかった？ ケイは色男なんだけれど、俺がとっつあん。革ジャンに格好いいパンツに靴に大きなサングラス。こっちは大工さんルック。じえんじえん感じが違う。まあ、ないもんはない。人畜無害の好々爺。

でね、新しいパソコンの初期設定をやった。でも、最初に入れたアンチビールスがいつも表示される。

ここに本妻と妾のような関係があるわけね。まず、パソコン初期設定。アンチビールスをインストールしたら、既にこのパソコンには入ってます。二重になりますという表示。「あなたっ！

なんでこんな女を家にっ！」という声さえ聞こえた。「あらら、ごめんなしゃーーい」とアンインストールした。それから長いカフカパソコンの始まり。ピナクル動画、ウインドウズ10と相性が悪いみたい。ちゃんと機能しない。あーーあ。しゃーーない、ムービーメーカー。ウインドウズ10にはない。げっ。しかも、今年の1月10日でサポート終了。インストールを試みる。駄目だ。まっ、いいかと諸々のビデオソフトを試す。分からんのだ使い方。そうこうしている内に気が付いた。アンインストールしたはずの妾。アンチビールスがそこここに表示。わっ、カミサンに叱られる。完全削除を調べる。完全削除のアプリをインストールせよ。した。削除された・・・。

わっ、パソコンを起動するとBios画面ちゆう変なことになった。ウインドウズにしますか完全削除アプリにしますか？ いくらパソコン音痴でもこりゃーー変なのだ。後割愛。結局、パソコンを初期化した。これしかなかった。

まっさらなパソコン。初期設定を慎重にやった。すげえー早い。なんかしんねえーけど、ムービーメーカーダウンロード英語版でやったらすんなりインストール。さっき、ケイとのコンサートのビデオをユーチューブにアップ。以前は1日仕事が15分ぐらいでアップ。今まではなんだったの？

でね、おっさんの教訓。やっぱ脳も、たまに初期化とは言わんけれどクリーンナップした方がいいみたいね。固定観念、偏見偏屈、こういうどうでもいいデータで脳のキャパシティーを圧迫しておる。若干、脳キャパは多い方とどうでもいい自負をしているところもあるけど、仮にそうであってもキャパが一杯では結果、キャパの大小の問題ではなく「一杯のアップアップ」状態はプロセッサとすれば同じ。

しかし、アンチビールスをアンインストールするアプリを入れ、今度はそっちがビールス化する。妾そっくりだ。ごめんなさいっ！ なんて謝っているのか？

はははあー、動かない指から完全復活っ！ 時速350km。戻っている。

初めてのパソコン。五年前である。まだ、息子と娘が家にいた。イエーイッ！ 親父ギャグですべてが理解されるはずである。会社員の時は、でかい会社だったからコンピュータ専任というのか仙人みたいな人がいたし、最悪、ロンドンにコンピュータールームというジェームズ・ボンドのような機関さえあった。結局、他力になって覚えな

でも、反省期という、またまた、親父ギャグではないけれど、ジャズピアノだって独学。パソコンだってできないはずはない。で、五年後・・・、だれの助けも要らなくなった。

考えてみると、急に俺になるけれど、ピアノを再開というのか人前で堂々とやったのが三十五。もう、キミマロさんの口調で、あれから二十三年。げっ。この時、美術からピアノにスイッチし、同時に本格的に小説を書き出したのだ。息子五歳、娘三歳。

パソコンとピアノは非常に似ている。理科系人間にはほとんど同じだ。パソコン同様、俺のピアノはめちゃくちゃだった。でも、その頃のカセットテープをたまに聴く。うーん、なんちゅうのかな？ ピアノとなにをしているムラムラ感というのか自己顕示とメガロと性欲と名声欲と俺はただもんじゃねえーニャロー感が漂っていて、自分ですげえーと思う。今の方が三十倍ぐらい上手いけれど、深奥に突き刺さるうーん感は、前の方が三十倍。で、「若い頃に戻りたい？」。俺は、やだ。あの頃のぐちゃぐちゃめちゃくちゃ、生きているのがやっとな状態。ヤッコサ君は、もう、ええー。

だって、こんな親父、息子も娘もワンちゃんも要らねえー。笑顔で大工仕事、水道工事、パイプの取り換え、庭の畑、車の整備、料理・・・、終活・・・、今からやることは沢山。だから、断捨離は終わると、とっくによ。「風と共に美しく去る」、こういう映画あったでしょ。わっ、でも、超絶長生きするかも。まっ、いいか、便利なら。

なんかね、いろんなタイトルが思い浮かんだのだけれど、日付にした。河原温のデートペインティングの印象が脳内に残っているのだろうね。なんかね、書きたい事はあんまなくて「お話」をしたいわけ。だれに？ 自分に話してもちょっと怖い。

突然、ドライバーの仕事が忙しくなった。ブログ書きもピアノも触れない。娘たちのレストラン。嬉しい悲鳴。助力がないといくら若い彼等でも倒れてしまう。諸々が雪だるまになると暇親父が急に多忙になる。

あっ、娘たちのレストランの話の前にね、「映像ブログ」というのを作った。新しいパソコンにムービーメーカーをインストールして、ケイとのビデオを作ったから、うな、アップと思いきや、「トライアルバージョン」で一回やったら、「あんたあー、買うのか買わんのか、ゴム紐」となった。でも、変なのは元々無料ソフトをなんで「買う」の？ で、わたくしの映像ブログは保留になった。

娘たちのレストラン。正確には、アドリアン・カショーがシェフを務めるお店。二人とも社長だからなんと言えればいいの？

親父の私とすれば「石の上にも三年」と思っていた。スポンサーをしてくれている高名なシェフが「二週間の辛抱」とオープン前から言っていて、えっえっえっと思っていた。パリに七軒のお店を持ち、テレビの料理番組の人気シェフ。半端ではなかった。三週目からすでに「予約なし」では入れなくなった。オープンして一か月半。もう、フル回転。新規にスタッフ入れんと二人とも倒れてしまう。

そして、親馬鹿カバの分析というのか、たぶん、本当なのだと思う。

「この大盛況の理由」

- 1 バックの高名なシェフの後押し
- 2 アドリアンの料理の技量 超美味しい 三回食べてうーーむ、こいつ、  
すげえー、となった
- 3 ここに親カバ登場 臨時雇いのプロ中のプロのウエイターさんが1か月契約終了

当然、娘がウエイトレス、会計を一人でやることになった。倍率35倍の建築大学出身。内気無口理科系眼鏡美女の典型である。細身165センチ。小顔。この娘が紺色のオシャレなんだけれど調理服を着て給士。化粧ゼロ。ひつつめ。親父とすれば、わっ、やつれちゃったあーーと

なる。

昨日、ドライバーのお客さんと娘のレストランで食事。入れない一見さんの対応、電話、常連との会話・・・、とにかく、忙しいのだ。で、後方のお客さん方の会話をダンボ君していた。「とにかく、料理が素晴らしい」。その後に、「あの、たぶん、モデルだと思うけれど、ちょっと、東洋ぽいウエイトレスが、なんてのかな、ういういしくて、なんてのかなあー、いいなあー」。確実に、我が娘。理科系美女のレストラン、このミスマッチがお客さんの琴線をゲットしている。

さっき、記事をアップしたんだけど、今、なんとなく気が付いた。

私のブログ食指を動かすもの。サムネイル、ブログ総タイトル。これは、皆さんも同じのはず。

結局、分かった。「記事のタイトル」に私は食指が動く。らしい。

わっ、結局、いかに、私のブログが食指を動かさないのか？ 分かった。

でも、ネットフリックスで「深夜食堂」というドラマ見ちゃったから、これでいいのだ。

なんとなく、フランスでも「そう」なのだけれど、「皆、忙しい」と言っている。日本人は物理的に忙しい人たち。たまに、日本に「行く」と、お土産を持って行くお返しがあるそのお返しを返しに行くこちらに上げたからこちらに上げない訳にはいかない〇〇先生を失念していた・・・、延々と他人のために忙しい。自分の時間はなくなる。

フランス人。もう、皆、「忙しい時間がない・・・」の連発。そりゃー、バーベキューの肉の買い出し、諸々で忙しい。半日、庭で食べて飲んでだから残り時間が短い。そりゃー、忙しいだろう。自分のためにバタバタしているのは、私の感覚では「忙しい」とは言わない。もし、それを言ったら私は世界一に近いぐらい忙しい人間になる。ピアノブログ料理草むしり犬孫の面倒娘の手伝い大工仕事・・・、ビル・ゲイツより忙しい。

そもそも、多忙は美德は戦後じゃないんだから、もう、ええー。暇こそ美しい。暇が文化を作る。フェアリーさんは理解してくれると思う。なかなかフェアリーさんのように「暇だから」とは意外と言えない体質は止めた方がいいと思う。第一、社会的に忙しい人間がピアノなんか弾かない。仕事としてしかできなくなる。そうなんだよねえー、ピアノは仕事なんだあー、私には。あぁーあ。

ピアノとリムジーンドライバーの仕事が立て込んだ時っ！ わたくしは「忙しい、多忙っ！」と初めて言える。だから、暇だ。わっ。

「言葉なんか 覚えるんじゃなかった」田村隆一



なんとなく、これから動画を作ってみようかと考えている方の参考になるかも知れないので、私の実体験を書いてみる。インターネットに「動画作成ソフト」の記事は沢山出てくるので、パソコン音痴の私が改めて書く意味があるのかと言われると、ある。インターネットの記事、スポンサーが絡んでいるから記事によってご推薦ソフトが違っていて初心者にはよく分からない。私の個人体験は参考になると思う。

### 「pinnacle 15」有料ソフト

5年前に初めてのパソコンと共に購入。もっとひどいパソコン音痴だったから、プロセッサの容量なんてことは念頭になかった。私のビギナー用パソコンにはインストール不可。新しいパソコンにインストールしてみた。Windows 10に基本的に対応していないせいなのか、きちんと作動しない。取扱説明書をもう一度読んでみたらプロセッサはintel i7がよろしいと書かれてあった。私のそれはi5。これでも容量不足？ はっきり言って重過ぎる。変なたとえが浮かんだ。東京大学文学部の学生が工学部の学生に馬鹿にされている。こんな感じで偏差値競争もここまで来るとお手上げ。アンインストールした。

### 「Windows Movie Maker」

結局、上記が使用不可。いろいろ調べてこれを使い始めた。パソコン初心者の私でも取説をざっと読んだら使えた。私個人は私のようにパソコンに詳しくない方にはお勧めソフト。無料。新しいパソコン購入後、やはり上記が作動しないから、もういいや、使い慣れたムービーメーカーにしよう、となった。ここからドタバタ。Windows 10には入っていないのだ。どうして？ では、別途インストールすればいいとなる。このソフトはWindows Essentials 2012この中に入っている。調べたらマイクロソフト社のサポートが本年1月10日で終了。公式ページからのダウンロードができなくなっていた。インターネットの海に浮遊するミラーサイトから試みる。すべてダメ。トライアルバージョンしかダウンロードできない。ということは起動するのに20分は掛かる私の古いパソコンで動画を作成するしかないとなる。なんのためにカミサンが新しいパソコンをプレゼントしてくれたのか、これでは意味がなくなってしまう。

### 「aviutl」

インターネットで代替の無料ソフトを検索。いろいろと試してみた。使い方がよく分からない。どのサイトも基本的にこのソフトがベストと出てくる。ただし上級者向けと。インストールしてみた。インストール自体がパソコン音痴には複雑。ピアノをほんの少しかじった方がいきなりジャズのブロックコードを習得しまあーすという感じ。無理がある。なんかもっと話を進めると私の師匠沖至が「イサオ、うーん、レとソの間ぐらいの音出して」。ジャズのノウハウのない方にはなんのことだか分からない。ちょっと、似ている。しかし、場末のとはいえピ

アノ弾きの端くれ。こういうマニアックな作業を覚えるのは吝かではない。結構本気になって取説を読み始めた。わっ、すべてのビデオ形式を受け付けるにはさらにこれをインストールして下さいと出てきた。わっ、「日本国内のみ使用可」。フランスに住んでいることを失念していた。ダメ。結局、諦めた。でも、このソフト、上級のマニアはたまらないと思うけれど、子供のビデオ、結婚式なぁーんていう方には複雑過ぎ。パソコン自体も上級でないと取説の用語自体が分からない。ほんと、ピアノをゼロから始める人にいきなりジャズの複雑なコードワークを覚えるというのに似ている。ドレミの位置さえ知らないのに・・・、同じことである。

### 「Video Pad」

ムービーメーカーに近いソフトと検索したら出てきた。初心者向けとも。昨日、インストール。取説をまったく読まずに動画を作れた。最後の方に10秒ぐらいの空白と、突然、映像の切れ端がバツ。どうも後半部のカッティングミスのように。でも、私はあまりこういうことは気にしないからそのままユーチューブにアップしてしまった。

総括。考えてみると、私は三次元の映像を作りたいとか映像加工の方へ興味があるわけではない。なんで私がバイクのヘルメットを地下鉄の中で被っているのか？ 娘とアドリアンがスクーターで私のコンサートを聴きに来てくれた。日曜日だったから。帰り、雨。スクーターはアドリアンが乗っていくことになった。娘は地下鉄。なんかパワーレンジャーみたいな面白いと私が真面目な顔で被ったまま地下鉄に乗ったのである。意味はない。パワーチャンジーだねえーとか言いながらゲラゲラやった。

突然、富岡多恵子「写真論」という昔読んだ素晴らしい書物が脳内を過る。それから、アラン・ロブ・グリエの一言「世界はあるがままにあるのだ」。話が飛ぶ。私は元美術家なのだけれど、加工された写真とか抽象写真、まったく興味がない。むしろ、素人のバカチョン写真の方がずっと面白い。芸術的とか詩的な写真とか映像？ 私は芸術的詩的なのは写真映像ではなくて、写されているこちら側、世界の方だと思うから、そんなものに撮り手の思惑なんぞいらんと思っている。こういう偏屈親父に諸々の映像エフェクトが可能なソフト、必要なし。バカチョンソフトで十分という結論になった。

えっ？ SF映画大好きな裕センセ。矛盾していませんか？ ちゃうちやう、あれは存在しない架空の世界。人工世界。じゃ、映画は？ 存在しているようでしていない架空の世界。人工の世界だからいいのだよ。本物の世界はややこしいからオタク的にこもって別世界を作るちゅうことね。だから、存在していない風景写真なぁーんて大好き。バベルの塔の写真見てみたいんだけど・・・。やはり、矛盾してませんか？

明日は、ドライバーの仕事。シャンティ一城に行ってくる。予約投稿記事を書く。

私、私で恐縮ですが、私も含めてミュージシャンはイメージ的に「努力をしないプータロー」という感じはする。

あっ、その前に、ばっばっばと記事を複数アップしたのだけれど……。 「暇と多忙」、それと「Movie Blog」。大体、Video Padの機能は把握した。作り直して完成形と入れ替えました。

一応、ミュージシャン代表ということで「私」とするけれど、基本的に「努力」という言葉は好きだけれど「教育」としてのそれは嫌い。どうして？ 「うざい」、以上。その対極に「好きこそものの……」という日本語もある。だから、私のピアノは後者だ。でもね、「入場料を頂いて弾く」。好きというより、やはり、社会的なゴトシ(仕事)である。えっえっ、場末のピアノ弾きが？ そういう疑問も出てくる？

はい、そこの君っ、お答えする。「裕センセがなんらかの心の支えになっている」、こういう人々がいる。第一、まず、先に「それ」は本名野渡司がいる。彼は俺だから、置いておく。家族は除く。

三十五歳から独学でジャズピアノを習得  
サラリーマンをしていた 課長だ でも 折れなかった

意外と、じゃないと思うのだけれど、こういう出発は後進世代にはインパクトがある。えっえっえっ、あたしは東京芸大のピアノ科よっ、なんで、あんな馬鹿親父のようにできないの？ ほれっ、すでに反面教師として一流じゃんかよってっ！

若い世代の偶像反面教師踏み台はいつの時代も必要なのだ。おっ、にほんブログ村エッセイ部門の「それ」でもあると自負していいのかしら？

右半身がなんとなく麻痺している。慢性的背骨神経痛。それからドライバー業ピアノと右側を酷使しているからだとは思う。でも、ピアノに這ってでもにじり寄る。これを「努力」というのかよく分からない。ミュージシャンは全員「こういうこと」をやっている。馬鹿といってしまうと分かり易いだけれど……。でも、努力とは違うエンジンだと思うのだ。

なんか違うベクトルに行ってしまった。次世代のためという感触は俺の年では当然にして考える。支えの一つになっているのであれば、折れるわけにはいかんのだ。それでもいいだけ

れど・・・、自然体で。と、俺はできる限り自然体ジャズ親父の方へにじり寄り始めた。年は取りたくない？ うなことは絶対はない。今の方が、ずっと・・・。

昨日はドライバーの仕事でシャンティエ城と古都サンリスに行って来た。ガレージに戻り夜は社長とレストラン「DETOUR(デトウール)」にて食事飲み会。シェフのお任せメニュー。フレンチ懐石。お皿、盛り付け、そして、味。完璧だった。二十七歳のシェフAdrien CACHOT(アドリアン・カショー)の腕前は半端ではないことを改めて思い知らされた。社長と私がもつ系が好きであることを知っている彼は、わざわざ特別メニューを作ってくれた。もつ料理というのか素材の持つ味わいを最大限に引き出している。「もつ」のイメージはまるでない。実に繊細な料理だった。最後にメイン中のメイン、我々の好物。豚の臓物のソーセージが出て来た。今まで一度も食べたことがないのではないかというぐらいに洗練された料理に変身していた。一口でその美味しさに唸る。今まで食べていたそれは何だったのかというぐらいに・・・。

### 「Adrien CACHOT」

ボルドー出身

ボルドー一つ星レストラン「Le Saint James」のシェフNicolas MAGIE(ニコラ・マジエ)の下で修業

テレビの料理番組で人気のカリスマシェフChristian ETCHEBEST(クリスチャン・エシュベスト)のレストラン「Cantine du Troquet」パリ十四区にて修業

若干二十五歳　パリ十五区の人気レストラン「Petit Pan」のメインシェフを務める　人通りのない住宅街にも関わらず昼夜満席の人気店である

パリのレストランインサイダーには若手の有望株の一人として認知されている。

2017年3月16日　レストラン「DETOUR」を開業。愛弟子のレストラン。ニコラ・マジエとクリスチャン・エシュベストが駆け付けてくれた。それからライバルであろう若手シェフたち。オープン二か月弱にて諸々の雑誌記事。テレビの取材とフル回転である。

ミシュラン一つ星、東京への出店。彼の「夢」。現実味のない夢物語ではなく、すでに射程距離内であることは彼の料理を食すれば分かる。二人の高名なシェフの目は確かなのだ。私がロンドンからフランスに来て三十四年が経つ。今頃になって世界遺産「フランス料理」の神髄を味わっている。

Restaurant 「DETOUR」 フレンチガストロノミー

15 Rue de la Tour des Dames 75009 PARIS

百貨店ギャラリーラファイエットから徒歩6、7分

Tel 01 45 26 21 48 要予約 フランス語英語および簡単な日本語対応可能

定休日 日 月

営業時間 12h00-14h00(ラストオーダー) 19h00-23h00(ラストオーダー)

フランスでは19h00オープンおよび23h00ラストオーダーは珍しい

通常は19h30ないし20h00オープン ラストオーダー22h00

メニューのみ

三日起きに新メニュー

前菜 メイン(肉または魚) デザート 二品の中からのチョイス

お昼

前菜+メイン または メイン+デザート 22euros

前菜 メイン デザート 28euros

夜

前菜 メイン デザート 32euros

フルコース六品 45euros

ワイン グラス5eurosから

当たり前のように当たり前でなくなってしまったレストラン業。彼の料理に既製品は一切ない。ソースからビスケットからアイスクリームに至るまで、すべて彼の作品なのだ。私は、当然だと思っただけけれど……。

さっきね、娘のレストランについての記事をアップしたのだけれど、これは、グーグル検索エンジンのために書いた。自分の営業、まったくなダメ人間なのだけれど娘のため、息子のためとかなると元々泣く子も黙る営業マンが復活する。コンサートもレストランもお客様なしには成り立たない。じゃ、自分の営業しろよっ、バーカと言われるけれど、とっつぁんは先がないのだ。いいのだぼちぼちで。

フェアリーさんの記事。「ウイット」。他人への思い遣り。ジーンとした。手前味噌だけれど、私もしばしば使う。気拙い時って結構、とりわけ営業マンの時は頻繁にあった。こういう時、なんか「そういうもの」があると「急に和む」。人間は当然にして和んでいた方が皆気持ちがいい。もの凄く低レベルのウイットだけれど、「裕さんはどうしてフランスに?」「はい、絵描きとして一旗揚げに。でも、揚がったのは白旗でしたあーっ!」。このセリフ五回ぐらい書いているけれど、馬鹿でかメルセデスベンツの運転ちゃんと後席のお客様との会話はこうでないといかんし、車内が和まない。そういうこと。

ところで、私以外にブログ総タイトルにピアノという字が出て来た。見た。わっ、凄い。やばいなタイトル変えないと・・・。

あっははは、変えない。

文章力も演奏も素晴らしい。ごめん、お自虐、あっ、オジギャク、脱毛ですっ!

起きる。娘たちのレストランへ。左側の壁の装飾をする。といっても既に作ったものを取り付け、アクセントのお花と葉っぱ。以上。お昼まで時間が余ったので、レストランの掃除機掛けをし、床の水拭きをする。これで、娘の仕事が減る。またまた、アドリアンが特別メニューを作ってくれた。豚胸肉の前菜が出て来た。美味かった。それから台形のステーキが出て来た。仰け反るほどに美味しかった。娘になんの肉か聞いた。「豚のヒレ」「そうなんだあーっ！」。それから娘が笑いながら「パパ、ごめん、牛タンのステーキ」。わっ。うなもんメニューにはない。痺れた。こんな美味しいステーキ食べたことがない。筒形のビスケットの中にコーヒー風味の寒天、チョコレートアイス、生クリームが入ったデザートが出て来た。デザートを普段食べないパピーは、またまた、その美味しさに仰け反る。

無料というわけにはいかんからチップを置く。娘の眉間に皺。「パパ、やめて」「へっへへ、先週、チップ一杯貰ったわけ」と退散する。娘たちのアパートへ向かう。孫犬が飛び付いてくる。馬面がそっくりだからお爺ちゃん認定されている。近所の公園にうんち散歩。一時間ぴったりでアパートに戻る。孫犬と遊ぶ。それから激務で散らかっている娘たちのアパートの掃除をする。ちゃっちゃとやる。食べるものがなんもない。近所の中華食材店に行く。カップヌードル各種、タイのカレー、チンすれば済むやつを各種、お煎餅、茶饅頭を台所に綺麗に並べ、孫犬にキスをして颯爽とパピピアノはパリの喧騒の中へ。ジャズメン顔に戻る。



昨日は娘たちのレストランで昼食。大急ぎで味見をさせてもらったことはあるけれど、ゆっくりと一人で食事をしたのは初めて。12---14h00。私のために一番いい席を空けていてくれたのだけれど、ファミリーが特等席では様にならんから、厨房横の端の席にしてもらう。レストランと厨房の間に仕切りはないからシェフの仕事振りがよく見える。

12h30ぐらいまで、私と営業ウーマン的な中年女性のみ。娘になんども「込み合ってるんだったらパパはいいから」と伝えてあった。「大丈夫、わざと四席空けてあるから」「あっそ」。まあ、娘とシェフにすれば開店までの工事に絶大なる威力を発揮したパピピアノであるから、そのお返しという感じなのだろう。私とすれば、当然じゃーーんっ、うなことっ！ となる。パピーは便利に越したことはない。

一見さんのビジネスマン四人がメニューと店内をじっと見ている。「ねえ、ここ行けると思うんだけど・・・」「よし、試してみようよ」と入って来た。娘が「ご予約は」「いや」「どうぞこちらへ」。この時点で「わざと空けていた四席」はすでに埋まった。ということは私が一人で二席をブロックしている。私のせいで入れないお客様が出るという計算になった。娘に言う。「パパ、いいからゆっくりして行って」「あっそ」。まあ、初めてだし娘の女将振りとシェフの仕事振りを見ていくか、となった。13h00ぐらいには満席。思った通りである予約なしのお客様が入れなくなった。まあ、私のブロックしている二席は勘弁してもらうしかない。

親馬鹿手前味噌抜きに娘の女将振りを理科系目で分析してみた。シェフ、洗い場、女将、三人が娘がデザインした紺色の調理服を着ている。これは珍しい。女将だけオシャレな私服というのが通例である。明らかに「女将だぞ感」が普通は出ている。娘、バイトの娘なのか全然服装からは分からない。これはいい感じである。威圧感がない。化粧をしていないと大学生にしか見えない。内気無口を克服してやっていますというういういしい感が漂っている。お客様からすれば好感度は抜群のはずだし、レストラン自体のイメージ、看板でもある。さすが理科系。注文、お皿運び、お皿下げの各テーブルのタイミング、完璧である。フランスでは「早過ぎる」とクレームになる。遅過ぎも、とりわけお昼はクレームになりやすい。それとお会計のタイミングも追いついていきます感が出るのは厳禁。この時間間隔が完璧だった。近くを通る娘に小声で言う。「パパ、大変だけれど随分慣れて来たよ」。

一見さんのビジネスマンの反応を観察する。一口入れる。四人で目配せして頷いている。「おっ、やっぱ、当たりいーー」と目が言っている。メインの時は四人で頷き、満足げに笑った。それから、娘をちらちらと見る。大体、想像は付く。「あの子、フランス人かな？ ちょっと東洋ぽいけど・・・。ロシア系かな？ いや、東欧の血が入ってんじゃない？」。大体、こんな感じのはずだ。

私の左隣、高年夫婦二組。「いやあ——、美味しかったよお——」。ビジネスマン四人組の隣に若いモデル風の娘と私ぐらいの年齢の男性。親子ではない。演劇、デザイン、なんかそっち方面の感じ。その娘、なんとなくデカダンな空気。面白い。インテリ風三十代の男性二人組。中年のカップル。その間に予約なしの方々が「あら、満席、残念」と出ていく。13h45ぐらいに席が空き始める。テーブルを片付ける暇もなくお客様が入ってくる。結局、ずっと、満席。

シェフの仕事の早いこと！ もちろん、朝の七時から仕込みをしてあるから最後の仕上げなのだけれど、超絶的に早い。洗い場の兄貴が頻繁に足りなくなった材料を地下の冷蔵庫に取りに行く。娘が立て込んでくると大男のシェフが調理服に野球帽を反対に被った姿でお皿を持ってぬっと現れる。お客様に「どうも」と挨拶。これがなんか唐突で面白い。

しかし、夜は洗い場の兄貴はいない。娘とシェフ二人だけである。こりゃー、限界だな。アパートは遠いし……。これではまともに食事も昼寝も取れない。早急の改善をお願い申し上げる次第である。と、皆でウェイターとアパート探しを始めた。

わっ、還暦まで二年を切ってしまった。還暦＝エンドオブキャリアーと私個人は理解している。たぶん、そうではないと思うのだけれど・・・。ちょっと待って、調べるね。あっ、じえんじえん違う。まあ、いいや。江戸時代の人間の寿命が五十ぐらいだったから、もう、十分つうーこと。とはいえ、超高齢化社会。私の両親は健在である。と、私の立ち位置は江戸時代とは当然違う。でも、私は年寄りぶるつもりはさらさらないけれど、馬鹿みたいに若作りなんてしない。爺さんである。江戸時代感覚は生物学的には自然だから、私は「これ」を年齢基準にしている。

ところで、俺もカミサンもなんだか仕事が程よく入るようになった。いい感じ。お金はない。でも、いいのだ。物欲がないから酒とたばこが買えればいいという程度なんだから楽だ。欲しいもの？ そうねえー、ピアノ室ちゅうか、四六時中、ピアノをピンピン、ドラムばしばし・・・できる部屋は欲しい。それと、ヤマハのU1も欲しい。以上。お金が余ったら？ 文化センターを作る。食えない後進の役に立つ。以上。ルイビトンもポルシェもいらん。似合わないのだ、俺には。ブランドだから・・・、うっしししし。本名野渡司君に似合うのは「Isao YU」。以上。

ところで、あんま、息子の手前、詳細は書けん。アパートシェアリングがロシアとアメリカ冷戦時代で悶々としていた。まっ、息子のシェアリングパートナーの選択ミス。勉強になったはずだ。色気、そこに親友が侵入、二対一という修羅場のシュビドゥビダになった。うなことをしている時間は息子にはない。でも、そうだった。しんどかったはずだ。後方援護部隊、俺とカミサンがいる。突撃するか俺は親父だから見守る。「あやつが起こした事態なんだから自分で解決。以上。ラジャー」。カミサンは「今、突撃しないと・・・」。むむっ、母親は強し。でも、俺は偏屈親父だから動かない。ほおーら、息子が自分で解決の道を開いた。いいのだこれで。でも、やばい時は、ターミネーター親父が出現することを息子は知っている。一切れのパンなのだ、親父は。理不尽なことは俺は許さないから、理不尽にはそれなりのご対応をする。以上。

ところで、娘たちのレストランは何回か書いた通り。嬉しい悲鳴と絶叫の間ぐらいだから早急になんとかバランスを取らんといかん。でも、俺は一切の助言はしない。倒れた時に気が付くことは知っている。倒れないように裏方裏方。でも、倒れたら本人が痛い痛い。そういうこと。ひやひや目だけれど、若い連中にご忠告なんぞいらん。

ところで、俺のパソコン。絶好調っ！

裕センス、後は内容だけですね。るっせえーっ！ リーブミーアローンっ！

私が偏執狂的に「嫌いな言葉=音」がある。その一つ「うんこ」。もう一つ、「落ちる」。わっ、書いていただけでざわざわする。でも、書く。私はうんこ恐怖症で、なんかね、至る所にうんちが付いている恐怖。トイレの取っ手だのパリの地下鉄の手摺なんて怖くて触れない。サマーズの大竹さんが俺と同じなのを知って安心した。潔癖症というより病気だ。だから、娘たちの犬孫が家に来ると、その恐怖が増長する。あやつは、うんちをして「拭かない」。ここが問題なのだ。私の家のソファーとか私のピアノは堅いから「それ」はないとは思うけれど、至る所で「うんち拭き」をしていることは間違いないのだ。うんこ、うんちの話になると2000ページぐらいになるから止める。

わっ、もう一つの方。はっきりと「縁起が悪い」感じがする。むむまま人生とか、飛行機がむむまましたとか、ミサイルがむむまましたとか・・・、とにかく、なんかヤなのだよ。私は物が落ちると拾うけれど、「その後、手を洗う」のだ。病気の一つのはず。私個人はいいのだけれど、家族に「それ」は超緊張する。でも、田村隆一が「落ちる」という詩を書いている。

昨晚、Netflixで「グッドモーニング・コール」という、おっ、懐かしい「りぼん」に掲載された漫画の実写版を嬉々として見ていた。本当にシナリオライターの方々、それから、俳優さんたち。凄い人たちである。私は「文学者であるから」、でけんのだ。デッケンズと呼んで頂いて結構。本当に「よく出来ている」。「泣かせ所」とか絶妙。やはり、私が「売れない理由」もよく分かる。私はストーリーテリングはまったくダメ子。才能ゼロ。本当に、高校生の恋愛ドラマ。絶対に書けない。素晴らしいです。

そのドラマを三篇見た。カミサンに叱られる。寝る前にたばこを吸いに階下に降りる。コースター代わりの紙ナプキンが、たぶん、風で床に落ちていた。わっ、嫌だなあーといつもの反応をした。でも、本当に突然、久保の兄貴がオネエー疑惑？ じゃなくて、「引力」のことを考えた。

わっ、引力かよおーっ！ 生まれ「落ちる」ってそういうことかよおーっ！ 俺たち、わっ、全員、地面に「落ちている」。磁石なの？ 地球の表面に「落ちている」。

地球は丸いから私の家の土地もほんの少し円形のはずである縁起もへちまもそもそも我々は地上に落ちていた当たり前のことを一秒弱で私の脳が把握したやめて欲しい脳モアサンキュー産休を取らせて頂きたくでも引力なくなったらミサイルは飛行船かわゆい浮かんでいるだけだ

なんか訳の分からないタイトルを付けてしまった。たとえば、私のブログは、どうも長寿。更新頻度も相当にして高い。無内容とはいえ続いている。そして「コツ」というものがあるのか？  
はははあ、ない。

そもそも「ブログを続けなければならない」とか、そもそも「やらなければならない」、これ自体がないから「コツ」なんて当然にしてない。努力して書くなんていう職業作家じゃあるまいし、金銭がまったく関わっていない系のブログなんだから止めてもいいし、年一回の更新でもなんでもいいのだ。

ピアノ？ うーん、これはなんかちょっと違うのだろう。ブログの総タイトルの通りだから、這ってでも続ける。でも、ピアノなんか弾けなくたってなんの支障もない。私個人はそうはいかんというだけ。なんかね、空手を続けるとかボディービルを続ける、私にはよく分かる。私の義理の甥っ子がボディービルダー。細い弱弱しい子だった。今は筋肉隆々。「あっ、オジさん、自分のためです」と言っていた。フェアリーさんの本日の記事の中に孔子の教えが出てくる。「暴力にどう対応するか」という。フランスに長年住んでいるせいなのか、五項目の中で当て嵌まるもの。脳内で二番と反応する。私の義理の甥っ子もボディービルの根源にそれがあると推測する。でも、二を踏み台に五を目指すという心のベクトルがある。と結論した。

「ブログが続く」とはどういうことなのか？ 私個人は・・・。

根底に引き籠り系というのがある。人と会うのがあまり好きではない。話すのも億劫なところがある。傲慢とかではなく、あまり、興味が沸かないのだ。自分にさえあまり興味を感じないのだからねえー。そうなる自分で自分の中の他者にお話しするというオタク現象が起きる。一人漫才でもいいのかも知れないけれど「書く方」がやり易い。と結局書く。しかし、結構いらっしゃるのだけれど、自宅で延々とピアノの練習をしている人。これは一例だけれど、あまりに籠り過ぎると世界が自己完結してしまう。病気になる。もう、音楽ではなく音学になる。音楽は他者と音、同じ時間を共有することだと理解しているから、コンサートをやる。

ブログも似ていて「自分の中の他者との会話」を本物の他者と共有する。そうしないと病気になってしまう。と、なんの努力というものなしに結果続く。結構、なんか暗い理由があるのかしらね？ 単純に「ものを書く」と自分の現在がよく見えるということもあるし、漠然としているものが明確にもなるし・・・、と色々と効用はある。

籠り系の方々こそ、ブログはいいよおー、ブログは、うんうん。いいよおー  
ーっ！ コンサートもいいよおー、うんうん。キャー、なんなんです、このオジさんっ！  
！ そうです、わたすが変なブロガー、ピアニストです。

今週のドライバーの仕事は、日、火、木、土。綺麗に一日おき。長い一日なのだけれど、「翌日休み」という心的な休息感があるから、それほどしんどい感じはない。と、この記事は予約投稿。少し前に「芸術熱」という記事を連載みたいな感じで書いたのだけれど、さっき、ピアノの練習をしていたら文学熱が出始めた。

何度か書いているのだけれど、私の自作ピアノメソッド「ドラゴンへの道」。このピアノ的数式を延々と練習。二十四音階を一昨日、またまた一回りした。一周するのに一か月ぐらい掛かる。二ミリ前進のところが、たぶん、二センチぐらい前進したことが自分で分かる。もしかすると、私は努力家なのか？ うーん、分からない。そうなのかも知れない。理科系真面目人間なのだ。これは、私の親父、私、娘と遺伝子構造は引き継がれた。だから、文科系「不」真面目人間、わっ、誤解を招くけれど、この「不」。でも、数学的には「そう」書かないと対極にならない。と、配偶者はそんな感じの方が上手く行くことは周知の通り。お袋、超芸能系。家のカミサン、論理的なことは一切ダメ。宇宙と一体化しているから、そんな姑息なことはいらんのだ。家の息子がカミサンの遺伝子を引き継いだ。だから、私は娘のことを「ミニモア(小さい私)」と呼んでいる。

僭越にも「映画のシナリオのような小説が日本には多過ぎる」と書いた。でね、夜な夜な日本の映画とかドラマを見る。本当によくできている。でも、こうなると「映画のシナリオのような小説」、まったくもって読む気がしない。違うな、誤解を受けると困るのだけれど、小説＝文学ではないということ。じゃ、小説が格下なの？ そうではない。違うもの。物語。もちろん、物語も文学の一つ。でも、文学まで昇華した物語的小説があまりないということ。ややこしいから、以下、書いてみる。つまり、「映画化できないというより文章の方が格段にインパクトがある小説」について書いてみる。

レーモン・ルッセル アルフレッド・ジャリ ビィリエ・ド・リラダン 私が個人的に愛してやまないアンリ・ピエール・ド・マンディアルグ

そういう下地の上にカフカ ベケット ジョイス イタロ・カルビーノ すいません、年代がバラバラ

と、書いて行くと一冊の本になってしまうから、もっと分かり易くする。「私の心を捉えた作家たち」とする。思い付くままに。

富岡多恵子 私の基本的世界観は彼女によって形成されている

金子光春 晩年の自伝小説三部作 随筆の極北と理解している

吉岡実 時空を超えた詩人 時代の影響を受けていないし実に色っぽい

深沢七郎 現役の作家が神話を書いてしまう 世界的にも稀な作家

三島由紀夫 ストーリーテリングの天才 「金閣寺」「宴のあと」「春の雪」

この筆力は超絶的である 私は「金閣寺のための金閣寺」という美術作品を作っている

稲垣足穂 宇宙人

沼昭三 宇宙人

森敦 「月山」 どこか根源的に私の深奥に迫ってくる

ヘンリ・ミラー フリージャズ アメリカ 小説 社会道徳 すべて破壊しようという気概は  
天才的

レーモン・ルッセルとマルセル・デュシャンの言語実験 人間の個性とか主観自体を解体する  
先駆的研究

と、こういうものが日常生活脳の中で渦巻いている。ちょっと、病的な気もするけれど・・・  
。

お元気ですか？ はい、元気です。あなたは？ はい、元気です。肺は大丈夫ですか？ はい  
。一杯行きましょう。いや、肺の調子が、はい。お銚子ですか？ えっ、わたしはお調子モンで  
はありません。えっえっえっ、A型？ おっ。

ちょっと、長くなるかも……。お忙しい人はパスです。

今週の俺のドライバー業。日火木土。一日おきのハードワーク。一日が長い長い。今日は水曜日で睡眠不足でふらふらダンス。といいつつ、働き者の俺は、朝から畑にトマトを植えた。なんかね、今年は家族全員飛躍の年的で快調。俺の庭までなんだか快調。ちょっと、端折るけど、じえんじえん実が付かなかった梨の木。一杯実りちゃんの気配。東北大震災の供養のために植えたマルメロの低木。全然、花が咲かなかった。今年、突然のように赤い花が花火のように咲いた。私の祈りがどこかに通じたのかも知れない。それから二年前ぐらいだったよな、カミサンの誕生日にピボワン(ねえ、サクライ君、日本語だとなんなの?)をプレゼントに買ってきた。カミサンは花束が欲しかったらしいのに東北人的愚直真面目人間の俺は鉢植えのそれを買ってきた。カミサン、

げっ。仕方がないからマルメロの低木の左に植えた。カミサンも俺も、その存在さえ忘れていた。芝刈りの時に危うく刈ってしまうところだったのだ。今朝、庭に降りた。階下だから。ピボワンの「大輪の花」直径十二センチぐらいはある。見入ってしまった。凄げえ——っ！ まっ、俺もカミサンも、もう、還暦が近いから大輪の花は無理だ。その花を見て、おい、息子よっ、娘よっ、お前らの番だぜっ！ と、ちょっと、うるうるした。でもさあー、大輪じゃなくていいよ、小さい小さい花でもいいのだ。酒、あれっ、咲けば。

さっき、半分眠りながらピアノの練習をした。ちょっと、休演をすることにした。私が自分で作ったピアノメソッド「ドラゴンへの道」。少しずつ加筆されて行ったのだけれど、Cmのページを見たら2006年に最初のコードワークを書いたらしい。もう、十一年も経っている。そして、沖至師匠に会社を辞める前ぐらいに「お前、ブロックコードを覚えろ」と言われた。すでに六年経っている。

そして、この五年間、延々と練習してきた。そして、初めてだ。ドラゴンになったわけではない。「ドラゴンになりつつある」という実感を、そう、「初めて」感じた。これは、やっぱね、「努力の賜物」だよねえー。白帯が茶色になって、それが少しずつ黒くなっていく。

そう、俺の余生は安泰なのだ。

羽毛っ！ さっき、ピアノの練習を厳しい顔でやっていたら娘から電話。レストランの合間に自宅に帰りワンちゃんの散歩。扉ばたん。入れない。アパートの鍵持ってきてクレヨン。カミサン、眉間に皺、「あなたっ！ サンラザールに鍵届けてくれない」。

あのねえー、俺さあー、昨日、午前五時に起きて帰宅午前一時。でね、明日は午前四時半に起



きる。もう、立っているだけの親父にそれはないんじゃないっ！ 人使い荒え——って！ 志村けんのバカ殿見て寝るのだ。

おっ、タイトル自体を忘れてた。うさぎとかめ。まあ、俺はピアノ亀だ。でも、絶対に兎を追い越すことはできない。三十五歳からスタート。無理だ。でもね、亀でかめへん。

今、帰宅して夕飯まだなのにブログを書き始める。晩酌をしないと夕飯が喉を通らないのだ。赤ワインをちびちび飲みながら書き始める。はははあー、特に書きたいテーマがあったわけではない。わざと濁すけれど私が大ファンのブロガーさんの記事を拝読したら、このタイトルになった。

欲しいもの。特にないのだ。だから不平不満もない。もう、完璧な終活シフトに入っている。しいて上げればピアノ室というか何度も書いているけれど、四六時中、好き勝手楽器が弾ける部屋。超贅沢といえ言える。私の家の構造上、半地下室は可能なのだけれど、螺旋階段をピアノが通らないのだ。と、一番安価なピアノ室=サイレントピアノとなったから、別にそんなに不満はない。でも、生のピアノの音とは違うところが若干不満だけれど、言い出したらキリがない。

そうかあ、酒とたばこはいる。ピアノはある。ブログを書く新しいパソコンもある。カミサンがいる。子供たちは元気にしている。お金がないのに馬鹿でかベンツもある。女子にもてる。わあ——おうっ！ 十分過ぎです。

そうねえー、唯一の不満はピアノドラゴンにまだまだ遠い。不平不満は俺本人へ、という心のメカニズム。平和な人だ、俺って。

またまた、日付タイトル。本日はオフ日。明日は仕事でジベルニーとオーベェール シュル  
オワーズ。

急に推理小説。

昨晚、本名野渡司は午後九時半に帰宅した。玄関の足拭きが裏返しになっている。奇妙である。  
。しかも、一階に明かりはない。妻がいるはずなのに。本名野は大きな声で「ただいまー」  
と言った。暗闇の中で返事はない。本名野は元英国諜報部員。咄嗟にホルスターからワルサ  
ーPPKを抜く。腰に力を入れて銃を構える。二階に向かう暗い螺旋階段を少しずつワルサーを構  
えながら上る。娘の寝室。だったと過去形。現在は妻のサロン。一階が本名野のピアノ室のよ  
うになっているから、妻との二世帯住宅化したのだ。そんな描写はいらん。螺旋階段の壁に背を付  
けながら上る。その部屋の扉を開ける。咄嗟に飛び込み銃を構える。

「あなた、お帰りい」とニュースを見ている妻がどうでもいい感じで言った。娘の  
ベッド。だったと過去形のベッドの中にだれかがいると本名野は咄嗟に判断した。寝男かっ！  
ワルサーを向ける。掛け布団が盛り上がり、孫犬のボワイヨーがおじいちゃんに飛び付いてきた  
。

答え。玄関足拭き裏返しの犯人はあやつなのだ。表にしているとおしっことうんちを芝生と間  
違えてやる。

ところで、蝶姉さんの記事「怨念との闘い」。その筆力に唸った。凄い文章だ。「ワラ人形」  
の例え的描写に仰け反りました。ブログ村老舗店の面目を「密かに」保っている。のれんをくぐ  
る人が多いのが頷ける。

あっ、ありがとうございます。ピボワッンって日本語だとポタンの花のようです。深謝です。

本日は、孫犬がいるから芝刈りした。芝刈りして芝刈り機の電気コードを巻いていたら雨。  
わっ、その前にいんげんを畑に巻いたから恵みの雨である。私の小説、一冊だけ上梓されたそれ  
のタイトルが「水の記憶」。水って雨、海……。地球が地球である根底に水という不思議に詩  
的な物質がある。

ところで、コンサートはちょっと休演することにした。二十四の瞳ではないけれど、二十四音  
階のひとつひとつを使ってパリの映像と自作曲を被せたビデオをユーチューブに順次アップしよ  
うかと考えた。ピアノドラゴン化の第一弾なのかしらね。それと、

リールの私のユニット。バンサン・バン・ミラーを復活させようとも考えている。詩人のジャン・リュックとエリック・ミモザとの私のトリオである。58-56-49。これは我々の現在の年齢。発足当時は49-47-40だったはず。皆、ジーちゃんになっちゃったあー。それから、サンラザール駅の人込みの中のコンサート。これは諸、売名行為。でも、やる。わあーおうっ、沖至師匠とのデュオコンサートという恐ろしいことをやる。中堅芸人がビートたけしと漫才する。同じこと。恐ろしいけれど、やる。

明日はブログ書けないから二回に分けて読んでね。って、最後に書くなっ！

凄いオジギャグタイトルなんだけれど、うなもんは、ない。

わっ、今日の記事も凄いと思いました。もしかすると私には姉さんっても大して変わらないはずですが、姉さんの記事は秘薬なのではとも思います。毒も孤独もあんま溜めない方がいいですなあーんていううざいことは言わんの馬鹿です。勝手にブログジャムセッション。いいですよ、私のブログのブログ村第一発見者ですから。見る目がおありだったと申し上げる次第です。えっ？

なんかね、私の自作ピアノメソッドを何百回目かの一巡を「いつものようにした」つもりが、明らかに飛躍している。こんな実感は初めてだ。五十八歳になって初めてピアノ黒帯化が始まったような感触。

なんかね、わたくしは超高齢化社会の一つのプロトタイプなんじゃね、と思い始めた。ゲイズツツカとしては大成せんかったけれど、なんかね、生き生きした断捨離と終活と正しい好々爺を両立したということで内町小学校(ふくすまけんいわぎしのうつごうつーとこにあんだ)の校庭に銅像が立つ気もしてきた。半分嘘。俺の銅像かあー、わっ、また、書きたいっ！ 「どうぞおー」

。

私は営業課長も父親も辞めた。旦那は辞めない。自主的なものであるから。

辞めたいものの一つにというか唯一のもの、「長男」。辞表を出したい。もちろん、そうはいかない。親子の縁切りしかなくなる。遠距離恋愛じゃあるまいし、そんなことはできない。でも、次世代の私の家系の筆頭者は辞退した。これは良識的な判断である。フランスのお墓に入るプータローが日本の一家の長なんてことは不可能である。

私の母国、日本という国で、一家の長男がフランスでプータローしているということはどういうことなんでしょうか？ 私は真面目人間だから、当然にして考え分析する。考えているうちに辞表を出したくなってくる。そうはいかない、長男だからである。どうどう巡りをしてもなんの解決もない。

そうなると論理的な分析という一步下がった視点から見る。親子とか家族とか情愛とか、そういうセンチメントを除外して分析する。超高齢化社会。超高齢者が皆、裕センセのような賢者ではない。だから、論理破綻が起きる。しかし、論理的な思考こそ、そういう時は有益であり、もやもやししながらピアノの練習をすることも、本当に大切なのである。自分でなくなってしまうのは私が困る。

私はかつて新宿の下落合に住んでいた。近所に作家の金井美恵子さんが住んでいた。お会いしたことも訪ねたこともない。

そのカナイさんが突然、私の下落合の下宿と言ってもなぜか今のフランスの住まいにいらした。イメージ通り、小柄でお河童頭の女性が玄関口に立っていた。私は大変に恐縮した。カナイさんの大ファンであるとなんども言った。カナイさんは「裕さんに私のピアノを聴いて欲しいのです」とおっしゃった。「もちろんですよ、カナイさん」。

カナイさんのピアノの技量。半端ではなかった。

と、これは正夢というものであろうと判断する。

元々、肩凝りが酷い。その上にピアノが乗るから肩凝りを乗り越えて痛いのだ。ピアノ飛躍のせいもあるのか、最近、更に酷い。酷いのだけれどピアノを弾くための筋肉が盛り上がっていることが目で分かる。指さんたちのスピードも全盛期に戻っている。上半身に筋肉の鎧を付けている感じ。ピアノマシン化なの？ 沖至師匠のアドバイス「ブロックコードを覚えろ」。これが血肉化し始めているのだ。望むところである。この調子で行くと私の定年と共にピアニスト裕イサオはそれなりの全盛期を迎える感じがしてきた。六十二歳でデビュー？ という感じ。全然、比較にはならないけれど森敦さんが芥川賞を受賞したのは六十五歳。長い間、最高齢記録だった。受賞が重要なのではなく「彼のデビュー」だったことが凄い。そう言えば、マックス・エルンストの最初の個展が五十代だった。

と、ここまで今朝書いた。これではなにを書きたいのか分からない？ そう、「遠距離親子」。「ピアノ肩凝り」というタイトルを変える。

私とカミサン、至近距離。息子と娘、35km。私の親父とお袋、地球の反対側。地球の反対側の私の妹、長女である。実家との推定距離7km。同条件で弟、推定250km。長男が地球の裏側にいる。ふむ。

実家方面がまたバタつき始めた(医学的に)。こんなことをブログに書いていいのか分からない。

スーパーマンの衣装を今、庭に干している。



五月中旬まで雨が多く肌寒い日が続いていた。今週末はフランス人にとって「ゴールデンウィークエンド」である。木曜日が祭日。金曜日、フランス語でポン＝橋を取るから、四連休となる。しかも、毎日、晴天三十度。すでに夏のバカンスが始まったような趣。

私もたまたまプランニングのせいで今週末は暇。カミサンと小旅行。大工仕事と典型的なフランス親父の週末である。唯一、そこにピアノとブログがあるから若干、典型から外れるのかも知れない。

今日は朝から、トイレのリノリウム張り。便器だパイプがあるからカッティングは複雑である。しかし、私はこっち方面はプロである。庭の扉のペンキ塗り前の下準備。螺旋階段の分からない日本語でなんと言うのか……。足元に十五センチぐらいの装飾的な木の張り出しがある。そこのペンキが諸々がぶつかり剥げている。剥げている部分の修復。これから庭のいんげんとトマトの水やり。マーボー豆腐を作るのだ。

今、気が付いたのだけれど、二日間記事を書いていない。そう、実家の方が少しまたバタつき始めたからである。地球の裏側に私はいるから心配は増長する。心配していても埒は開かない。妹、弟との連携以外にはない。こういう時の長男というのはデリケートではあるけれど、指揮者的存在でなければいけない所が、おフランスプータローには辛いからブログが書けなくなる。でも、ピアノは延々と弾く。

よぼよぼの体なのに、ピアノを弾く筋肉だけキンキンに盛り上がっている。心が折れそうな時、このピアノで鍛えられた筋肉が心を支える。

昨日から肩凝りを乗り越えた肩凝り。ピアノ狂の肩凝りに苦しんでいる。痛いのだ。真っすぐ歩けないぐらいに痛い。ピアノ筋だけブルース・リーみたいになっているから当然なのだろう。よぼよぼ爺さんの体なのに指先から肘、肩の辺りだけパンパカパン。変な体。カフカの体と申し上げる。

そういえば、一週間前ぐらい仕事のために午前四時に起きてコーヒーを入れようとしていたら、巨大なゴキブリのようなものの後ろ姿。わっ、一瞬、カフカの世界が現実化と半分寝ながら考えた。そいつは通り過ぎ四つ足で去った。なんなんだ？ 娘たちのワンちゃんを預かっていることを失念していた。それにしてもお爺ちゃんに飛び付く奴が後ろ姿を見せて単に去った。半分、あやつも寝ていたのだろう。あー、びっくりしたよってっ！

毎日、三十度。超絶肩凝りと灼熱でふらふら。

明日はフランスの母の日。息子、娘、彼氏、ワンちゃん。オレンジ色のパラソルの下でバーベキューなのだ。毎々、父の日とか母の日は皆忙しいから無視して結構と言っているのに、あやつらは言うことをきかん。我々、愛されているのかも？ ママは間違いないけれどパパの方は怪しい？ ピアノ馬鹿振りに呆れていると推測はするのだけれどね。

先週の日曜日。花屋に裕センセ。牡丹の花の大きなブーケ。会計する時、「お誕生日ですか？」「えっ、母の日なんでうちの家内に」「母の日、来週ですけど」  
「えっ」。大きなポスター。五月二十八日は母の日でえ————すっ！ 裕センセ、大きなブーケを持ったまま、あはあはあは、僕ネエー、せっかちでねえ————、あはあはあは。「お客様、お忘れになるよりはいいと思いますよ」「うん、君、正解。また来週。あはあはあは」。

本日、三十二度。今朝、再度、牡丹の花のブーケを買ってきた。花屋のお姉さん、私の顔を見てアハハあーと笑った。「どうもどうも」。先週の日曜日にどじを踏んでいる裕センセ。でも、おっさんだから堂々たるものである。横のハイパーで、マラゲーズソーセージ、ツウールーズソーセージ、豚の臓物の腸詰ソーセージと大きなマッシュルームを購入。炭火で実に見事に蒸し焼きという感じで焼いた。

バーベキューはせっかち組はダメ。白い煙で燻し焼きがベスト。お腹がはちきれんばかりに食べた。肉攻めなので今晚はムール貝。娘が激務でまたまた痩せた。元々、細いのにまたまた痩せたからおとつあんの手料理で少し太らせて帰すのだ。男の料理は愛が籠るとるぞっ！ ということにする。女子のご批判はお受けいたさんっ！ 板さんだから・・・。

ところで北フランスだけではないけれど、乾燥しているから空も空気も透明。サングラスをしていないと涙が出てくる。同じヤマハのピアノを日本で弾くとフェルトが湿っていることが直ぐに分かる。こっちで弾くと明るい音色。悪く言えばちょっと金属的。日本、韓国のピアノにこれは共通している。

透明な灼熱。煙草を買いに公園を横切る。白昼夢の中を歩いている感じがする。または、キリコの絵の中かな。

今朝、庭の畑。一週間経っていないのにいんげんの葉っぱ。去年は長雨でいんげん全滅。ほっほっほおー、今年は豊作の見通し。いんげんの天ぷら、作るどおーっ！ にんげんといんげん、どっちが好きかって？ うーん、難しいこと聞くなよ。

昨日、近所のハイパーマーケットへ。ハイパーマーケットの横にお花庭関係のお店と言っても同じ系列店。以前は日曜日はお休みだった。フランスも段々、いわゆるグローバリゼーションというやつで日曜日開いているお店が増えている。ドライバー業のお客様によく聞かれる。「どうして日曜日お店閉まってんですか？ 店主にとっても、フランス経済にも絶大な威力と思うのですけれど・・・」。「私の個人的な解釈も少しありますけれど、カトリックの国では日曜日は神が仕事の手を休めた日。俗物の人間が仕事をしてはいけない。ということなのだと思っています」。

私のこの解釈はちょっと詩的な感じで気に入っている。たぶん、本当なのだと思う。違うな、物の本で読んだ記憶がある。フランスは週三十五時間労働。五週間の有給休暇がある国。フランス革命の伝統が息付いているからだ。すべてが経済効率の方へ向かう現代社会。貧乏臭い。文化の土壌はブルドーザーの下。私の母国も早急にフランス化して欲しいと思う。勤労は美德であるにしても、会社、隣近所とどうでもいい人間関係で忙殺され、きちんとした休みもない。でも、長寿国ということは、あら、日本人は自らそれを望んでいるということなの？

以前にも書いた。フランスの人口は日本の半分以下。それなのに国民生産量は日本の半分。労働時間も下手をすると半分に近い。そうすると「日本人の仕事の仕方は無駄が多過ぎる」という数式になってしまう。論理的に判断する能力に欠けているのだと思う。八十時間の議論をしてもいい。結論が出ないのあれば無駄。鶴の一声。これでは独裁になる。そうではなくて、的を絞って議論して決断すれば解決する。極東の国々が今もって戦争を引き摺っていることはとても奇妙。これでは前に進まない。感情が先にくる？ いや、そういう風に教育洗脳？ いつまでもこんな貧乏くさい政治はいらない。

わっ、とんでもない方向に記事が行っている。グローバリゼーションも極東の政治も私には興味がないということに一応する。でね、中国風の上履きがワンちゃんのおもちゃになってぼろぼろ。三週間ぐらい探しているのにサイズがない。マーケットのバーゲンセクションに、ちょっと格好いい上履き。ゴム底の感触を確かめる。そう、ピアノのペダルが踏み易いか。いい感じ。超安いから買ってきた。

「ねえねえ、えれえ一格好いい上履きめつけたよ」

「あなた、それ水の中を歩く靴よ」

「えっ、そうなんだあー。超気持ちいいんだけど」

それを見た娘が買いに行った。おっ、娘と腕組んで「せせらぎデート」っ！ いかしてるぜってのっ！

仲間たちから毎日コンサート案内メールが届く。うんうん、皆、元気そうねえーっ！ と好々爺目でメールを裕センセは見ているだけで重い腰を上げない。裕センセはすねているの？ ちゃうちゃう、イケイケモードもいいのだけれど、時々ね、意図的にヒッキー小森になる。

裕センセのご自宅はサナトリウム？ パリから見れば田舎。真南の丘の上に建っているからリハビリセンターのような感じにも見える。心の充電にはもってこいなのだ。南仏でバカンスしているような感じでもある。毎日、暑い暑い。避暑地でもある。

と、裕センセはバカンスなの？ ちゃうちゃう。

初めてピアノ技術の飛躍を感じた裕センセは、磨きをかけるのは今だっ！ と判断したのである。そして、故意にヒッキー小森と化す。わっはははあーっ！ また、会おうっ、君たちっ！ 秋になったら。

と、そんな感じなわけね。

明日、明後日はドライバー業。ブログ記事の更新はできないから、などと言いながらどうでもいい記事を書く。

その前に久保の兄貴の記事「赤い靴」を拝読。この曲、実は裕イサオアレンジでできているのになぜかあまり人前で弾かないし、ユーチューブにもアップしていない。なんか怖いのと、もう典型的な短調の曲が悲しくなるのと、なんか、フランスという西洋世界にずっと住んでいると、この異人さんというのがなんか気に掛かる。正直に「少し屈辱感」が込み上げてくるから弾かないのだと思う。なんか暗いしサディズムとマゾヒズムの臭いも私は感じてしまうから、指さんたちが躊躇する。おまけにエロティシズムまで感じてしまうからややこしいのだ。この曲、うーん、やはり、いつか世に出そう。大好きな？ 曲のひとつではあるのだ。これが童謡というのが凄いとも思う。

わっ、ニンジンに誘拐。これはなんかいい感じ。そうかぁー、「ニンジン色の靴」に編曲すればいいわけですね。

毎日、暑い。少し涼しくなった感はあるけれど、二十九度。暑いから風呂に入る回数が増える。

私は出来る限り風呂に入りたくない系。インテリだからめどうなのだ。風呂で寛ぐ時間があるのならピアノににじり寄るといふ阿保。そうねえー、体面とか世間体というものから解放されているから、ますます、めどう。ばっちい格好でうろつくことがまったくもって気にならない。なんとなく、心が円空のような感じになっているのかもしれない。

とはいえ、リムジーンドライバー。黒いメルセデスベンツに不精髭ばっちい運ちゃん。これは美しくない。医者に行き床屋に行った。繁忙期がくる。床屋の床の私の髪。参った。グレーなのだ。鏡に映る私の髪。グレー。ロマンスのないグレー。グレでやるっ！ というお自虐がお似合いなぐらいに白髪の多いことっ！ 苦労してるからねえー？

でもね、短髪の自分の姿を鏡で見る。深呼吸して胸を張る。そこそこハンサムな感じは「残っている」のだ。自分で言うのだから本当。これにスーツとサングラスとメルセデスベンツ。そこそこは格好いいと自分で思っちゃったぁーっ！

ここまでが、前置きのなのだよ。でね、風呂嫌いだから思い付いた。「干ばつのアフリカで三か月ぶりに風呂に入った男の趣味レーション」。風呂桶に七センチのぬるま湯。これですべてをすます。これがなんと南東とは関係ないぐらいに気持ちえがっ

たあーっ！

ほとんど、坊主刈りに前髪付いてますという髪型だからシャンプーなんてちびっとで十分。よくよく自分の顔を見たら、みたらし団子には似ていない。そう、長髪も挑発も似合わない顔になっているとも言えるというか、はっきりと、自分の顔になっちゃっているからある意味髪自体がいらぬ。

若い頃、若干、変なのかも……。ロマンスグレーとか白髪、老眼鏡、こういうものに憧れていた。俺も早く年取りたいと。なんか諸々の欲望から解放されて、存在自体が理知の人みたいな感じが、ロマンスグレーの髪の毛と老眼鏡にはあった。

若い頃は顔のエッジが鮮明だし目力が違うから長髪でも短髪でもどちらでもよい。私は長髪の時期もあったし、二十四歳の時に独学で水泳を覚えた時は坊主刈りにした。元々、野球部の時にそうだったから懐かしかった。

現在の私の顔。エッジがあるのかないのか？ ぼわあーんとしている。皺および弛み。目力もない。好々爺顔である。こういうぼわあーんとした顔に長髪。痩せた体との対比上、なんだか頭部が重過ぎる。髪を切ると若干肩凝りが緩和されるぐらいだから、実際に髪自体が重いのだ。結局、頭部自体がぼわあーんとして重苦しい。

カミサンは長髪の方が格好いいと言って居るのだけれど、私自身がなんかちゃうなあーと思う。短髪にすると、不思議なのだけれど、頭部というか顔のぼわあーん感がかなり薄らぐ。頭部、および顔まで小さくなった感じ。つまり、リムジーンドライバーっぽい感じになる。男っぽい、ちょっとだけ。スーツを着ると八頭身に見えちゃったりもする。

顔のエッジがぼわあーんとしているからこそ、顔自体を剥き出しにすると、そこそこ……。そう、ロマンス(のない)グレーの髪も老眼鏡も、ほんのちょっと理知の匂いを醸し出すと言いたいけれど、老眼鏡のサングラスだからリムジーンドライバーに見える。ほんのちょびっと、精悍な男に見える。やっ、やばいなあー、「春の目覚め」？ 久保の兄貴。

私は元美術家だから自分を格好良く見せる技術は知っている。ファッションに疎いわけではない。別に高級品でなくともオシャレ感を出せる。でも、やんない。めどうなのと、うな、ジャズメンがジャズメンらしい格好いい格好。違うのだ、私には。音と生き様じゃね。とサマーズの三村さんの口調になる。格好いいとは「その意固地感」と思っている。

そうねえー、若い頃に憧れていたロマンスグレーと老眼鏡を手に入れた。若い頃に戻りたいという願望ゼロ人間。ここに、わたくしが大ファンであるサクライ君の名言が出てくる。「今の自分が一番若い」。ちょっと、説明。どんだん年取るから、そう、今、そう、今現在が人生の中で最も若い時ちゅう、サクライ君の魔術なのだ。



私のピアノ。絶好調。明らかに大したレベルではないにしても、なんらかの到達点に至りつつあるのだという実感がある。私の師匠の名前が沖「至」だから。しかも、本名。師匠の教えを反発しながらも、結構、どこかで素直な気持ちで聞いていたからこういう次元が現れた。ここ近々のコンサート、とりわけ、私のトリオ、オリビア、真師匠にケイとモーガン。このユニットは私にとってはフリージャズのなんらかの次元に到達しているという実感がある。沖師匠が、バンドマスターの私をほめてくれた。よく計算された演奏。良かったよ。こんな日が来るとは考えていなかった。三十五歳から独学で、結構ハードサラリーマンをしながら細々と続けて来たのだピアノを。

ピアノの調子がいいと、当然にしてコンサートをやりたくなる。諸々のプロジェクトがある。でも、逆噴射。ヒッキー小森をやる。いいのだ、秋に爆発すれば。一つの到達点を確実にしたい。5月のコンサートが2つ流れたことも原因にはある。エリック・ミモザとDJマクサンスとのそれが流れた。夏のバカンス前に、新境地の触りを確かめたかったのだ。

それと・・・。書きたい気持ちはあるのだけれど書かないものの一つ。両親。父は相変わらず入退院。でも、原因は分かっている。リハビリのような意味の入院だから心配はない。介護の過労で母が入院。昨年 of 帰国時と同じ状況になった。おパリ馬鹿長男ジャズプータローの私とすれば、これが一番痺れる。地元の妹には多大なる負担を長年掛けている。

そう、私は若年時から自由を求めて3000里というスタンスで来た。「他者の自由を奪いながら」である。吸血鬼なのだろうと思う。「つけが溜まっている」から返さないといけない。私は見えないけれどもこう見えても真面目人間なのだ。

と、重苦しい記事になる前に、うちのお袋との時空を超えたセッションを添付する。芸能の血は母方から来ちゃっているのである。私の動画の中で最も再生回数が多い。このビデオは母の八十歳へのプレゼントだった。元準ミス仙台。健在なのだ。

私はピアノ弾きのくせにど音痴。かつて、会社の旅行部のマネージャーをしていた頃、毎年、ロンドンでヨーロッパ各国のマネージャーが集結しミーティング。夜は飲み会。いい時代だった。昼間は皆うたた寝ミーティング。夜に賭けているのだ。高級カラオケバー。ヨーロッパ統括社長のボトルを全部飲んでしまった。各国のマネージャー、べろべろ。「裕さんも歌え」となった。「あっ、すみません、私、ど音痴なんで・・・」と八百回ぐらい辞退しながら黙々と飲んでいた。というより、横のお姉さんたちといちゃついていた。私は正直、お笑い芸人、下手をすると彼等より話術が巧み。女子の心ゲット術に長けているからモテモテとなる。卑猥な話もするのだけれど、卑猥感がない感じにメタモルフォーズ。ジョーク、オジギャグ、しかし、調子に乗らず結構、詩的なことをちらっといっちゃったりと、変幻自在。もてるのだ。そもそも、夜のお仕事をしている苦学生だろう。ロンドンで苦学している日本人の若い連中。当然にして、気遣いとか心配もちょっとは先輩として出るから優しくなるし、せめて、嫌な客ばっかの相手をしている心労を俺が緩和してあげようとか思っちゃうのである。と、結局は回りくどく口説いているということにはなる。俺、三十代だったんだぜっ！ 最近は「この手法はうざい」ですから要注意。

結局、こっちもべろべろになっているからU2の「ウイズアウトユー」を歌った。お店自体が傾いたはずである。

私の長年の夢。ボーカルを私の曲の中に入れてたい。作詞ができている曲もいくつかある。私の代表作です。

あしたになれば

なにかが

変わる かも

あしたになれば

なにかが

変わる かも

知れない

もじもじ、やっぱ、作ろうかな動画・・・、ボーカル入りのやつね。

私が敬愛する富岡多恵子さんが無名時代の坂本龍一さんとの歌のアルバムがあるのだけど、富岡さんの歌、下手だし暗い。詩人はやはり歌わない。歌えない人たちと思った。だから、詩を選んだと思った。

このタイトルは、もちろん、私のブログのこと。ブログの右側のカウンターをクリックすると、1とか4とか、たまに10。

ブログも六年目に入ったから、まあ、こんなもんか、という感じで、ある意味、開き直っちゃって、あたしゃー、自分のために書いてやすから、そっとしといてくださいませ、なあーんていう感じ。私が愛するブログ村エッセイ部門参加者数724名と出てくる。一応、古株、常駐ブログみたいな私のブログで、この数字ということは、そうではない方の閲覧数ってとんでもなく少ないということになる。

なんか、本当に僭越上から目線的なのだけれど、馬鹿野郎っ、俺の、あたしのブログを読めっ！とお感じの方がいらしたらコメント下さい。ちゃんと読みます。おっ、ベテラン面？おっさんだから、行き付けのお店にしかいかん傾向がある。尻を叩かれんと暖簾をくぐらない。いかんとは思いますが・・・、それが年取ったということなんだよね。

でね、今、仕事から帰って、作業報告を会社に送って自分のブログを開いた。本日の閲覧数1。わっ、またかよおーっ！あれ？拍手2。本当にありがとうございます。深謝致して居ります。ブログ村の閲覧数40=4だ。えっ、算数としておかしい。久し振りにFC2アクセス解析を開いたっ！これは本当に驚いたっ！ユニークアクセス98。トータルアクセス107。日によっては三人の読者様。これはいつもの通り、でね、三人の読者様に読まれた記事が104記事っ！

なんか、私のブログってつまらんのだろうなあーと内心思っていた。こういう数字を頂くと・・・。うるうる。

無内容をなんとかせんとねえー。あはあはあは・・・。やっぱ、小説連載しちゃうかしら・・・。お笑い、ショートショート、純文学、文芸批評、なんならブログ批評、美術論・・・、ご注文がございましたらなんなりと・・・。という勢いも沸いて来る。三桁の数字を見てしまうと。ありがとうございます！

結局、全部、自動生成ブログロボット君たちだったりして・・・。うん、ロボット君たち、君たちは「見る目がある」と申し上げよう。新しい世界の位相的な風景を見る気にさせる食べ物は何？ロボット君だからこそ、分かるよね。不二家のミルクー。

あはははあー、今、私のブログのアクセス先を調べた。なんかね、五月中旬ぐらいから普段の一桁アクセスが物凄い数字になっている。こんなはずはないとまず思うところが超低空アクセスブロッカーたるどころ。疑惑、不審が込み上げてくる。

6月5日 ユニークアクセス 98

普段一桁のブログにしては当然にしておかしい。アクセス先を調べたら「米国资利団体」95。自動生成ブログのロボット君たちだ。正式なアクセス数は3なのだ。安心した。

第一、企画もののオルガナイザー付きコンサートのお客様の動員数は別なのだけれど、ライブハウスでの私の動員数は・・・。7---25。ブログのアクセス数は1---13。零細企業的でむしろほっとする。98はちょっと怖い。しょぼいねえーと言われてもねえー。しゃーーないよね、出したい音出して書きたい事を書いてだから、むしろ、お付き合いして下さる方々がいらっしゃることに感謝です。

「あたしゃー、自分のためにピアノを弾き、ブログっている」と啖呵を切りたい？ おっ、うなことはないのだ。おっ、ヘンリ・ミラーの一言。「私は人類史の一つである」。格好えーっ！ と言いたい気持ちもちよびっとはある。もじもじ。

## 2017.06.10 Sat ご多忙君

---

先週 金曜日土曜日 ドライバー 日曜日 カミサンとドライブ ちょっとピアノを触った

今週 月曜日火曜日 ドライバー 当日オーダー 痺れる 「その日の予定」がめ  
ちゃめちゃだけれど「そういう仕事」

水曜日 娘たちのアパートのリノリウム張りとワンちゃんの散歩代行 おっ、お昼は娘たち  
のレストランでセミフルコース

木曜日 息子のアパートのカーテン棒の取り付け トイレのリノリウム張り  
おっ、夜は料理狂の息子の手料理とワインがぶがぶ

金曜日 ドライバー

本日 土曜日 ドライバーしかも午前四時半に起きて帰宅午後十時半 そういう仕事だ 走行  
距離約300km

ピアノを触れない日々が続いている。爪が伸びて来る。生きているから。伸びるとピアノが弾  
き難い。でも伸びている。生きているから。しかしだっ、ピアノを弾くために生きている私の爪  
が伸びると吸血鬼に変身するから気を付けてっ！ 誰に言ってるの？ 俺だ。

あたしは番長の裕太に呼ばれた。体育館の裏に。あたしはイルヨ。

「おい、イルヨ、おめー、最近、更新してねえー」

「楽しくないから」

「おい、ブログの神髓は更新のみだぜ」

「えっ」

「爪、伸びんだろ、毎日。おんなじ」

「げっ、そういうレベルなの？」

「でもよ、おめー、珍しいなあー、俺の名前・・・」うるうる。「じゃーな」

思い切り、ご多忙君だから、あんま、更新でけんから、オジギャク。

じゃーなりスト

決めたぜっ！

本日と明日のみ休みで後は七月中旬ぐらいまでドライバーの繁忙期。ブログ記事の更新は難しいぞっ！ っても、一桁の読者様、世界経済に影響はない。っても、一桁の読者様にとって裕センセのブログの方が世界経済より大切。ということもあり得なくはなくもなくはない。久保の兄貴文体を拝借。

健筆のフェアリーさんから一昨日コメントを頂いている。「パソコン壊れちゃったあー。あーあーあ」って。更新が途切れているのは「そのせい」です。エッセイ村の村長さんですからね、ご心配の方も多いと思う。

ところで、うーん、なにから書こうかな？ そうそう、私の住む町に「トップシェフ」という超人気料理コンクール番組の2013年の「優勝者」がレストランをオープンした。なんで？ と思ったら彼女の地元だった。理解。娘の彼氏DETOURのシェフであるアドリアン・カショーもこの番組に応募している。でも、凄まじい倍率。採用はされなかった。

今週末から息子、娘、アドリアン、ワンちゃんと実家に。爺さんと違って皆疲れているから「保養」に来る。昨日、爺さんは仕事。息子も仕事。娘、アドリアン、カミサンはオフ。この噂のノルウェーのレストランへ三人で行った。

内装超素敵 展望テラスまである しかし、三人のウエイトレスにまったく笑顔なし＝娘の素人的笑顔の勝ち  
料理・・・

三人ともとても美味しかったそう。しかしである、カミサン、娘。DETOURの方がずっと上との評価。ここからが面白い、ライバルのアドリアンも「そういう評価」と思いきや、彼だけ、「さすが、ホテルブリストル出身。良く勉強している」とライバルを擁護する発言をしたそう。この話にはかなりうるうるした。「プロとプロ」。この感じはミュージシャンの世界でも同じなのだ。たぶん、彼はトップシェフ優勝者のプレッシャーを背負うシェフである女性ノルウェーの技量と胸中を察したのだ。これこそ、プロの同業者の仁義というものである。他者の悪口。「なにも生まない」のだ。

カミサン、娘の感想は率直なもの。先週の水曜日。私はレストランの細部のペンキ、掃除、自宅のリノリウム張り、ワンちゃんの散歩。その前の料理。アドリアンのお任せメニュー。

自家製豚肉のテリーヌ この上になんとマスタードのアイスクリーム自家製 この組み合わせはフリーズジャズに近い 超美味

キャベツ餃子 キャベツの中にエビ 周りにオレンジ風味のソース 塩味のきいた小さな焼き



パン

この諸々の素材のシンフォニーは絶妙

メイン 牛の頬肉のステーキ 真っ黒である ジャガイモのピュレが点在 塩漬けの赤カブの薄切りがお花のように見える

私の対角線に一人でいらした「作家風の高年女性」も私と同じものを頼んでいた。後日談。本当に作家だった。レストランの記事を書いてくれた。「あら、お宅のステーキって真っ黒ね＝焼き過ぎの失敗?」。娘、「ノン、マダム。周りのカラメルが黒いのです。ご賞味して下さい。後ほど感想をお伺い致します」。

私も同じものを食べた。「失敗したの?的ステーキ」。真っ黒く見えるカラメルの焦げた味の後に甘味が来る。その中のステーキは実に見事にミディアム。お箸で食べられるぐらいに柔らかい。こんな美味しいステーキは初めてである。作家の彼女。シェフにブラボーと言いたいと帰り際にアドリアンに挨拶。

デザート イチゴムース ナッツ入りヨーグルト 美味だった

私は珍しいボージョレクルの赤ワインを頂いた。

私は二流にさえなっていないジャズメン。娘の彼氏であるアドリアンの料理の腕は間違いなく一流なのだ。見事だと思う。

ところで、息子がダイエットせずに体重19kg減という「快挙?」を成し遂げた。身長175cm 89kg。現在、70kg。紙面が尽きた? その方法のみキスじゃね、記す。

一日 一食 ばっちり食べる

毎日水泳 時々 ネパールのすもう

もともとラグビーマンのような体だから、メタボ君を排除すると、わっ、パンツ一丁で、水泳選手の北島君。

激務で痩せこけている娘。暇なのに痩せこけている爺さん。好きなことしかしていないワンちゃんのボワイヨー、がりがりに痩せている。これは、生物学的に分析できるはず。

私のピアノ

少しずつ「このタイトル」へにじり寄っている

自分に臆目

こういう弊害は私にはない

科学的な分析をする

いい年こいてにじり寄る

ピアノという楽器は歌わない

だからこそ 私が 私を 歌うし歌わせる

西洋の楽器は 東洋の人間にとって ひとつの壁なのかもしれない

壁なのか金魚すくいのウエハウスなのか

それは あなたではなくて 私次第

昨晩は午前様なのに起床が午前四時。当然にして三時間しか寝ていない。家にお昼に帰りカップヌードルを食べたら睡魔せん。二時間ぐらい寝た。眠い。ここがピアノ馬鹿の凄さである。半分眠りながらギネスビールを飲み赤ワイン。指さんたちが久しぶりのお散歩に狂喜しているから凄まじい演奏になる。

七月中旬まで休みの日は一日のみ。はい、七月八日のみ。この日の晩にゴトシ(音楽の仕事)が入ったというより入れた。会社のコンサート禁止令を破ってしまった。あはあはあは。とはいえ我が岡部社長は野暮なことは一切言わない群馬の人格者だから脳プロブレム。しかも、沖至、佐藤真と両師匠とのトリオ。私自身、秋口までコンサート引き籠りシフトだった。こっちも破ってしまった。どうして？ 諸々の形事情学。お一人くしゃみをしているブロガーさんがいらっしゃるはずである。敢えて名前は伏すが、久保出版社「骨のないブログ賞」を惜しくもわたくしの次に受賞なさった方とだけ申し上げる。つまり、次席。受賞は僕もおーんっ！ 私はシニアマン、他の天体から来ているのだ。体内に骨はない。なに、ブーツブーツ言ってんですか？ 裕センセ。このどうでもいいダジャレってさ、なんか、俺が迷惑がっているという印象を与えんかね、君？ ばあーか、お会いするの超楽しみっ！ ブロ友は大切にしましょうっ！ 皆さんっ！

フランスの明日は父の日。娘たちは「それどころ」ではない。でも、息子がお肉を買って実家に来ると言ってくれる。息子の父は夜仕事だから酒が飲めない。そもそも、私は「父は辞任しているから無視して頂戴」と毎々言っている。「日本風のお義理はいらん」とイラン人をずうーとやっているのに「こう」なる。もしかすると、「いいお父さん」なの？ 辞任しているところが絶対に素敵と分析する。私はお金が財布にあると全部カミサンと子供たちにあげてしまう。酒煙草代のみ残す主義者。お金も物もイラン人。ピアノとパソコンと彼らが元気であることが第一位。ピアノは二位なのだ。まあ、分かり易い親父だ。

あれっ、煙草に火を点けたら書こうとしていたことを一瞬で忘れた。

おっ、俺のじゃないけれど俺が昨日から運転している会社の車の写真。アンバリッドの近くでね、早朝掃除していたわけね、おっ、たまには玉に瑕じゃなくて写真写真と思ったわけ。添付するぞっ！

そうそう、毎日、パリ暑い。各国からいらっしゃるアマゾネス軍団。以下、箇条書き。

身長180cm 推定スリーサイズ 100 68 92 これにヒールだから187cm ちょっと、ごめん、私は元美術家だから女性の裸体を透視できるのである 因みに、こういう美女が裕センセと一緒に

にハーレーダビットソンに乗るとする わっ、どう考えても俺が後席でしょ？ 俺、跨がれない

と、こういうアマゾネス軍団を車中から見ながら運転している好々爺の乗る車です。パリの盆栽老人。

Mercedes S

でかい車だから、わざと小さくしました。というのは真っ赤なウソ。サイズ変更も禁則文字の調整も眠いから睡魔千。

昨晩は十一時間寝た。すっきりした。今晚も仕事。予約投稿記事をコーヒーを飲みながら書くことにした。

フランスでリムジーンと呼ばれる車は、あの長いアメ車のことではなくて大型の超高級車。日本車のイメージだとセルシオとかシーマのことを指す。フランスでもっとも多いのがサイズ変更した写真を再度添付するけれど、メルセデス・ベンツSの長いやつなのでSL。他にもBMW、アウディー、ジャガー、マセラッティ、レクサス、たまにロールスロイスなんかがあるけれど、もっとも見掛けるのはベンツの黒。一つには世界中から大金持ちが集まるパリなのだけれど、「世界共通の高級車のイメージ」=ベンツという図式があるせいなのだと思う。それと、やはり車としての完成度、見くれ、性能等々を考えると一番無難ということにもなる。

この車、各社の中のVIP専用車だから、当然、各社のトップドライバーたちが運転することになる。この車の運転手、やはり、いつも観察しているけれど、さすがにきちんとしている。元悪系、よぼよぼ爺さん・・・、こういう感じの奴はいない。皆、ピシッとしている。何を隠そう社長+従業員一名という難関を潜り抜けて私もトップドライバーの一人なのだ。以前は、それを社長一人でやっていたから二人になった威力は社長にとっては絶大なのだ。会社のキャパが二倍になったんだから・・・。

運転手としてもっとも悪いのは、「高級車と共に自分も金持ちになった気になってしまう」「ないしは後席のお客様に嫉妬し変な風に張り合う」。最低なのだ。それから「俺はただの運転手ではないと自分に言い聞かせる」。「ただの運転手なのだ」。第一、この車を個人で運転する人は皆無。とりわけ黒は。どうやったって運転手にしか見えないのだ。個性なんぞはいらんのである。小奇麗で時間に正確、目立たない、笑顔、パリの道に精通、話題が豊富・・・、以上なのだ。とはいえ、我が社のドライバー採用条件が・・・。

旅行関係の仕事最低五年

営業、接客業最低五年

これだけですでに十年になってしまう

フランス、パリでの運転歴最低十年

日本語フランス語英語

できれば、容姿端麗

注 この範疇に私が含まれるのか疑問なのだけれど、やはり、高級車からあまりにも即わない奴が出てくるのはイメージ上避けたいらしい 大体、社長は185cmのハンサムだからねえ 一性差別ではないけれど男性を社長は探している

注 もちろん、女性ドライバーもいるのだけれど、どうもお客様の方からトラブルを招くケ

ースが多いらしいのだ

重労働、お客様からのちょっかいと女性にはしんどいかも知れない

まあ、こういう下品な客も多いのだろう 我が社にということではないです ほとんどの方が超ジェントルマン

と、俺もやってみっかぁーという方はわたくしまで非公開コメントを下さいと言っても、もう一つの難関「プロライセンスの取得」に二か月間学校にいかないといけないというのが三年前から+になった。痺れるのはここだ。授業料も高額。

Mercedes S Bis3

昨日、私が乗るフォルクスワーゲンのミニバスの温度表示。四十三度！ 睡眠グ四時間の運転手には地獄。社長も手配でへ口へ口。でも、一人のお客様のご出発が三日早まった。すかさず裕センセを休ませんとやばいとプランニング変更っても、午前五時に起きるのが六時になり帰宅が午後一時となっただけ。でも、若干は助かる。っても、またまた明日は五時起きで500km。で、明後日を休みにしてくれたと思いきやその後午前二時起床。休みなのかインターバルなのか分からん。猛暑のパリはファッションウィークとリムジードライバーのかき入れ時。黒いベンツがパリ中に溢れている。その一台が私だ。

今晚は冷やし中華。そして・・・、ブロ友から大変に貴重な日本情報を頂いた。ありがとうおーっ！ うーん、ピアノをね、人前で弾いてお金を頂く私ってなんなの？ と思っちゃったあー、よ。自己顕示の化け物なのかちら？ なんと、南東の方にサマーズ。私のフェイバリットゆるキャラお笑い芸人。いやあー、ゆるくはないのにそういう感じになるところが大好きなのだ。大竹さん、なんか見た感じとか性格が私に似ているのとミムが古女房みたいな感じがとてもいい。なんとなく、印象が我が夫婦に似ている。で、彼らがパリにいたのだっ！ 運転手したかったよおーっ！ 大竹さんの悲しいダジャレ、すべて暗記しとるぞっ、俺。「鹿を叱る夜中まで」ミム＝三村さん「鹿、なにしたんだよってっ！ 鹿はそんな悪りいーことしねえーよっ」。なんか一つの間論の趣さえある。わあーっ、志村けん。もやもやサマーズパ  
リっ！！ をチューチューブしてから寝る。るんるんるん、ミムちゃんが飛ぶ。

なんか、三日前になんのか？ 珍しく運ちゃんに挨拶をしないお偉いさん。この解釈は複数ある。運転手なんぞに挨拶はいらん。普通、コンプレックス住宅の運転手は考える。でも、単に内気無口。ないしは裕センセがあまりに格好良く声を発せなかった。または、ハードゲイで裕センセが理想のお相手に見えちゃって恋をしていた。パリじゃ、なんでもありだから嫌な奴と一方的には評価しない。でね、車中、部下に・・・。

私は、その方の意見が脳の深奥まで来た。

「あのさ、あいつ、前菜もデザートも食べないよな、いつも。胃腸が弱いなんて社内メールに書いてたよな。何度かあいつと食事した時、無理して食おうとしていた。途中で具合が悪くなった。あいつの体質なのは分かる。でも、きつい言い方なんだけれど、小食とか胃腸が弱って他人を不快にさせることは知っておいた方がいいよ。苦し気に食事しているやつに、部下は付いてこないし友達も側近もできない。会社の中のサバイバルに勝てない。あいつにきつけれど胃腸だって鍛えられるって教えてあげたい。優秀なのにもったいないよ」



運転手目線でとっても嫌な客に映る。でも、私は無言で運転しながら「いい人じゃん」と思ってた。空港で降ろした。部下が何度も私に礼を言った。「裕さん、三日間、本当にありがとうございました。無事にスケジュールを消化しました。ありがとうございました」。上司の彼は、運転手を不思議な目線で見、一言も運転手に言葉を発しなかった。

羽毛っ、こういう時はね、姉さんっ、だれ？ わたくし裕イサオ氏が脳天気気温四十三度だからゆるちてっ！ 脳破壊のあげく二ミリの知性を振り絞り、こう、結論した。姉さん、俺、バンドマスターだけれど、メンバーに何も言わない。指示も出さない。いい所以外は無視。いい所が伸びると、悪い所までうやむやに崩壊する。そう、私は他人に注意忠告アドバイスなあ——んという柄じゃない。いや、むしろ針の筵じゃなくて、メンバーに教えてもらっているという感じ。私は会社社長はやらんけれど、私のバンド=群れと訳すのが本来的に正しい、この音楽的群れの長をやる。私は結構いい上司だ。上部にしか攻撃しない。部下は守る。裕イサオミュージックエンタープライズの社長ではあるが、なんぼのもんや？ 人に上下はないと八万年前のエジプトのヘラマコイタは言っていた。だれ？

わたくしのカリスマ

わっ、カリにですすいませんっ！

本日、久しぶりのオフ日。っても午前一時半起床だから休みなの？という感じ。酒もほどほどにして早く寝ないと・・・。

でも、昨晚午後十時半に帰宅。残務処理みたいなものとオーダーシートの作成を酒をがぶがぶ飲みながらやった。それから食事。翌朝思いっきり寝れるチャンス。「もやもやさまーず」を午前二時半まで布団の中で見た。でも、午前六時半ぐらいに目が覚めてしまった。体がドライバーになっているのだ。

さて、私の感想？

大竹さん「はい、どうも、本日は隅田川の辺から。なんかオリンピックのせいですかね、町の美観整備が随分と進んでますね」

福田さん「今日は。大竹さん、ここはパリですけど・・・」

大竹さん「えっ？」

三村さん「馬鹿だなお前。セーヌだろセーヌ。はい、セーヌ(の)って行こうぜ」

福田さんがいつも以上にキラキラ目。大竹さん、海外にいる緊張感をなるべく出さないように逆噴射している感じ。三村さん、自然体のお上りさん。まあ一、このお三方、素敵の方々である。私は大ファンなのだ。おパリに精通している感ゼロ。こういうところが芸能人していなくて、いい意味でゆるくて自然。三人の雰囲気は違うけれど、それぞれが緊張感も含めて自然な感じ。

緊張しているだろう大竹さん、物凄くパリの風景に馴染んでいる。福田さんもパリジャンヌっぽい。自然体の生き生き感がいい感じの人である。ミムちゃん、自分でも言っているけれど「昭和のおっさんがパリにいる感」丸出し。これが泣けるぐらいにパリに溶け込まずむしろ素敵だ。

ところで、もちろん、撮影場所はすべて知っている。でも、もやもやパリ界限はゼロなのが残念。うーん、安全上、やっぱ、あれで無難なんだろうなあー。何千万もするテレビカメラ抱えてだもんな。どこのリムジーン会社を使用したのか知りたいけれど・・・。運転手やりたかったあー！ まあ、旅行でいらっしゃる方は番組に出て来た界限が無難です。あんま、ハードパリを見てもしょうがないだろうね。綺麗なところだけ見て帰る。これが観光というものだ。大体、ドライバーとして行くところが番組の撮影場所と完全に重なっている。「こだわり」ラーメンが出て来るけれど、この辺りだけはベルビルのチャイナタウン辺りで撮影して欲しかったな。中国人の娼婦とか映ってもう一つのパリ、もやもやパリの映像がちょっとだけ出たと思う。

潔癖症の大竹さんの緊張感。これは在住者が二十四時間感じている第六感。彼の緊張感こそ、

パリジャンしていた。本当に、パリに住んでいる人に見えた。このパラドックスこそ、リアルパリ。ミムちゃんの昭和のおっさん感がこれぞ日本のグローバリゼーション。逆ギャグインターナショナル。福田さん、キラキラ目が自然で素敵。福岡から東京へ。一躍、有名アナウンサー。そして、パリ。そのキラキラした勢いが全身に出ている、いい感じ。応援してますっ！



もやもやパリを生き抜いてきた三人の日本人。あれれ、沖師匠、ビール飲んでたのにカメラを向けられたら「その時だけ」手帳。真師匠が「沖さんっ、なに、格好付けてんですかっ！」と三村さんの口調。沖師匠「まあーな」。

## 2017.06.27 Tue Longlongbrog 3

---

昨晚、午前1時に帰宅し繁忙期のインターバル。7月3日から超絶繁忙。昨日まで3週間休みなし。痺れた。本日は久しぶりのオフ。久しぶりにピアノを弾いた。

ピアノを再開してから23年も経っているのに、やはり、会社勤めの合間だったからちっとも上達していない。でも、会社を辞めてからの猛練習の成果が5年も経ってから出ている。ピアノ黒帯化が確実に始まった。うひょうひょ。黒帯化の途上でまたまた各音階のドラゴンへの道を作り始め、本日でAMとAmまで来た。後はB♭MとB♭mとBMとBm。7月8日に両師匠とのコンサート。これまでに間に合う。横綱、大関、小結みたいな感じ。でも、おむすびではなくなった裕センセ。「継続は力なり」そのもの。折れないのだ。馬鹿だ。

明日からカミサンとプラハに行って来る。私の目的は一つ。カフカの日常を垣間見る。以上。リスボンのペソアと同じなのだ。そして、東欧というのは初めて。脈々とフリージャズが生き延びている国々の一つ。これもちょっと覗いてみたい。後、チャスラフスカとかコマネチの国だったよね？ 別嬪の宝庫なんじゃね？

さっき、乾麺ときゅうりを買いに古い古い市民公園を横切った。小学5年ぐらいの女の子男の子がペットボトルに水汲み。水の掛け合いでびしょびしょ。女の子たち、ちょっとセクシーでもあった。いいねえー、水掛けでキャーキャー楽しそう。俺も年を取った。なあ——んていうことを書きたいのではない。一緒にやりたいっ！ と思ったところが本当に年取ったということだ。でも、運転運転で腰が痛い。でけん。

ところでfc2のカウンターのアクセスは片手。アクセス解析287なんて出て来る。どっちが本当なの？ カウンターが3でアクセス解析がこのとんでもない数字。どっちでもいいのだけれど、少しは「正確な数字」は知りたい。毎日5以下というのもなんかそんなにつまらんの俺の書くもの？ と若干拗ねかねない。300は気持ち悪い。もうちょっと5年もやっ取るブログなんだから丁度いい数字が欲しい。と、Ptengineに登録した。ダメ、サイトが開かない。フランスじゃ使えない？ 分からない。

だんだんブログをどうして書くのか？ 自分でも分からなくなった。アクセス3だったら個人メールと変わらない？ でも、個人レベルではやはりないところがブログ。まあ、以前にも書いたけれど私のような籠りのおじちゃま系は世間だ世界に気持ちだけでも開いていないといかん、と思うから、やっぱ、続いている？ でも、ピアノが続いているのはどこかが違う感じはする。どうして、私はピアノになったの？ う——ん、祈りみたいな感じはある。わっ、その内、顔までピアノに似て来たりして……。こっ、怖いっ！

私は生来の出不精だから旅行が大嫌いである。幸いというのか不幸にしてというのか、私の妻は旅行が大好きである。私は観念的な旅行で十分と、まるで澁澤龍彦である。澁澤さんのような博識ではないから、具体的には赤ワインを飲んでピアノを弾いているだけではある。でも、それは私にとっては一種の「旅行」なのだ。などと言っているけれど、私は岩手県で生まれ、仙台、いわき、東京、クアラルンプール、ロンドン、ボルドー、パリ、リヨン、リールと旅行ではなく「住んだ町」だけでも結構多い。そう、カフカの小説のタイトルと同じ「失踪者」なのだ。

妻がプラークに行きたいと言う。私は例によって上の空で聞いている。「うん、いいんじゃない」。それから毎日、妻からホテルの位置、日取り等を聞かされる。相変わらず上の空である。「あなた、プラーク、物価凄く高いみたい。旧市街のホテルは物凄く高いわ。でね、若い人たちが泊まるホステルみたいのを見つけたの。旧市街のど真ん中なの」「あー、そ」「ホテル、フランス・カフカ、超安いだよ」「えっ、カフカ?」「あなた、なに寝ぼけているのプラークはカフカの町でしょ?」「プラークって日本語でプラハだな。国はどこだ?」「チェコ」「あー、チェコスロバキア」「違うわよ、独立したからチェコ共和国」「あれ、共産圏じゃないわけ?」「うーん、カフカの町ねえー」とここでやっと目力が戻る。

プラハ、カフカ、プラハの春、カフカ・・・、これが延々と脳内に木霊す。「よし、行こう」と全てのスケジュールが妻によって既に構築された頃に重い腰が上がる。

プラハに着いた。ホステルに着いたのは午後九時。街並みはさておきビールとワインの調達以外に私の目的はない。その時に薄々は気が付いた。闊歩する観光客のその量。夕飯の心配をしていた私の目に煌々と光るケンタッキーフライドチキンのネオン。深夜までやっているミニスーパー。ビール、ワイン、夕飯の心配は皆無であった。唯一、私が力を振り絞ったのはワインオープナーの購入のみ。この辺りから次回に回すと言っても書く時間が皆無になるからあらずじとする。

翌日夜。私は超不機嫌。カフカのマグカップ。Tシャツ。冷蔵庫に張るマグネット。膨大な観光客。私たちも含まれる。カフカが育ったユダヤ人ゲッターは一掃されブランド店。ヘルメス、グッチ、ローレックス・・・。カフカが「変身」を執筆した建物。ない。ホテル、インターコンチネンタルが建っている。カフカがドイツのサナトリウムに入る直前まで散文と手紙を書いていた横丁。その小道に駅の改札口のようなもの。有料なのだ。私は超不機嫌。

不機嫌なまま、格安のセルフサービスのレストランへ入る。入口に番台。後ろ向きではあるけれど不機嫌そうなおばさんが「入場券のようなもの」を私たちに渡す。サラダ、デザート、メイン、飲み物とパスポートコントロールのようにその紙を差し出す。この旧共産圏のシステムを

垣間見た私は急激に機嫌が直る。カフカの町は「こうこなくっちゃっ!」。蒸しパン。久保はつじ氏にご教示頂いた。豚肉のシチュー。酸っぱいキャベツ。このガストロノミーとは程遠いチェコの大衆料理。これは本当に美味しかった。

長くなるから端折る。

カフカがいたプラハはことごとく崩壊。たぶん、久保はつじ氏がいたプラハもない。ディズニーランドと化した。住民の十倍の観光客が津波のように闊歩する町。街並みはとても美しい。

私は「この旅行を企画した」妻に二度悪態を付いた。申し訳ないとは思う。でも、カフカがミッキーマウスになった遊園地なんぞに興味はない。でも、その悪態を反省した。妻に申し訳ないと思ったのだ。

「うん、とっても良かった。カフカの城の原点的な風景。そう、プラハ城が包囲するヴィート大聖堂。あれが、カフカの城の原型。大聖堂を城が包囲している。あのストラクチャーがカフカの城の観念的な原点なんだと思うよ。信仰を拒む城。信仰は個人レベル。でも、でも、あの聖堂へのアクセスは城の入口しかない。カフカの世界そのもの。でね、津波のような観光客、私たちも含めて。カフカの痕跡なんぞどこにもない。それは、私の中のファンタジー。そう、世界そのものがカフカのイマジネーションに百年も経って追いついて追い越した。こういう先駆者は大切にしないといけない」と・・・。

三時間半しか寝ていない。猛暑のフランスで過労した運転手とはいかんから過労していない風を一日中。今晚だけは仮眠ではなく睡眠。カミンスキーになる前に充電。そう、明日はコンサートなのだ。両師匠と。

実生活で忙しい人はブログを書くとかピアノを弾くということはしないのだなあーと思う。それをする人が暇人という意味ではない。

あまり詳しいことは書けないけれど、四日間、後席にいらした大企業の社長が副社長と専務に・・・。

「ベルサイユ宮殿ってさ、庶民から搾取して作ったということだよな。うーん、王様のいる国、そうだね、贅沢を極めるということが文化を育むんだね。複雑な思いだな」

この思索に富む大企業の社長に運転している私は脳内で・・・。

「社長。そうです、文化は時代の贅肉と良い意味でも悪い意味でも例えられます。そう、こうしてジャズメンが運転していることが重要なのです。時代の贅肉だから私自身は痩せ細る。数学上は私の人生は正しいのです」

と、もちろん、申し上げない。でも、社長はうすうす「それ？」に感付いていたことは間違いない。

「推測」

「なあ、専務、あの運ちゃん、なんかさ、道良く知ってる。まあ、仕事だからな。でも、なんかさ、美術とか文化全般、べらべら言わないけれど、専門家なの？ っぐらい精通してない？

目立たないようにしてさ、無口だけれど、なんか俺には、なんでかな、うーん、分かんないな、ジャズメンのように見えただけれど・・・」

昨晚、7時間半寝た。久し振りに睡眠を取った感じ。とは言え、今晚も仕事。まったく休みの日がない。おまけに手配をしてくれている社長が入院中。しかも入院期間が伸びている。運転しながら手配だ見積もりだ電話対応……。きつい。そんなことを書きたいのではなく……。以下、被害妄想のようななんかある種のお自慢にもなってしまうのかしら？ そんなことは私自身の中にはない。そのまま読んで頂ければ幸いです。

うちの社長の人気は絶大である。36年間掛けて築き上げて来たお客様との信頼関係。なによりドライバーとしての人柄。お客様方が入院と聞いて皆さん心配なさる。大事ではないと私が説明する。お客様のお一人がずばり「社長って執事みたいですよね」とおっしゃっていた。そう、自意識とか自負心とかこういう個人の思惑をすべて消し去って仕事をしている超絶プロドライバーなのだ。いつも明るいというかそうしている。話題が豊富、フランス中の道を熟知している。高尚な話題から下ネタまで……。

私が入社後、一枚看板から少し解放され、最近手配にやや専念。私を後継者に仕立てようという思惑。それは確かに順調に進んでいるように見える。実際、私のご指名、お礼メール、非常に多い。

しかし、社長と私の大きな違い。彼は自己消去のプロだ。私は逆噴射してやっている。自然体ではない。どこかに元芸術家とかジャズメン的なあくの強さ、つまり、おとなしそうな笑顔から牙が覗いているように自分でも思う。俺はゲイジュツカだっ！ とそういうことを言いたいのではない。ドライバーに徹しようと無理してやっている、その無理感がどこかでお客様の目には映っていると思う。若干、凄く真面目でいいドライバーだけれど、なんとなく怖い感じとか、たとえば、社長にペコペコやっているお付きの人を見ている私の目付きとか……。絶対にキラリ目になっていると思う。

なんかね、私が特別とかそうではなくて、私の仲間たちは皆そうだ。自己消去の真逆をしつつ、でも、不思議なセッションを構築する変な人種なのだ。でも、この感覚が必要ない縦割り社会に生きる男たちには、私のようなドライバーはやはり一匹狼的な牙が時折、ちらつくような気がしてしょうがないけれど、逆に言えば「それ」が無くなっちゃったら裕イサオという芸名まで消滅してしまう。そう思いませんかブーツさん？ 8日、楽しかったですっ！



## 2017.07.12 Wed Boots Strapさん

---

ブーツさん、素敵な記事、ありがとうございます。現在、私はドライバー業、多忙を極め、当日のビデオ編集がウェイティング。編集が終わりユーチューブへアップしましたらお送り致します。返礼として。

ブーツさんのお人柄、きちんと調べて毎日更新なさるそのブログの姿勢、ハンサムで知的な紳士。お会いするのは二度目ですが、毎々、感銘を受けます。

そう、沖師匠は「日本からの頭脳流出」。ニューヨークではなくパリへ。この自由人でもあり天邪鬼でもある我が師匠。流出先に同じ自由人天邪鬼の日本人、佐藤真と裕イサオがいた。十二分に流出した頭脳を注入されました。

食事の時、沖師匠と真さん・・・。

「パークレーとかさ、ああいうとこでさ、勉強した奴。みな、同じ音になる」沖師匠  
「沖さん、そうそう、だれの音か分からないよ。みんな一緒でさ。俺、やだなあー、そういうの」真師匠

れれ？ 裕イサオというチンピラミュージシャンと付き合ったださる理由そのものでもあるのです。このお二人、凄い人たちです。奥様によろしくお伝えください。

## 2017.07.13 Thu 一日という休み

---

本日、なんか印象では一か月振りの一日休み。疲労がヒーロー化しているから、なんだか一日中眠い。明日から、また、仕事。社長の退院の遅れが響いているけれど、たった一人の従業員がこういう時に踏ん張らないと……。社長も私も長年パリというジャングルで生きて来た。同士の友情なのだ。姉さん、そう、ブーツさんと盛り上がりましたっ！ ブロ友もバーチャルからこっち側に飛び出してくる。そういうギャグが志村けんのひとみ婆さんにありました。ブーツさん、本当に知的なハンサム。わっ、高学歴だよおーん。奥様はどう見ても奥様に見えない。明石家さんまの口調で「本当でんがなあーん？」と言うの？

**2017.07.14 Fri Itaru OKI Makoto SATO Isao YU**

---

Live at Babilo Paris 8 July 2017

私はピアノ弾きであり、リムジーンドライバー。うなことは知ってる？ でね、毎々、ピアノの後席じゃね、車の後席のお客様。「凄いですねえー、このマナーゼロ車線ゼロのパリでよく運転できますねえー」。

あはあはあは、テレビゲームやってるみたいで楽しいですよ！ カーラグビーちゅう感じですねえー。お客様、あはあはあは。となる。でね、パリはマナーゼロ都市ベスト10にヨーロッパではローマと並んでランクインしているはずだ。まあー、ひでえー。歩行者、自転車、とりわけオートバイもマナーゼロと来ているから「引いちゃったらあんたが悪い」という論理しかない。歩行者赤信号。ぞろぞろと渡る。こちらは突進してる風にしないと先に行けない。赤で渡っている歩行者が悪態。歩行者をなんだとおもっちよるっ！ るっせえー、ばあーか、赤で渡るなっ！ ばあーか。とりわけ、オートバイ連が最悪。

私はプロドライバーだし、後席にお客様がいらっしゃるから笑顔で穏やかな運転。でも、告白する「目はサディスト目」になっている。そう、私はジェントルサディストなのだ。とはいえ、ハンドルを持つと人格が変わるといふか本来のそれが出る系ではないといふのか、私は性格は至って穏やかだからハンドル持っても変わらない。人格が変わるのはピアノを弾く時だけ。これは深層人格が出る。メガロナルシスバイオレンス体育会系サディスト、こういう諸々が噴出する。ぎよ。

しかし、後席にお客様がいらっしゃらない時。私は高年目だからサングラス。スーツ姿。馬鹿助が絡んでくる。私「おい、なんだ？」ぎろっ。場合によっては車から降りる。フロントグラスをドンっ！ 「ばあーたれっ、マナー覚えろっ！」。プロドライバーだからこれぐらいはさせて頂く。でもねえー、血の気の多いチンピラ馬鹿助だと殴られるか刺されるから、あんま、やらないようにしているといいつつ、こちらも深層的には血の気は多いから負けはしない。好々爺が爆発するとマグマ大使化するからチンピラの方も怖いと思うよ。俺の目付きな。ジャズメンとかリムジーンドライバー舐めるとやっぱやばいはずだ。

ところで一か月半。休みの日は七月八日と十三日のみだった。でね、本日と明日はオフ。二日の休みは一か月半振り。これは最長不倒距離。猛暑、社長の入院(中)、痺れた。でも、今朝は七時半に起きて買い出し行って放置状態の庭の芝刈り掃除をした。息子、娘、アドリアン、ワンちゃんがお昼に来る。バーベキュー。息子が手作りソーセージ各種を大量に買って来てくれた。後は綺麗に蒸し焼き。うまかったっ！ わっ、放置していた階下の庭に降りた。わっ、りんご、いちじく、なし、ぶどう、いんげん、トマト、わっ、豊作ベクトル。去年の冬の剪定が上手く行ったのだ。芝は芝の女王と化したんぽぽはびこり。これじゃー、ワンちゃんが遊べない。綺麗に刈り取りした。午後三時頃、珍しくうとうとし始めたら社長から電話「わあーおう、結果次第では明日退院。るんるん、酒飲んでえー」。

我々および娘のレストランというのかアドリアン・カシヨーのレストランについて  
ブーツさんが素敵な記事を書いて下さった。深謝です。義理親馬鹿ではなく、アドリアンは既に  
パリの次世代を担うシェフとして認知されている。インターネットに無数の記事。料理の専門誌  
でなんと名店パリ七位だってよっ！ イギリスの料理雑誌で紹介。イギリス人観光客がわんさか  
。テレビの取材諸々。大体、二十席しかないからいつも満席。ミシュラン一つ星も射程距離と言  
われている。でね、こっちは本物の親馬鹿。かならず記事の最後に娘のウエイトレス振りが紹介  
されるところが面白い。はにかんだ内気な商売毛のない笑顔が素敵と出る。アドリアンの料理と  
娘の素人っぽい初心な感じが上手く行っている。大体、アドリアン、野武士みたいな感じで無口  
な職人系。愛想は悪くはないけれど・・・。娘も内気無口系。まあ一、こういう二人がやってい  
るところが好感度が高いと読んでいる。その前にアドリアンの料理の腕は一流であることは間違  
いない。パリで世界遺産フランス料理をこれから担って行く野郎だから半端ではないのだ。  
俺よお一、十年以上ピアノやってんのに相変わらず二流の下というのも逆に凄くね？ あやつは  
十年で到達しているのにねえー。

我が社の隊長が体調不良ではなく前Ritz腺肥大の手術で入院。四日のはずが十二日間。我が社の隊員は約一名。俺だ。リムジーンドライバーをやっていればエブリシングオーケーの隊員は手配見積もり電話対応を運転しながらやらんといけなくなった。猛暑のジャングルパリでだ。痺れる痺れる痺れエイ。隊員が入院しそうだった。または、僧院に入りそうだった。以下、ちょっとお下品。隊長と隊員の会話。

「わっ、珍宝の毛剃られちゃってパ〇ン。かわゆいのだよ」

「えっ、隊長っ、自分でお好きな「それ」、つまり、キューピーちゃんになったんですね」

「うん、写メしていい？」

「やめてえー、セクハラっ！」

「でもさあー、裕さんいなかったら会社閉めるところだったよ。深謝深謝。酒飲みに行こうよね」

「隊長。社員約一名の会社でそいつが踏ん張らないとどうすんすか？」

「三十六年間探して、やっとだ、そういう社員の出現は……。うるうる」

誤解なきよう、私も運ちゃんだから……。

「いろんなドライバーさんがいたのに？」

「あいつら馬鹿だ。他の会社で勤まらん落ち零れ集団なのだ。運転しかでけん。しかも、ちゃんとリムジーンを運転でけん。運転さえ、でけんっ！ ましてや、電話対応見積もり手配、あいつらその日暮らし脳ででけん。金の話ばかりの禁治産者。うるうる。裕さんみたいな人はいないんだよ」

ところで、なんだっけ？ そうそう、バカンス明けからニューユニットを作ろうと思う。そう、若向け音楽。まあ、俺はある意味気難しい孤高のフリージャズピアニストではあるけれど、脳軟化だから、あらゆる音楽が好きだ。とりわけ、かしこまらないやつが好きだ。踊れる音楽は超好きである。脳がいつも踊っているからね。DJマクサンスと強力女子、オリビアとモーガンだな。シンプルなメロディー、リズム、以上。マクサンスのパソコンにオリビアのウッドベースと俺のシンセとモーガンのソプラノとテナーサククスとボイス。完璧だ。

おう、FC2のカウンターの数値は8とかなのに、アクセス解析は187。米国营利団体。なんなんすかこれって？

明日から3日間、寿限無の激務。じゃ、アビアントという前に、わたくしのブロ友よりメッセージ、ブーツさんの記事の中の裕センセ、ピアノ職人みたいで格好いいー—————っという……。あはあはあは。るんるんるん「鉢」が飛ぶ。痛っ！



「cocode note」サクライさんのブログ。私が愛してやまない数少ないブログの一つである。どうして？

総タイトル レイアウト レイアウトの中の諸々の文章 コメントエールのシステム サムネイル・・・

実に素敵だ。そして、毎々の記事のタイトル、その内容。散文詩の名手であり、プロの文筆家と私は思う。柔らかくて優しい平行目線。こういう境地で文章を書くことは非常に難しいのだ。フェルナンド・ペソア、アンリ・ピエール・ド・マンディアルグと言った散文詩の名手たちを彼女の記事は毎々彷彿とさせてくれる。

また、私事になってしまうけれど、彼女が天性の文筆家であれば、私は天性の変脳分泌家ということになる。やはり、ジャズメンが物を書く限界でもある。音の世界に揺蕩う脳に彼女のような上質な散文詩は書けない。

毎々、サクライさんの記事を拝読し、やはり、私の書くものは言葉のジャズ、または、ジャズの言語化というベクトルを描いている。世間をスイング目で見ているから歪んでいる、その映像は。だから、サクライさんの歪んでいない目線が私には必要なのだ。



今日は午前五時に起床。500km走ってドゥゴール空港から帰宅。午後五時。娘たちのワンちゃんをお預かりしているから、玄関扉を開けた途端、ヴォアイヨーがパピーに飛び付いて来る。よしよしとやりながら風呂に入る。上がる。ビールを飲みながら仕事の帳簿を付ける。超まともな暮らしをしとるぞおーという感じ。

五十日間で休みの日、四日。ピアノの練習を半分眠りながらやったのが三回。コンサートが一回。これだけピアノを触らない日々というのも初めてだ。社長が一昨日退院。溜まっているサービス終了報告書を届けに行く。不精髭姿でよぼよぼと自宅から出て来る。「裕さん、十二日間、老後のことばっか考えてたよ」だって。

社長と二人で煙草を吸いながら、夫婦円満、子供たちとも仲良しこよし、孫守り、私はワンちゃん、健康で仕事して俺らってしやわせえーってうんうんとやったのである。お金はないけどねえーって。

昨日、本日と後席にいらした大企業の副社長。

「俺さあー、後一年で定年なんだよ。困ってんだよ、やることねえーんだよ」

「副社長、私も一緒です。仕事以外やることないですよ」

「あっ、俺も」 常務

運転中の裕センセの脳内。「えっ、俺？ ドイツ、オランダ、ベルギーとか東欧でコンサートツアーやりたい。日本でも。それとね、未完の美術作品、完成させて、うーん、後はねえー、北回帰線みたいなハチャメチャな小説を書きたい。それと子供たちの便利屋と孫守り。旅行狂のカミサン？ そうなんですよっ、コンサートツアーと一緒に行く。ばっちりじゃん」。貧乏暇なし。ジャズ用語でポーピンマヒナスターズ。

久保の兄貴とブーツさんの本日の記事を拝読した。私は五十日間続いた繁忙期から本日で解放された。

「もし、生まれ変わったら？」というこの問。まず、私はもう一度人生を、これはノンメルシー。でも、そうになったらどうなるのだ？

ここで、素朴な疑問、そう、このタイトルね。もし、そうだったら「裕イサオ」というピアニストは存在していなかったことだけは間違いない。たぶん、いわき市のママさんコーラスの指揮者になっていた。これは断言できる。

安直な比喻と若干の自負を込めて、ブルドーザーのように逆風を跳ね除け、中学二年生の時の先生への回答を私は全うしたのだ。なあーんていう、やっぱ、馬鹿だ。下手なピアノ弾きだけれど、自力で来た。ちゃうな、諸々の仲間に支えられてだな。TSF JAZZというラジオで運転中に諸々のピアニストを聴く。もおーん、皆、上手い上手い。高度な音楽教育を受けていることぐらいは分かる。

私とは比較にならないぐらい上手い。はっはははあー、そうなんですよ、奥さん、比較にならないということは「比較ができないスタイル」という馬鹿変です理論。やっぱ、私もプロなのだ。ちょっと、ヤーさんのゴム紐売りみたいな論理だけれど、いいのだ「それで」。

ねえ、奥さん、上手いピアノ弾きばっかじゃ、世界構造がおかしくなる。わっ、いいのかなあー、こういう単語？ 私は「ブスピアニスト」。わっ、書いちゃったっ！ でもさ、上手い上手いジャズピアニスト諸君っ！ ジャズってちと違うぞっ！ ブス音楽だよ、元々が。ジャズという音の中に諸々の概念が凝縮されている。音大で「学ぶ音楽」ではない。こういう老いの繰り言は大切にね。

ジャズ 苦しくても明るく生き抜く このブルース構造こそが それ なのだ そう 明るく行く スイングする 苦しいから スイングする 苦しいから踊る 助け合う このベースの上でセッションする 俺たちって 大人なんじゃね

リムジーンドライバーになる理由を考えてみた。

選択肢がなかった

高級車に乗りたかった

運転が 車が 好きだった

金のため

たとえば、うちの社長。会社員は無理だ。だそうです。

本日も社長宅へ書類を届けに行った。「車を綺麗にしないドライバーばっか」「私は車の掃除好きですよ。お世話になっている高性能の機械です。リムジーンドライバーという仕事の一部でもあります。やっぱ、なんかねえー、世話になっちゃうね、つうー、感謝の気持ちもあります。一日一緒に仕事をしてくれた高性能の機械を綺麗にする。御礼ですよ、私には」「それって、本物のリムジーンドライバーちゃうことだな」。

そう、私の「それ」は自由であるために走る。超絶格好いい理由がある。じゃ、自由ってなに？ はい、不自由じゃないことです。馬鹿じゃね。分かり易く書くとね、楽しい、毎日が、生きてることが楽しい。そういうこっちゃね。五十日振りにピアノを弾き捲った裕センセはご満悦。じゃ、五十日間の激務は不自由だったの？ うなことはない。自由に向けて走っていたから楽しかったよ。サドマゾなんじゃね？

私の記事が分かり難い方はフェアリーさんのブログを読めっ！

今日から十日間、暇人になった。四十六日、仕事したからいいのだ。

暇は大切です。文化という時代の贅肉を育てる腐葉土。暇だと、色々なことを考える。と言いたいけれど、私の場合はピアノで音の探検隊をする。でも、忙しくしたい＝色々なことを考えたくないという公式もある。＝仕事人間。定年後に破綻が来る。色々なことを考えないで六十年も生きればそうなる。自分の人生ではないからそうなる。

仕事は大切である。家族も、諸々の社会生活も大切。でも、一度しかない自分の生きている時間という物理的なものと自分を分析せずに生きていると、老年になると訳が分からなくなる。

たとえば、四十年ぐらい会社員していると、会社員の顔しかなくなる。我々、人はそんなに貧しくはない。脳のキャパシティーは宇宙的。だから、なにか自分ではないものに染まってはいけないと申し上げる。俺はピアノだから、染色体は受け付けられないということになるよね。ピアノは堅いぞ。

私のジャズとドライバーで稼ぐ身銭は低所得者層に位置する。つまり、貧乏なのだ。ジャズ用語でボービン。でも、そのボービンな男は富裕層の住む界隈に持ち家がある。「でかい家」とタイトルには付けたけれど、相対的には十分にでかい。でも、ボービンである。さっき、どちらかと言うとボービンが多いスーパーに散歩がてら行った。安いのだ。でも、品質は悪くない。

揺るやかな坂を下りながら考えた。私は金持ちもボービン人も嫌いだ。どちらもバランスが悪い。モーツァルト以外は音楽ではない。ラップ以外は音楽ではない。このベクトルは同じなのだ。だからどちらも好きになれない。

私はでかい家に住む貧乏人。このメビウス構造が私の中核にある。どちらでもない。つまり、心は錦ということなのだけれど、これは相対的にでかい家に住んでいるという物理的な優越感満足感が根底にはある。ちょっと前までは私はボービンではなかった。そう、自分でボービンであることを選択した。この選択肢が無数にあるということは、やはり、私は大変に豊かに暮して来たということになる。

何足も草鞋を履いて来た。でも、履けるだけのパワーとポテンシャルを両親から授かった。これは、やはり、凄いことだし両親および遺伝子にありがとう。わっ、上から目線的っ！ ふん。

暇だからいい加減なタイトル。私が大切にしている物。あんまない。カミサン。あら？ 日本語で「古いもの」って自分で言っている。

ピアノ その他諸々の音楽機材楽器  
スズキ スイフト DDIS  
もう一つはパソコン

物に限ると以上。

とうとう、私の一台目のパソコンが認知症的になった。起動するのに三十分。本体が凄く熱い。Netflixでフラッシュゴードンの現代版を見ていると画面がパチパチ。ちょっと、お釈迦に近付いている。お世話になった。六年ぐらい。一番安いパソコンだけれど、諸々の勉強をさせてもらった。やはり、メールとユーチューブを見るだけというコンセプトで購入。ユーチューブを作ると言うことは念頭になかったから無理をさせてしまった。と、私は優しい人間だから電化製品にも愛着が沸く。少し、悲しい。諸々のデータが入っているから捨てはしない。でも、データバンクとして保管する以外にはない。

ところで、なんのことが分からないことを書く。ビル・エバンス・トリオの名盤のドラマーはポール・モチアン。ジョン・コルトレーンのベースはジミー・ギャリソン。彼らのことはあまり語られない。真師匠とよくその話をする。師匠自身がとても似ている。俺はソロはしない、といつも言っている。わたくし、裕センセは俺が俺があーと前面に出るキャラ。自信過剰なのではない。彼らが土台を支えてくれている安心感に甘えているのだ。イケイケだけで音楽はできない。そうしないミュージシャンなしにユニットは存在しない。ということ。彼等こそ、本当に人間的な、音楽的な、この二つの技術を持っている人々なのだ。まあ、わたくし、裕センセは足軽。歩兵。馬鹿だ。竹槍持って先頭切って走って行く。情熱大陸善良クローズゼロ的馬鹿と申し上げる。

自発的に頑張るのは悪いことではない。自分のため、他人のため……。しかし、私が嫌いなのは「それ」を他者に強要すること。頑張らなければならないなんてことは一切ないのだ。人生頑張らずに済むに越したことはない。

今気が付いた。お気に入りブロガーさんへ久しぶりにコメントをお送りさせて頂いたのだけれど誤字が二つ。「チャンジー」「クールビズ」でした。すみません。

ところで、先日、経済学者のお客様と一日ご一緒させて頂いた。「裕さん、先日ね、環境省に背広とネクタイ姿で行ったら、本気になって怒られました。クールビズを徹底して頂きたいと……。その剣幕にちょっと怯みましたよ」「あはははあー、右向け右体質って治らないのですね」「そうですね、でも、この感じだとね、今政府がバカンスを取るとか残業をなくすって音頭取っている。クールビズみたいにあっという間に浸透する可能性がある。いいことですよ。仮に政府の政策の強要でも悪いことではない。世界一仕事時間の少ないフランス人の一人の生産量は日本人を上回っているという事実をきちんと認識しなければならない。効率が悪いということ。休みをきちんと取った方が生産量が高まることを……」。こういう会話があった。

たとえば、私も会社で上司をしていた。責任者だから当然にして頑張った。けれど、部下に強要は一切しなかった。私が残業をするのはその立場上、しなければならないのであればやるしかない。しかし、私が帰宅できないのと部下が残るのは話が違う。「上司がいるから帰れない」こういう「忙しい振り、頑張っている振り残業は一切しないでね」と言った。バカンス日程は早めに私に伝えてくれとも指示した。私が先に日程を組む訳にはいかないのだ。部下の休みが先である。

ところで、クールビズ。環境保全の関知からはいいことである。じゃ、パリのリムジンドライバーがそれをするのか？ 私はお客様の前で背広は絶対に脱がない。ノータイもしない。半袖の白シャツ姿はできない。スーツとはこちらの正装だからできない。もし、私が自発的にクールビズをやるのであれば、黒い半袖シャツとかにむしろなる。正装ではないということにしないとおかしいことになる。一番おかしいのは白い半袖シャツにネクタイ。これは浴衣に紋付き袴の帯というのと同じことになる。

と、私はまったくもってオシャレとかファッションに興味はないけれど、自分の着るものは自分で決める。

私は頑張ってピアノを弾いている？ そうなのかも知れない。自分のために自分へ強要する。一人サドマゾ。自発的に自分のために頑張っている。頑張る理由は意外と重苦しい文学的な理由がどこかにある。それは私自身の問題だからそれでいいのだ。子供たちのために頑張る。それは

私の子供たちだし、私自身がそうすることが好きなのだ。大袈裟な感謝は要らるのである。私が好きでやっているだけなのだ。私は几帳面な性格だけれど他人がずぼらとかだらしがないのはいっこうに気にならない。むしろ、私のような几帳面な人間ばかりでは生態系がおかしくなると思う。人類全員がジャズのピアノ弾きだったら商売上がったたり！



突然定年した感じのど暇。四十六日間の激務はなんだったの？　なんか戦場から帰還した兵士ちゆう感じです。庭掃除して料理してピアノ。るんるん。で、暇だからコメント狂に少しなる。すいません、ご迷惑をお掛けして居ります。お辞儀。「酔った勢い」コメントは受け取られる方は迷惑。お辞儀。などと言いながら、蝶姉さんの記事、脳髓にぐわっと来る。わたくしが敬愛して止まない富岡多恵子に肉薄していると勝手にこちらは評価している。はい、ブーツさん、「フランス人は大人」です。つまり、「日本人は子供」ということにもなります。

「世間」という実体のない、顔のないものについて書く。「世間体」という言葉もある。

たとえば、フリージャズのピアノ弾きが「世間が悪い」と言ったとする。つまり、自分が売れない、脚光を浴びないのは「その」せい。もしかすると本当かも知れない。諸々の芸術の動向を掌握していない。政治家は超絶上から目線で愚民などと言う。しかし、世間に受けない音楽をやっている。じゃ、世間てなに？　大体にして、ジャズの歴史を掌握する必要はない。皆、忙しい。

知性とか教養はあった方がいいとは思う。学歴ではない。いや、知恵はいる。物事を理解する必要はないと思う。自分が理解できないものに遭遇した時の反応。クローズするのかオープンするのか。前者こそ「世間」と呼ばれるものだ。

もっと、分かり易くする。

私は医者の子。しかも、長男だ。「家業を継がなければならない」という「世間公式」の中で思春期まで育った。だから、ぐれた。脳味噌が歪んだ。

そう、つまり世間とはクローズマインドのことだと定義する。学歴、知識。東大生がオープンマインドには自動的にはならない。知識を蓄積してクローズするのなら、そんな学問は要らんだ。うなもんは高が知れている。

「編集部」

裕センスの理論上、一つ欠けているものがある。それ以前に、彼は、ピアノ弾きとして下手だ。偉そうな記事を書いている彼の神経こそ、馬鹿。えっ？　ぐさっ！　「すいませえーん、世間にお詫びしまあーっ！　ところで、おめえー、だれだ？」

悪いけれど、私は「世間と言う実体のないものの一員には」なりませんよ。極論すると、右向

け右、政府の指導。この先に第三次世界大戦というものが出現する。経済学者のお客様との会話が私の愚脳の中枢に突き刺さった。環境省のクールビズの徹底という小学校の生徒のような顔が脳内を過ったからである。狂信的な小学生的な大人。本来の小学生の方がずっと自然に大人。

凄く長くなるけれど、午前中に「頑張る」という記事を書いた。うーん、きつい内容だけれど、自分の引き際、断捨離とか終活ができない老人。これは頑張ってもらわないと困る。次世代の重荷という強要は好きになれない。無自覚なのであれば強要ではなく人としての教養の問題だろう。次世代に「世間公式」を強要する愚行は私は受け付けない。

本日は、娘たちのアパートのリノリウム張り。彼らは超絶多忙であるから暇なジイさん、家中の掃除。ヴォアイヨーをジイさん宅へ疎開させた。便利ジイさんなのだ、私は。暇なんだから役に立って当然理論。働き者は働いている方がいいのだ。

うーん、父と母が交互に入退院という現実になった。馬鹿長男がおフランスでピアノを弾いてていいのか？ 素朴な疑問が脳内をマッハ3。そんな事を考えながらヴォアイヨーと電車に乗った。58歳のおっさんと子犬。なんとなく映画の一シーンのような感じ。なんとなく行き詰ったジャズピアニストが愛犬を連れて当てのない旅に出た。若干、鬱になった。

帰宅する。私はビールを飲み赤ワイン。ふと、というのは嘘。息子と娘が使っていたバイエルをピアノの譜面台に置いた。

53年振りに弾いてみた。まともに弾けない自分がいた。歪んでいると思った。

そして、もう一度、バイエルから始めようとも思った。ピアノという楽器、西洋の知の結晶の根源にもう一度戻ったらどうなるのか？ 福島県いわき市の常磐炭田の炭鉱労働者の長屋街を横切りピアノ教室に通っていたなんか変な私の風景が蘇る。オープン脳を授かったのも両親のお陰と理解する時が来た。

昨夕、「53年後のバイエル」というタイトルの記事を書いた。起き抜けに「ピンク色の本だったか？ 中に入っていた曲が違う気がする？」。気になったので調べてみた。

私の頭の中で「ピアノの最初の教則本」＝「バイエル」＝「そのフランス語名がメトードローズ」と思い込んでいた。なんかピアノメーカーがヤマハとカワイしかないように、なんとなく、思い込んでいるのと似ている。

謹んで訂正致します。確かに私が5歳の時に始めたのは「バイエル」。でも、昨日、譜面台に乗せたのは「メトードローズ」。まったく違うものです。

「メトードローズ」はフランスのピアノ教則本でした。収録されている曲。すべてフランス民謡のようです。全部見ていない。曲がシンプルだけれど実に綺麗。説明も分かり易い。この教則本、58歳でピアノをゼロから始めるおっさんでも大丈夫だと思う。ちゃんと見ていないのに薦めするいい加減な裕センス。直感です。

日頃、複雑なジャズのコードワークで頭が邪頭になっている私のようなおっさんには衝撃的に新鮮。こんなシンプルな音で音楽ってできちゃうんだ。という実に当たり前のことを理解したりする。それとすべての音楽の原型にある基礎的なコード進行が実に分かり易い。コード記号なんて書いてないけれど一目瞭然。トニック、サブドミナント、ドミナント、トニック。このシンプルな動きが衝撃的に新鮮。右がシンプルなメロディー。左、基本ルートおよびその和音のアルペジオによる伴奏。

いかに日頃、めちゃくちゃ複雑な演奏をしていることか、がよく分かる。ちょっと、ジャズから離れてメトードローズをやってみようと思うのだ。なんかね、自分の人生を見直すことにも自動的になるような気がする。ちょっと、怖いけれど……。でも、真逆なことをやると、たとえば、左手を鍛えたらなんだか右手のスピードが更に速くなった。メトードローズを本気になってやるとジャズの方が飛躍する感じもする。ドミソドミソレファラなんて左手でやったんだけど、なんか、ちょっと、泣けてきた。しかも、指1 3 5なんてね。ブロックコードで8和音を押さえている指さんたちの困惑。逆にぎこちないところがかわいい。

## 2017.07.26 Wed 定年後ゼロからのピアノ

---

「メトードローズ」の譜面を弾く。わっ、53年前に私のピアノはここから始まったんだあーっと、ちょっと、目頭が熱くなる。まあ、ぐれ捲り歪み捲り酒煙草の毒に脳を侵されたことがよく分かる。でも、その歪みこそ、私が世間の荒波をサーフィンして来たぞっちゅう証。

でね、メトードローズの超シンプルな曲を弾きうるうるする。その後、すぐに超複雑な曲をやる。精神分裂ピアノみたいな感じ。でも、楽しいどおーっ！

ところで、そこのおっさんたち。定年後、やることねえーっと言っているおっさんたちに、この「メトードローズ」。第一、名前がおっさんに丁度いい。波多野結衣ちゃんのメトードローズなんて本当にありそうなAVのタイトル。結衣ちゃんは私には看護婦さんにしか見えない。

40年会社勤めして取締役になりましたあーなんちゅうおっさんが、本妻に煙たがられ自宅に居場所なし。可哀そうというのかなんか分からんからスタンウェイのフルコンサートマスターのグランドピアノ買って、メトードローズで初めてピアノを弾く。なんか悲しいようなコミカルなようなじーんとするような、悪い感じではないと思う。

まずね、右手だけで、ドレミファソファミレと延々とやる。会社勤めを初期化できるはずだ。3か月ぐらいしたら、左でドソドソレファとかルート音で伴奏する。会社でえぱり捲っていたおっさんがよちよちとやる。

会社のOBとして君臨できるのであれば、その調性をキープ。奥さんは大変だろう。子供たちも。

私は、私もおっさんだからこういうおっさんを非難したりしない。でも、盆栽もでけん、大工仕事もでけん、楽器もでけんなんちゅう居場所なきおっさんたち。ピアノいじってみ、俺が教えたるよ。寂しい風景だぜっのっ！

「メトードローズ」の中の曲を弾いていたら頭が少しおかしくなってきた。元々、おかしいのだけれど分裂してきた。

私の家の右斜め前の大きな家。右側が音楽教室。ここに通ってみるかなどと考えた。ついでにフランス語学校も……。下手とは言えプロの端くれピアノ弾きがメトードローズを小脇に抱えて通う。傍迷惑甚だしい。先生が迷惑だろう。フランス語学校。先生とフランス語で喧嘩したりしそうな気もする。時々、脳がワープする時がある。「あれ、なんで俺ピアノ弾けんだ？　なんでフランス語しゃべってんだ？」。こういう認知症のようなおっさんが初々しい生徒さんたちに交じる。いかんだろうやはり。

息子のピアノ。ミスタッチが多いのだけれど、俺の息子のせいかなノリがいい。タッチが力強くどんな曲を弾いてもスイングするというのかしてしまう。体全体で弾くから見ているとおもしろい。メトードローズの曲を弾いてあやつの脳構造が少し分かった。ノリノリでフランス民謡を弾いていたのだ彼は。お父ちゃんの方は高等技術があるから和音分解して超複雑ノリノリにしちゃった。

娘のピアノ。真面目几帳面理科系。まず、ミスをしなない。正確である。スイングはしない。譜面通りに正確。ある意味、機械的でもある。でも、ほんの一瞬、微かに彼女のエモーションが出る。

このキャラの違いがおもしろい。そしてお父ちゃんの方は脳構造は娘。でも、やることが息子という分裂症なのが、やはり、おもしろい。ピアノという楽器は「歌わない」。ロングトーンが出せないこともあるけれど、パソコンみたいな楽器だから歌わない。これを「鳴かぬなら鳴かせてみようホトトギス」と裕センセはやるところが馬鹿だ。娘はお父ちゃんはキチガイと言う。ガイキチとジャズ用語では言う。医学的なそれではなくて、娘はゲイジュツカ的ガイキチと言う意味で言っている。息子は言わない。本人の方がお父ちゃんよりずっとガイキチなのだと思う。大体、哲学書を漫画本のように読む奴なんぞまともではないはずだ。

まあ、永遠の三流ピアニストではあるけれど、沖師匠、真師匠に言わせると……。

自分のスタイルがある

挑発力　スピード

弾いている姿

他のミュージシャンの音をよく聴いている

スイング

いい奴だ

と、まあまあの評価？ いや、実は、これって凄い評価なのだよ。手前MiSolではないぞっ！

## 2017.07.28 Fri 芸術を定義してみる

---

赤ワインをちびちびやりながらピアノを弾いた。弾き終わりこの記事を書き出した。もちろん、私見ではある。たまには私も真面目な記事を書くのである。

芸術は、くどいけれど、私見です。芸術は人間の営為の最高峰にあるべきものだ。そうでないものは「そう」は定義できない。では、なに？ はい、一言で言うと、あるようなないような「自由という概念を体現するもの」と定義する。以下、美術史ベースで考察してみる。

宮廷での絵師。この時代は個人ベースの芸術家とは呼ばれていなかった。でも、その中で自己を表現するというベクトルが生まれてくる。ゴヤなんか代表だろう。そして、マネが続き、モネが出現してくる。美術史初の前衛芸術。良く分からない上から目線で書くと、一般の人々はここで脳がストップ。これは、時代の変化に付いて行けない老人のベクトルそのものなのだ。大体にしてモネの生きている時、印象派は狂気の沙汰だったことをなんで皆忘れていたのかが理解に苦しむ。絵画の鑑賞というものは存在しない。当時の前衛＝自由人のコンセプトを学ぶ、以上なのだ。芸術は飾り物ではないということを忘れてはいけない。自由を希求する、その狂「喜」を学ぶところだ。

印象派の時代から百五十年弱の時間。セザンヌからキュービズム、フォービズムが生まれ、抽象絵画の出現。当時のスター、ピカソの裏にデュシャンがいた。彼らは時代の変遷と共に前衛、つまり、自由を希求し続けたから美術史という芳醇な人間史が生まれた。セザンヌが近代絵画の父である。

少し専門的に書くと、彼が初めて絵画を二次元化させたからである。この発想はなかったのだ。平面化と言ってもいい。でも、デュシャンは、ダビンチの方へ行った。ほとんど科学とか理論の世界へ。絵画の平面化という革新的な概念をデュシャンはオブジェと言うさらに、現代のインターネット的な革新概念を定義し美術理論は終焉したのだ。

美術理論は究極まで行った。でも、我々は生きている。その後はどうするの？ その問題をデュシャンは残してくれた。

唯一、究極まで自由と言う概念を時代と共にと言うより通り越してしまった人々を理解することがまず最初。と言うことになってしまう。もちろん、する必要はない。いや、どうなのかな、した方がいいと思う。不自由は排除した方がいいし、時代が急速に変わる現代と言う時代に自由な発想と言うむしろ「まだあるの？」と言う時代だからこそ、かつての天才たちを理解していた方が身の安全と思う。



では、私は自由なのか？ 分からない。でも、自分の事を悪く書くこともできる。譜面を見ずにピアノを弾ける。結構、自由だと診断してみる。

私は自慢じゃないけれど三流ピアニストだ。自他といたいけれど、他の評価はたぶん違うはず。自認めるといふこと。二流なのか五流かも知れないのだ。沖至師匠からの教えの一つに「ピアノ弾きには教わるな」。これがあるから、時々、苦しむ。

客観的に「ピアノの黒帯化が始まった」。でも、黒帯になったわけではない。そのベクトルが始動しただけなわけ。ここからどうすんだよおー、おめえーってなる。これがやはり若干分からない。とにかく自己流独学だからどこかで行き詰る。

なんとなく、飛躍の後に行き詰りが来るから悪いことではない。前進している兆候ということではある。でも、高々、俺ごときが行き詰る？ 百年早いぜっという、謙虚というのかがんばり屋さんは私の年では止めた方がいい感じがする。と思う。

メトードローズの超シンプルなハ長調の曲を弾いた後、超複雑な即興演奏をする。健康によくない感じはするのだけれど、逆に「ジャズメンってなに？」と弾きながら考える。わっ、長くなりそうだなあー、この記事。

美術もそうだけれどジャズも技術理論的にはすでに完成形。昨日も書いたけれど、自由を希求し続けるとこういうことになる。でもね、自由という概念自体が美術文学ジャズ・・・、こういう世界ではすでに「定義済み」。でも、我々は生きている。こういう状態でピアノを弾く。つまり、歴史的に新しいものを堆積させることは、もはや、不可能なのだ。過去のコピーをどれだけ上手く、ちょっと、嫌味かも知れないけれど、技術的にマスターしマスメディアという商売に繋げるかという方向に、たぶん、アンディー・ウォホール以降になったんだと思う。

美術文学音楽に私ごとき三流脳の持ち主が出る幕はない。おわっ、これじゃ、先がなくなる。

で、ジャズって黒人奴隷の労働歌だったことを改めて思い出す。フェアリーさんの記事に衝撃を受けた。「人生は苦から始まっている」。ジャズというマイナー音楽に私は自分を掛けたその理由がよく分かるのだ。苦を安楽の方へ。これこそがジャズの本質。だから、三流でいいのだ。と言いつつはダメ。苦しい人たちが歌う。もっと苦しいと、もっと歌う。歌えなくなる時が本当の負けということ。

あはあは、負けでいいんじゃないね、裕センセの年では？ わっ、三村さんっ！ あんたも、ご、五十かよおーっ！

私の師匠、トランペッター沖至、76歳。ドラムス、佐藤真、71歳。俺が58で相対的に若造のトランペットの吉田ケイが50。因みに、弟が51。妹、54。年齢の話を書きたいのではない。両師匠といて「そんなこと」を考えたことはない。老後の話など一度もしていない。ブーツさんの本日の記事の中の言葉を借りると「粹人」なのだ。ついでに、俺のトリオのベースのオリビアは40。テナーサックスのモーガンは、あれ？ 知らない。30代前半なんだろう。

沖師匠の何気ない会話。「イサオ、あいつら上手過ぎて、ちょっと、やになるよな」とか、「俺より上手い奴、五万といる」とか、こういう普通のような会話をするのだけれど、たとえば、ケイ。「イサオさん、絶対に俺は沖さんみたいには吹けない」「なんで？」「あんな音出せんですよ。一音一音がジャズのレジェンド。俺には無理」

「リャ、ケイさんのペットの音、凄く綺麗、音程も正確だし」「ダメすよ、あんなじゃ」。オリビア、モーガンたちは俺のバンドにいと凄く楽しいらしい。バンドマスターが「ほな、へめれけの、ですだす」などと、何の指示も出さないことが楽しいらしい。終わると、「すげえ——っ、盛り上がっちゃったあ——、わ」なんてピンク色の顔で二人で話している。

ここに、超絶的真理が出現する。「音楽は一人でやるものではない」。これは本当だと思う。そして、上手ければいいのか？ これまた、素朴な疑問。とりわけ、マイナー音楽のジャズである。超絶技巧っているのか？

沖師匠。「イサオ、技術はなくてもいいけれど、あった方が自分が楽だ。でも、習得したものはステージではすべて忘れろ」という恐ろしい掟がある。私見では、スイングしないジャズは両師匠は「芋」という判断。最悪ということ。辞表しかない。それとね、生意気な奴も師匠連は嫌う。俺もチャンジーだからよく分かる。「自分の技量を知れっ、ばあーかっ」ということ。

やはり、結論は、音楽は一人でやるものではない、です。でも、もじもじ、ピアノはソロに最も向いている楽器でもある。そして、最も歌わない。結論は一つ、超絶技巧でスイングする。現実にキース・ジャレットがいるのですよ。彼の「ジャズメン」としての評価は賛否ある。しかし、やはり、凄い一言。とんでもない俺俺俺。でも確実な技術と超絶的な「ノリ」。俺は「ノリ」しかマネできない。

まあ、偏見といわれてしまうとそうなのかもしれない。または、逆コンプレックスといわれてもそうかもしれないと思う。私は世にいうエリート系が苦手だ。諸々の職種にそれはいるのだけれど、とんでもなく長くなるからジャズに限定する。

東京芸大のピアノ科主席卒業なんていうジャズのピアノ弾きが「もし」いたら構える。いない。そんなエリートがジャズなんぞやらのだ。音楽のベース自体がエリートを受け付けないところがある。黒人奴隷の怨念だろう。元々、そういうものにNonから始まっているから、ジャズロッククラブとかにエリート系はいないのかもしれない。

超絶曖昧な書き方をするけれどエリート系音楽というのか、音楽そのものではなくて、エリート系に支えられている音楽はやはり、その支えに違和感がおきる。ところで、うちのカミサンはフランス人だ。もう、庶民そのもののフランス人？ ちょっと、違うな芸術家だから相当ずれている。でも、実生活は諸庶民。ジョニー・アリデーとか聴いている階層出身なのにバッハとかパーセルしか聴かない。フリージャズも聴かない。うーーむ、彼女にとっては民謡なのかも知れない。とりわけ、グレン・グールドのバッハばかり聴いている。私、バッハよねえーとか、たぶん。

私は武満徹、ジョン・ケージの大ファンである。あれ？ 阿部公房は東大の医学部出身だ。三島由紀夫は東大法学部主席である。エリート系なんじゃね？ 違う。天才系。武満さんは中学しか出ていなかったはず。安藤忠雄の前身みたいな感じ。

書きながら分かってきた。私は独学系、または、天才系にしか興味がないということみたいです。そうかあー、エリートってのは世間レベルの秀才族ということなのだな。結局、世間レベルという定規、金魚鉢を出ると単なる凡庸に頭のいい人となる。美術文学音楽、こういうどうでもいいように人類史の土台でもあるどうでもいいものはこういう人たちが参加するものではないという結論にめでたくなった。

考えたら、私は5歳から12歳。ピアノを再開したのが35歳。以前にも一度書いたけれど、なっなんとっ！ 29年もピアノをやっているのだ。専業ではなかったけれど……。でも、40の時にプロ登録したから趣味ではない。

趣味と本当はいいたいような気もする。でも、違うのだ。私の両師匠の立場がおかしくなる。私のバンドのメンバーたちはどうする？ 「ピアノは私だ」というブログの総タイトルもおかしくなる。うーん、ド下手だけれど趣味ではないというのは本当で、私の全存在が集約されているという、なんでこんなことになっちゃったのおーっ！ なのだ。

趣味でお笑いやってますあーっす。これもあまり聞かない。趣味でジャズってます。こちらはどうかだろう。なんかジャズという音楽はそういうものではないとなる。黒人奴隷の労働歌が母体。現代社会で、黒という単語はいらぬ。人 奴隷 労働からくる歌。労働形態に奴隷という意識構造が発生する人々の歌。おっ、和音転回すると分かり易くなる。

要は自由ではないと感じる人たちの叫び。溜めると爆発するからジャズ。これこそが、現代でも生きているジャズの本質と申し上げる。抑圧を感じたらそく喚く。以上。

昨日、今日と忙しかった。予約投稿したこと自体も忘れていた。「ピアノ道」という記事をどうも書いていたらしい……。400km走って帰宅した。読み返した。なんか違う。書きたかったことを脳内再生してみる。短く。

29年 ピアノと戯れ やっと 黒帯化の気配 でも その一つの分岐点に立つと 今までのように自己満足独学と邁進して来たつまり自分で道を切り開いて来た それとは違う あみだくじのような迷路が出現した つまり諸々の技術の蓄積が 逆に先人たちの切り開いて来た諸々を「理解できるレベルになった」のだ 当然にして 私がプロのピアニストであること自体が問われる

と、脳内では木霊している。しかし、この迷路からの脱出は理論的には2つしかないと思う。

迷路の全貌をアインシュタインのように把握する。35歳から数学(ピアノ)を始めた人には無理だ。学者の世界は20代に基礎理論を構築できない。論外なのだ。うおーおーおー、自己流に徹する。これこそが、そもそも、ジャズだったことを私自身が忘れていたこと自体が大問題なのだ。

へんてこな例え。ロダンの彫刻と円空のそれ。私は後者に絶大に惹かれる。マルセル・デュシャンと棟方志功、どちらにも超絶的に惹かれる。三島由紀夫とヘンリ・ミラー。どちらも本当に惹かれる。ピカソとブラック。ブラックに惹かれる。ピカソのぎらぎら感がどうしてもダメ。ピカソとダリ。当然にしてダリ。モンドリアンとゴッホ、どちらも大好きである。うーん、私が愛して止まないのは富岡多恵子さんなんだな、やっば。

一番分かり易い例えを思い付いた。私はあまりロックを聴かないのだけれど……。ビートルズとローリングストーンズ。絶対に後者になる。ブルースを理解している白人。エリック・クラプトンもそうだ。スターにも2種類あることが実に面白い。沖至と日野皓正がまさにその通り。沖師匠はストーンズ、もちろん。

デイビッド・ボウイーというロックのマルセル・デュシャンも眩い。ジミー・ヘンドリックスが我々ジャズ屋の深奥を揺さぶったことも確か。凄い人たちだ、本当。

自分で作った地図(ドラゴンへの道)を見ながらピアノ黒帯寺を29年も掛けて探して来た。ヒイヒイ言いながら長い長い坂道を登って来た。当然、頂上に「それ」があると思っていた。「被莖廬(ピアノ)寺」なんて言う感じの巨大な山門があると思っていた。沖師匠と真師匠が仁王門に立っている。

そして「それ」はあった。

「よい子の皆さんの船着場」と書かれた殺風景な暖簾と風景。右側に小さな字で・・・。

ピアノ黒帯を目指すよい子の皆さん方はここから船出して下さい  
お好きなボートをお選び下さい

当然にして、私の中の違和感。頂上に船着場？ なぜか日本の自販機があったから、なんとなくエビスビールを買ってしまう。飲みながら煙草を吸う。あの暖簾の向こうに山門があるということなんだよな。なんか凄く安っぽい感じだよな。銭湯の入口みたいだよな。でも、いよいよ、俺も黒帯か、ついにな。

ビールを飲み干し暖簾をくぐる。

私の前に広大な海が広がっていた。

「訳者あとがき」

思考回路を想像しつつフランス語より翻訳させて頂いた。参考文献として英語版も併せて参照とした。当時の彼は、ここからは一つの例えとしての推測となる。ハ長調の基本的なコード進行はC F G7であることは音楽の基礎をご存知の方々には周知の通りである。彼の自作メソッドを詳細に分析してみた。なんと、このコード進行の代理コードの数が50なのである。このブログが書かれた頃、彼の技量は50のうちの30ぐらいであったと推測する。残りの20が・・・。たぶん、彼の中で頂上が見えたという感触があったに違いない。しかし、まだ、20も、と言う落胆の果ての復活の予兆を感じさせるブログである。

小さな手漕ぎ船の上の裕センセ。「黒帯化ってこういうことだったのね。陸地なんかあんの  
かよおー。漕ぐ(練習)だけ？」

そういうこと。わっ、仁王様っ！

2017.08.04 Fri 綺麗過ぎる

---

私と同時期にロンドンにいた舞踏団の最近を見た。綺麗過ぎる。どうしてアンダーグラウンドではいけないのか？ うどん粉塗れで水槽に浸かっていたあんらはなんだったのか？ 私は「そういうことを」若かったからという説明で済ますことこそ、若い次世代への嘘となることを知っている。いかんと思う。我が師匠を見よっ！ 師匠は折れない。



昨日、少し風邪気味なのか体がだるいのに、午前六時半、一緒に寝ていた子犬に起こされた。顔を舐めるのだ。コーヒーを入れる。煙草を銜え階下の庭に降りる。ウンチとおしっこ。暫く空を見上げぼーと佇む。庭の木々を見詰める。どの木々も大きくなった。二十三年前に家内と植えたのである。

スズキのガレージにスイフトの整備点検の Appointment がある。隣町まで行かないといけない。ガレージにスイフトを預け諸々のカーディーラーが立ち並ぶ通りを煙草を吸いながらバス停まで歩く。一瞬、いわき市の国道六号線沿いを歩いている錯覚が過る。八月の朝。なんとなく蒸し暑いから体内の記憶に残る日本の夏が蘇る。ついでになんとか悲しくなった。

パリ市内はまだしもこの辺りでバスに乗ることはめったにない。バスの車窓から風景を眺める。カーディーラーとか自動車整備工場等が立ち並ぶ大通り。殺伐とした風景。また、私の脳がワープする。私は一体どこにいるのだ？ 二連結の大型市営バスの車内。乗客は三人しかいない。少しずつ私の住む町。ピサロの町として知られている古い町が近付いて来る。風景が少しずつフランスのそれになって行く。パリから北西に三十五キロ。サンラザール駅まで各駅停車で四十一分。十分に通勤圏なのだ。新しいマンションの建設ラッシュ。バスの車窓からそれが良く分かる。フランスの不動産バブルが止まらない。二十年前の三倍近い価格になった。パリ市内に住むことは一般庶民には不可能という大袈裟な言葉が当て嵌まるぐらいに難しくなった。

オワーズ川の畔の大きなバルコニーの付いた瀟洒なマンション。パリ市内の狭苦しいアパートの倍の面積。小さな子供を抱える若夫婦にはむしろいいのかもしれない。少なくとも子供たちには生活環境は断然にいいはずだ。彼らの長い長い子育て期が始まるのだ。

昼食後、家内とセザンヌが描いた水車小屋の方へ子犬の散歩に行く。広々とした公園があるのだ。全長二キロはあるはずだ。小川が流れ鴨が浮かんでいる。この広大な公園に昼寝をする男。大型犬を連れた少女。私たち以外にいたのはこれだけである。木切れで大型犬と遊ぶ少女の姿。キリコの絵みたいだなと思いながら見詰めた。

丘の上の小道を歩くことにした。中途まで歩きながら子犬のお気に入りテニスボールを公園に忘れたことに気付く。来た小道を元に戻る。家内と子犬は丘の中腹で待つ。私が一人で公園まで降りる。丘の中腹の金網越しに家内と子犬が私の方を見ている。テニスボールを丘の中腹まで投げようと思う。元野球部のキャプテンだったのだ。家内が止めた方がいいという。私は意地になり大丈夫という。投げる。腕、腰、膝に軽い痛み。ドキリとした。再度、小道を歩きながら家内にその話をしたらゲラゲラ笑い出す。「大丈夫、マイオールドフレンド」。

スズキのガレージに電話を入れる。スイフトを再びバスに乗り隣町まで取りに行く。帰宅後、いつものようにビールを飲みながらピアノの練習に掛かる。ここ一週間、少し消化するメニューに迷いが生じている。大袈裟に言えば途方に暮れているという感じもある。自作の教則本。諸々のコード進行が数学の教科書のように書かれてある。ハ長調の代理コードの数は約五十。二十九年も掛かって三十まで身に付けた。まだ、二十も残っている。あまりの遠さに少し意欲を削がれたのだ。挫折しそうになっているということなんだな。迷い。メトードローズの中のフランス民謡を弾いてみたりもした。

二日間、ドライバーの仕事で中断していたピアノの練習。私の指が五十のコードを迷いなく弾いた。自分で驚く。つい先日まで迷いながらもぎくしゃくとやった五十のコード。指が確実に記憶している。当然、削がれていた意欲が戻ってくる。お前、できるじゃないか？ 二十四音階 $\times 50=1200$ 。何年掛かってもいい。習得できるはずだ。時間は十分にある。急ぐ必要もない。凝るな。ゆっくりと一つずつ覚えていけばいい。一つのピアニストとしての転換期を迎えているということでもある。当然にして、人生のそれでもあるのかもしれない。高年から老年へ少しずつ移行して行くその入口に立ったのかもしれない。1200のコード進行の習得と共に少し余生のようなものが始まったのかもしれない。

昨日の午前中、私には非常に珍しいのだけれど、午前中＝素面で記事を書いた。通常はピアノの練習と夕飯作りの間の空き時間に書く。当然にしてビールから始まり赤ワインをちびちびと飲んでいる。ほろ酔い気分で書いている。

その記事に対してコメントを頂いた。アルペジオみたい・・・という。ありがとうございます。そうなんだと思います。

メトードローズの基礎練習曲を弾いてみるのだけれど、ずばり、左手が上手く動かない。パリ在住のジャズピアニスト後藤リコとの会話を思い出す。彼女は元々はクラシックのピアニスト。途中でジャズに転向した。「イサオさん、ジャズに転向してから左手が前のように動かなくなった」。

どうしてなのか？ もう、実に単純な答えでジャズピアノの奏法から来ている。左手ブロックコード。右手でメロディーラインとブロックコードみたいな感じで弾くから、つまり、左手でアルペジオはまったくとっていいほどやらないのだ。とりわけ、私の最近の奏法は左四和音重複音を含む、右三ないし四和音と両手で七から八の音を押さえている。基本的には同時に。いや、各音が微妙にシンコペーションしながらの同時です。その合間に右手で装飾音だのはったり音だの超絶スピードとこういう技を繰り出す。とはいえ、左手で半音ずつスライドするというのもやることはやる。でも、動きは非常にコンパクト。たまあーにベースラインを弾いたりもする。でも、私のバンドにはオリビアがいるからトリオの時はあまりやらない。もっと専門的に書くと、テンションコードのみで演奏しているともいえる。ここにシンコペーションというノリとエモーションが被さりエクスタシー的トリップ現象の渦中へ。

ジャズを始める前に書かれた小説群があるのだけれど、長編散文詩という感じが強い。この頃書いたものの方が若干その道の方々に評価された。そして、四作目が一つの完成形のような作品になった。某文学新人賞の次席になったりもした。芥川賞作家お二人から「次回作に期待する」というお手紙まで頂いたのである。

しかし、四作目と五作目の間にジャズというものが侵入して来た。当然にして脳は邪頭と化した。と同時に私の書く物も言葉のジャズ、ジャズの言語化というベクトルへ向かい始めた。たぶん、ジャズメンの誕生＝小説家裕イサオの終焉という転換期でもあったのだろう。芥川賞作家の方々が「期待していた次回作」は結局書かれなかった。小説自体がフリージャズと化してしまった。そして、私の師匠沖至との出会い。決定的に堅気ではなくなったのだ。ジャズ菌の威力は絶大なのである。天才ではないけれど、ジャズバカボンになってしまった。浴衣草履姿でDJと共演する変な爺さんになることは確定したのだ。

我々、ジャズメン。ジャズメンであることの効用紅葉高揚について「酒の勢いで」書くことにする。いろいろと便利なことがある。たとえば・・・。

会社を理由もなく3日休んだ ジャズメンだもんねえーで許されるというのか理解というのか認知というのか・・・

社会的な禁治産者認定をされているから、最初から期待されていないし、「どうせ」という、まず最初の印象が世間への逆圧力となる。

ジャズメン。酒煙草ジャンキー女癖悪会社にいけない馬鹿。これは本当にそうだ。仮に私個人は麻薬はやらない。法律抵触は嫌なのだ。私はいいにしても家族が困る。「裕イサオ、覚醒剤所持で800000回目の逮捕」。私はラリっているからいいけれど、家族への世間の目がある。いくら禁治産者でも家族といえども他者への迷惑はいけない。だからやらない。女、これもやらない。同じ理由である。モテモテ状態キープこそ、美学と申し上げる。珍宝のコントロールができない男は嫌いである。理知が珍宝に負けた時の男ほど情けないものはないと申し上げる。ジャズメン以下は勘弁してほしい。

58の私がモヒカン刈り なんの問題も起きない ジャズメンだもんねえーで許される  
息子の親友のDJとノリノリ なんの問題もない 打ち上げで若いネーちゃんを口説き捲る  
なんの問題もない 口説いているだけなのだ なんのために？ という素朴な疑問さえないから  
いいのだ 訳が分からん？ でも、答えはジャズメンだから・・・で済む

昼間から酒を飲んでブログを書く なんの問題もない

ところで、ジャズメンは若干暗い感じを与えるように演技しているきらいがある。馬鹿がばれるとやばいという懸念があるからだ。でも、アフリカ大陸から無理やり連れてこられた黒人奴隷の労働歌が母体にある。重労働を、体はよれよれ、でも、歌って、ハイになって、ついでに踊ろうという明るい気質が根底にある。南国ルーツが。現代社会では、このネアカがばれるとちょっとやばいから嘘眼鏡なんて掛けてピアノを弾く。

真面目にお笑いというものはやるものだ。真面目にやらないと他者の笑いは取れない。他人を舐めている芸人。辞めた方がいい。ジャズも同じ。でも、効用は本当にある。美男子である必要が全然ない。むしろ、三枚目の方が似合う。いい加減、いつも遅刻、女の名前を間違える。安物の衣類。変なコーディネート。モテモテなのだ。

こういう禁治産者が両親の介護に行く。

なっ、なんてっ、彼はっ、すっ、素晴らしいのっ！ ジャズメンなのにつ！

と、こういう世間的な倒錯現象が起きる。申し訳ないと私が代表して申し上げる。

昨夜から娘夫婦が来ていた。プロの料理人の彼は私の手料理を毎々楽しみにしている。餃子とワンタンメン、キュウリの浅漬けを作る。これからパリの世界遺産であるフランス料理界を牽引するであろう男。この男のインスピレーションの一助になればと考える。今日のお昼は手抜き。つまり、バーベキュー。パリジャンたちにはできないから、これで煙に巻く。

彼らが交互にシャワーを浴びている合間に「じゃ、またな」と娘、彼、子犬と抱き合い妻とドライブにでる。「高年夫婦にこんな大きな家はいるのかしら?」「もっと、パリに近い方が便利」「平屋がいいわ」。なんとなく候補地はあるから下見ドライブとなる。セーヌ川の畔の町々。セーヌ河畔で少しぼーとする。私も妻もあちらこちらの「故障、不具合」。「スイフトのモーターマークどうして取れないの?」「一応、応急処置はしてもらったんだけど、また、点いた。明日、ガレージに行くよ」「やだわ、あたしたちの額にも不具合マークとか点いてんじゃないの?」「あれ、おまえ知らなかったの、ばっちり点いてるよ、ここに」「えっ、どこに?」「ここ」「本当?」「馬鹿じゃね。うなもん点いてるかつ」。

セーヌ河畔をくすくす笑いながら散歩する。「参ったよ、テニスボール、二十メートルぐらい上に投げようとしたらビン。右腕腰右足。情けネエーよなあー、うったく」「あら、あなたの額にも不具合マークが点灯してる」「知っとるぜ」。それから、息子と娘の話になる。三十三年の夫婦の歴史がある。しかも、お互いが若かりし頃、同じ職業。現代美術家だった。芸術という大仰な世界と家族、パパとママをずっとやってきた。子供たちは立派になった。世間に恥じるようなことは一切ない。戦友とか仲間という言葉が本当に相応しい最愛の他人。

フリーズジャズという音楽。単純に万人受けしない。この「万人の定義」が分からない。当然にしてやっている側は拗ねる。余りにも拗ねるから「世間が悪い、馬鹿」という論理になる。私はそんなことはないと思う。この「万人に受けないことを延々とやっている」方が馬鹿なのだ。でも、私が多少マシなのは、私は私の馬鹿馬鹿しさを認識している。そして、止めない。結局、上から目線ではけっしてない。「なんかを感じる人だけ」が聴いてくれればいいということになる。

どうして「万人受けしないのか?」。単純だ。「万人」という人たちは単純らしい。でも、なんのことなのか私には分からない。前衛美術、現代文学の世界にもまったくもって同じ現象がある。音楽を例にとる。

メロディーがない

リズムがない

譜面がない

でたらめに聴こえる

難解

やっている人たちが怖そうな上から目線のように見える

と、こんな感じであると推測する。でも、無理やりいい面を考えてみる。

メロディーがないから 逆に飽きない

リズム 規則的ではないけれど どこかにうねりのようなものを感じる 人という動物のうねり

譜面がない なにはともあれ 規則がない これは悪い事ではない 無法地帯

でたらめ そうなのかもしれないし じゃ 世界はでたらめではないのか? 正直 もっとひどくでたらめである

難解 それは聴く方の脳障害 オブセッションがブロックするから そう 聴こえる 実に単純な音楽だ 原始的でもある

我々が 超絶的インテリ 気難しい 上から目線 真逆である 明るい貧乏人たちと申し上げる

なんだか久しぶりに私の「難しい会話」という即興演奏を添付する。これが難解ホークスに聴こえる方は、その弾き手の、そう、裕センスの馬鹿面を脳内で思い描いて頂きたい。ちょっと、ハンサムな志村けんというイメージ。おっ、でも、志村さんとか、サマーズの三村さんが弾いていたら……。ちょっと、怖い。縁側で洗濯物を干しながら聴くと格別なんだけれど――。意

味分かります？ 洗濯物もびっくりして乾きが早いよっ、奥さんっ！ わっ、弾き手の脳構造  
をあんまばらすと営業妨害？ だれのだ  
よってっ！



お自虐、おーっ、脳っ！　と言いたいんだけど・・・。以前にも書いた。私たちが「新規になにかを初めてものになる」、この医学的な限界が三十五歳。なんの本で読んだのか忘れてしまった。スポーツ選手が引退を考え始める年齢でもある。

先日、家に来ていた娘に「パパさ、二十九年もピアノ弄って覚えたコード進行、各音階のが三十。まだ、二十ある」「パパ、後、二十年ね」「うん、単純計算だとそうなる。なんかさあー、気が遠くなるよ」と、めげただけけれど、まあ、人生長いしやるっきゃないよねえーとやり始めた。そうすると黒帯化は始まったんだけど黒帯になるのが七十八歳。しかも、黒帯っても初段だよ。そうすると「脚光を浴びて女子にキャーキャー言われるの」が、私が八十の時になる。キャーキャー言われてもねえー。モテモテ爺さん。まあ、いいかしらね。

しかし、トランペットの吉田ケイは三十五歳ゼロから始めた。凄い人だ。私のジャズピアノも同じだけれど、幼少期に脳内アプリとしてピアノはインストールされていた。この違いは相当大きい。でも、三十五歳から始めるのはパスできることがケイのケースで証明されている。あやつはプロだ。未満ではなく三十五歳は含まれているのだろう。

ところで、残りの二十のコード進行を覚え始めた。単純計算では後二十年掛かることになるのだけれど・・・。

ねえ、皆さん、聞いて聞いてっ！

全然、脳に入らないっ！　唯一、私の望みちゃんは指さんたち。  
。わっ！

西海の大陸のパリのピアノに

われ泣きぬれて

指とたはむる

たぶん、日本の方々にはピンとこないと思う。明日から私はバカンス。予約投稿だから、本来なら本日。

午前中、娘たちのレストランの水漏れチェック。会社のガレージでベンツのSとEのエンジン回し。バッテリーがあがらないように。それからモンマルトルの丘のホテルへ。お客様七名。娘さんの国際結婚で親族の方々に来ていた。と理解した。たぶん、長女の方で車にいらしたのは既婚の二女と思う。二女のフランス人の旦那。これは良くいる。空港に向かう間、私の右側、つまり、助手席で延々と妻に「なんで、こんな、高い、リムジーン会社に頼んだのだ？ ホテルでタクシー呼ぶか、ホテルのナベットサービスをなんで使わなかったのか？ どうしてこんな高い会社に頼んだのだ？」と、ずっと、言い続けていた。

奥さんの計算が正解。タクシーだったら三台。我々よりもっと高い。しかも、訳の分からないドライバーが来る。ぼられる。フランス語を喋れない両親親族のことを考えたら、一台で、信用できる運転手のいる会社に頼んだ。それでも、フランス人旦那はずっとぶつぶつ。三年後に離婚のパターンだろな。無神経極まりないと家内に言ったら「当然でしょ、運転手なんて存在していない」と言われた。流石である。

モンマルトルの丘、ドゥゴール空港、パリのガレージに帰った。一時間ぐらいですべてが終わっている。道がガラガラなのだ。

私と家内、娘が山に行きたいと言うからでかい別荘を予約した。息子も友達連れて来るというから尚更でかい別荘を借りた。娘たち、忙しくてそれどころではない。息子、友達とほとんどヨーロッパ一周旅行。「もし、行けたら、そっちに行くから」。

こういうのが一番、プランナーには困る。結局、家内と、つまり、高年夫婦が、仲よしだからいいけれど、馬鹿でかい別荘。そう、ジュラ山脈のど真ん中で一週間。電子ピアノ持って行きたいと思うけれど、いいのだ、なんもせん、カミサンとペチャペチャやって山歩き。そう、そのうち、できなくなる時というのが来るのだ。

ジュラ山脈から帰宅した。400kmぐらい運転して来たからブログを書く気力はあまりない。

一週間。私がピアノ弾きであることさえ忘れていた。パソコンも持って行ったけれど開く気がまったく起きなかった。スマートホーンでメールの確認は毎朝コーヒーを飲みながらした。返信が必要だったメールは一件のみ。それからお気に入りブロガーさんたちの記事を拝読。

なんとなく、インターネットとかグローバルゼーションとか、そういったものが存在しない世界にいたような錯覚。バルセロナの悲惨なテロの映像さえ、なんか別世界の出来事のように見えた。

川の水源地を訪ねる。渓谷を歩く。閉鎖された鉄工所を見学する。ジュラ山脈を見ながら家内と貸別荘のテラスでビール、ジュラワイン。

脳の初期化とは言わない。洗濯という感じである。こういう意味でフランスの名物「バカンス」。世界遺産に登録されてもいいと思う。この洗濯をバネに豊饒なフランス文化が作られて来た、なんとなく、断言してしまいそうにもなる。

ジュラ山脈のことを詳しく書こうと思っていたのだけれど、一度、ピア脳が戻ってしまうと山々は脳内から退散。

バカンスから帰りピアノを弾いた。指さんたちがやはりバカンスしていたから元気一杯。筋肉疲労だったのだろうね。早い早い。とはいえ、もちろん、指が早ければそれでよしという訳には音楽はいかない。弾きながら考えたというより、「俺のピアノの水源地はどこだ?」。やはり、l'Ainラン川の水源地を見て来たせいなのだと思う。

湧き出した山水。ちょろちょろとは言わないけれど大した水量ではない。カミサンと「なんで村の名前にセーヌ川って付いてんだ? セーヌ川なんてどこにもないのにね。まさかねえー、あの溝みたいなの、あれがセーヌじゃないよねえー」などと冗談を言いながら小さな村の小さな橋を渡る時、橋桁に「セーヌ川」。「わっ、すいませーん、セーヌ川だったぞっ!」。

ル・アーブルから海へ注ぐフランスの大河の一つ、セーヌ。パリを經由しているから世界的に有名な川。その水源はディジョンの近く。幅三メートルぐらいの小川。イメージがなんか違う。帰宅してから、なんか、私のピアノ歴のイメージと重なった。「あんな小川が海と直結する時の大河感。うーん、俺のピアノもそうあって欲しい。なあーんちゃってえー」と。

正直、バカンス前のピアノ。閉塞感。つまり、私自身がそうだったことになる。ピアノは私なのだ。でね、脳洗濯をして来て弾いた。

「私のピアノの水源地＝ルーツ」がはっきりした。＝やりたい音楽のベクトルがはっきりした。

1) まず、お客さんのいないコンサートはやりたくない。拗ねているのではなく、音楽、つまり、生きている今を共有している感じがしない。仲間内のみ感は避けたい。

2) DJ Maxとのユニット。若々しい音楽をやりたい。これからの世界を背負う若者たちと時間を共有したい。でね、ジャズの複雑な音の迷路を一旦初期化したい。テクニックに、そう、「日本人は」はまりやすい。そういう傾向がある。私もそうだ。几帳面、細部にこだわる。三年前ぐらいに一度書いた。日本の絵描きの「カンバスの裏側が綺麗なことっ!」。でも、表面は芋だ。これは、本末転倒なのだ。絵画は表面が先。裏なんてどうでもいいと言いたいけれど、日本人気質はカンバス自身が綺麗でないと落ち着かない傾向がある。だから、ピカソみたいな人は滅多に、そう、岡本太郎とか宗像志功みたいな人しか出ない傾向がある。えっ、円空とか高橋竹山とか寺山修司とか大野一雄とか土方巽とかは? 凄い人たちだ。わっ、ロシア文学と一緒に抑圧の爆発

パワーは凄いのだ。

3) Unit Vincent Van Millerの復活。バンサン・バン・ミラー。このユニット名は二十年前ぐらいに私がリヨンで作った。素人プロなんでもいい。楽器もなんでもいい。楽器ができない人、ウェルカム。「とにかく人前でなにかしたい」ウェルカム。ちょっと、ユートピック。社会的な法に触れない限り、ステージの上という限定空間で「なにしてもいい」。こういうコンセプト。リヨンとリールで2まで続いた。パリで3として復活させたい。

と、そう、今を生きている。同じ時間を共有している。3か月の赤ん坊も90歳のおばあちゃんも、一つの同時代。

私たちの貸別荘の大家さん。老夫婦。真後ろのお家に住んでいる。ご主人。筋骨隆々。70近いかなとお会いした時に思っていた。お別れをして車の中で家内が「あなた、ご主人、いくつだと思う?」「うーん、筋骨隆々、グレゴリー・ペックに似たハンサム。俺より10上ぐらいかな?」「そう見えるでしょ。さっき、立ち話の時に、今年で85歳ってっ!」「えっえっえっ、うちの親父と同じ年?」。

ということは、奥様も80ぐらい? 3人の息子さんの一人をオートバイ事故で亡くした。25年前。23歳だった。電気技師だった。半年間鬱病で臥せっていた。抗鬱剤の日々が続いた。これではいけない、私には残された二人の息子と娘、3人の子供がいる。なんとかしないと・・・。絵を始めた。モネとかゴッホの模写を始めた。いつの間にか薬を飲むのを止めていた。

美術文学音楽、私はこれ程人生に効く薬はないと確信した。

今日から、アドリアン・カショーと娘のレストランは二セット目に入った。三月中旬から五か月間、ほとんどいい意味で暴走した。二人ともヘロヘロだった。二週間のバカンスで少し脳洗濯したはず。昨日は便利屋父ちゃんの出番。本来ならドライバー業の日がキャンセル。オープン前にやらなければならないことが山積。水漏れで傷んだトイレの天井の修理。大理石ぼい階段の磨き。ファサードの水拭き。メニューを飾る窓のガラス入れ掃除。板の間のワックス掛け。父ちゃんは九時前から行く。天井の修復、掃除機掛けと延々とやった。夕方の六時半まで延々とやった。正確には昼食は取った。娘が

行ってみたいと言っていた近所の中華レストラン「生きている麺」と言う小さなお店。手打ち中華ラーメンと餃子。超絶的に美味しかった。アドリアン君の料理熱にインパクトを与えたはずだ。なんと、親馬鹿の子亀なのだけれど、大手卸問屋が主催する「新規オープンのフランス料理レストラン全国ベスト5」。フランス全土の新規オープンレストラン。膨大な数。アドリアン君は、これを受賞したのだ。パリでは二軒。その一軒。芥川賞とは言わないけれど群像新人文学賞と言う感じだと思う。快挙である。本日、昼から予約がパンパカパーン状態になった。やはり、世界遺産であるフランス料理をこれから背負う男だから、助力は惜しまない。娘のため？ それもあるけれど、あやつは芸術家認定しているから、元それだった便利屋義理父ちゃんは仲間と見なしている。超絶理科系マニアック神経質な娘。すいままっしえーん、私のいい所？ 悪い所？

すべてをコピーした娘。見てくれは父ちゃんより十倍はいいからノープロブレム。こう言う「難しい女」と一緒にいるのは大変だっ！ アドリアン君は家のカミサンにタイプが似ている。茫洋と宇宙的。たぶん、いいカップルなんだろうな。

あらっ？ なんか違うな。ジュラ山脈の世界遺産。製塩所と、鄙びた鉄工所のことを書こうと思っていた。どうして？ そう、塩と言うものと理想都市。工場が一つの町を作っていた昔が私の中の幼少期の常磐炭田と重なった。コルビジェのマルセイユの理想都市が更に重なるから八百ページぐらいには軽くなる？

今見たらこのタイトルで一度記事を書いていた。フランス語で書くとややこしくなるから日本語表記にする。これはマルセル・デュシャンの言葉遊び。マルセルを分解するとマーシャン ドゥ セル=塩の商人。難しいことがお好きな方々は、この塩という言葉に錬金術を重ね合わせたりする。私の貧弱な博識という矛盾したものをご披露しても意味がないから止める。澁澤龍彦の著作に詳しい。

ジュラ山脈に二つの世界遺産。サラン・レ・バン大製塩所とルドゥー設計のアルク・エ・スナン王立製塩所。

貧弱な博識そのもので、私は山から塩が採れる(塩ってこの漢字でいいのかな?)ことを知らなかった。海水からだと思っていた。石炭みたいな塩の結晶があることも知らなかった。サランの塩は山水から……。それを書きたいのではなくて、ルドゥー設計の王立製塩所。工場と従業員の住居が一体となった一つの理想都市のようなもの。なんとなく、マルセイユにあるコルビジェ設計のユニテ・ダビタシオンという集合住宅のことを考えた。一つの建物の中にすべてがある。建物を出なくても学校から医者からプールから全部入っている。私のような出不精には理想的。でも、工場ではないからちょっと違う。

2009年に閉鎖されたシヤムという村の鉄工所。基本的なコンセプトは王立製塩所と同じ。従業員家族が敷地内に住んでいた。

世界遺産である壮大な王立製塩所と鄙びた鉄工所。共通点は、どちらも火を使う重労働。前者はど真ん中に偉いさんたちの建物。後者は山の上にイタリア風のお城。

高熱で山水を熱しその釜の上の塩を掻き集めていた男たち。千℃に熱せられた鉄塊を巨大な鉄のペンチで変型機に出し入れする男たち。敷地内の住居で洗濯料理縫物をする女たち。敷地内で遊ぶ子供たち。

建築家たちは理想都市を思い描いていた。実際はどうだったのか？ とジュラ山脈を見上げながら考えた。

エクソプロバンスの小さな通りで、たぶん、家内が小物店を覗いている間だったのだろう、煙草を吸っていた。なんとはなしに建物を見ていたら「ノストラダムスの生家」と書かれていた。本当にびっくりした。なんとなく実在の人物とっていなかったのだ。ダ・ビンチのお墓もなんか人だかりがあるなあーと近寄ったら「ダ・ビンチの墓」と書かれていてびっくり。私は旅行に行く前に下調べとかまったくしないからこうなる。出不精で旅行が嫌いなのだ。ピアノと旅行していれば十分という変わり者。近所の村を散歩していたら「ドーミエの家」というのもたまたま見付けたりする。

ジュラ山脈に向かう前にドールという小さな町を訪ねた。またまた……。 「ルイ・パスツールの生家」という道案内。わっ、あのパスツールなの？　ここで生まれたんだ、とびっくり。数日後、アルボアというジュラワインの産地である小さな町。「パスツールの家」。これはパンフレットで知っていたのでわざわざ見に行った。

ルイ・パスツール。フランスの生化学者。細菌学者。たぶん、世界的にも著名なはずである。へえー、ここで幼少期？　低温殺菌、狂犬病ワクチン……と人類史に残した足跡は巨大な人。こういう仕事をする人も我々には必要なんだろう。と思いつながら、俺？　足跡というより即席ちゅー感じだよなあー。で、めげたのか？　うな、人類史に巨大な足跡を残さない人が99.999パーセントなのだ。でもいいのだ、小さいけれどパリの場末のジャズクラブとにほんブログ村に足跡というのか轍というのか引っ掻き傷というのか、なんか分からんもんを私だって残してはいる。



今朝、「ルイ・パスツール」という記事を書いた。で、今日はドライバー業オフだからピアノの練習。ちょっと前に書いたのだけれど、ピアノの黒帯化は始まった。各音階の50の代理コードの内、30まで血肉化。残り20。ここまで来るのに29年。これぞ、大器に一生ならないケースじゃね？ 晩成しないのだ。

29年といっても会社勤めの合間という感じだったから、本格的にやり出したのは、ある意味5年ともいえる。58歳で、まだ、20も残っちゃう。馬鹿だ。

ところで、一昨日、サマーズがゲスト出演している番組を見た。大竹さん「こいつ、50になったのに、まだ、伸びてんだよ。馬鹿じゃね」。確かに、三村さんの存在感は大竹さんよりどんどん増している感がある。トークも大竹さんより巧みだし、物凄い読書家らしく博識。でも、見た感じが、そこいらのおっさん。楽しい人だ。でも、そう見えないけれど、努力家と見ている。ローラもそうだ。

大竹さんは少し天才系。努力家ではない。閃き系。三村さんはジープみたいに走りながら覚える系。私はどちらかという元々は大竹さん系。でも、ピアノに関してはスタートが遅いから三村さん系になった。いいことだ。いろんな系統を知るとは絶対にいいことだ。おっ、わたくしは一人でサマーズを合体させてしまった？ うーん、ちょっと、そうかも。

大竹さんの口調で、しっかし、頭に入らねえー。

呆れるぐらい頭に入らない。老化現象なのだ。そうなると方法は一つ、ジムナスティックピアノ。老化防止のためのピアノとなる。頭に入らないのなら体に覚えさせるしかないっ！ 私より指さんを信じるしかないっ！ 年は取りたくない？ ふん、お前も一緒だっ！

いいのだよ、それで。対処するだけ。高年でコードワークが頭に入らないピアノ弾きが自分で鞭打ち体に覚えさせる。いい健康法ですよ。でもねえー、黒帯になるのが推定78歳だよ。まあ、いいかしらね。

フランスのアン川といっても日本の方には馴染みはないだろう。大河ではない。私は以前リヨンに住んでいたから知っている。それと、若干フランス国内で知られているのは、フランスの県番号は県の名前のアルファベット順。フランス国内領土には95ある内の01番なのだ。因みに私が住む県が95番。海外領土に6県。計101県となる。

ついでにフランス四大河川は・・・。長い順に書くとロワール1004km、ローヌ812km、セーヌ777km、ガロンヌ647km。アン川は190km。時々、川の水源地とどこで海に注ぐのか妙に気になる時がある。

四大河川については今回は書かない。アン川の水源地を訪れた。ジュラ山脈の中にある。あまり大自然の中を車でブーブーと荒らしたくないのだけれど水源地までの距離の表示がないからとにかく車で行ける所までは行くとなってしまった。予想通り県道を降りてから結構走る。更に村道からすれ違いぎりぎりだろう道を結構走る。水源地だから当然にしてどん詰まりのはずなのになかなか辿り着かない。徒歩だとかなりの距離だった。どん詰まりのパーキングといっても十台ぐらいが止められる空き地。人も十人ぐらいしかいない。山の奥そのもの。それから200mぐらい山道。左側に真っ黒い苔に覆われた大きな石がごろごろしている。不思議な風景。水がない。その黒い石がずらっと並んでいるだけ。突き当りに巨石が丸く挟られたような池。結構深そう。その奥に地層の割れ目のような洞窟。こんな池に突き落とされたら怖くてショック死しそう。なんか地底への入口に来たという感じで怖かった。

あれ、水流れてないよねえーといいながらカミサンと説明書きを読む。この水源は枯渇し現在は〇〇村が水源地となっている。そういうことかぁーとなった。でも、初めてフランスの川の水源地を見た。アン川はリヨンの東側でローヌ川と合流しているから、ふうーん、ここからあそこまで伸びてんだなぁーとなんの感慨なのか分からない感慨を抱いた。

それから、旅行パンフレットに度々出て来る。「アン川の消失点」。この意味がまったく分からなかった。貸別荘の大家さんも是非行って見てと何度もいっていたから行った。行って見てその意味を把握。地上を流れていたアン川が一旦地層の中に戻り再度滝として地上に現れる渓谷のことだった。その渓谷を訪ねた。壮観な自然の風景を見た。高所恐怖症の私には・・・。正直、渓谷を覗き込む時足が震えた。時々、栈橋。しかも、金網で下が見える。滔々と山水が流れている。深い深い。カミサンは平気でぴよんぴよん渡る。私は目を瞑り両手で手摺を掴み座頭市。戻りの心配が脳裏を過るがぴよんぴよん先に行くカミサンに「わっ、オシメしないと僕ダメです」ともいえない。渓谷の横の小道。一部、「下が見える」。滑ったらアウト。前方から人が来る。擦れ違わないといけない。紳士を装い渓谷側ではない方の木にそれとなく捕まり「ボンジュール」「メルシー」「どう致しまして」と引き攣った笑顔でやった。こういう時、本当にサ

マーズの大竹さんに私は似ていると思う。

その訳の分からない感慨に耽ったついでに、フランス四大河川の水源地とどこで海に合流するのか以下簡単に列記する。

ロワール川 フランス中部の南セヴェンヌ高地 ナント

ローヌ川 スイス 南仏カマルグ地方

セーヌ川 ディジョンの北西30km 今回車ですぐ横を通った 時間的余裕がなく見学はしなかった ル・アーブル

ガロンヌ川 スペイン側ピレネー山脈 ボルドー

県名とか地方名、村の名前に必ずといっていいほど「川の名前」が付く。また、訳の分からない感慨が湧いて来る。

今、「Ain川」という記事を公開した。私は明日から3日間、ドライバーとして忙殺される。記事の中の「不思議な感慨」。これは取り立てて不思議ではなく演歌のタイトル「川の流れるように」。とんでもなく陳腐な比喻だけれどインパクトは凄い。そういう意味で私は「川」が気になるのだろう。生死というイメージに重なっている。

高所恐怖症の私がびよんぴよん前に行く家内の後を若干必死で座頭市のように追い掛けたのは理由がある。とんでもない方向音痴なのだ。スーパーに行く。どこに車を止めたのか、私がいないと皆目分からない人だから溪谷内での迷子は困る。人間ナビゲーションのような私は一度通った道は脳内にインプットされる。その道を引き返せば出発点に戻る。この当たり前の理論が方向音痴という天然には無理だ。時々、馬鹿疑惑が過るけれど知能指数とは関係がないことは分かっている。むしろ、高い人ほど、その傾向がある。

やっと、心の中でオシメをしながら溪谷の展望台。金網状。下が見える。家内が元の道に戻ろうとするのを手摺に引き攀った笑顔でへばり付きながら待つ。やっと、Uターン。左に行く所を既に右へ行こうとする。また、馬鹿疑惑が脳裏を過る。しかし、考えてみると来る時は右に曲がったことは確かなのだ。でも、逆さになっていることを脳が把握していないというより、把握しようとしていないからこうなる。これが「天然」という脳細胞なのだ。天然系は超絶論理系を生きるのに必要としている。これで、数学的なカップルが生まれたということになる。

私、家内の「人生という川」。家内は裕イサオという残念ながら大河ではないちよろちよろ川に合流した。父と母、妹、弟、息子、娘、血の繋がった、つまり、水源地が同じ連中の「それ」を再度考えた。

皆、既に流れているから、当然の疑問は、その流れがどこに、となる。この次元で、それは、それぞれの流れになる。私は、音の宇宙という海に行く以外にはないことがよく分かった。

今回のバカンスもとても良かった。どこが？ 泳げる湖の畔を除くとあまり人がいない。老夫婦、高年夫婦。それと小さな子供連れの家族。つまり、金持ち、スノッブ系がいない。ニースの辺りとまったく層が違う。

どうでもいいことを書くけれど、本物の金持ちは運転手付きのロールスロイス、マセラッティ、ジャガーなんか乗っている。車内の傘とか帽子。超高級品。堅い仕事をしている富裕層はポルシェとかベンツのクーペ。それからランドローバー、ポルシェ、ベンツの四駆も多い。どうして？ 馬主が多いから馬を乗せたワゴンを引くため。別荘、ヨットとかクルーザーを所有。海岸沿いを得意になってフェラーリのオープンカーを運転している筋肉むくむくアンちゃんたち。成金だ。オープンじゃないやつはサッカー選手なんかが多い。芸能人？ 運転手付きの大型バンの後席。外からは見えないし目立たない。こんな感じ。

と、こういう人たちがほとんどいなかったところが、私のような人間にはいい感じ。別に金持ちに他意はないけれど、バカンス先でも経済力で張り合っている人たちなんてそもそも私にはなんの関係もない。スズキスイフトにアイスボックス積んでドライブで十分に楽しい。

それと、なんか時間がどこかの時代で止まってしまっている感。山脈だから工場なんて建てられない。夏の山歩きと冬のスキー観光。ほとんど地元で消費される少量生産のジュラワイン。産業は以上みたいなところだから時間が止まっている。とても懐かしい感じがする。

「フランスでもっとも美しい村」調べたら151あるらしい。貸別荘の近くに二つあった。シャトー＝シャロン村。こちらも調べたら人口153人。台地の上の鷹の巣村とも出て来た。眺望が素晴らしい。ジュラ山脈が見渡せる。台地の斜面に広がる葡萄畑。ここで生産される不思議な白ワイン。黄ワインと呼ばれている。自宅に戻り近所の巨大スーパーで探してみた。この村のものではないけれどジュラワインは二種類のハーフボトルのみ。しかもストックも五本程度。ハーフボトルで約三千円！ 大家さんにジュラワインを賞味してみたいという話をしたらご主人がカーブから一本持って来てくれた。どうぞ。頂いた。アルボア村の白ワイン。家内と飲んでみた。

一口飲む 最初に凄い古いワインの味がする その後、なんとなくコニャックの味 その後に白ワインの味

不思議な味。こんな白ワインは初めてだった。独特。

それからボーム＝レ＝メシュール村。断崖絶壁に囲まれた袋谷。滝と鍾乳洞と修道院。斜めに傾いだ断崖が小さな教会を押し潰すような感じでそそり立っている。実に美しい村だった。

この二つの村がいわゆる観光地と呼ばれているけれど人でごった返す感はまるでない。ついでに家内とたまたま見付けた村。レ・プランシュ村。こちらも袋谷。鍾乳洞と小さな滝。ほとんど

人がいない。周りは山と断崖絶壁。袋谷の真ん中の村役場の横に小さな野外レストラン。お客さんもあまりいない。いい感じなので家内と昼食。ジュラの赤ワインを飲みながら地元のハム、ソーセージの盛り合わせを食べた。もう、わたくしは世界から隔絶されましたあー、リーブミアローンっ！ 正確には家内と共にだけれど。この清々とした隔絶感こそジュラ山脈の最大の魅力。フランス国内で「もっとも海から遠い地方」の面目躍如！ レストランに午前中山歩きをしていた三十代カップル。皆に挨拶。それから山歩き情報交換。実に楽しい。「断崖の上に小さな十字架が見えますか？」レストランの客皆で「えっ、どこどこ？ あった」「うわっ、高そうだな200mぐらい？」「約500m。歩いて登れますよ」「いやあー、高年には無理無理」「大丈夫、ぐるっ——と回って行くから」「それでも無理無理」「あっ、車でも行けますよ」「あっ、そ。じゃ、行ってみようかな」「あそこは廃墟と化した城塞都市なんです。廃墟の中に入れますよ。不思議な光景です。是非、いらしてみてください」。

こんな感じで皆で盛り上がった。私と家内は興味深々だったから行った。村の教会の横に車を止める。結構長い間山道を歩く。出たっ！ 失われた幻の城塞都市っ！ 断崖絶壁の上の廃墟。なんとなく人類が滅びた後の町ってこんな感じなんだろなあー。断崖の端からちょっとだけ下を除く。すぐ止めた。オシメなしでは無理だ。500mの高さの端なんぞ私には無理。十字架が見付からない。城塞都市に着く前の山道でレストランでアイスクリームを買っていた若いカップルとばったり。「あら、再度ボンジュール」。歩いて来たそう。さすがに若い。でも、ヘトヘトだって。「十字架のどこまで行って来た。十字架ぐらぐら揺れるからもたれない方がいいよ」。断崖絶壁の十字架にそもそももたれたりはしない。十字架ごとあの世行き。洒落にならない。高所恐怖症だから気絶してそのまま十字架抱いて谷底へ。

家内と探す。見付からない。ベルギー人の高年カップルと一緒に探す。諦めて引き返そうとした時、「あったあ——っ、こっちこっち」。また戻る。わっ、怖い怖い。谷底が見える。

それから鍾乳洞……。いつまで書いてるんですか裕センセ？

おパリのイっつあん。生業はピアノ弾き。生業なのに食えないからクエン酸を舐める。舐めてばかりいるとあの世。仕方がないから車屋。

お——、イっつあん。ヤノピはどうでえ——？

お——、ハあつあっん。何度やってもド頭に入らねえー。あと、四百もコード進行を覚えんといかん。進行信仰お新香ってね。還暦ちけえーのによ。参るぜのお寺参り

イっつあん、おめえ——、真面目人間過ぎ。適度適当いい塩梅ちゅー感じでやらんと

俺、ハードボイルド系。でけんのだよ。でけんでけんのデッケンズ

おめえーの好きなさまーず見習え。真面目だよ、あいつら。でも、なんかほわあ——んと適当な感じ。ありゃ、むしろ、プロだ。芸能界っちゅう針の筵であれだ。むしろ、ずげえ——

でね、何度も何度もD♭Mをやった。めげた。ド頭に入らねえー。もう、わしゃ、アルプスの少女廃人と思った。でね、さっき、弾いた。でけた。やりゃ——でけることが分かった。めげたらしめえ——。俺は人生の落伍者だけど、なにに、落語的の後幸福人生音楽宇宙揺蕩う貧乏暇なし……。

I'm very very fineのストロベリー。

#### 作者追記

さっき、階下の庭に降りた。リンゴ、パンパカパーン。高年夫婦でどうやって消費？ 娘のレストランに持って行こうっ！ 梨もうるうると大量になっている。収穫はまだ。インゲン。庭のトマト。このトマトの味は……。スーパーのトマトはトトマ。別の食べ物。葡萄っ、大量。松島まあ——のっ、大漁節を歌うしかない。左門豊作。ちびっと庭に行って大きな笹にインゲン、トマト、リンゴ、葡萄、山盛り。とうとう自給自足も夢ではなくなった。家賃も食費もない生活っ！ クロ・マニ・ヨンと改名の日も近い。

旅行とかバカンスのいいところは……。何度も書いているけれど私は出不精なので旅行があまり好きではない。家に居る。正確には私のピアノの横に居るのが好きなのである。いつものスーパーに買い出しに行き、料理。赤ワインを飲みながらピアノ。階下の庭に行きトマトをとってくる。それからブログを読む書く。これで十分という安上がり人間。友人知人は結構いるけれど特別に会いたいという気もあまりない。カミサンがいてたまに子供たちの顔を見れば十分。ジャズメンなのに夜のパリを徘徊。これもあまり好きではない。ユーチューブでサマーズとかマツコさんを見ている方が好きだ。

カップルとは上手くできたもので、内のカミサンは旅行狂。性格から脳構造まで私と真逆。でも不思議なことに美術とか文学に関しては好みがまったく一緒。展覧会后にどの作品が気に入ったか？ このクイズ、ずばり、いつも同じ作品を選ぶ。唯一、音楽のみ真逆。ジャズと古典音楽。で、毎々、私は前日まで駄々を捏ねる。お金がないのになんで旅行なんかするの？ 俺はピアノを弾きたい。以上。しかし、方向音痴、直進のみドライバーのカミサンを一人で旅行に行かせる訳にはいかない。しかも、ヨーロッパとはいえ外国。英語があまり上手くない。私は一応ロンドンの美術学校出身だから旅行中の英語ぐらいはなんとかなる。運転は実際にプロドライバー。人間ナビ。地球のどこをどこに向かっているのかいつも脳が把握している。

結局、駄々を捏ねながらも旅行に出る。一度、出てしまうとルンルンと楽しんでいるところが自分でもよく分からない。でね、何を書きたいのか？ そう、旅行後、こうやってブログ記事として旅行を二度楽しんでいるのだ。写真とかまったくくないのは自分の脳内旅行だからなんだろう。一人楽しんでいるという自己中旅行記。

ジュラ山脈の一週間。お天気は最高だった。暑過ぎず丁度いい感じ。最終日午後。なんとなく唯一訪ねていないところ。ジュラ山脈には沢山の鍾乳洞がある。一つの観光の目玉でもある。貸別荘の近くに一番規模の大きいそれがある。しかし、私は高所および閉所恐怖症。なんとなく足が向かない。入場料も高い。高い入場料を払い閉所恐怖症と戦い地上へ生還。なんか理不尽。パンフレットを読んだら身障者の方でも見学可能と書かれてあった。ということはそれ程狭いトンネルを通るといことはないと推測。考えてみたら初めての鍾乳洞は阿武隈山脈のそれ。中学三年生の時。野球部の仲間の二塁手と一緒に自転車でいった。記憶が薄れているけれど片道70kmぐらいの上り坂を走ったはずなのだ。帰りはペダルを踏む必要がなかった。あの体力は何だったのか？ ずーと後になってベルギーの鍾乳洞を訪ねた。鍾乳石の形状が実に面白かったことを思い出した。

珍しく突然、カミサンに私から行こうっ！ と切り出した。なんか中学三年生に突然戻ったのだ。行った。閉所恐怖症を危惧していた私が見たもの……。



地底の中の巨大コンサートホールのような空間。これには本当にびっくりした。1966年に発見されたとのこと。発見者たちのその驚愕振りを想像した。地底の中のこの空間。なんか月面をお散歩して来た錯覚を抱いた。鍾乳石と石筍が1cm伸びるのに100年掛かるとの説明。いくら私がハイランダーとはいえ、まだ、858歳。800年前に一度訪れていたとしても8cmしか伸びていない。という空想。俗世間の悩みなんぞなんなのだぁーとなる。地底時間では我々の人生は1cmにもならないのだ。

地上に出て来たら豪雨。でも、月面のお散歩に満足している我々にはなんちゅうことはなかった。

昨晚、久しぶりにマツコさんの出ている「五時に夢中」を見た。「政府が健康のために飲食業の酒の飲み放題を禁止することのこと」ふかわさん。「えっ、そうなの。でもさあー、健康健康っていいね。完璧な健康体で椅子に座ってじっとしていることを健康っていうのかしら？」マツコ・デラックス。

マツコさんは実に「当たり前のこと」をいう人だ。私が若い時分に嵌った富岡多恵子さんのエッセイもそうだった。富岡さんは訳の分からない「色眼鏡で」世間とか世界を見ない。だから詩人なのだ。マツコさんも同じ。結果、もう、本当に「当たり前のこと」しか出て来ないとなる。若干、私のブログもそうなのかも知れない。

ところで、さっき、ピアノを弾きながら……。ヤマハのサイレントピアノ。ヘッドホン。ズームのリズムボックス。ステレオにアウトプットするためのコード。パソコン。親父が入院していた緊急病室とどこか似ている。いろいろと接続器具機具危惧？ 私は中酒飲み。ミドルスマーカ。取り立てて健康熱もない。しかし、頭と歯以外は丈夫らしく大病ゼロ。両親に感謝です。

私は健康？ そうなのかも知れない。諸々のコード類と共にピアノを弾いてルンルンしている。名付けて健康病室。

マツコさん「健康ってそれぞれの考え方よねえー」。

はい、裕センセの「健康維持方」。はい、……。

吸いたい時に煙草 飲みたい時に酒 一切の自粛はしない 悲しい時は泣く 可笑しい時は笑う ピアノを弾く なかなか上達しないから終わりが無い 下手で良かったとルンルンする 理不尽なことはしない 上に諂わない(ヘツラウ) 人間に上下はないから偉いさんなんぞどうでもいい とはいえ、礼儀は順守 理不尽と感じたら、きっぱりと言う 私はそういうことはしません 俺は戦争には絶対に行かない 死刑でも 企業戦士なんぞ虚業戦士と見做す なくてもいいものを生産している会社 大した話ではない なくてもいいものを売るために営業だ仕事だと騒ぐ 富岡さんが四十年前に「男どもの仕事なんぞ暇潰しの最たるものである」と書いている。「人生は長過ぎる」とも。

分かったっ！ 自分ちの庭で葡萄畑と煙草栽培。はい、わたくしは酒に関しては質より量。でも、おっ、人生に関しては……。わっ。健康で早く死にたい。とは言わないけれど、死ねない苦しみこそ、拷問だと思う。だから拷問ちゅうんだけれど……。これはヤダね。健康で老

衰死。なんか現代では出来なくなったような気がするの、は錯覚なのか？ 私の大師匠、金子光春もマルセル・デュシャンも、とても美しく去った。鍾乳洞地底時間で0.81cmの人生。素晴らしい。体にコード類は私は要らない。ピアノには要るけど。

私の妻はフランス人。一緒になって三十年以上が過ぎている。第一、ニューヨークの現代美術の世界に飛び込もうとしていた二十歳の私がなぜ今フランスに居るのかという素朴な疑問が沸いて来る。しかも、ジャズのピアノ弾きになった。全ては必然的な偶然だったと理解する以外に方途はないのだろう。

早回し。岩手県、仙台。福島のいわき市。常磐炭田。つづら幼稚園。内町小学校。平一中。磐城高校。水道橋美術学校。美学校。ロンドン、ジョンカスアートスクール。パリの旅行会社TCI。人材派遣会社TOS。フランス日通旅行。フランス日本通運引越課営業統括。

この間、美術小説ジャズとスマホの画面を変えるように？ ではなく自力で変えた。本来の見取り図は、磐城高校東北大学医学部医学博士。こういう設計図があった。医学白紙と化した。私は人間の修理に興味がない。なにか違うものが欲しかった。それだけのことなのだ。本当に嫌な言い方をする。私は肉の修理に興味はない。心とか精神と言う抽象的なものにしか興味がないのだ。肉の腐敗が死に至る。それでいいと思う。苦しめない方法で死ぬ方法にしか興味がない。地球にもっとも悪いものは二酸化炭素ではなく、我々。人間量こそ自然破壊なのだ。

そういう俯瞰図はある。しかし、家族という弱小俯瞰図の中は、また、話が違う。家族に危害を加える馬鹿が居たら当然その馬鹿の力量の上に行くしかなくなる。暴力なら更なる暴力で対応するしかなくなる。もし、世界がそういうことなら、仕方がないと言うコメントしかなくなる。だから、暴力馬鹿はなんとかして欲しい。

階上の娘の部屋で老眼鏡を掛けながら息子の博士論文の誤字脱字の確認をしている妻の後ろ姿。とても綺麗だと思う。

社会はこういう順番になっていた。最下層の「商」の更なる最下層が「芸能人」。このように今でも理解しているから、更に「芸能人の最下層」。わっ、もしかするとジャズメン？ うなことは無いと思うけれど……。仮に「そう」であってもじえんじえんなんの問題もない。芸能人の格付けは「年収」と仮にすると、やっぱ、ジャズメンはやばい。でも、ここに微妙な問題。私の理解では、現代の「士」というのは芸術家、哲学者、数学者、文学者……。それから医者だの弁護士と私見では理解している。ジャズメンは芸能人なの？ 芸術家なの？ 分からない。メビウス現象だからどちらでも構わん。

ところで、芸能人が「一般人」と結婚とかよく出て来る。もし、上から目線的なのであれば馬鹿だ。堅気じゃないやつが幸いにも堅気の方と結婚。こういうスタンスでいっているのであれば許す。お笑い芸人だの売れないジャズメンなんぞ、私も含めて社会の屑。要らんのだ、こういう人たちは……。といたいけれど、でも、屑がいないと息苦しいでしょってっ！ 馬鹿がいないと秀才の意味がなくなる。私？ ある意味逆噴射傲慢なのかも知れない。社会の屑、最下層、なんかトキメキを感じちゃったりする。すげえーって。

でね、現代社会はなんか「商工農士」になってねえか？ これはダメだ。「農」こそ我々にもっとも必要なものだ。芸能人が増長するなんぞ論外だ。あれ？ ジャズメンって逆さにしても結局最下層になるところが素晴らしい。

相変わらず去った会社から復帰コールが来る。気持ちは分かる。「所長の不在」が組織的な問題になっている。事情は分かるし、還暦近い親父にこういう選択肢が残されている。ありがたいし、素敵ではある。なんとなく、昔の部下の現状を考えると「よっしゃー」という気持ちも少し起きる。でも、芸能馬鹿がアーティストビザでフランスに来た男が、二十四年間サラリーマンという真逆ライフを送って来た。もう、勘弁してっ！ 僕は自慢じゃないけれど社会の屑最低人間高年プータロー、人呼んでジャズメンだぜっ！ という気持ちが凌駕する。そりゃー、年金額に多大な影響を及ぼす。それは知っている。でも、まともな年金を一応はもらえるようになったのは、うーん、「堅気の二十四年」。もう、いいんじゃない？

私は芸術家と言い放ちたい。でも、なんか「そう」ではなくなった。「売れない芸能人」。これこそ、本当にどっちなんだよ、あんたっ！ となる。じゃ、売れぬのなら 売れて見せよう ジャズメン。と、数学的にはなるんじゃない？ 裕センス。まあ、いい年こいて、楽しいです。じえんじえん頭に入らないように思っていた複雑なコードワーク。ちゃんと、入り始めたというより、私より指さんたち、社長より従業員の方がずっと優秀ということ。

夏の終わりに捧げます。

「バンド」という単語、私は音楽用語だと思っていた。調べたら「動物の群れ」という意味が徐々に音楽用語化したと出て来た。

我々がバンドを組む時。いや、私が組む時、私と技量が同等以上の人と組む。できれば「ずっと上の人」。ただし、共演をしてくれるかという問題は起きる。でも、幸い私には沖師匠、真師匠がいるから助かる。ずっと上の人と共演させて頂くと自分の非力がよく分かるし、分かった分、伸びる。

こっちは我々といっていいのかも知れない。両師匠も含めて生意気な奴、上から目線、自己中ミュージシャンとは組まない。でも、不思議なのは沖師匠からすれば佐藤真と裕イサオは「生意気で可愛い弟子」となる。なんか超真面目系生意気は問題ないようだ。自分のスタイルを崩さない意固地な生意気というのは別らしい。

両師匠、私ごときチンピラと共演してくれるのだけれど、結構、「イサオ、俺はあいつとはやらない」ときっぱりといわれることも多い。生意気でダメだ。こちらの音を聴いていない。上からものをいう態度はいけない。スイングしない。人間性が気に入らない……。私と共演してくれるということは技量は大したことはないにしても、こういったものは私にはないということなのだろう。

なかなかバンドの一員とかバンドマスターって難しいといえはいえる。人間の群れなんだから当然かも知れない。楽器自体が違うという条件の下でも上手く行かない時はいかない。

以前にも書いた。沖師匠が「合わせようとするな。人間嫌でもどこかで合ってしまうから」「リズムは後追いじゃなく自分が引っ張る感じぐらいが丁度いい」「変な遠慮はするな。歳だのキャリアは関係ない。今出している音が俺たちにはすべてだ」「少なくとも演奏前は体調が悪いとか、そういう話はするな」「家で練習したことはステージの上ではすべて忘れろ」……。

確かに佐藤真も裕イサオも生意気だけれど、師匠の教えは身に染みているところは物凄く素直な弟子。

私は時事系の記事は書かない主義。でも、珍しく書いてみる。日野さんの名前がニュースになっているから……。結論を書いてしまう。良し悪しは分からないけれど「私も同じことをした」。これは断言できる。その後の対応とか云々は分からない。でも、同じことをしたことは間違いない。もし、私が同じことをしたとする。もちろん、お詫びはする。行き過ぎていましたと。でも、反省はしない。ジャズをやりたいなら当然だし……。 「そういう世界」がいいとはいわない。でも、ジャズの根源が「そこ」にある。でも、あの中学生、大成するだろう。日野皓正にビンタされても素手で叩いた。正直、私のバンドに加入させたいというのが本音。いい根性している。学習発表会をぶち壊したこと自体がジャズしているから……。 どうも分からない。現在、日本でジャズがお習い事とかになっているのか？ もし、そうならドラムスの中学生の方がジャズしている。そういう音楽なのだ。黒人奴隷の白人社会という社会への痛烈な反撃。私自身は黒人ではないけれど黄人。白人ではない。そういう肉体的なヒエラルキーは破壊しないと中上健司にぶっ飛ばされるだろう。

タイトル。日野さんを先にした。我が師匠沖至。ピカソとブラックによく似ている。日野さんは英才教育トランペッター。お父さんがタップダンサーだったはず。出身は東京のはず。すいません、いい加減で。沖さん、トランペットの英才教育は受けていない。神戸出身。お坊ちゃまだ。師匠、書いちゃいますね。すんません。お父さん、弁護士、お母さん、お琴の先生。師匠の「長男極道説」にわたくしも便乗。

沖さんは71年からパリ。日野さんはニューヨーク。工藤哲己と荒川修作という日本現代美術の先駆者にそっくり。工藤さん、凄いパワーの人。でも、お金はなかった。一度だけ画廊でお会いしている。私が美術家だった頃の精神的な支柱だった。

沖至と日野皓正、永遠のライバルなのかも知れない。反主流と主流。七十年代、スイングジャーナルトランペット部門で一位を争っていた。

パリなのかニューヨークなのか？ 世界に流出する日本の頭脳という観点で考えると、「その人が現れる」と思う。パリももちろん巨大なお金が出ている。ジャズの世界。流れない。お金ダムが封鎖。しかし、我々はいる。ジャズの本家、ニューヨークをパリは本質的に凌駕した気もする。そして、ベルリンと東京。ジャズを芸能としない気概が、まだ、残っている。ジャズはファッションではない。と、申し上げる。

私は私をジャズメンと名乗る。自称ではなく、ジャズの本質を守っている馬鹿という意味でいるから……。ジャズの本質？ 人間のそれと同じことなのだ。



この音が頭から離れない。字体も音もとても綺麗だ。調べたらラテン語のユリアJuriaに由来すると出て来た。ますます素敵。森、原生林、山地の森という意味らしい。私の自宅から貸別荘のあるシャンパニョルまでの距離も調べてみた。最短ルートで470km。とはいえ、我々夫婦は国道県道村道回り道大好き人間だから、トロワの町を訪ねたりディジョンで一泊したりと600kmぐらい走ったはずである。高速道路、つまらないし、もう一つは有料ということもある。高速料金をケチるわけではなく、有料でつまらない風景というのがなんかつまらなからなるべく乗らない。今回は書かないけれどトロワの町とオーセールスの町、とても素敵だった。

ジュラ県。フランスの地図を見ると、ずばり右側の真ん中＝東側。スイスと国境。フランス国内で一番海から遠い県。日本だと長野県だったと思う。私は訪れたことはないけれど、なんとなく雰囲気似ているのでは？ 県の人口も調べた。261.277人2009年。面白いのは2006年から過疎化に歯止めが掛かって人口増に転じている。昔、務めていた会社の作業員の一人。パリ郊外の家を売り、定年後ジュラ山脈に引っ越した。ジュラ山脈に小さな家を買ったことと、家の工事と釣り以外はなにもしないと本人がいていただけで、だれも住所を知らない。奥さんと二人で十分ともいっていた。子供たち以外にはだれにも会いたくないとも。

釣り？ どこで？ 川で鮎釣りであることが今回の滞在で分かった。ミッシェル、元気ですか？ 十五歳から仕事を初めて六十で定年。ずっと重労働。お疲れ様っ！ 私は上司だったけれど仲良しだった。よく一緒に出張に行ったよね。今は悠々自適だろうな。どうして彼がジュラを選んだのか、本当に今回よく分かった。フランスの秘境。素敵なところだ。

約4.700の手工業。木工が当然にして多い。ジュラワインの少量生産。観光。以上という時間が止まった県だ。そして、ルイ・パスツールの故郷。バカンスから帰りパリを馬鹿でかいベント、後席のお金持ち。運転手の私は妬みも僻みもなにもなくなんとなんなくジュラ山脈のことばかり考えていた。

### 追記

相変わらず不親切な写真なし旅行記。すいません。ご興味ある方がいらしたらインターネットで「ジュラ山脈」と検索するとプロの撮った素敵な写真が沢山出て来ます。

それと、不思議なのはジュラ山脈について書く時、裕センス特有のジャズ文体にならないところが我ながら面白い。

## 2017.09.05 Tue ピアノ黒帯亀夫定年計画

---

段々、一日二記事になって来た。そんなに暇でもないのに。九月十日からドライバーの仕事がぎっしり。午前中に素面で一記事。夕方ほろ酔いで一記事。

ところで、私のピアノ黒帯まで算数上は後二十年。とはいえ、私はすでにプロ。でも、高年脳には残りの400和音がなかなか入らないと嘆きつつ、実は結構入り始めている。そうになると、私の定年62歳までの三年半で黒帯と化す目算も立つ。

わっ、定年と共に黒帯？ いい感じだ。

コンサート三昧 カミサンと一緒にだから旅行も兼ねる 旅行すると私はジュラ山脈のような旅行記を書いたりもするから、これを小説化する 美術はめどうになった

おっ、ピアノソロでギャラを独り占めにしカミサンと旅行も兼ね旅行記の印税が入る。一粒で三度美味しい定年計画。

どうだっ！

まあ、お金は適当でいいのだけれど、いい感じだと思う。

なんか脳内再旅行が止まらなくなった。今回、ジュラ山脈への行きの際にトロワの町を訪ねた。それから会社員時代なんでも行っているディジョンで一泊。帰り、オセールを訪ねる。

トロワは初めて。オセールは一度車で通過している。この二つの小都市。あまり「フランス観光」ということでは耳にしない町である。

「トロワ」人口約六万人。パリの南東百五十キロ。若干、耳にするのは巨大アウトレットショッピングモールがあることと、豚の腸詰モツソーセージが有名。アウトレットは町興しの一環なのだろう。観光地としてあまり聞かないのは、パリから近いようで結構遠い。トロワ周辺は麦畑のみ。そういう意味では観光資源に乏しい感じはする。なんとなくインターネットで見てみたら、どうでもいい町という印象が……。木組みの家が立ち並んでいる写真。とても綺麗だ。それから家内と一度行ってみようということに

なった。腸詰モツソーセージはいつの間にか私の好物になったものでもある。分からない、ここ十年ぐらいのはずだ。以前、同僚が出張先で美味しそうに食べているのを見て、「わあ——っ、よくそんなもん食べれるよなあ——」といていたのに。

「えっ、こんな美味しいもん食べないの？　食わず嫌いだよ。この美味しさが分かったら君もいっぱしのフランス人だ(笑)」。一度、アドリアン君がレストランで私のために出してくれた。ハイレベルシェフのそれは、今まで食べたものとはまったく違っていた。モツのイメージゼロ。高級肉料理に変身していてびっくり。超絶的に美味しかった。

トロワの町。到着。その街並みの美しさ。町自体が清潔。パリのような変な暴力臭、緊張感がない。私たちはほんの一部十六世紀の木組みの家が残っていると想像していた。ほんの一部？　なんと旧市街全体がそれだった。近年修復されたらしいけれど、この旧市街全体の保存状態と規模には本当にびっくり。十六世紀にタイムスリップした感じ。世界遺産認定されてもおかしくない。そして、一番びっくりしたのは「異国にいる錯覚」。家内とどうしてなのか考えてみた。なんとなくオランダのユトレヒト、ドイツのバーデンバーデンに街並み、雰囲気似ていることに気が付いた。清潔で穏やかな雰囲気。娘たちのレストラン、この町にぴったりだな、などと話した。

改めてパリが実に汚いことと暴力臭、四六時中なんとなく緊張していることを再考した。グローバルゼーション？　確かにジャズしているともいえるけれど、人々の穏やかな健全な生活を考えるとこういう町こそ自然な暮らしだろう。だから逆に一度トロワに演奏しに来ようとも思った。穏やかな生活のちょっと外に訳の分からないフリージャズなんていう少し暴力的な音楽がある。こうでないと演奏者の面子が保てないという逆説。パリはそこいら中がフリージャズになっているから我々の演奏も掻き消されて有難みゼロとなる。

「オセール」については明日にしよう。

すっかり一日二記事シフトになった。先週末、土曜日曜日ドライバー激務。今週の日曜日から二週間激務。ということは月から土まで私は疑似定年。この暇と激務が交互にくるところがゲームズ・ボンドしている。午前中、コーヒーを飲みながら、つまり、素面で散文する。夕方、ピアノの練習の後、ほろ酔いでなんか書く。やはり、私は書くことが好きらしい。電話は嫌い。人と話すのもあまり好きではない。でも、お客様も含めて友人知人、他者と会っている時、私はお笑い芸人化する。嫌いではないということなんだろう。一つの他者とのセッション。嫌いではない。でも、めどうでもある。一人というのかカミサンといるのが好きなのだ。究極の愛妻家？

そうなのかな？ 内のカミサンと息子、なんかパンダに似ていて可愛いのだ。バシッ！ 娘は私にそっくりで可愛い。というより美人だ。えっ？

どうして亀夫なの？ はい、歩み＝学習能力の鈍い亀的ピアノ弾き。特に高年だから更に酷い。亀夫と名付けた。といいつつ、じわじわと入っては来ている。でも、さっき、ピアノを弾いていて気が付いた。ところてん脳なのだ。古い頭に無理やり新しいものを入れると、元々入っていたものが流出する。プラマイゼロ。一步前進一步下がる。これって、練習なのか？ はっはっはあ——、数学的には無意味となる。しかし、お若いの、違うのだ。努力している姿勢が大切。でね、本当にプラマイゼロなのか？ そんなことはなくて、やはり、黒帯ににじり寄っているのだ。ついでに人格者化もしている。別に涙ぐましい努力をしろとはいわないけれど、自分が自分を叱咤激昂しているからいじめではない。というよりなんなんだ？ 二重人格なのか？ そうなのかも知れない。傲慢と謙虚というより、メガロと論理的分析かしらね。自分を大した人間と思ってもいいし、屑と批判してもいい。どちらでもいいけれどバランス崩すと病院行きとなる。

よし、自己賛美する。私はかなり視野は広いし自由脳だ。頭も秀才系。天才ではない。貧弱な博学もある。美貌まではいかないけれど、どちらかというところハンサム系。俳優でも別におかしかあーねえー。男らしいところと女々しい(これって差別漢字なんじゃないの?)ところが同居しているから若干複雑そうで、実は単純。好々爺。愛妻家、子供たちは大好きだ。自分のは。几帳面だけれど、他人のルーズは全然気にならない。籠り系。ある意味、複雑なようでシンプルな優しい人。

よし、自己批判する。相対的、富裕層の家に生まれたから、なんとなく、どこかに、上から目線がある。ぶっちゃけ、選民意識ともいえる。これが、やはり、災いの元で幼少期をそういった環境で過ごすとは繊細な子は歪む。時代的に選択肢としてはなかったけれど、なんとなく、私はおかまになっていてもおかしくなかった。でも、先天的なおかま遺伝子はなかったみたい。小学校六年生ですでに170cm。勉強、スポーツ、すべて一番か二番。でも、私は女々しいところを幸いにして多分に持っていたというより、よくいえば繊細。悪くいえば、女々しい。結局、増長して

もよかったのに、なにか、よくいえば繊細な部分が「詩人になる」という後の暴言となる。その前に、実に素直に「将来はジャズピアニスト」と十五歳で答えているところが意味深である。中二からジャズばかり聴いていた変な子供だ。

本当に時々ドキドキ。こういった歪んだ精神構造が、本当に時々ドキドキと出る。そう、「喧嘩を売られた時」です。私は、他者の批判だの、妬みとかそういうものは一切なくなった。でも、馬鹿助が絡んでくる時がある。こういうレベルの時、昔のメガロマンが出る。

でも、いつまでもこういう、つまり、人間のヒエラルキー。こういうものを抱えていてはいけない。人間に上下は絶対はない。

私には珍しいのだけれど、日野皓正のビンタ問題という諸々のユーチューブ画像を見てしまった。実に不快。

唯一、マツコさんのコメントが流石だった。「教育委員会が学習指導としてジャズという自由な音楽をやらせること自体が本末転倒なんじゃないの」「日野さんは世界的なジャズトランペッターって分かるけれど、そういう人を指導者として教育委員会が選んだ。なんか、すべて根本からおかしいじゃない」「ジャズって、そういう音楽じゃないんじゃないの」。

日野さんの帰国コメント画像も見た。ノーコメント。あまりいい気持はしなかった。

不快の一つにお笑い芸人が日野皓正のやったことを、笑いを取りながらバラエティーで話している。その一人は「大した音楽家じゃない」と偉そうなことまでいっている。ジャズという音楽の本質。これはアフリカまで遡る。その怒りの根源はテレビの売れっ子お笑い芸人が話すべきではない。一流のお笑い芸人、これも大したものだ。でも、ジャズという音楽はもっと根が深い。だから、安易に「テレビのお笑い番組」で語って欲しくないのだ。

体罰は厳禁。こういう時代。それはいい。だったら、ジャズという音楽はやらない方がいい。黒人奴隷の亡霊に同じことをいって見たら、ビンタじゃ済まないと思う。そういうところから出来た音楽であることを再認識しているのであれば・・・。どうぞ。堅気の音楽ではない。半端じゃない。ジャズ。アウトローの美学。分からないのであれば、心を込めて、ビンタです。日野さんの台詞「帰れっ！」ということだ。

「酔った勢いで」悪態を付くけれど「世界的」という形容詞はいい加減止めて欲しい。だったら、裕イサオだって世界的になる。宗像志功も高橋竹山も円空も、日本国内で宇宙的な人たち。そんな安っぽい形容詞こそ貧乏臭い。私の師匠、沖至。「世界的」なんていう形容詞は付かない。本当に世界的な人にそんなもんは要らない。音楽自体が世界的だろってっ！　なあ、お笑い芸人さんたちよ。高々知れた知識でジャズだの日野さんの話なんぞするなっ！

トロワと同じくオセールという町もそれほど観光地として名前を聞かない。私の思い込みなのかも知れないけれど……。パリから南東に170km。どうして一度車で通過したのか考えてみた。家内と一泊二日で世界遺産フォントネー修道院とヴェズレーの丘、それから白ワインで名高いシャブリ村を訪ねたことがある。地図を見たらシャブリ村のすぐ近くだった。

「オセール」人口約三万五千人。私が住む町が三万人。県都でもあるところは似ている。前者はヨンヌ川、私の住む町はオワーズ川。パリへの水運の要として栄えたところも似ている。オセール在住の方に叱られてしまうけれど、私のイメージはサッカーの強豪チーム。今でこそ二軍になってしまったけれど、一時期はフランスリーグのチャンピオンだったチーム。サッカー熱の高い町、でも見るべきところは特になしみたいなイメージだった。失礼致しましたっ！ 第一、オセール＝ブルゴーニュ地方。これがどうしてもピンとこない。ディジョンとかボーヌと頭の中でなっていた。ブルゴーニュ地方といえば元ブルゴーニュ公国。独自の文化、世界的なワイン、美食……。調べたらオセールはその最北端。つまり、パリへの入口のような位置にある。そういった町、見るべきところなしなんてことは絶対にないはずだ。一度、車で通過した時、なんか巨大な聖堂があったなあーという残像。

オセールに到着。ヨンヌ川の左岸の高台に第一印象、大聖堂が三つ？ そんなはずはない……。大教会、大聖堂、大修道院。町の規模にそぐわないくらい立派な宗教建造物群。少し圧倒された。ノルマンディー公国の首都ルーアンも百の尖塔の町と呼ばれているけれど、少し共通点を感じた。そして、私の住む町がノルマンディー公国のパリへの入口として機能していたのだ。

観光局にも行かずに取り合えず大聖堂の方へ。実に立派。と思っていたら教会だった。もっと先に更に大きな建物。その後方にも大きな建物。修道院である。ヨンヌ川沿いの高台に建つ三つの巨大建造物。トロワと同じく十六世紀の木組みの家並みが続く。

当然にしてトロワと比較してしまう。木組みの家々。あまり保存状態がよくないから少し町が汚く見える。それと、はははあー、いわゆる芸術系というのか職業不明系の人が多い感じがした。若い連中もロックミュージシャンみたいな人が多い。トロワと雰囲気が違う。町の雰囲気とは面白いもので、行く先々、皆感じが違う。たとえば、私が三年間住んでいたリール。ほとんどの若い連中がギターを背負っている。という印象。道に散乱するビール缶。という印象。フランス国内でたぶんもっともフリージャズが盛んな町でもある。トロワは実に清潔。ちょっとお澄まし？ オセールはちょっとリールっぽい雰囲気。庶民的というのかジャズメンがなんとなく多い気配。

町の中央に時計塔。ルーアンにそっくりである。昼間からカフェのテラスで酒を飲んでいる人々



も多い。元ブルゴーニュ公国の栄華の残像の中で今を生きる人々の息遣い。なかなか印象に残った町だ。

世界遺産フォントネー修道院。ヴェズレーの丘。サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路の一つの起点であるサント＝マドレーヌ大聖堂が丘の上に建っている。建立は861年。それから白ワインのシャブリ村。その延長線上でオセールを訪ねる。パリを起点とすると一泊二日の旅行に丁度いい距離です。

人生を80年と仮にすると、私は4分の3を「消化」した。野球の試合じゃないから「消化」ってのはおかしい表現なんだろう。そうすると残り4分の1。なんか物凄い年寄りのような気もするし、「まだ残ってんだ」やれやれという気もする。

私は長生き願望も早死に願望もない。ただ、いつオサラバしてもまったくもって問題なし。やりたいことはやって来たし、今もってやっているから、どこで切れても構わない。後悔なんぞ微塵もないのだ。そもそも、人生は基本的には楽しくない。フェアリーさんの記事の中に釈迦の教えが出て来た。釈迦も「そうって」いた。元々楽しくないから自分で楽しくしているだけだ。慢性的鬱は治らない。などといいながらルンルンと楽しく過ごしている。

でね、定年後なんだけれど、まず、一番やりたい事は……。夢なんていい年こいて見ないから射程距離内となる。ずばり、コンサートツアー。でね、以下、行きたい国と町を列記する。独断と偏見と私の勝手な印象。

フランス国内 もちろん、住んでいる国 もっともコンサートをしたい町はリール かつて住んでいたし、ライブハウスまでやっていたのだ それと、同じく住んでいた町リヨン いい町だし私のピアノの出発地点 ボルドー 初めて住んだ町 カミサンと一緒にあったところ それと小さい町でやりたい そう、トロワとかオセールとかルーアンとか……。南仏は結構です あまり好きではない マルセイユもコンサートをしに行きたいと思わない

ベルギー ゲント アントワープ ブリュッセル 真師匠の娘さんがブリュッセル在住 真師匠はよくコンサートをやる 一緒に行きたい

オランダ ユトレヒトとアムステルダム

ドイツ ベルリン トランペットのポールがいるからいつでも行ける

日本 母国 それとジャズの国でもある カミサンとキャンピングカーで日本全土行ってみたい 特に東日本は故郷だから是非行きたい 私が生まれた岩手 幼少期の仙台 福島 私の師匠沖至の熱狂的なファンが今もって多いのだ もちろん、東京 素敵な大都市 横浜 それと、京都 大阪 神戸 よく知らないけれど行ってみたい それと、同じく私の知らない名古屋 おっ、久保の兄貴のいらっしゃる九州も 博多なんか行ってみたい

と、裕センセの射程距離内定年計画。お気に入りブロガーさんたちとお目に掛かる日も近いのでは……。わっ、私のピアノを聴いて「声を掛けようとしていたのに黙ってご帰宅」とか「なんだよおーっ、もう少しハンサムかと思ってたのに、よぼよぼ」とか。お会いしない方が

ベターなのかしら？

## 追記

ジャズのルーツはアフリカだけれど、私は南国にまったくもって興味がない。セリーヌの名作「北」。北国に惹かれる。東北で生まれて育ったせいなのか、私が自分に大変に厳しい人間なのか、よく分からないのだけれど、たとえば、上記にジャズの発祥地アメリカが含まれていない。ニューヨークへは一度行ったけれど……。アメリカという国にあまり興味が湧かない。とりわけ、私はアメリカのウエストコーストのジャズはまったく聴かない。ニューヨークのそれのみ。ニューヨーク、アメリカ、大変にシビアな世界から押し上がって来た宝石のようなジャズにしか興味がない。

フェアリーさんの記事を拝読していて、「人生は苦から始まる」という仏教の教えに触れた。かなりの衝撃だった。私はきちんと仏教を学んだことはない。ここに大変に不思議な現象。私は、現代詩、現代美術、小説、フリージャズとお遍路さんそっくりに遍歴して来た。私は巡礼者ではないのに、「仏教の教え」の一部だとは思う。これを血肉化している。

私の世界観の根底にマルセル・デュシャンという一般的に難解と呼ばれる美術家がいる。彼の晩年のインタビューが今考えるとすごく仏教的にも思える。彼が東洋思想、仏教に精通はしていなかったはずなのだ。論理的思考の果ての結論が「そう」なったのだと思う。

人は存在しているだけで疲れるのですよ

多くの人々の一人であることを忘れてはいけません

私は諸々の事にあまり興味がないのです 無関心という自由もあると思います

まるで、釈迦＝仏陀の教えにそっくりだ。釈迦族と呼ばれた民族の末裔なのかもしれない。アメリカに亡命し、二十世紀の美術史を根底から変えてしまったルーアン出身のフランス人から、私は仏教思想を逆注入されていたのかも知れない。芸術というものの計り知れない力も「ここ」にある。凡庸な思想人生、なんらの問題もない。でも、開眼、悟りを開いた方がずっと自由になる。社会の諸々のトラブルもなくなるはずだ。でも、なくならないことは分かっている。社会とはそういうものでもある。と、いつの間にか、私自身が悟りの世界にいるような気がする。一介の場末のピアノ弾きがこういう境地にいることも不思議な気もするけれど、ある意味、私の人生は一つの修業という一面もあったのだろうとも分析できる。

後、400の和音が中々高年脳には入らないと嘆いていた。でも、少し考え直す。元々ピアノが弾けなくて当たり前。必要がない方にはなんの意味もない。苦から始まっているからそれでいいとなる。

さっき練習していて考えた。一音階のレベルを30から50にしようと私はしている。31でいいのでは？ そして、30で十分なのでは？ 人生、ピアノを付けないとややこしくなるから付けるけれど、元々、ピアノ人生はゼロから始まっている。30まで来ていること自体が十分なような気もする。でも、31を目指してみる。

明日から、また、ドライバーの繁忙期。それはいいのだけれど。ここ数日。軽い眩暈。軽い吐き気。なんとなく火照り。なんとなくぼわあーん。元々の小食がさらに小。倦怠感。私は病気なのか？ もちろん、内臓から来る病気も考えられるし脊髄辺りも疑わしい。私は医者ではないけれど、ある程度の分析は出来る。素人なりには。脊髄辺りへの疑いは医者の方も怪しい。熱中症には水水水なんていう医者もいるから少し疑った方がいい。現代はインターネットで医療関係は諸々出る。

私の診断はピアノ病。試しに「ピアニストの病気」とインターネットで調べた。出るは出るは……。しかも、私の症状とずばり同じなのだ。つまり、極度の肩凝り、鍵盤楽譜を追う動体視力の酷使による目の疲れ……。姿勢を正す。目を休める。肩を回す。指の力を抜く。

キース・ジャレット。演奏中、ヨガの運動のような動き。肩をぐるぐる。目を瞑る。指には力を入れないようにしている感じ。これは、ピアノ病対策なのかも知れない。考えてみると私も本番の演奏中、同じようなことをしている。そうかあー、練習がいけない訳なんだな。

と、練習を止めてライブ活動を再開することにした。

それと、気が付いた。レベル30をいきなり50にしようと凝っている。これは止めた。35ぐらいにする。どうして？ 高年なのは脳だけではなかったことを裕センセはお忘れでした。高年体にレベル50を強要したら体調不振という現象。まあ、なんでここまでしてピアノなのと世間はおっしゃるけれど……。

本日は日曜日。昼食後ドライバー業。少し肌寒いけれど秋晴れ。

昨晚、あまりに肩凝りが酷く。なんとなく体調までおかしい……。目も疲れているから少し早めに横になろうと思いつきながら、ユーチューブ画面。登録チャンネル「ワールドオーダー」更新1と表示されている。私は大ファンだから当然すぐに見る。須藤さんが中央にいなくなって久しい。あれれれえー、もの凄くダンスの上手いイケメン落合さんがいない？ この日だけなんか事情が？ オフィシャルサイトを見る。落合さんがメンバーの中にいない。調べたら「体調不良で脱退」と出て来た。残念。

それから急に思い付いた。ワールドオーダーのメンバーって肩凝りなんかないだろな？ でも、彼らのように踊ったら一週間寝たきりになってしまう。布団から出る。もう、本当にゆっくりとゆっくりと恐々と昔やっていたラジオ体操のような感じで十五分ぐらい。

今朝起きた。あら、不思議。肩凝りが相当緩和。しょぼ目がキリリ。顔の浮腫みちゃんもスッキリ。

このゆっくりゆっくり体操、日課にしよおーとっ！

詩を書くという意識がなくなって随分経つ

一つには年を重ねたから 本体が詩になったとも思えるし 脳がピアノ弾き化したせいも多分にあるはずだ

詩ってなに？ その問さえなくなってしまった

これを 単に老化とってしまっても 別になんの問題もない

分からない 年を重ねているうちに 私は いつの間にか 宗教的になっている感じも少しする

生まれたことが苦の始まりだとすれば 結構長い間それを背負って来た

息子と娘に苦を背負わせてしまったという解釈もできるから 父親とすれば 息苦しい

そういうネガティブな考察は必要だと思う

だから 苦苦苦って 私たちは笑う傾向がある

ドライバー業の繁忙期に入っているのだけれど、さすがに3年目。余裕である。お客様も顔見知り。行くルートも大体掌握している。まあ、ペーペーから二流ぐらいにはなったんだろう。しかし、私は経験で知っている。慣れ始めにドチョンボをする。むしろ、慣れて来たからこそ、基本を守り、緊張感を失わない方が得策なのだ。しかも、人命をお預かりしていることを忘れてはいけない。

でね、高年恐る恐るゆっくり体操を始めた。体調は凄く良くなった。煙草が減った。なぜか？ 想像は付いている。

でね、昨晚、仕事から帰り晩酌、夕飯。少しさまあーずを見て体操。首が痛いからゆっくりではあるけれど回した。「変な音」がする。今朝、インターネットで調べた。出て来る出て来る。こんなことをやっているとその内医療ブログ化するかも？

「首から変な音」なんていう馬鹿ぽい検索をしたらちゃんとした医者の説明が出て来ちゃう。でも、助かります。ありがとうございます。背コツが歪んでいる私が馬鹿みたいに首の運動、危険なことが分かりました。ピアノ病の全貌もなんとなく分かった。

でもねえー、医者に行く前に下調べしている患者？ 悪いとは言わない。今日も、後席で「最短ルートの検索」の気配。察知した私は「物騒な地区をお客様をお乗せし通過する訳にはいきません」みたいな説明をした。「お任せします」とのご返事。



本日はドライバー業オフ。明日は午前四時半起き。五か所のアポイント先を回り空港へ。すべてのルートが頭に入っている。プロドライバーだ。

九月二十八日に我々のいつものトリオでコンサート始動。黙々と練習ばかりしていた。そういう時も必要だ。自分の実力を過信してもいいけれど、逆に長い人生が暇になってしまう。さっき、コンサートをシュミレートしてみた。格段に上手くなっていることが自分で分かる。まだまだと発破を掛け続ける。私は大変に自分に厳しい人間？

午前中、昨日誕生日だった親父に電話を入れた。八十六歳。入退院が小休止。いいことである。昨年は誕生日の三日後に入院。その三日後に私はパリから文字通り飛んで帰った。一か月強、実家にいた。お袋が納戸を片付けていたら私の単行本のストックが出て来たそう。いわきアート団体のメンバーだから、三冊ぐらい配った。絶賛の感想が来た。とのこと。ついでに、いわきの画家峰丘さんも納戸の整理をしていたら私が峰さんの展覧会のために書いた文章の載ったパンフレットが出て来た。あまりに凄い文章なのでミーティングの時に持って行った。地元で、裕センセの不思議なブームが起きているとのこと。どうして、パート二を書かないのだ。どうして、その後の出版がないのだ？ 是非、映画化すべきだ・・・。

そういうご意見は分かる。お袋も二十何年振りに再読して涙したそう。「どうしてジャズのピアニストになってしまったの？ どうしてパート二を書かないの？ 皆、絶賛している。素晴らしい文章だって」。そりゃー、芥川賞作家お二人から以前書いた通り「次回作に期待する」というお手紙を頂いていたから「そこそこの出来」ではあるはずだ。

「お母さん、邪という字に頭って書くわけ。ジャズって。頭がそうなっちゃったんだよね。沖さんのせいだね」と答えた。一応、今でも愚ブログを書きながら、電子書籍「たわしは馬鹿だ3」というのが五冊あるよって説明。パソコン知識皆無の人に電子書籍ってもねえー。一応、「まだ、書いとる、わし」と伝えた。

なんとなく私は非常に自分に厳しい人間のような気が少しして来たのだけれど・・・。

なんちゅうかな？ なんかね、年取ったら人の悪口を言わなくなった。というより他人に興味がないのだ。興味がないものにはなんらの反応も起こさない。興味ある他人。もちろん、沢山。興味がある。つまり、レスペクトしているから応援する。以上。あんまりすぎるとウザイからほどほどに。と分別まである。

でも、なんらかのシュチエーションで「興味がない方々と接する」。まあ、多分にドライバー

のお客様方だ。こちらが興味がない分、あちらもこちらに興味がない。いいことだと思う。「無口ないい運転手」で十分だと思う。苦を広げない方がいいと思う。

はははあー、私は苦手なミュージシャンはいないぞっ！ いいんだよ、傲慢で。若人よ。

沖師匠「なあ、ばりばり弾いていいんだよ。いずれ、弾けなくなるから」。

すっかり北フランスも秋めいて来た。気温十七度。白い雲と雨雲が張り付いた秋空。透明な光の中、少し疲れが溜まっているのだろう、うとうとする。透明な光が人々の平穏な暮らしを柔らかく照らし出す。光が充満している。光の水槽。アクアリウム。人々の、私も含めた平凡な暮らし。この穏やかな空気の中で心がうとうとする。

とても気持ち良い鬱と言ってもいい。私の後ろ姿が見える。人々のそれも見える。皆、少し悲し気に見える。健気で儂い。

私の小説を再読した。一時間半で一気に読んでしまった。三十五歳から三十六歳に掛けて書かれた。苦筆と言う言葉があるのか分からない。難産だった。原稿用紙五十二枚。大した量ではない。でも、難産だった。家を購入した直後。私は課長に昇進した。美術作品を作っていた。ピアノを再開した。その上に小説を書いたのだ。この異様な体力と気力は何だったのだろう。二人の子供たちは五歳と三歳だったことになる。

それから二十数年が経った。私はあまり内的には変わっていない事を実感はした。でも、人生は秋になっている。どんどんとピアノの存在が増している。それはそれで構わない。

四季、とても素敵だし、言葉自体も実に美しい。一年おきに繰り返される。

うとうとしながら思うのだ。私の人生は少しずつ冬に向かっている。そして、春が来ることは二度とない。だから、心だけでも春めいていたい。ピアノがそれを支えてくれる。

さっき、透明な秋の光の中を車で走りながら車窓の風景を見た。中華食材店に生うどんを買いに行った。

人生は一度きりとしみじみ思った。

この記事のカテゴリーを「旅行」とした。脳内のそれという意味で。

私は歴史愛好家では全くないのだけれど、小旅行で訪ねた場所を「旅行後に検索する」という倒錯した趣味がある。今朝、コーヒーを飲んでいたら、なんとなくヴェズレーのサント＝マドレーヌ大聖堂を思い出した。ジュラ山脈の帰りに近くを通ったせいなのだろう。私は家内と一度、ドライバーとして一度訪ねている。世界遺産。このバジリカ(バジリカ形式。大聖堂に準ずる大教会)、いい加減な描写で恐縮です。とてもとても素敵な建造物である。私の好きな建造物ベストの一つに入る。861年に建立。その後、人々の暮らしを優しく見詰めて来たという趣がとても素敵なのだ。優しい感じが。

サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路の始点の一つ  
マグダラのマリアの聖遺物(頭蓋骨)が祀られている

歴史もキリスト教の知識も貧弱なものしかない私が仰々しいことを書くことは出来ないから、脳内旅行歴史旅行歴史ロマンへの誘いの道標を列記してみる。つまり、その名称はなんのことなのか？　ダ・ヴィンチ・コードのことは全く知らないけれど、たぶん、そんな感じで……。色々と調べて行くと面白いのです。

バジリカ　サンティアゴ・デ・コンポステーラの巡礼路　マグダラのマリア＝フランス語だとマリー・マドレーヌ　パリのマドレーヌ寺院　マドレーヌというお菓子がどうして帆立貝の形なの　マレーネ・ディートリヒというドイツ人女優の名前の意味　サン＝マクシマン＝ラ＝サント＝ボームのバジリカ　マグダラのマリアはこの町の洞窟で修業していた

そもそもマグダラのマリアとは一体何者なの？

突然、話が飛ぶけれど、ジュール・ジョゼフ・ルフェーブル「洞窟のマグダラのマリア」エルミタージュ美術館（ロシア、サンクトペテルブルク）。この絵なのだけれど……。聖人の絵のはずなのに。洞窟で修業しているはずなのに。

段々、顔が刑事コロンボになっている。

このタイトル、健康にはいいと思う。でも、人生訓とすると、私はギラギラ系なのかも知れない。なんか詰まらない。行けるところまで行ってみないと分からないことも沢山あるはずだ。以前にも書いたのだけれど、絵画とか小説とか音楽は私には鑑賞観賞するものではなく干渉するものとずっと思っている。

人の作品を批評するなどという恐ろしいことをするには、まず、自分がその中にいないといけないという論理。落語の欲耳と同じで、自分と同レベルの人は下に見えるという心理的なベクトル。ということは、同レベルなのに下に見えるから、当然にして上から目線になる。現実と同レベルなのだ。おっ、そこそこ行けてるねえーと思うことは、その人のレベルは自分より上なのである。同レベルと自分が認定しているから。

ジャズピアノに関して腹八分目ぐらいの技量はあると自分で思う。ということは、七分目くらいということだ。

ここに、実に穏やかで長い人生の暇潰しには最適の逡巡が生まれる。暗中の模索君。自分で作ったピアノメソッドの「残り400が入らない」。でも、800まで来ている。嘘のそれではなく。3分の2まで。人生は4分の1しか残っていない。微妙なズレ。棺桶まで間に合わない。少し凝る。間に合わんっ！ と。

今、練習していて気が付いた。「どうして入らないのだ?」。もちろん、高年脳のせいはある。でも、800の敷石があるのになぜに入らない? という素朴な疑問。はい、やり方を間違えていたのだ。出来ることの上に一つだけ上乘せみたいにやったら、するするとマスターした。一挙に830ぐらいになった。やはり、発想の転換は必要だと思う。子供の教育も難しいけれど、自分の教育こそ、本当に難しいという裕センセの大変に素晴らしいお言葉を頂きました。

うーん。私は「さまぁーず」の大ファン。腹八分目芸人。一流の二流。この逆説は本当に難しい芸だ。もちろん、大竹さんの天然天才も三村さんの影の努力も知っている。でも、そういうものが前面に尖がってこない。これは本当に難しいことなのだ。だから、私は腹八分目の超プロのお笑い芸人と認定している。

正確なタイトルは「ギックリ腰の裕センセが車のフロントガラス越しに見たパリ」です。

裕センセは先週の土曜日から、ずっと、ドライバー。悪夢は日曜日から始まった。06h58のパリ行の電車。十五分後にストップ。時間に余裕のあるセンセはお玉割ゲーム。07h45止まったまま。電車の運転手に聞く。「前の駅で電車が故障している。あと、十五分ぐらいだと思う」。急にセンセの目がジェームズ。家に引き返しスイフトでガレージへと判断する。向こう側のホーム。すべての電車がキャンセル。社長に緊急電話10h00のアポイントに間に合わない公算が高くなった。十五回。留守電。「寝る前に、戸棚の中に携帯忘れちゃったっ！ あはあはあは」後日談。さらに顔が引き締まるというより引き攣る。他社のドライバーにダメ元で電話。重要顧客を置き去りドライバー。大事になる。「ハイ、マイネームイズジェームズ。ジェームズ・ボンド」あっけない「はい、午前中空いてます」解決。上り下り電車不通となった。バス、電車を乗り継ぎガレージに着いたのが11h30。05h30起床。ちと、書きたくはないといつつ一番書きたいっ！ 午前中、そう、日曜日手当、しかも、必ずチップをくれるお客様。フランス国鉄による損害「一万円」っ！ =ライブハウスのコンサート三回分っ！ 煙草銭に苦しむ赤貧には赤飯炊くしかねえーだろって、国鉄さんっ！ と怒りがちょっとだけ。やれやれといいながら午後の仕事。すべてが美しくプロしていた。のに、お客様のスーツケースをベルトコンベアに乗せた。腰の左、ビンっ。笑顔で出国口までお見送り。四角に畳んだ紙幣らしきものを無理矢理手の平へ。翌朝、04h30起床。洗顔。歯を磨く。腰に電気。崩れる体を洗面台で支える。社長も前日入った仕事に無理矢理行かざるを得ない。下請けさんにも発注している。代替えは不可。四日間の激務。三人のドライバーが同じだ。行くしかない。

ところで、その紙幣らしきものは、午前中にセンセが失ったはずのマネーと同額だったのだ。一つのハッピーエンドではあった。しかし、センセはギックリ君状態で、月から木、中一日で土とフルサービス。しかも、来週はライブ再開。

崩れそうな気持を支えてくれるのは、お自慢じゃないといっても当然お自慢にしかならん。息子が博士論文でへろへろ。カミサン、その誤字脱字チェックでへろへろ。娘とアドリアン、レストランでへろへろ。九月二十五日。新規オープンレストランフランス全土だよっ！ ベスト5の授賞式がバンドーム広場のリッツの右側の建物で行われる。もろ、自慢だわな。

そう、ギックリ越しに見るパリの風景。ややもすると崩れそうな運ちゃんの心を彼らが支えている。パパも負けんっ！ えっ、もう、負けてる？ そうなんだけど、一応、ギックリ腰で笑顔で運転ちゅう意味。

IV パリ在住のジャズのピアノ弾き。五十八歳。高年にも拘わらず会社を無謀にも自主退職した男だ。どうも、ジャズと会社は水と油の関係にあると思われる。心の中で啖呵を切った。現実には甘くない。食べて行けないからハイヤーの運転手。給料はかつての四分の一以下という有様。確かに社会的な意味では惨め感は漂う。でも、彼はジャズという音楽は奈落から立ち昇る一つの大変に悲観的な暮らしの果ての陽光のような音楽であることを知っている。だから、彼の選択は正解と言わざるを得ない。

腰痛に耐えながらの仕事。パリのジャングルを生き抜くには、あまりいい状態ではない。しかも、ジャングルでお客様を乗せたミニバス。ハンドルを切る度に腰に痛みが走る。

お客様の一人は明日のご出発。空港へのサービスはない。お客様を社長一行の出発後、オペラ界隈のホテルへ空港からお送りする。空港から直帰の予定だった彼は、心の中で眉間に皺を寄せた。でも、いつでも笑顔を崩しはしない。

日本食材店、エイスマートで日本語新聞オブニーを二部、車を止めて大急ぎでピックアップ。来週のコンサートが紹介されている。それから、ギャラリーラファイエットの裏側に近い娘たちのレストランでビールを一本飲んで帰ろうと思う。お客様をお乗せしていない運転手は若干の飲酒は法に触れない。ベルギービールを瓶から直接、外の長椅子で飲み一服。シアターが密集する界隈。ミニバスを一時駐車するスペースは皆無である。

彼の運転手のテリトリーの中に、通称日本人街と呼ばれるオペラ界隈は含まれている。いや、ほとんど、その辺りなのだ。その一角に二十六歳の娘がいる。車窓から給しする娘の横顔を見た。その一瞬だけ、腰痛という痛みは心の中にはなかった。

## 2017.09.22 Fri 超短編「オールナイトヨーツー」

---

本日は、世界的に無名なフリージャズピアニスト、山下腰痛氣さんをゲストにお迎え致しました。この番組は腰痛に苦しむ皆様へ、「腰痛は要注(つう)意」でお馴染みの「ふくすま製薬」の提供でお送り致します。

山下さん、本日はお忙しい中お越し頂き、誠にありがとうございます

えっ、暇ですけど……。ピアノの方は

山下さんは山下洋輔さんにご親戚なのですか？

洋輔先輩と血縁関係はありません

そうすると、山下さんのお名前は若干、類似品名という感じもしなくもなくもなくもななななな……

あーたねえー、失礼じゃなあい

突然、スカルノ夫人に変身するところが見事。ところで、フリージャズという難解な音楽をいい年こいて、失礼致しました、なさっておられる。フォークソングなんて、お聴きになりますか？

はい、井上腰痛

では、ロックなんかも？

はい、YO2

小説は？

二葉亭腰痛

要は通なのですね、山下さんは？

うん、要は通なんだから

本日は、ありがとうございました。世界的に無名なフリージャズピアニスト、山下腰痛氣さんを



お招き致しました。腰痛に効く「腰痛は要注(つう)意」「電話の留守電、よ  
おっ、ツーツー」「おっ、よっつけよ、俺んち」でお馴染みの「ふくすま製薬」の提供でお送り  
致しましたっ！

不思議なコード。後になって気が付くことが多々ある。私が畏敬する詩人、金子光春。彼はマレー半島からパリに来た。彼は船で。私は飛行機。マレーシアからヨーロッパへ。ボルドーから、家内とパリに転居。アパートが見付かるまで知人宅に一週間ほどいた。パリ十四区のタゲール通り。金子さんが住んでいた通りだった。不思議なコードではある。金子さんの息子は早稲田大学の教授になった。私の息子はパリ大学第十二校舎法学部の暫時的ではあるけれど教授。私たちは良き反面教師と言わせてもらおう。子供たちは立派になる。とはいえ、私の息子はカフカの小説をくすくす笑いながら読む。哲学書を漫画本のように読む。はっきり言ってパパより変人だと判断する。しかし、娘はパパは「キチガイ」と、もちろん、愛情を込めて、そう、言う。

マルセル・デュシャンは公の舞台では三十代前半で美術界から消えた。チェス三昧。私も、まったく同じ経路を辿っている。チェスがピアノに変わっただけである。ほとんど、彼の人生を私は模倣しているようにも見える。そんなことはない。いくら畏敬していても人生の模倣は無理だ。たぶん、同じ体質、ヒト科の動物として同類項が多分にあるのだろう。彼の家は公証人。富裕層である。私の父が医者と良く似ている。

一つの人生のコード。

生き立ちという運命もあるのかも知れない。生まれた後の人生の轍もあるのかも知れない。竹内久美子さんにDNAについてお伺いしたい。

私は大した人間では本当でない。でも、日々思う。脳という臓器のキャパシティー。これは、間違いなく私の父の高性「脳」の「一部」は移植されていることを実感する。父はフェラーリ脳。一部が移植されたから、まあ、アルピーヌ・ルノーぐらいの感じなんだろうと思うけれど母方の作家映画俳優絵描きオペラ歌手、この芸能血が数学脳に雪崩れ込んでいるから、脳が爆発しそうというより、既に爆発しているからフリージャズ。と、なるでしょ？

先週の土曜日から今週の土曜日までの八日間。ドライバーの勤務日が七日。しかも、先週の日曜日からギックリ腰。本日と明日はオフ。二十八日、コンサート。十月一日から六日間フルでドライバー。一体いつギックリ腰の静養ができるのだ？ できないのだ。びっこを引きながらよたよたと勤務。

家内は延々と息子の博士論文の推敲。娘は超多忙なのにレイアウトの変更なんていうことまでやっている。この家族一体感はなんなのだ。素敵だ。私はフランス語の博士論文のチェック。無理だ。とうとう、昨日でその論文ができあがった。家内の解放感は格別だったと思う。しかし・・・

「あなた、うちの息子の論文なのだけれど」

「ごめん、俺、本当に疲れている、限界」

「その論文、全部読んで推敲したのだけれど、法学博士論文なのに詩とか哲学書みたい」

「まあ、おまえの子だからね」

「あれで通るのかしら」

「知らんけど、あいつは詩人だ。もう、根本的にそういう奴だ。脳味噌の推敲はできない」

「あたしも、そう、思う」

などと、ずっとお話をしていた。こちらは過労状態。家内もそうだったんだろう。ワインを二本開けてしまった。家内が絡みだした。珍しい。ずっと、笑顔で聞いていた。しかし、決定的な発言。「美術を放棄。文学を放棄。あなたは、いつも、言い訳ばかり・・・」。

ここで、三年に一度の私の噴火が始まった。長いから割愛。単純に「一体いつ俺はクリエーションを止めたのだ？ ジャズのピアノ弾きだ。折れたことはない」。それからは暴力的発言の機関銃をやった。むしろ、家内の方が温厚な私に火を点けたことを後悔したのだ。翌朝、なにもなかったように二人とも笑顔。古夫婦のアウンの呼吸。

「裕イサオトリオ」という名称を、私は一度だけ使った。逡巡があった。私ごときが名前を冠する。佐藤真トリオの方が適切だとずっと思っている。オリビアもいる。きちんと、パリ音大でベースの勉強をしてきた人だ。独学独流の私の名前を使う。謙虚とは違う。立ち位置としておこがましいのである。

しかし、パリの日本語新聞オブニーに「Isao YU Trio」とばっちり紹介されてしまった。ピアノトリオとしてだから、当然にして私がバンドマスター。すいません、真師匠。オリビア。

ピアノトリオの極北をざっと思い浮かべる。ビル・エバンス。ポール・ブレイ。キース・ジ

レットのそれだ。そこに、私になにかを上乗せするということになる。

技量はない。だからこそ、一つだけ、本当に、裕イサオピアノトリオである理由は、私が私であることなのだ。

フェアリーさん、お元気でいらっしゃいますか？ コメント、ありがとうございます。腰痛、少し治まりました。

裕イサオトリオ。うん、さっき、練習しながら分析した。私のピアノ弾きとしての持ち味。長所は短所でもあるから難しいけれど、非常に分かり易い特徴がある。センチメンタルでエモーションナルでスイングハイスピード。やはり、バン・ゴッホとかヘンリ・ミラーになる。どうもそういう系統なのだろう。悪く言うと挑発的暴力的でメガロ。うーーん、私は良い人なのか悪い人なのか自分でも分からない。

でもね、我々は3人。なんか諺があった。3本集まると云々と言う。

真師匠は、非常に謙虚でしゃしゃり出ない人。ソロもしない。しかし、言動と見てくれは真逆。楽器と人格のメビウス現象。オリビアもしゃしゃり出ない人だ。結局、しゃしゃり出るのは裕イサオのピアノ。そうかあー、だから、この二人に私は羽交い絞めにされている訳だ。相性が良いのだと思う。この構造は、キース・ジャレット・トリオと共通はしているけれど、キースは私より100倍は上手い。下手なのにしゃしゃり出る私はなんなのだ？

しかし、馬鹿田大学ピアノ科卒とすれば「これでいいのだ」。たわしはわたしだっ！ 転回形でかたが付いたのだ。

結論が出たので一句かなん句か詠んでしまう。

たらちねの まぶたのはははあー ソナチネ

われ狸を煮て 蟹とじゃんけんする 愚うー

わたしはたわしのじょりじょり ピアノ弾く

「いやぁー、川西さん。ついに、高齢化社会もここまで来ましたねっ！」

「そうね、私と同じ年だ」

「五十八歳にして鮮烈なデビュー。難解アホークス裕一茶夫投手ですっ！ 前身がフリージャズピアニスト。リムジードライバー。この異色の経歴。しかし、残念ながら赤貧生活。ついに奮い立ち、元いわき市平一中野球部キャプテン。甲子園を目指していた。この過去の記憶が鮮烈に蘇り、プロ野球デビュー。しかも、しかもっ！ プロ野球一軍選手の低所得を塗り替える推定年俸二百八十万九千八百円。本人が球団に優しいエコ選手と言っているところが好感度の絶頂。しかし、裕投手。以前、泣く子も黙る日系企業の凄腕営業マン。流石です。この低所得をむしろ逆手に使っている。コマーシャル、広告、著作の印税、推定三億円と言われています。しかし、球団にとって、これほど、重宝なエコ選手はいないと申し上げて過言ではない。裕投手のこのマーケティングは高齢化社会への一矢と言われていることもうなずけるのです。しかし、プロの世界は厳しい。二勝八敗123S。本人は控えではなく先発希望と言うこの男気が泣けますよねえー、川西さん」

「あんた、しゃべりすぎえー、なげえー。私がゲストなんじゃないのおー」

「失礼致しました。それにしても裕投手の魅力は、いきなり172kmの直球。あの大谷投手の日本記録を破りましたねえー。それと、ブログもそうですが、つまり、文章も含めてコントロールが悪い。つまり、なんの球が来るのかタマタマ分からない。つまり、打者、読者は的を絞れない。これは、熊本メビュースの久保投手と共通して居ります。これ程、打者にとって難解な投手はいない。TOKIOココデーズのエース桜井投手。変幻自在のコントロール。打者の打ち気を誘うこのコントロール。やはり、気質の違いは明白でしょう。裕投手。外角高めのシュートなどと言うまったく意味の分からない玉。暴投。噂ではベンチで赤ワインを飲んでいる？ しまいには消える魔球などと言うボデポテスローボールを投げたりする。しかし、人気の秘密はデッドボールを投げた後、ベースへ走り、打者を抱き起し、救急隊を呼び自ら治療する。選手の鏡ですねえー。本人は、あはあはあは、僕は先はないけど、先のある人、ケガダメね、などと言うところがお笑い」

「あのねえー、ゲストは私ださん」

「いやぁー、失礼っ！ しかし、裕投手、テレビだなんだでひっぱりだこ。トクホン、漢方薬、腰痛、ポリデント、アデランスのコマーシャル、ダイエット番組。どうしてあなたはスリムなの？ はい、酒と煙草です。もう、若い女子が酒煙草。CDバカ売れ。E-BOOKわたしはたわしだ。ベストセラー。ついにはワールドオーダーとシンセで共演。次回のマイクロソフト社のオープニングは裕投手は確定と言われているますっ！ えっ

えっ、もしかしたら・・・、東京オリンピックの・・・」

「あぁーたっ、煩いわね」

「わっ、スカルノさんっ！」

## 勝利投手インタビュー

「裕投手、完投おめでとうございます」

「いやぁー、腰痛を庇いながら投げたら力が抜けてコントロールがバーターロールしたんじゃない」

「しかし、失礼ですが、そのお年で現役」

「いやぁー、健康に悪そうなことばっかやってたら健康になった」

「？」

「あのね、人生は苦から始まるでしょ？ と言うことは、我々は苦からの解放を目指す。でもね、苦はないと考える。生きているのではなくて、単に物体として存在している意味のない物と自分を捉える。そうすると、生きている物体と言う矛盾が生じる。しかし、生きている。でも、そう考えると苦がまた来る。じゃ、苦なく生きる方法？ あはあはあは、ない。だって、生きてりゃー、痛み感じるからね」

「以上、異常な勝利投手インタビューでした」

## 2017.09.27 Wed レストラン「DETOUR」本日のメニュー

---

牛肉のカルパッチョ 胡麻山葵ソース

サツマイモ パッション風味

もつのテリーヌ 自家製バター 生キャロット薄切り添え

巻貝 赤蕪 シャンピニオン 鶏ガラスープ

子牛肉ミディアムステーキ えのき茸肉汁ソース シャンピニオンのムース

洋ナシ バニラクリーム 焼きチョコレートパウダー

本日(27Sept2017)、わたしくがレストラン「DETOUR」にて食したものです。吉野家の牛丼食いてえーなどと言っているわたくし。フランス料理、および、パリのフレンチレストランの次代を担うアドリアン・カシヨーの技量。世界遺産「フランス料理」の神髄。すげえーと思った次第です。

味覚のシンフォニー。オーケストラ。視覚のそれでもある。食感、柔らか、堅め、柔らか、サクサク・・・、食べる順序がコンサートの選曲に酷似している。そして、娘のシャイなウエイトレス。狸腹で帰宅した。明日はコンサート。わたくしの出鼻の出番の番茶も出端でした。



## 2017.09.29 Fri 昨晚の演奏を聴きながら

---

昨晚、体調が悪く一度は出演キャンセルのオリビアが心配だった。顔色もあまり良くない。でも、本人がやると言うからやってもらうことにした。こういう時の演奏。オリビア、白い顔でずっと目を瞑ったまま、音の世界にトリップ。この無心の境地から出る音は凄い！ 真師匠と私は目配せしながら無心のオリビアに付いて行った。凄い演奏になった。と自分で言ってしまう。

打ち上げでベロベロまでは行かないけれど、ベロぐらい。帰路の坂道千鳥足。なんか千鳥ながら幸せの絶頂感。今朝と言うより昼近くに起きる。二日酔い。ふらふらしながら煙草屋、散髪。この道すがら不思議な感覚。なんか街並みが綺麗だな。フランスみたいだな。あれ、俺は実家にいたんじゃないかったけ？ 実家の周りの失礼ながら殺伐とした風景。街並み、川岸、私の住む町と比較にならないぐらいひどい。なんの統一感もない風景。これは日本のほとんどがそうなんだろう。なんだか、ぐっと悲しい感じが込み上げて来る。上から目線ではなくて、私の国の昔流行った原風景と言うやつが胸に込み上げて来た。

なんか、ピサロが住んでいたこの町が実に美しいと改めて思った所が凄く不思議。じゃ、日本の風景は汚いのか？ そうではない。なんか、不思議な孤独と悲しい感じが込み上げて来た。これは郷愁とは違う。うーん、百年の孤独みたいな感じ。カミサンはいつもそうだけれど、床屋の親父の人生まで愛おしい感じがした。アルジェリアの移民系フランス人。たぶん、親父も時々、母国の幻影を見ているはずだと思う。

しかしっ！ 我々の演奏の凄いことっ！ 悲しくパワフル。

昨晚、布団の中でヘッドホンを付けて二十八日の自分たちの演奏を聴いた。ソロとトリオは当然にして違う。我々トリオも円熟の境地に達していることが実感された。体調が悪いオリビアの無心のベース。パリの売れっ子ドラマー、真師匠は流石だ。そして、自分のピアノ・・・。

流石に還暦も近くなると自分を過大評価したりはしないし、現在の私は比較的謙虚だし、比較的自分に厳しい。自作のピアノメソッドも三分の二までしか消化していない。残りの三分の一が中々頭に入らない。悪戦苦闘模索の日々でもある。本日から、また、新しいやり方、覚え方を探らないといけない。とは言え、明日からドライバーの繁忙期。

正直に書く。自分のピアノ。一つの完成形に到達していると思った。分からない、その個人的な各人の好みを度外視すると、もしかすると私は既に黒帯なのではないのかと思った。独学で良くここまでっ！ という気持ちと、完成形？ なんか先がないような寂しい気持ちが入り乱れる。完成しているのであれば、もう、ばんばんと人様にご披露しないといけない。これは本当にそうなのだろう。バンドマスターとして我々トリオの営業はいずれにしてもしないといけない。

でも、執念と言うのか「残りの三分の一」、まだ、私が身に付けていない音がある。なんとか這ってでも習得したい。人生の四分の一が残っている。二つを同時にやって行くしかないのだろうとも思った。それと、この三本の矢であるトリオと言う人間、ミュージシャンの形態。ソロではできない別の力がどこからか立ち上っている。ピアノ、ベース、ドラムス。これはジャズの中でも定型的な形態でもある。歴代の名トリオの数も半端ではない。そして、私たちのそれが名トリオと呼ばれても私は特に照れたりはしないだろう。そういう地点に来ていると思ったのだ。

ビデオにオリビアしか映っていない。わざとではないのだけれど、オジサン二人が画面から消えている。蒼白な女神のようなオリビアのオーラが凄い。

急にインテリしてしまうけれど、クロード・レヴィ＝ストロースの名著のタイトル「悲しき熱帯」。若い頃に読んだはずなのだけれど内容は脳内にないよおー。でも、「悲しい」と「熱帯」、この音のミスマッチがずーと、脳内に残っている。フランス語でもまったく同じ「Tristes tropiques」。不思議な音感だ。

しかし、うんざりするほど新しい和音が頭に入らない。「年は取りたくないネエー」と珍しく言いそうになる。カミサンに言うとゲラゲラ笑う。何度も書いているけれど、マスターした800の嘘八百みたいな数字からちっとも先に行かない。まあ、私の独学フランス語のレベルが10点満点で6ぐらいなのと似ている。独学の限界も感じる。しかし、今更、音大には行けない。

でも、考えてみれば800で十分とも言える。しかし、私が納得できない。でも、頭に入らない。と言うことは……。そうなのです。1日、1つを入れると考えれば残り400は400日で習得できるのだ。でも、入らない。考え直すと、私には必要がないという分析もできる。さっき書いたけれど、私のピアノのスタイルは完成形に近い。私が出したかった音が充満している。

うーん、難しいネエー、こういう分岐点。まあ、どこまで残りの400が私の人生の残り時間で入るのか？ まあ、入らなくてもいい感じはあるけれど、やるものがなくなってしまう。

ところで、蝶姉さんの記事を拝読。「嫌なパートナー」。もちろん、当然にして私への当て付けなんてことはないのだけれど、その外観に問題のない紳士って、なんか俺に似ていると思ったけれど……。でも、よく考えたら、俺はミュージシャンでバンドマスターだ。まったくもって「彼」とは違うし、世界観が広大な人間だからネエー。

ミュージシャンにも多い種類です、そう言う人。付き合わないのがベスト。今更、他人様と喧嘩なんかしないから、笑顔をハンカチで隠しながら、バイバァーイっ！ です。自信過剰の悲しき高年。ゴミと申し上げる。

今週のドライバーの勤務日。日 火 水 木 土 月 火 水 木。一日が長い。早朝から深夜。この記事は長くなりそうです。当分、更新はできない。ところで、ドライバーになる理由。会社勤めがダメ。会社を解雇。会社倒産。まあ、はっきり言ってろくな理由がないところがイカしている。うちの社長に言わせるといいドライバーは「会社勤めに自分で見切り」か「本業で食えない」。この二種類とのこと。まあ、いずれにしても憂愁が漂う孤独な仕事かしらね。

今日は月曜日。オフ。その前の晩、四時間ぐらいしか寝ていないから、九時間半寝た。八時半に起床。仕事のレポート、書類作成。風呂。牛丼を作る。ゆっくりとカミサンと昼食。ワイン一杯。それからカミサンにパソコン教習。うちのカミサン、数学はダメ。パソコンがテレビに見えると言う基本的な脳障害。私は好々爺先生だからイラ付いたりはしない。私だってできないことの方が多いのだ。アドリアン君の料理、無理だ。素材の知識がまずなさすぎ。でも、カミサン、プリンターのプログラムを三十分ぐらいで覚えた。なかなかである。スマホ使えないのだから優秀。

それから近所の小型スーパーに口の濯ぎ液を買いに行く。平和だねえー。帰宅し、有り余るりんご。近所に、葡萄と一緒に配り捲る。それでも食べきれない。生ジャムのようなものを作る。シャーベットにしてもいいのだ。問題は、近所に持って行くと帰りにトマトだのイチジクを貰って帰ると言うわけ。結局、高年夫婦二人では食べきれん。

「ビンセント・バン・ミラー」。以前にも何度か書いた。裕センセが二十年前に一つのコンセプト人間論芸術論ユートピア実践文学的行為・・・、なあーんて言う思惑で立ち上げた。リヨン、リアルバージョンが存在している。パリ版を十月末に復活させる。バン・ゴッホとヘンリ・ミラーを合体させた名前。

素人 なんでもいい ステージに立ちたい プロ セミプロ ジャンルは皆無 詩の朗読 ストリップ 料理 罵倒 プロレス ゴルフ 習得した楽器 していない楽器 歌 演歌 ラップ  
パソコン バンドマスターは裕センセだからすべての責任は取る ただし、法に抵触しない限りですよ

私は、あまり、人を上から目線では見ない方だと思っている。長所短所は表裏一体だから何がいいのか分からない。私はピアノ弾きだけれど、別にピアノが弾けなくたって何の問題もない。一つには、何か人より突出している部分が一つあればいいのだ。つまり、すべての人がそうなのだ。これこそ、超絶的上から目線的発想でもある。つまり、裕センセは悟りを開いていると言うことになる。知らぬ間にね。うちのカミサン=宇宙的。うちの息子=天性の詩人。娘=俺だ。そして、皆、優しい。金金、だれも言わない。これこそ、ブルジョワジーだろってっ！ しかも、ないのにだよ。

私はユートピストなのかも知れない。ユートピア、わっ、本当に悟りなんじゃないの？ 私、または、あなたの心の中にしかない。と、凄そうで当たり前の結論。でもね、お若いの、向こうからはこっちに来ない。こっちから行くしかないことは釘刺しね。

昨日、午前五時起床。帰宅が午前一時半。一日の勤務時間の最長不倒距離が出た。流石に痺れた。本日は、午後から仕事。

ご依頼頂いているお客様の会社のフランス人顧問弁護士の方。お客様をホテルに送り、弁護士の方をご自宅まで。柔和な紳士。お話し好き。

「僕、ジャズの大ファンでね」

「マイルスとかビル・エバンスとか聴かれるのですか？」

「うー——うっ、フリージャズが好きなんです」

「えっ？」

「え——と、あれ、ど忘れ。あの伝説のサックス……」

「コルトレーンですか？」

「いや、日本人」

「坂田明？」

「違う、なんか首相の名前……」

「まさか、阿部薫？」

「おっ、彼だっ！ 僕、アルバム、全部持ってるよ」

もう、話の流れで告白してしまった。会社を辞めてドライバーをしていることも……。そして、阿部薫と裕イサオは沖至に発掘されたミュージシャンであることも……。

「わっ、ジャジーだねえー。ニューヨークの運転手さんの半分はミュージシャンらしいよね」

なんか、深夜の路上で固い握手。二人ともスーツ姿。私のユーチューブを見捲るとおっしかった。

休みなくドライバー業をやっている。本来、本日はオフ。追加サービス。へろへろである。今日の私を簡単に活写する。

彼は、ポンピドゥーセンターの真後ろでコーンビーフ自家製弁当を食べた。食べ終わり、黒いベンツEの車外へ。煙草を吸いながらセンターを見上げる。俺は、ここで個展を開くつもりでいたはずだ。まあ、いいか、と自分に言い訳する。巨大な垂れ幕「マルセル・デュシャン賞受賞作家展」。その時、目が狼のように一瞬なった。永遠の前衛もこうして歴史と言うゴミ箱へ。俺は、いつまでアンダーグラウンドなんだと思う。なんか突然、阿部薫。同じ師匠を持つミュージシャンのことを考える。あいつはずっとアンダーグラウンドだった。フリージャズの歴史の中に彼のライブ演奏は燦然と輝いている。それでいいじゃん、と本気で思う。まあ、俺たちはマグマみたいなもんだよなとも思った。でも、阿部さんは二十九歳で事故死と言うのか分からない。睡眠薬を二十九錠飲んだのだ。俺は還暦が近い。アンダーグラウンド歴は俺の方が先輩になった。また、ちょっと、眉間に皺。センターを再度見上げる。俺にとっては大聖堂だったよなと思う。

突然、本当に突然、うな、コンサートやるか、ここで・・・。

本当にしみじみ。俺っていつまで夢みてんだ、ばあーかっと思ったけれど、不可能ではない立ち位置にいたことが、なんか、馬鹿なりに自分が愛おしくもなった。

禁則文字チェックなし

なんと、南東の方にみな実と東がいた。なんと、八日間の私の勤務日は七日。しかも、一日が長い長い。ご家老の過労状態で午前四時起床。こういう社員は希少価値。空港からの帰路。真正面に白い満月。バックミラーに薄い金色黄色の日の出。気が狂いそうになった、少し。地球の表面を走っているぞ感。午前九時に帰宅という変な社員。二度寝、風呂。それから諸々をする。カミサンと昼食。なんか久しぶりの感。息子が来る。今晚は、彼が料理。十九kの減量という恐ろしいことをやる。こいつは勉強は無理だよねえーと書いていたら大学教授へ邁進している。うるうるする。筋骨隆々、お笑い大好き、超インテリという滅茶滅茶頼もしい野郎になった。カフカをユーモア小説として読むという恐ろしい脳の持ち主。人生皆苦を私と家内でやっちゃったから、なるべく、苦は父親としては与えないという論理が成立する。俺が、苦の元凶なのだ。ごめんな。と謝っているのだ。

激務、つまり、ピアノを弾けない日々。これが本当に不思議なのだけれど、この抑圧が表目に出る。さっき弾いたら、結構脳に入っていて自分でびっくりする。ここからが、本題。三つのサブジェクト。「脳トレ」と「人生観」「社会」。

「脳トレ」

ドリフターズのコント。取っ手の付いた扉。押しても引いても開かない。引き戸だった。取っ手というオブセッション。もし、引き戸でもなかったら……。シャッターかも知れない。でも、取っ手の意味が分からないし巻き上げる時に邪魔。持ち上げるガレージのような戸も推定できる。最終的に扉の形をした壁とか扉かも知れない。と、脳はなるべく自由にした方が人生は楽しい。

「人生観」

若い頃、性欲が理知の前を100m 9.56ぐらいで走っていた。五十八の今、性欲はどっかに老眼鏡と一緒に忘れちゃったあーとローラの口調。これは実に鬱陶しい。下品ですいません。獲物、つまり、ナオン=女。取られた。殺意さえ沸いて来る。でも、一応、当ても人間ではあったから、嫉妬という自分の内部で消化する。しかし、余計に腹が立ってくる。戦争になる。馬鹿だ。こういうことを我々馬鹿男は延々とやって来て、延々とやっている。本当に雄は馬鹿。ヒト科の動物。でもね、私は今は「人間」。つまり、理知が先頭を切っている。

「社会」



金を得るには社会に同化、迎合しないとイケない。大量な人間集団の中で餌を得る、たぶん、唯一の手段なのだ。でも、俺たちは「それ」はしないという馬鹿集団も、当然にして現れる。私自身がそうなのだ。ジャズ、ロック、パンク、ラップ・・・、元々が「それ」から始まっている。「迎合しない」、これで売れてしまう。「迎合しないスタイル」という歪みが起きる。

社会は甘くない。我々は凡庸なものを求めている。この凡庸の洪水が、異端を飲み込む。売れっ子たちはこの波に飲まれる。

でも、金と体と心売るから「そう」なる。少なくとも、心売った時がおしまい。と、私はずう———と思う。

私は娼婦、娼夫を蔑視したりはしない。蔑称から始まったジャズメンにそんなことはできない。これを、まず、書いて置く。

パリのタクシーとリムジーンの戦争。タクシー、立ちん坊の娼婦、娼夫。リムジーン、コールガール、コールボーイ。後者の方が料金が圧倒的に高い。人類史と歩んできた体売る商売という最低人種にも格差がでる。さっきも書いた。体は売らないと金にはならない。セックスという意味ではない。心売るか、そこが問題になると思う。

高級という形容詞が付くリムジーンドライバー、および、最下層のジャズメンである二重苦の私に言わせれば、タクシーもリムジーンも「やっていることは同じ」なのだ。虚飾の世界にどれだけ入るか、それだけ。立ちん坊とコール、こんな戦争は、どちらも馬鹿。最低人種であることに、むしろ、清々とプライドを持つべきなんじゃないの。

それは、私もあなたも同じなのである。人生皆苦から我々が始まっているのであれば、上下はない。

と、決めてみたけれど、あはは、皆、死ぬから、そもそも上下なんてないよな。  
あっ、すいません、私、ひそひそ、ヒ素の飲み過ぎで不死になった。ごめん。ブログ書いて858年。

「ロコンブ刑事。昨年の今頃、カトリーヌ116歳が殺害されました。今もって犯人を特定できていません。プロ集団とのみ推定」

「うん、ワット君。その通り」

「刑事、またしても……。同名のカトリーヌ117歳が殺害。これは暗号なのでしょうか？ 同一犯？ 複数犯？ 謎だらけです」

「うん、ワット驚く為五郎」

「とはいえこの年代の女性はほとんどがカトリーヌ。偶然というのか必然というのか？」

「君の瞳は何ワット？」

「えっ、視力ですか？」

「ワット君。昨日、犯人は自主してきた。正確には今年の事件の」

「わっとっ！」

「悩み抜いたあげくの犯行だ。彼等の家の建設当時から同居してきた。しかし、二年前から大病を患った。年齢のせいもあるだろう。幼虫には要注意とだけいっておく。彼等は削除、薬と諸々の介護をしてきた。そして、力尽きた。妻の方が殺害を決意した。夫は優しい性根なのだろう、延々と躊躇していた。妻が夫の留守をいいことに少しずつ少しずつ殺害を決行し始めた」

「本当に多いですね、介護の果てにという犯罪」

「そう、超高齢化社会。介護する側がすでに高齢という生態系の歪みといういい方は酷かもしれないが……」

「悲しい事件？」

「そういう見方もできる。自主してきた夫婦は、特に夫は伏し目がちに泣いていた。殺害はなんとしても回避したかったのだろう。しかし、妻の意思に従った。彼の偉い所は、止めは自分がやった。妻ではない。犯人は私だといひ張る。息子も犯行当時に帰省していた。息子はまったく関与していない。犯人は私だと主張する。今時、こういう人間は珍しい。そして、昨年の事件の全貌も明らかになった。プロの庭師が多数いた。北フランス全土に広がった低木を食う幼虫の被害に合っていたカトリーヌ。伐採された。しかし、今回の事件はあらゆる蘇生を試みた末の犯罪である。我々、警視庁の判断で、この夫婦は検挙しないことになった。ワット君。一つ的美談だ」

その日、裕一茶夫と妻のトメはパリ警視庁を無罪釈放となった。

14日間に12日仕事。早朝深夜。痺れた。その割にブログは更新しているところが凄い。そこまでしてやるものなの？

いきなり、1週間休みというかサービスがなくなった。庭仕事をしないといけないから丁度いい。9時間寝ても眠い。ピアノを弾いたら入らない入らないといっていたコードが入っている。不思議だ。努力の賜物？ 今晚は家内と一緒に娘たちの子犬が来る。5日間お預かり。うどんと鶏の唐揚げをこれから作る。秋晴れ。優しい光。気持ちのいい疲れ。天下泰平じゃないけれど心が平和だ。

ピアニスト「イサオ」。これは私の小説「ポリゴーン」原稿用紙500枚の中に出て来る主人公。これに後に「裕」がついて芸名誕生。イサオは38歳だった。自分で書いた小説の主人公に自分でなるという倒錯人生をやっている。いつの間にかイサオは58になっているし、リムジンドライバーでもある。もう、ジャズそのものに人生がなったじゃん感が凄い。

つくづくつくつくぼーしである。

「ブログ」もちろん、このタイトルはThat's allのオジギャク。若人にはダッセーだろうけれど、オジさんにはいい感じ。ブログの総タイトルにしたいぐらいだ。

「秋晴れ」今日なんか二十度以上。テーシャツで歩ける。一日、庭仕事子犬の世話カミサンと久しぶりに買い物。平和だ。子犬とパンダがいる感じで素敵。バシッ！ これから冷凍なんだけれど海鮮シュウマイを綺麗に蒸して豆腐の味噌汁というジャポンナイト。平和だ。

「ピアノ」なんか結構残りの四百コードが頭に入り始めている。覚え方を変えたのだ。私は理科系論理脳だから「指さんたちに体育会系の練習を強いていた」と思い、論理的に音の分析をしながら鍵盤を押さえた。意外とすっきり脳に入る。不思議だ。頭でっかち系なのか？

「意外と知らないというのか無知に鞭打つ」鳥唐揚げ。毎々、小麦粉でやっていた。なんか外で食うのと違うなあって思っていた。メリケン粉？ トロミを付ける粉？ これでやったらパリパリサクサクで超美味かった。ショウガと醤油に二時間ぐらい浸けた。知らなかったのだ。インターネットで検索したのである。思い込みって、やっぱ、危険。でね、昨晚、疲れているから大好きなジェームズを見てぐっすりと思った。わっ、DVDが作動しない。私の初代一番安いパソコンでは簡単に見れたのに……。考えたら、動画もムービーメーカーで簡単に作れた。えっえっえっ、最新の高性能パソコンウィンドウズ10で再生できない？ うな、馬鹿な。一時間ぐらいパソコンと戦っている内に寝てしまった。今朝起きて調べた。はい、できないのだ。思い込みは危険だ。

と、平和な、心が平和な一日。

「片栗粉」昨晚、ジェームズ・ボンド「スペクター」をヘッドホン付けて布団の中で全編真剣に見た。その後、うとうとしていたら「あれっ、鶏の唐揚げの粉、日本語だと片栗粉だったよなあー」と眠る前に思った。翌朝、8000000のコメントを頂いた。ありがとうっ！ 香田久里子さん、肩凝夫さん、スカルノ夫人、「あぁーた、カタールのクリコでしょ」。

「ダニエル・クレグ」肉体美というのか存在美というのかいかした俳優さんだ。不敵な感じと無敵感とちょっとハニカんだ感じとか実にかかしている。全然ハンサムではないのだけれどなんかジェームズ・ボンドしている。はまり役なんだろう。金髪でそれほど背も高くない。世間の非難轟々の中でのスタートを彼は現実の社会で跳ね除けた。実社会でもジェームズしているところがかかしている。初演作「カジノロワイヤル」。いつもの小道具ゼロ。映画としての出来は素晴らしい。ところで、ボンドガール。意外とフランス人女優が多い。「スペクター」もそうだ。美人なのか今一つ分からない感じが逆に美しい。プラスチックではない女感がやはりフランス人女優のいいところでもある。

「庭の仕切り」今朝は延々とカミサンと二人で庭の仕切りの設置。117歳の低木。フランス語でブイーというのだけれど日本語名が分からない。カミサンと二人で暗殺してしまった。幼虫被害で復活は無理だった。私の家の建設と同時に植えられたはずだ。伐採は避けたかった。私はまったく物を溜めない人間だけれど物でさえ愛着が沸く。だから、逆に物を増やさないのだ、最初から。100円ライターを入れる銀色のケース。煙草の箱を入れる深緑色のケース。こういう本当にどうでもいいような安価なものを凄まじく愛してしまう。パソコンだって同じ。ピアノに至っては……。今のピアノはアコースティックも電子も2台目。車は3台目。なんとなく、スマホを2台目かなあーとも思い始めている。パソコン2台目だもんなあー。うん、カミサンだけ替えてないぞ。ジャズメン的には珍しいかも。

「ブログ」記事タイトルの「な」を「っ」に変えた。なんとなく「ピアノは私だ」の次期タイトル候補のような気がして来た。うーん、私はそれ程、雑な人間ではないどころか真逆。だからこそ、なんかいい感じ。それと、進る馬鹿脳を活写し易いというメリットもある。このタイトルだとなんでもありという感じ。

「イタリアングレートハウンド」というのだったはずだ。娘とアドリアン君のワンちゃん。Voyou=チンピラを五日間お預かり。その前に、なんと、本日の気温二十五度。人生の秋を迎えている高年夫婦の我々にも秋晴れというものがあつた。気温も天気も高年に丁度いいし実に気持ちがいい。十月半ば、なのに、泳いでいるのだっ！ ビキニ娘が。と、我々はワンちゃんと一緒に近所の広大な湖へ行った。水泳は因みに禁止ですよ。などど、ふん、俺がチビの頃、あっちこっちの沼、川だの遊泳禁止などという立て札はなかった。そして、何人か毎年溺死していた。動物の世界に近かった気がする。そして、もっと昔は深沢七郎の世界になる。危険は教えるものではなく、自分で察知できないという人間が増えた。これは、悪い意味での動物から人間への移行と申し上げる。理知を得るのは難しいぞっ、お若いのっ！

カミサンと湖の畔をVoyouを連れて散歩。犬を連れてると犬連れの人々がやたら目に入る。こんなに犬っていたのか？ 長男が生まれた頃に行ったパリのスクウェアに乳母車が沢山。これと、まったく同じ。目に入らないものって結構ある。たとえば、バスのおばさん。私は時々、数える。凄まじい数。ただし、私のいうバスというのは「顔がイライラ、不満だらけ・・・」だから美女も含まれる。優しい穏やかな顔をした人。我々ぐらいの年だったら「そうじゃないやつは」バス。還暦を迎える人間がイラついている。論外だし、生まれなおせばあーかっ、っても人生は一度だからバイバァーイ。

遠くの方から子犬が二匹。なんとなくうちの子に似ている。近付く。イタリアングレートハウンドのメス二匹。うちの子はもう興奮。二匹の飼い主、うちの息子と娘と同年ぐらいのカップル。

「あらあー、珍しい。オスね。格好いい」

それから湖の畔でワンちゃん談義。しまいには婚姻のお話まで出た。

うちの家内が「娘が散歩していたら、同じ種類の犬が二匹」「えっ、〇〇広場に僕のオフィス」「あら」「あれ、背の高い旦那さんと歩いていた・・・」「あら」「えっ、あの方のご両親？」「えっ、娘のね」「あらあー、奇遇ですねえー」

「ブログ」なんか、このタイトルに嵌っている。テーマがないから書き易い。即興ブログちゅう感じだから、私の得意分野。

「マイケル・ジャクソン」これもたまたまなただけれどピアノの練習をしていたら、いつの間にかブロックコードでマイケルの「ヒューマンネイチャー」という曲を弾いていた。この曲はマイルス・デイビスも演奏している。とても素敵なバラード。布団の中でユーチューブでマイケルのライブを見た。参った。神々しいのだ。もう、どこか別世界に彼は行ってしまった感が凄い。ポップな音楽も突き詰めていくと神々しい。あまりに凄いのでマイルスの演奏を見た。これもなんとも凄いけれど、でも、マイルスは現生にいる感がある。切れてはいない。やはり、ジャズメン。

「富岡多恵子」寝しなに富岡さんの現在を調べてみた。あまり出て来ない。うちのお袋と同じ年。富岡さんは複数回芥川賞候補になっていることは知っている。でも、受賞はしていない。インターネットで調べたら選者の寸評が出て来た。ファンとすると何様なのあんたというぐらいの感じ。もう一つ、完成に遠いとか、詩的な実験は分かるけど・・・とか、私にとっては日本文学の骨格を担ってきた才女。彼女の作品がこんな風に当時批評されていた。少しショック。そう考えると私の小説作品なんぞゴミ以下であるとなる。うーん、そうなのかも知れない。でも、箱庭みたいなものを小説と呼ぶこと自体がどうしても理解できない。言葉のカオスでいいと思う。

「オーネット・コールマン」なんか富岡さんのことを調べていたら少しイラついて、我らの御大オーネット・コールマンのビデオを見た。フリージャズの原型の一人。まあ、凄い。小説も音楽も型に嵌った箱庭ではないぞ感。もちろん、それでもいいのだ。三島由紀夫はベルサイユ宮殿の広大な庭。人工美を夢見て、実際に書いた。ダリも同じベクトル。ここまでやられるとフリー系はなんとも反論の仕様がな。

「秋」十四日間で十二日間ドライバー業。いきなり六日間オフ。しかも、フランス人がいうインディアンサマー。今日なんて二十六度。うーん、人生の秋の真っ只中の高年夫婦には実にいい感じだ。適度に暇だし、やること、やりたいことは山積しているし、息子と娘のお手伝いも山盛りだし、ワンちゃんの面倒、庭仕事・・・。快晴の秋空の下で高年夫婦はルンルンと人生を謳歌しておるのじゃ。いや、人生の秋だからこそ、その快晴感が途轍もなく愛おしいのだろう。若人には、この快感は無理だな。こちとら冬が待っとるのだ。なんか裕センセ、このまま行くと灼熱の冬なんちゅう晩年になる感じもちとある。傍迷惑だろなあー。ごめん。断捨離終わってるし、いつあの世でもいいしお墓の設計も終わっとる。許してっ！



「Vincent Van Miller 2=Lille Unit」復活の兆し。私の親友二人。詩人ジャン・リュック・ガルス。ギターその他、エリック・ミモザ。リール時代の私のパーマネントユニット。四十だったエリックが五十になっている。かめへん。おっさんなのにこうやって親友ができるところがミュージシャン冥利。友情以外なんの利害もないのだ我々には。

「イチローと中田英寿」明日から二日間ドライバーの半日仕事。なんか暇。娘たちのレストランの工事。自宅の庭の手入れとやることは沢山。それから、ピアノの難解コードがじわじわと体内に注入され始めている。覚え方を変えた。すでに目瞑って弾ける曲に三つぐらいできないコードワークを付け足す。これだけなんだけれど意外とするすると入る。まあ、素人ではないのだから当たり前といわれてしまえばそれまで。で、暇だからジェームズ・ボンド見てサマーズ見て、なんか勢い付いて野茂英雄の全盛時代の映像を見て、さらに勢い付いて中田英寿とイチローのそれを見て、なんか二人とも実にかかしているから彼らの現在とかインタビューを見た。

イチローと中田。いくつか共通点がある。そのジャンルの体格という意味では二人とも小柄。細い。しかし、鋼のような体をしている。ハンサムではないのだけれどいい男に見える。マスコミへのサービストークみたいなことをやらない。ちょっと生意気で取っ付き難いけれど圧倒的な実績のオーラ。マスコミも安易なことは書けない緊張感がある。海外、世界を相手に二人はやって来た。考えてみたらパリの裕センセもジャズメン的には小柄かも知れない。体脂肪率が超絶少ない。海外、世界を相手にやって来た。少しは共通項があるけれど、鋼の体というより洗濯板だし圧倒的な実績のオーラもない。マスコミ受けトークはしないところは似ているというより取材自体がねえーだろってのっ！ まあ、歴史に名を残す連中のオーラは半端ではない。凄い野郎たちだ。

イチローの大リーグ3000本安打のインタビューなんか、もう、庶民感覚では神々しい。「そんなに大したことをしたという感じはない。でも、ファンの、チームメートの熱狂を見て、僕がやるのが他の方々の楽しみ熱狂になる。素晴らしいと思った。自分のためにという感じが段々なくなっている」。こんなことは簡単にはいえない。「達成した後には先がない？ その質問自体疑問ですね。僕は満足しなにかを達成する。小さなことでもいいのです。満足する、達成する。むしろ、次の目標への活力になる。先がないなんてことはまったくありません」。まあ、前人未到のプレイヤーがいうから頷くしかない。でも、ちょっと皮肉がでる。「走る、投げる、打つ。大したことはないですけど、ただ、走る打つ投げる。記録は無理です。頭を使わないと。でも、なにも考えてないやつに負けることもしばしばある。考え過ぎも決していいとはいえない」。

まあ、本当に凄い人たちである。

「裕センセ。無観客記録を更新しましたね。おめでとうございます」

「うん、ありがと」

「800コードへの到達感は」

「ちみ、まだ、400残っちよる」

「そろそろ現役引退の噂が・・・」

「まあ、頭はよれよれ、肩ぼろぼろ、腰痛の慢性化、うん、根拠はあるっても、やることなくなっちゃうだろってのっ！」

「ボログがあるじゃないですか？」

「今、ブがボって聞こえたけど？」

「あはあはあは、悪い冗談を・・・」

「一日中、ブログ書けるかってのっ！ 働きもんだからいつも動いていないとすぐに暇になっちゃうわけ」

「その洗濯板のような体形維持法を最後にお一つ」

「まあ、ちみ、イチロー君、中田君と一緒に。弛まぬ努力。私は一日たりとも酒煙草は切らさないし小食だ。ピアノで全身筋トレ。着痩せするセクシーボディー。まあ、鋼みたいねえーってよくいわれるよ。わっははははあー」

「えっ、歯がねえー？」

「鋼の体でソークレバーってね」

「歯がねえー、総入れ歯あー？」

オヤジは暇なのになぜか疲れていたのだろう。午前九時に廊下の目覚まし鳴るまで熟睡していた。前夜に布団の中でプロ野球番組を見過ぎたせいかもしれない。起きた後は素早い。リムジーンドライバーだからである。コーヒー、煙草、洗顔しスーツに着替える。早めに家で昼食を取ってから仕事という選択肢もある。でも、腹が減っていない。早めに行ってどこかで食べよう。

秋晴れ、二十度近い。市民公園をとぼとぼと歩く。黒い革靴の先が白くなる。そのとぼとぼ歩く自分の後ろ姿を脳内で鳥瞰する。少し悲しくなる。高年の背中少し悲しい。と、自分で思う。息子は順調。娘たちのレストランの皿洗いが行方不明。連絡が取れないらしい。無断欠勤なのだ。眉間に皺。オヤジがこういう時に手伝わんと、と、とぼとぼ歩きながら思う。明後日から暇になる。なんとかしよう。

洗濯板のような痩せこけた自分の体が少し嫌になる。性欲、権力欲、食欲・・・、同年代でもぎらついているオヤジどものことを考える。オヤジの本業はジャズのピアノ弾き。なのに、この不思議な清々とした無欲感は何なのだと思う。この不思議な孤独感は十二歳の頃からなのだ。よくもまあ、還暦近くまで生き延びたとしみじみと思う。

ガレージに着く。ゆっくりと昼食を取る時間はある。ケバブ屋に行こうか中華屋に行こうか考える。いずれも面倒になる。スーパーでサンドイッチを買い、車の中で食べる。食欲まで萎み始めているのか？ ちょっと、怖い。ロールスロイス、フェラーリが並ぶ人気のないガレージ。権力金力の果てに手に入れたであろう高級車を見ながら車中でサンドイッチを食べる自分の姿をまた脳内で鳥瞰する。スーツにサングラス、ベンツの中にいる。見ようによっては孤独な一匹狼とかハイエナみたいにも見える。

自分の姿を鳥瞰してみると悲しいような、まあ、幸せな人だよな、とも見える。たぶん、ピアノという物体が彼を世界と繋げているのだ。蓋の閉まったままのそれは、本当に棺桶に似ているし、弾いている自分の姿が黒い鏡面に反射する。オヤジにとって一番怖い鳥瞰的イメージ。弾き手のいないピアノ。

昨夜は、四時間半しか寝ていない。眠い。でも、お昼に帰宅して昼食。一時間半爆睡。これで楽および暇になった。次回のコンサートは十日後。あんまりめっちゃくちゃコンサートはやりたくなくなって来ている。年だ。それと、盛り上がらない=お客さんが一桁という感じにちと疲れた。フリージャズメンがそんなこといった日にゃーっつと叱られる。でも、年だ。こっちも疲れる。

と、うだうだしていてもなにも始まらないから、コンセプトがはっきりしたコンサートしかやらないことにしたのだ。とはいえ、若い連中は人前で弾く機会さえないという状況。少しは私が役に立たないといけない。高年の役割だ。自分なんぞいいのだ。

フリーユニット、Vincent Van Miller 3 Parisを始動させる。おまけに、VVM2 Lille、こちらも復活させる。こっちはメンバーは固定されているから、まあ、飛び入りは全然構わないけれど、トリオ。ジャン・リュック 詩。ミモザ ギター、サクソ、ハーモニカ、スケートボード、講義。私はしんどいからピアノのみ。たまにド下手歌。ピアノの技術向上の賜物で、ピアノ以外には必要がなくなったのである。でも、ジャッキー・

チェンの物真似とかはステージでやってしまう。馬鹿だ。高校の地理の先生であり、作家詩人のジャン・リュック。声が実にいい。そして、私より相当酷い慢性鬱。ミモザ、リール大学エレクトロニクス研究所の所長。一番相対的に若い。バイエルの基礎ゼロなのになんの楽器も実に上手い。天才系だ。ミモザが鬱というのは聞いたことがない。いい旦那パパ。スーパーマン系。俺？ ヨレヨレさん。ということはですね、コンセプト、そう、企画プロモートという高年らしい道があるのだ。これを還暦前に始めることにした。

VVM2 リール 復活コンサート パリで3 始動 私のトリオでベルリン うーっん、お金があれば日本ミニツアーやんだけどなあー

と、自分で盛り上げる。あーっつ、しんどっ！

29 Oct 2017 Flyer Mini

おっ、この写真って俺の展望台サロンなのだ。なんか、インテリジェンスサロン  
つ——感じでしょ？ そう、俺はインテリです。そして、静謐な思想が充満してい  
るっ！ キャっ！

「バタバタ」娘たちのレストランの皿洗いが行方不明というか無断欠勤。立ち上げの頃四人。今は予約さえ簡単に取りれないという状態で二人。つまり、娘とアドリアン。もう、暇な高年両親がなんとかするしかないから、アドミ関係の書類作りで一日バタバタ。パパ、フランス語が書けない。ママ、書けるけれどパソコンダメ人間。パパママ二人でやらんと手紙一枚書けないのだ。ってもオフィシャルな手紙です。まあ、うちのカミサンのパソコン音痴は音痴を通り越している。論理的に脳が機能しない。だからよおー、芸術家は嫌いっ！ とはいえ、我々は超仲良しである。役割分担が実に分かり易いからなんだと思う。子供たちがチビの頃。私は宿題を見れない。フランス語では無理なのだ。と、当然、料理担当。カミサンは直進ドライバー。小技は私となる。カミサン、手荒れが酷い。私、風呂、トイレ、台所掃除と水回り担当。カミサン、洗濯、アイロン、掃除機。まあ、そういうこと。カミサン、サラリー(ウー)マンは無理だ。芸術家にはでけん。私はなぜかできた。

「くりいーむしちゅうー」上田さんと有田さん。私をご存知の通りサマーズの大ファン。考えたら、この二組。内村さんに改名させられたのだ。その後、ブレイク。内村さんは改名指南プロなのでは？ まあ、上田さんと有田さんの掛け合いはフリージャズと申し上げる。リズム感と突っ込みの迫力とボケの本当にボケなの感が素晴らしい。上田さんの野球番組の司会。超ド級プロだ。

「うしっしいー」残り四百コード。ちょっと専門的になるけれど・・・。Dim m-5M7。結局、この二つが入らんだ。入らんだ。これには原因がある。私はジャズメンなのに不協和音があまり好きではないらしい。あれ？ 分かり易い協和音で皆で盛り上がりたいという、つまり、ポップス系？ 年と共に「その傾向が」酷くなっているみたい。そう、挑発力がなくなっている。ジャズメン的には致命的かも知れないけれど。かめへん。シンプルな和音の繰り返しで歌いたい。あのねえー、裕センセっ！ 音楽ジャンル確実に間違ってますけど・・・。るっせえーっ！ というのは半分嘘で、これが入り始めて=少しずつ血肉化し始めていることを今日、初めて実感した。そう、初めてなのだ。できないことの未知って、こうして少しずつ押し広げて行く。人生そのものをピアノでやっている。ということになるし、指先刺激の究極トレーニングマシンでもあるから、ある通は今には絶対にならない。というより、血統上、一人もいない。そして、オジサン大好きギャグ。アル中は今？ これはなるかも知れない。

正確には、ネタとかコントは曲。事前の打ち合わせがある。フリースタイルは即興。そういう意味でお笑いとフリースタイルはそっくりである。「さまぁーずxさまぁーず」はもちろん大好き。

「しゃべくり007」、お笑い芸人七人のミニオーケストラ。同世代ということもあるのだろうけれど、お笑い芸人七人がこれだけ即興でまとまっているのは凄い。バンドにそっくりで、バンマス上田さん。ソリスト有田さん、徳井さん。変なソリストホリケンさん。ここにベースの原田さん。そして名倉さんが地味に締める。そして、なんともいえないのが福田さんの存在。空気がいい感じになる人。目立たないからこそその存在が凄い。本当に、バンドそっくり。ホリケンさんのまったく調性の違うギャグ。凄い人だ。一番、フリーであんまり考えていない。ノリのいい人。こういう奴、バンドにいるのだ。なんか下手だけど憎めない系。

沖師匠 上田さんといいたいけれど、すべての複合体

真師匠 原田さんと福田さん系

オリビア 原田さん

モーガン 徳井さん

ケイ ちょっとホリケンさん

俺 上田さんと有田さんの合体系 上田さんしばしば時流について行っていない感じの発言  
真面目人間 譜面から外れると有田さんのパワーが凄い 上田さん ちと、頭でっかち ホリケンさんの馬鹿丸出しでたぶん本当に馬鹿なのだろうと思わせるといふより、本当にそうなんだろうけれど臆せずにやる これが凄い

七人のバランスお笑い芸人という個人的集団アクの強い人種がこういうバランスこれは本当にフリースタイルに似ているから一般人もマネした方がいいはず ちょっと、上から苦言だけれど、馬鹿集団ができるんだから一般人ができない？ そっちの方が変。

趣味は？ と問われると、パッと頭に浮かぶもの。料理、庭弄り、お笑い観賞。絵を描くとか小説を書くピアノとはならない。絵とか小説の話をすると長くなるからピアノに限定すると、「趣味ではない」というかなくなった。気分転換のつもりだったのだそもそもは。あっ、趣味、はい、ブログ。

趣味は楽しい。無心の境地が楽しい。難しいことは考えないし、なんの社会的な責任もない。だから趣味なんだろう。ピアノ？ 弾いてて楽しいのか？ うー——ん、ちょっと違う。苦しいところもある。

ところで、以前にも書いた。プロと素人。社会的な目線では「金が絡むかどうか」となる。芸術という訳の分からないから崇高なようで禁治産者的世界では、そもそも「金」という社会通貨が存在していない。プロと素人の境目は「金という定規の外」となる。バン・ゴッホの絵は趣味では無理だ。

どこが違うのか？ これは私にも分からない。

たとえば、私の父、「ノーコメント」。母、「あんたはいい趣味持って幸せだね」。妹、ピアノの先生だ。「お兄ちゃん、好きこそもののなんとかそのもの」。弟、ジャズ狂だからむしろノーコメントが正解なのだ。

趣味はピアノです。って言いたいんだけど・・・、これは共演している人たちとそのレベルを考えると、逆僭越になるから、やはり、私はプロなのだ。定収入でも。という感じになる。



- 1 「認知症」と「アルツハイマー」の違い
- 2 「認知症」は後天的なのか？
- 3 「認知症の予防」はあるのか？

今朝起きて、諸々のことを考えた。

1、私の貧弱な知識の中で、「認知症」は脳機能の低下という意味で、アルツハイマーは脳の萎縮による脳機能の低下。つまり、アルツハイマーは認知症の一つの要因ということになる。当然にして、症状は似ているというよりアルツハイマーによる認知症という症例となる。認知症の六割がほぼこの症状と言われている。

2、「認知症の定義」自体の中に「後天的脳機能の低下」と書かれている。

3、これは良く言われる。指先の刺激。正確には指先の刺激による脳機能の活性化と言う意味と私は解釈している。私の周りはミュージシャンと美術家が多い。考えてみたら認知症に罹った話は皆無なのだ。これはなんらかの医学的な要因があると思われる。「認知症予防」の一部に指先の刺激、人と合う、新しいことを覚える、日記を付ける、赤ワインが有効・・・、結局は脳機能を活性化しろと言うことに要約される。本当にびっくりするのだけれど、ブログを書くジャズピアニストの日常はもしかすると究極の認知症予防の一つとも見える。

もう一つ、素朴な疑問が沸いた。「認知症のミュージシャンは演奏できるのか？」。九十五歳のイギリス人元ジャズピアニスト。認知症で施設に入っている。施設が共演者を公募した。八十名が名乗りを上げた。元ピアニスト、ピアノの前に座る。鍵盤を確認するように弾き始めた。脳が？ 指が？ かつて弾いた曲を記憶していた。仮に私が認知症を患ったとしても演奏は可能らしい。

今朝、「認知症」と言う記事を書いた。正直、「後天的なもの」であると言う定義は知らなかった。かなり、ぞっとした。そうすると「言い訳」が成り立たなくなる。「あなたは脳機能の刺激を怠ったためにそうなったのです」と医者と言われる。診断される。人生をぼーーーーっとやってきたんでしょ！ 医者＝他人にそんなことを言われる筋合いはないのだ。ぼーーーーっと生きててなにが悪いっ！ となる。

そうすると「認知症に罹ると言うこと自体が人間としての怠慢」。こう言う論理ができてしまう。これは酷過ぎる。そんなに脳を刺激してどうすんだよっ！ と三村さんの口調になる。穏やかに生きて、仮に医学的に認知症を患う。なんの問題もない。家族の負担。これは別の問題。低下するもの、萎縮するものは元には戻らない。では、予防できただろうっ！ って？ なんかを予防するために我々は生きてはいないと申し上げる。

私がアル中かニコチン中毒でオサラバする。いいのだ、それで。だってね、アルコールと煙草、そして、カミサンがいなかったら私はとっくに土の中にいる。そういうことでもある。もう十分に長生きしているのだ。

おっ、日曜日。沖組とパリ芸大組が激突する。沖師匠、大学の建築科。真師匠、仏文と法学部。私は美術学校。芸大出身ではない。オリビアとモーガン。女子。学歴も男女も年齢も超越しているユニット。まあ、どう考えても、我々が認知症になることは絶対はない。まあ、たまたまね。

実に素朴な疑問が沸いて来た。認知症と自然の老化の違い。それと、認知症という病気の初期症状はなに。インターネットで調べてみたら・・・。

同じことを何度も言う

忘れ物や探し物が多くなる

約束の日時や場所を間違える

落ち着きがなくなり、怒りっぽく、頑固になる

単純な仕事や計算に時間がかかる

料理を焦がすなど失敗することが増える

洋服に気を遣わず、同じ服ばかり着たり、だらしのない恰好や季節外れの格好が増える

「アットホーム介護」 「認知症の初期症状「7つのサイン」を見抜き早期発見」より。

「同じことを何度も言う」

これは、私もしばしばではないけれどある。カミサンと娘に「その話、昨晚聞いた」。息子はたぶん気を使っているのかいわない。分析してみると、明らかにアル中ハイマーなのだと思う。酔っぱらって話して、翌日、同じ話。これは老化でも認知症でもなく、単なる飲み過ぎ

「忘れ物・・・」

これはほぼない。100円ライターさえ忘れたことがないぐらい。嫌な奴かも知れない

「約束・・・」

100%ない

「落ち着きがなくなり・・・」

これも100%ないけれど、コンサートの後、美女がいると落ち着きがなくなるというより飛び跳ねる

「単純な仕事・・・」

これも100%ない。当然だ。ジャズピアノの演奏は数学的に単純ではない

「料理を焦がす・・・」

これも99%ない。ピアノの練習に夢中になり、茹で過ぎはある

「洋服・・・」

洋服に気を遣わないように気を遣っているから、同じ服ばかり着る。だらしなくはないけれど

認知症と自然の老いの違いは、お昼に何を食べたか一瞬思い出せないのと、食べたことさえ記憶にないこと。当然、後者が認知症と呼ばれるものの初期症状。

でも、最後に繰り返したい。とにかく健康オタクは私は大嫌い。「認知症が脳への刺激を十分

に行わなかった怠慢」とかの論理は私は大嫌いである。しかも、医者どもは認知症になり難いというデータまであるから、るっせえ——っ！ となる。どっちにしたって皆、あの世に行くから、生き方は行き方はそれぞれのスタイルでいいと思う。

「裕センセ」

「はい、僕はね、認知症にならないように日々努力」

「でも、肝臓と肺は？」

「しくしくしく。胃肝臓のハイです。ボロは着ててもお——、心も錦い——だけれどお——っ、頭もね。でも、体はボロ」

「裕センセ、自家用車は？」

「フォルクスワーゲンのボロ。あはあはあは。嘘。スズキ、スイングっ！」

## 2017.10.27 Fri 271017 DETOUR MENU

---

本日は、家内とレストランDETOURにご招待。ワンちゃんの面倒、アパートの掃除、レストランの掃除・・・、こういうことをばしばしとやっていることへの御礼なのだ。家内と私は当然えーーーーん。以上なのだ。暇忙しという感じ。以下、私たちが本日、食したもの。素材は少し私の独断。娘もお客様の対応に忙しいから詳しくは聞けないのです。

ラングドック地方の赤ワインをグラス二杯飲みながら・・・

「生イカげその切り身入りブイヤベース」わっ、酷い翻訳  
ブイヤベースの中にこりこりしたイカ この温かい感と冷たいこりこり感が素晴らしい  
そして、微妙にナッツが入っていたと思う ブイヤベース=魚のスープ 物凄く仕込みに時間が掛かる

「牛肉のカルパッチョ、赤蕪、バニラマスタードアイス添え」わっ、酷い翻訳  
イチゴの乗ったデザートに見えた 娘に冗談で、あっ、もう、デザートなのね、ご馳走様あーーーーっ！ ちょりちょりこりこりバニラマスタード温か冷たい まいううーーーーっ！  
バニラマスタードの下に粉末胡麻ときたっ！

「焼きイカ イカ墨ソース」  
和食器に黒いソース 焼きイカの切り身が乗っている なんか分からないパセリみたいのもの  
なんか分からないものの渋みとイカ墨ソース イカの美味しいことっ！ イカ同文 どこかに柚子の風味 柚子をアドリアン君は午前中じっと二分ぐらい見ていたから間違いない

「白身魚 ココナッツソース添え」  
白身魚の切り身 皮だけパリパリ 白身はミディアム ココナッツソースの真ん中に横たわっている 私はフランス料理の魚はあまり好きではないのに完食ペロリ 美味しかったあ！

お腹パンパン。

家内「羊肉」私「牛タン」「の薄切り大根が乗ったステーキ ジャガイモのピューレ 焼きサツマイモ 赤ワインソース」シェフのお任せだからアドリアン君の采配 気が狂いそうに美味かった

お腹パンパカパン。

「自家製ビスケット レモンシャーベット ヨーグルト マンゴの切り身」  
ぼんっとビスケット えっ、ぱりぱり割る 下にヨーグルトとシャーベット マンゴの細かい切

り身

まあ——、凄っ！ アドリアン君の腕は。義理親馬鹿？ いやいや、そうではない。舌は正直で舌。娘のシャイな給し振りがデザートみたいだった。

二週間前ぐらいに銀行関係の偉いさんの運転手をした。後席で「僕、サンドウィッチマンの大ファン」とおっしゃった。つい、口を挟んだ。「とってもいいですよなー」「えっ、運転手さん、四十年ぐらい日本離れているのに知ってるの?」「はい、私はお笑い大好きです」「えっ、とくには?」「さまぁーず」「よく知ってますなー」という会話があった。

明日はコンサート。いつもの場所だけどコンセプトが明確。要は惰性でやってまぁーず感ゼロ。息子、娘、アドリアン、それから息子の呑み助軍団が来る。

昨夜、ユーチューブでサンドウィッチマンのコント、漫才、インタビューを三時間ぐらい見た。笑いに笑った。彼らは仙台。私も幼少期仙台。東北出身のお笑い芸人はパリ在住日本人東北出身と同じで凄く少ない。東北人は無口で真面目。お笑いとかおパリに向いていない。東北弁の発音がフランス語に似ているのを除けば。

彼らは十年間下積み。面白いのはライブで凄く受けていた。でも、アンダーグラウンドのまま。これってフリージャズとそっくりのようでまったく違う。つまり、テレビのプロデューサーが目を付け一躍……。こういうことは我々には絶対にならない。やはり、芸能ではないんだよねえー。残念です。私は。やはり、難し過ぎなんだろう。という世間目線があるんだろう。スポーツ観戦としてコンサートにいらして頂けると嵌ると思うのですけれど。

日本人的思考の一つに「基礎からやらないといけない」というやつが、たぶん、ある。ピアノに頭突きしたりしてはいけないと教わる。えっ、教わらない? じゃ、やれよ。ちゃんと基礎をやらないと楽器は弾けない。エリック・ミモザに弟子入りして。と、そういう教育のベクトル。天才は出難い。

またまた私事。私の場合は基礎が後ろから来た。長く続けるにはやはりあった方がいいという結論が後から来たからやった。フランス語は女子を口説くためということで始めてはいなかった。けれど、フランス人のカミサンと一緒にってから覚えた。倒錯していると思う。どうやってカミサンを口説いたのか? へへへ、私は当時美術家だったのだよ。作品で口説いた。以上。ラジャー?

久しぶりに古いパソコン。新しいパソコンWindows10にMovie Makerが入っていないのだ。Video Pad無料版で動画を作っていた。お試し期間期限切れ。削除して再インストールというのもめどう。結局、古いパソコンで作ることにした。超絶的に遅い。半日掛かった。

昨夜はコンサート。午後六時二十分から始めたから、打ち上げの方が長くなった。ケイはコンサート後にあれれといいながら来た。時間を間違えているのだ。サマータイムが終わっている。サクスのフランソワは皆帰った後に来たらしい。ミュージシャンちゅうのはなんなのだ？

コンサートの出来は手前味噌も含めて完璧。沖師匠、真師匠にも褒められた。沖師匠に一つだけ・・・。「イサオ、最後のピアノソロ、かごめかごめ、なんで最後までやんなかった？」「長過ぎるんじゃないかと思って」「いい曲だよなあー、遠慮するな。最後まで弾け」。

打ち上げ。「沖師匠、なんか俺、ちまちまコンサート疲れて来ちゃいました」「うーん、まあな。大きいゴトシ(仕事)なんて二年にいっぺんぐらいだもんな。まったく金が動かないよな。どうせないんだから楽しくやろうよ。でもな、こうやって続けてないと大きいゴトシの話も来なくなる。蠢いているしかないよな」。

打ち上げの後、息子、娘、アドリアンと中華料理。水入らずで美味しかった。帰宅する。なんか実に充実していて楽しかったのに、変な風に私は不機嫌だった。今、昨夜の演奏を聴いている。正直、モントルージャズフェスティバルに我々が出演していてまったくもっておかしくない演奏。

フリージャズは終焉したのか？ そんなことは絶対ないと確信している。難しい？ 固定観念を取り払って動物のような感じというか我々も動物。原初的感覺に戻って聴くと、まったくまったく難しい音楽ではないはずだ。エモーションのうねり。それだけなんだけれどなあー。生きている実感、そんな感じ。



コンサートの打ち上げの後、沖師匠と歓談。

「イサオは真面目。仕事できるしな」社会的な仕事、つまり、マンサラ(サラリーマン)もできるという意味。

「俺なんて、女と7年でダメになるもんな。お前は真面目だよな」

「師匠、俺、カミサンと一緒に34年」

「そこまで行くとな。別レベルだよな。でも、お前は本当に真面目」

ここ3年ぐらいで、刑事コロンボのような帰り際ワンポイント説教アドバイスがなくなった。そう、何度も何度も私は抵抗した。俺のスタイルは崩したくないって。師匠も折れない。「お前、ブロックコード覚えろ。それだけで食って行ける」「ちゃら弾きが俺の持ち味」「だからこそ、覚えろ」。結局、私は会社まで辞めた。ブロックコードの習得のためといっても過言ではない。「あはは、俺がイサオを悪の道に引き摺り込んだ。あははあー」と沖師匠は毎々楽しそうなのだ。

と、私は頑張り屋、挑戦全身前身あるのみ系なの？と思われがちなんだけれど……。まあ、「そう」なんだろう。

でも、何度か書いた。私は几帳面。でも、他人のずぼらはまったくもって気にならない。むしろ、そうじゃないと私の存在意義がなくなる。まったく同じで世界中の人々が頑張り屋さんでは、私が困る。頑張らない人、まったくもって気にならない。むしろ、うらやましいし俺もそうなりてえーと本気で思うけれど無理だ。せかせか動いていないとダメなのだ。料理の煮込みをしながらブログ書いてピアノ弾いて明日の準備なんか同時にやっていないと気が済まないのだ。でも、カミサンが私と同じことをする？息苦しい。一緒にはいられんっ！私は私と絶対に結婚しないっ！

まったく訳の分からないタイトル。今、CM(ハ長調)のコード表を見ながら練習を終えたところ。あら不思議。50のコードの30しかできなかったのに全部弾いた。かなりスムーズに。当然にして音宇宙が広がる。三か月ぐらい入らない入らないと嘆いていた。俺、やっば年？とも本気で思った。でも、なぜか入った。ってもコード表を見ながら……。しかも、音階は二十四あるからまだまだ先が長い。とはいえ見ながらでもできなかったのだ。それができている。これを努力というのかよく分からない。無料ではピアノを弾かない人間なんだから当然と思う。マンネリも絶対にフリージャズの世界では芋になる。ならば未知のことを習得するしかなくなる。わっ、コード表持って行きたいっ！でも、本番でそれをやると仲間たちから串刺し。沖師匠には叱られるだろう。「お前、暗譜してこい」。真師匠、「伊沙子ちゃん、気でもちがったのそんな紙見てジャズするつもりい——っ！」。厳しいのだプロの世界は。

先々日のコンサート前。アマチュアバンドが練習していた。私は練習の件は聞いていない。ドラムのセッティングとか時間が掛かる。バーのお姉ちゃんに「何時まで練習？」「午後五時」「あっそ、なら大丈夫」。真師匠、二分ぐらい後に沖師匠。16h50ぐらい。17h20。まだ練習している。真師匠が少しイラつき始めた。「イサオ君っ、俺、ドラムセットしないとゆっくり飲めんっ！」「すっ、すいません。僕が交渉して来ますっ！」。地下に降りる。片付け始めていたから私はギャーギャー言わなかった。沖師匠も眉間に皺。「生意気だなあいつら」。上から目線？当然なのだ。超プロからすれば仁義を守れとなる。まあ、私には「超」は付かないから、まあまあまあ。お笑い芸人の世界と同じなのだ。

私は午後四時に行った。両師匠より後には行けない。ビールを持って地下に降りた。あれっ、練習？ちと、拙いなあー。二分ぐらい聴いた。やり手も聴き手も友達。皆、楽しそう。水を差したくない。演奏？うん、芋だ。プロがなんなのか二秒で悟った。人生自体の音楽へのスタンスが違う。もちろん、それで、違っていいのだ。

もちろん、音楽は楽しいに越したことはない。けれど、楽しみだけではお金は当然にして頂けない。

地下で皆でワイワイ楽しく練習している。階上のバーでイラつくプロ集団。私はバンドマスターだからイラつくというより、調整しないと、となる。「次のバンドのセッティングがあることを認識していない」。だからアマチュアなのだ。そして、それを理解せず時間超過。両師匠の目が珍しく吊り上がる。そういうこと。会社でもテレビでも、たぶん、ブログでも他者とのコンタクトは社会。礼儀を弁えないと当然にしていけない。我々、フリージャズ屋という究極的に自由人系の世界にも「それ」はある。

## フリージャズの掟

遠慮しない各自好きにやる楽譜持ち込みダメ

バンドマスターが長　マスターのコンセプトから逸脱しないといいつつ「フリーで」以上だから逸脱もへちまもない

各自の色気を出してもいいけれど相手の色気を潰すような無神経はダメ　キャバレーの掟と同じだ

皆でやっている　でも、絶対に合わせない　でも、ちゃんと、聴く　でも、合わせない  
嫌な野郎とは共演しない

なんか、東北の寒村の食料を皆で分け合う家族のイメージが脳内に広がった。もつろん、さべつ用語ではねえーべえー、俺づすんがとおーほぐ。です。

もちろん、人それぞれの嗜好もあるし時代の流れもある。「フリージャズは死んだのか？」という論争が現代詩手帳とかユリイカの誌上にもあった時代がある。今は「それ」さえないということは、本当に終焉を迎えたのかも知れない。学生運動とフリージャズに熱狂していた当時の若者たち。皆、なんらかの理由でフリージャズを聴かなくなった。就職し結婚し子供が生まれ住宅ローン……。じゃ、なんで石を投げたのだ？ 権力とかそういうものに刃向かうためだったはずだ。結局、石の代わりに意志を投げたということになる。

私はその世代ではない。でも、先輩たちの姿は見ていた。俺も続くぜと思っていた。でも、人に石を投げたりは絶対に俺はしない。石を投げる、権力へ向かって、自由を模索する、そういう意味では心の中で石は投げた。

と、当時の若者たちは今どうなっている？ 会社の社長、部長、カミサンと定年離婚？ 俺はこういう奴が本当に嫌い。沖至も佐藤真もまったく折れない。当時のままだ。俺たちに日和見はない。年なんて関係ない。心が折れない限り当時のままなのだ。

と、もちろん、こうあるべきといっているのではなくて、フリージャズ、もう一度、聴いて欲しいとやっている側は切に思う。我々は馬鹿だ。それでいい。でも、折れずにパリというジャングルで生きて来た。忘れていたのなら聴いて欲しい。

フリージャズにもっとも近似している画家。バン・ゴッホ。

私見ではエモーションのうねり、怒りでもいいし悲しみでもいい。人生皆苦でもいい。生きている、苦しい、だから、叫ぶ喚く。これを美術史の世界で初めて解放した人だ。色がおかしい、構図がおかしい……。そんなものは些末なことにはかならない。

時代というルール。作法。常識。そういうものに脳が侵されていると分かれようとしても分からないのではなく「感じない」のだ。

もし、昔、学生運動で、石を投げていた親父が社長面でオルセー美術館。副社長と専務引き連れて。「バン・ゴッホは流石だねえー」などとほざいているのなら、もう一度、フリージャズを聴いて欲しい。

フリージャズを視覚化するとどうなるのか？ すばり、近似値ではなく、そのものずばりの絵画がある。ジャクソン・ポロック。日本での知名度がどの程度なのか私にはよく分からない。五十年代。美術の中心はパリからニューヨークへとよくいわれる。その発端になった。バン・ゴッホ。まだ、額縁と遠近法の概念が残っている。ゴッホは色と構図の固定概念を破壊した。それから長い時間が経った。ポロックはついに額縁も遠近法も破壊してしまった。もちろん、そこに辿り着くまでの美術の歴史、つまり、前衛の堆積の上に到達した。絵画史上の革新性は「オールオーバー」。少し分かり難いので説明すると、無限に広がる平面世界を任意に切り取った状態。つまり、額縁という縁がない絵画となる。この発想は彼以前にはなかったのだ。しかし、マルセル・デュシャンはとっくの昔にオブジェという三次元の世界に到達していた。ポロックの時代には、まだ、デュシャンのもっと先を行く革新性は理解されていなかった。いつの時代も自由な脳を持つ人々は少数派。残念というかそういうものだ。だから世界はツマラナイ。時代社会的固定観念でがちがち。お話してもツマラナイ。

額縁を譜面。コード進行を色とか構図としてみるとフリージャズとポロックの作品はまったく同じコンセプト。ニューヨークの巨大なアトリエの床の上。ペンキ缶に筆をどっぷり。滴り落ちる絵具。床とカンバスの境目無視でびしゃびしゃと筆を振る。これを狂気とか出鱈目といってしまうえば、もちろん、そうなのかも知れない。私には狂喜。いい加減な記憶で申し訳ないけれど彼の絵画の根底にアフリカ、メキシコの土人の絵があった。これもジャズと同じ。

と、フリージャズがなんだか分からない。一応、聴いてみた。でも、騒音にしか聴こえないとか難し過ぎとか違和感を覚える方は、ポロックの絵を見てみて。でも、分からない？ うーうーん、感じないと私は理解するから、まあ、いいや。それで。でも、そうなる私とか私の師匠連仲間たちとの根源的な接点はないということになる。まあ、なんか変な論理なのだけれど、私は美術、文学ちゅうのはおこがましいけれど物を書く。こっちでの接点という接点もある。ややこしい人だねえーっ、裕センセは。多重人格メビウス君っ！

明日はドライバーの仕事。勢い付いて3。うーん、やっぱり自分で、仲間も含めて薄利多売の手弁当家内制手工業的フリージャズをもっと聴いて欲しいという気持ちが強くなってきた。とはいえ、「癒し系の時代」。無理なんだろうなあーと思う。

でも、本当に正直に思う。「癒しを求めるおっさんたち」。それは君たちが初志貫徹しないで日和見君したから「そうなった」。社会だ会社の歯車になったから癒しを求める。俺はいらんだ。初志貫徹の合間に癒しの時間が来る。癒しの密度が違うぞっ、おっさんたちよっ！

と、本日、カミサンとアウトレットモールに行く。その前に、すぐ脇のファミリーレストラン「フランチ」不埒じゃないぞ。私は、このレストランが大好きなのだ。物価の高いフランスの外食。一番安いビックマックメニューが1000円。このレストラン、一皿頼むと添え物は食べ放題。ポテトフライからお米、パスタ、温野菜……。カミサンとワイン付きで二人で2000円。日本の感覚では安くはない。でも、こちらではとんでもなく安い。たらふく食べた。そして、私が愛して止まないのは金持ちがいない。下の中=私たち。から中の中ぐらいまでの人たち。この感じは大好きなのだ。皆、それほどお金はないけれど、ちびちゃん連れてたらふく食べようねーみたいな感じはいい。ハロウィンのバカンスでもあるから、ファミリーも皆ルンルンしている。我々の子育て時代を思い出すからなおさらいいのだ。もう、これで十分に私は癒されている。

フリージャズを文章化すると・・・、ヘンリ・ミラーの「北回帰線」になる。

なんか、わたくし、裕センセは派手な生活、というより一日中ベートーベンみたいにピアノを弾いているのではと思い込んでいる読者様がいらっしゃる可能性がある。

えっ、いない？ あっそ。二十代。現代美術家だった頃。一日中作品を作っていた。ボルドーの小さなアパートは制作中の作品で一杯。安ワインと安ビールをがぶがぶ。午前零時、そうとう酔っ払っているのだけれど、近所のディスコに踊りに行った。べろべろでばしばし踊った。そういう生活をしていただけで、突然、坊主刈りにして毎日プールに通って水泳を独学で覚えた。もう、二十四時間、芸術で頭も体も一杯だった。「あれから三十年・・・」。

昨晚、ドクターX5をユーチューブで見る。布団の中で。今朝、八時半起床。台所の片付け、ベッドメイキング。カミサンは忙しいのだ。来週のドライバーの仕事の書類を作り、ルートチェック。ハイパーマルシェへ買い物に行く。帰宅し、カミサンと昼食。カミサン、すぐ仕事。自宅ですけど。私、コーヒー。お玉割ゲーム。それから夕飯の仕込み。

まあ、超平穏で平凡な時間。外は雨。なんかこういう時間がどんどん多くなっている。そりゃそうだ還暦近いんだもんねえー。とはいえ、午後四時。ピアニストへの変身タイム。こっからは昔に戻る。こういう平穏平凡から一気に酒の勢いでゲイジユツカに変身する。っても、二時間ぐらい。それから、また、平穏平凡に戻る。鶏唐と味噌汁を作る。どうせ作るなら美味しく作りたい。作りながら我々の先日のコンサートを聴いているのだ。

まあ、仮に自称ということにするけれど、結局、裕センセがゲイジユツカとして大成しないのは、このバランス感覚が災いしていると申し上げる。だから結婚して子供が二人いて持ち家があるということになったわけだ。二十代の独り者の俺にぶん殴られそう。過去の自分って自分なの？ 自分ってやっぱ現在しかないの？

「絶滅寸前フリージャズ」という記事を三篇書いた。やはり、絶滅して欲しくない。皆、年を取る。好々爺化する。私は先人を切って還暦前に好々爺。でも、ピアノを弾く時だけ、本当にその時だけ、無謀だった若人の私そのものになる。好々爺にさえなれない癒しを求めるおっさんたちは私とは関係がない。頭の中は、たぶん、AV(アダルトビデオ)だろう。癒し？ 嫌らしいと思う。他人に縋るなど申し上げる。おっさんの癒しなんぞ、若い優しい女の子という妄想。本妻に優しくない旦那が外で癒し。商売女しかいないのだ。女と金。寂し過ぎ。いやしいのだ。セックスはお金では買わないという主義。女子の意見は分からない。女子の方が計算が上手いから私には分からない。うちのカミサンは計算が下手だから、はい、だから私と結婚した。すいませんのありがとうっ！

と、昨晚、ここまで書いた。究極のフリージャズは阿部薫だと思う。沖至師匠が東京へ連れて来た。沖師匠の返事はそっけない。「死んじゃったら、おしまい。ダメだよ死んじゃ」でした。でも、沖師匠は一度だけ泣いた。ように、見えた。エリック・ミモザをバビロに連れて来た。裕イサオ、佐藤真、エリック・ミモザのトリオ。「イサオ、ありがとう。本当に久し振りにいい音聴いたよ」。この時の映像はユーチューブに入っている。沖師匠がこんなこと言ったのは初めてなのだ。少し経ってから、師匠が阿部薫を新宿ピットインに連れて来た時の記憶が重なったんじゃないのか？ と私は思った。

エリック・ミモザ。彼も五十になった。私のリールユニットのギタリスト。リール大学エレクトロニクス研究所の所長。とんでもなく頭がいい。あははっ、ワールドオーダーにも筋肉むくむくの東大工学部出身の野郎がいる。こういう超高性脳は必要。天才系が人類の未来を切り開く。ミモザの不思議なところは、いい旦那でいいパパ。ここだけ、私と似ている。狂気が凶器にならない人だ。

やはり、凄いステレオで聴いて欲しい。真師匠のドラムスは完璧。



珍しく午前中、素面で書き始めた。素晴らしい秋晴れ。

中々、高年脳に入らなかった残り400のコード(和音)。これが覚え方を変えたら突然入り始めた。一気に50ぐらい覚えた。このペースだと1年後ぐらいには習得できる計算になる。当然、私が長い間できなかつたことをやっているからピアノのレベルはぐーーんとアップしたことになる。自分のピアノの音が私自身の未知数の領域に少し抵触し始めていることになるから、新鮮。

私がフランスで運転免許を取得したのは26年前。娘が生まれた時。2歳の息子がいた。私、家内、息子、娘の乳母車。電車移動の限界。当時、日本人団体旅行の全盛期。私は旅行関係の人材派遣会社のアサイナーだった。1日100人のアシスタント、ガイド、通訳のアサインという激務。自動車学校に通う時間的な余裕はほとんどなかった。土曜日のみ。でも、考えたら32歳だったのだ私は。若かった。

時間がないから初回からいきなり2時間のレッスンを受けることにした。ご存知の方もいらっしゃると思う。フランスはいきなり路上運転なのだ。大失敗だった。2時間も路上で緊張を強いられる。気分が悪くなった。最低20時間のレッスンを受けないといけないのだ。それと交通法規の試験。50問中45問以上の正解。複数の正解が1問の中にある。まぐれ当たりができないシステム。

この初回の教官が体育会系。助手席で怒鳴る。「もっとスピードを出せっ!」。生まれて初めて車を運転する人間に怒鳴られても・・・。「君のような頭で覚える系が一番習得が遅いんだよ!」。私は本気で腹を立てレッスンの後、校長に教官を変えてくれとお願いした。2度目のレッスン。若い穏やかな教官。でも同じことを言われた。「あなたのような頭で覚えるタイプの人は全般的に習得が遅い傾向があります。40時間ぐらいレッスンを受ける方が多いですね」「私にはそんな時間的な余裕がないのですけれど・・・」。穏やかに言われたから腹は立たなかった。6時間目のレッスンぐらいからその教官のスケジュールと合わなくなったらしく70ぐらいの白髪のお婆ちゃん教官に変わった。

「なんか私のような頭でっかち系は覚えが遅いって二人の先生から言われました」「ははあー、そういう人は頭で覚えればいいのよ」。このお婆ちゃん。まず、車のメカニズムの説明から始めた。クラッチとはなんなのか。ギアーとはなんなのか・・・。どうしてそういう操作をするのか・・・。突然、私の脳が反応した。自動車学校の校長に、以後、私のレッスンはこの先生にお願いする。もし、先生の都合と合わない時はレッスン自体をキャンセルすると伝える。

ここからはもろ自慢話。その結果。私のレッスン時間は22時間。最後の2時間は試験前に念のためと言うことでお願いした。フランス語の読み書きができない私の交通法規の試験。49問正解。通勤電車の中ですべて習得した。フランス人でも難しいすべて一度で合格。この自動車学校ではなぞの日本人として歴史に残ったらしい。モーモロンシーの森の裾野の小さな町の学校。「フランス語ちょうろくに読めないのになんなんだあの成績は?」「レッスン22時間!最短記録らしい。あいつ無免許運転してたんじゃないのか?」。校長、「わっ、メイドインジャパンの凄さを思い知ったわ!」意味不明な発言。

中古のトヨタカローラDXを購入。それから毎週末。海、川、湖と水辺へ向けて家族4人で走り捲った。その時の風景が一冊の単行本になった。家内? 当時はペイパードライバーだったのだ。あれ? 彼女もすべて一回で合格している。ははは、試験官が同郷だったという……。今は進歩して直進ドライバー。小技ゼロドライバーだから田舎しか運転できない。

その伝説の日本人は今やパリのリムジーンドライバー。私の銅像が立つ日も近い。嘘。本当にピアノの習得と同じ軌跡を描いている。

私見ではピアノと言う楽器は歌わないと思う。ロングトーンが出せない。弦楽器なのに打楽器だからだ。パソコンみたいだから感情移入がし難い。鍵盤、キーボード。楽器が重い。演奏しながら踊り難い。向こうは一切動かない。こっちが蠅みたい。重量級の楽器なのだ。西洋の理知が凝縮されている。

さっき練習していて……。マイケル・ジャクソンのヒューマンネイチャーを弾いていたら、なんか不思議に歌い出した。調性は違うのに「あなた と わたし 仲良く あそび まあしょー 大きな栗 のおー木の下 でえー」。マイケルの歌の歌詞が、その意味が凄く悲しい。要約すると、道に人々が闊歩している。女の子たちが大勢いる。でも、僕はホテルに閉じ込められている。大スターの閉塞感。

なんか、私の、そう、とても難しいピアノ演奏で「歌ったらどうなるのか?」と思った。歌、癒されたい。うーん、難しい。私は他者に癒しを求めたりしない。自分で自分を癒す。そう言う難しい人間だから抵抗がある。でも、私があなただを癒すことができるのなら……。うーん、分からない。音楽はそう言うものでもあると言え言えるけれど。

ちょっと、試してみようかな。

この曲は、私の最初のユーチューブ動画。会社を辞める直前に作っている。自分への癒しだったのかも知れない。隠れた歌詞は「籠の中の鳥はいついつでやる」。そして、私は会社と言う組織を出た。

明日から忙しい。ドライバー業と娘たちのレストランの内装工事が交互に来る。ブログを書く時間もピアノを弾く時間もなくなる。とは言え、会社を辞めてから暇な時の方が多い。半分定年シフトとしては丁度良いと思う。まあ、以前は自分で思うのだけれど本当に家族のために頑張っていた。今？ 暇だから手伝いに行く。そんな感じに変わった。まずは、カミサンが居てピアノを弾いて、暇な時は息子と娘たちの手伝い。正しい高年と言う気もする。ただし、パパママがいつも後ろに控えている感。こう言うのは嫌い。要請があればバットマンみたいに出て行く。掃除だ大工仕事は私が一番上手いから当然にして行く。と、べたついた親父は「きもい」とわざと現代語にする。究極の個人主義の国で我々は生きているから、フランス的な距離は必要なのだ。でも、自慢ではないけれど我々の愛情の磁場は相当に強いと思う。ゲイジュツカ夫婦だから、たぶん、どこか普通ではない所もあるはずだ。変な両親を持った子供達の方がずっとまともな生活をしている。と、一見するとそうなるけれど、どこかに我々のへんてこりんな血が流れている。

フェアリーさんの本日の記事の中に坂村真民先生の詩がある。私も以前、詩を書いていた。私にとっては詩とは書くものであり、実践するものと理解している。拝読するものではない。自分の人生を素晴らしい詩に近付けるためにこそ、読むもの。

いじめられて よくなり

いじけてしまったのは 駄目

ふまれて おきあがり

倒れてしまったのは 駄目

いつも心は燃えて いよう

消えてしまったのは 駄目

いつも瞳は澄んで いよう

濁ってしまったのは 駄目

五十三年前に父が私のために買ってくれたヤマハU1。今でも福島の実家にある。時々、実家のピアノを思い出す。私の人生を決定付けた重いオブジェ。

娘が気を使って今日はレストランの工事はお休みにしてくれた。明日から毎日五時起き。書類は作らないといけないし、ルートチェック。複雑な行程だからかなり時間が掛かる。

昨日は家内と朝から娘たちのレストランへ。私はトイレの天井。水漏れで傷んでしまった。これを修復。窓の隙間風対策。入口の防寒カーテンの設置。厨房入口の修理……。一日では無理。家内は内部の装飾の変更。初めての冬越えだから諸々の準備。かなりハードな一日だった。お昼も結局、中華手打ちラーメン屋に行く時間がなく、近所に新しくできた小さな韓国料理屋でビビンパ。これがなかなか美味しかった。午後二時半ぐらいに入店。娘、アドリアン君、家内と私で食事。+ワンちゃん付き。食事をしていたら息子が入って来た。間もなく博士論文の発表があるから家内と夕方、ギャラリーラファイエットにシャツとネクタイの買い物に行くそう。その前に、大学に提出する履歴書のレイアウトを娘がやるとのこと。建築大学出身だからプロなのだ。息子、一週間前から禁酒減量。70.6kg 0.6がなんとしても減量できないって。今日、ネパールの相撲の試合なのだ。一時期、飲み過ぎ食べ過ぎで89kgメタボ君していたのに半年で19kg減量。なかなか根性ある奴だ。175cmだから今の体重が丁度いい。筋肉質だからぴったりだ。娘のモデル体型と真逆。

家内と工事をしていたら娘とアドリアン君とワンちゃん来る。娘の右目回りにパンチの青痣。「おっ、アドリアン、俺の娘になんちゆうことすんだっ！ お前っ！（笑）」「パパ、さっき掃除機掛けていたらホースが飛び上がって目にぶつかったの」「お前、理科系完璧主義者の割に結構ドジするよな。まるで夫婦喧嘩したみてえー、あはははあー」。それから皆で黙々と工事。アドリアンはなんかの雑誌の電話取材でやり取り。時々、ワンちゃんの散歩を家内がする。息子は履歴書の訂正。

夕方、家内と息子。買い物。なんども娘に電話。いいシャツとネクタイ……。値段、ぎょ！ママがそんな高額なものは買わないと言っているしかし凄く素敵……。娘がじゃお祝いにあたしが買ってあげる……。二人で帰ってくる。息子、入るなりいきなり上半身裸。シャツとネクタイ。元々ある背広を着る。「あのねえー、ここパブリックスペースなんですけど……。裸は止めて」と娘。息子、まったく気にしない。「見て見てっ！ シャツとネクタイっ！」。まあ、素敵だ。でも、娘。「シャツネクタイ背広、三つが光っている。なんか一つマット感が欲しい」パパ「うーん、背広とシャツ。シャツとネクタイ。ダニエル・クレグしてる。三つ揃うとちとキラキラし過ぎだな」。結局、更に新しいネクタイを買うことになった。息子の浪費癖は治らん。江戸っ子というのかパリ生まれの本物のパリジャンなのだ。宵越しの金は持たんみたいな感じ。アドリアン「いい感じだと俺は思うけどな」。息子と大の仲良しなのだ。

パパは流石に疲れてきて「ねえ、ビール頂戴」それから「赤ワイン頂戴」。工事を黙々としながら黙々と飲む。娘が手打ちラーメンに行けなかったから夜は日本のソバ屋に招待すると言い出した。前々から行こうと言っていた所。「日本と比べたら高いけれど料理のレベルは日本以上だとあたしたちは思うし、雰囲気は東京そのもの」。家内渋る。そんなに散財しなくていいから……。パパはって聞かれたから「おっ、いいよっ、いこいこ」。私は前々日に高額なチップを頂いている。自分で皆の分を払えばいいと思ったのだ。「でも、ワンちゃん付き、ダメなんじゃないの」「電話で聞いてみる。でも、黒いマント着せると本当に静かにするから大丈夫」。結局、娘がレストランに電話、予約は取らないとのこと。「それで、ワンちゃんは?」「あっ、聞くの忘れた」「まあ、いいや、ダメ元で行こう」。

アドリアンはスクーター。我々は娘が私の天敵ウーバーを予約。私は興味津々。まあ、良くできたシステムである。我々リムジーンドライバーの仕事が激減した理由が分かるけれど、でも、リムジーンって星付きレストランみたいなものだから折れる訳にはいかないだろうと思った。

ソバ屋。一時間近く並んだ。いやぁー、実に美味しかったし雰囲気が確かに東京だった。マスター「すみません、お待たせして」「いえいえ。でも、おトイレいいですか?」「どうぞどうぞ、左の奥です」「本当、申し訳ありませんっ、長時間お待たせしてっ」「いえいえ、でも、なんか大の方まで行きそうになりました」。無表情のマスターが急に笑顔になって笑い出した。

夕飯の後、雨の中、家内と北駅まで歩いた。我々には珍しく、あまり、会話をせず黙々と歩いた。でも、お互いの胸中は良く分かっている。

午後8時半に帰宅。明日は夜の仕事。酒を飲む。夕飯はまだだ。疲れて来るとなんとなく詩的な言語と呼ばれていた諸々が脳内で蠢き始める。今朝、息子の親友マクサンスからメール。司法書士なのにDJなのだ。彼も新しい彼女、新居と忙しい。裕イサオなんちゅうおっさんと付き合っている時間がないのだ。とは言え二人でエレクトリックユニットを立ち上げる話は続いている。メールにこれを聴いて欲しいと添付されていたユーチューブを聴きながら書いている。うーん、28歳がやりたい音楽が良く分かる。私も大好きなのだエレクトリックな癒し音楽。都会の音楽。素敵だ。まあ、彼の感性にお任せ。私は超絶単純なピアノメロディーのリピート、時々、ジャジーみたいな感じかな。いいよ、やろうよな。マクサンス君はリール在住時からの息子の友達、大学の同級生。息子の親友とユニット組む親父と言うのもなかなか粋だと思うんだけど・・・。

私の家内は現代美術家。でも、ジャズメンと同じく食えないからオリエント絨毯の修復の仕事をしている。どちらも最上階のアトリエが仕事場。仕事のない時は、息子と娘の手伝いにパリへ。親父の私はドライバーの仕事がない時は、地上階のサロンでピアノ小説ブログと籠りのおじちゃま。家内が籠りのおじちゃまを小旅行だ息子のアパートの修繕、レストランDETOURの修繕と世間に引っ張り出す。

パリ首都圏の人口一千万人。私、家内、息子、息子の彼女、娘、アドリアン君、ワンちゃん。1983年に小さな白いスーツケースと共にロンドンから来た男。その男はパリの郊外に小さくはない家を持ち、ミュージシャン仲間を持ち、裕センセ家族は計6名と一匹となった。この極小のパリの深海魚のような家族の絆は途轍もなく強い。たぶん、弱肉強食のグローバルな水槽の中にいるからこそそうなったと私の理科系脳は分析する。これはパリ首都圏の顕著なベクトルなのだ。

他人他者が信用できないからこそ、少なくとも家族ぐらいはユニットでいようと言う意識のベクトル。ちょっと、悲しいけれど、そう言う時代なんだろう。家長と言うバンドマスターの手腕が一番大きいと判断する。えっ、花鳥？ そう、私はフリージャズなのだ。



五日間の激務が終わった。私は水曜日がオフ、社長は木曜日の予定だった。二人ともあまり寝ていないから真ん中に一日挟まないと持たない計算だった。当日と前日オーダーが二件。我々のオフ日に重なっている。行くしかない。結局、五日間、睡眠不足のまま仕事となった。オフのはずの社長から電話。「裕さん、トイレ済んだ?」。私はバンドーム広場近くのホテル「ウエスティン」のトイレから出て来た直後。このホテルのトイレはフロントを通る必要がないからプロドライバーご用達なのだ。「えっ、トイレ済んだ?」「うん、裕さんの一日の行き先は全部読めている」「えっ、後付けてんですか?」「ふおふおふお——っ、向かい側におるのじゃっ!」「あれ、今日、仕事でしたっけ?」。ホテルの向かいにミニバスを探す、ない。「向かい側にいるんだけど・・・」「ありゃ、ベンツだったんすか?」。歩道を渡る。この時、ジャズメンの感が働く。社長が私の側に来る可能性もある。しかし、立ち場関係がおかしくなる。私が先に向こうへ行くのが筋と一瞬で判断する。フリージャズも社会生活に役立つと申し上げる。「あれ、今日、休みだったんじゃないですか?」「うっしししー、心配してたところ、そう、なんか仕事こないねえーってこないだ話したところから昨晚、電話」「あ——、私も心配してましたよ」「うちのサービスに粗相はないから、料金か本社からの圧力か、単に出張者がいないのかって俺も心配していた。結局、単になかっただけ。あはあはあは。ねえー、手打ちラーメン、今晚いこいこ」「いいですけど、相当遅くなりますよ」「裕さんがこないだ美味いぞって満席のお店紹介してくれてから気になってしょうがないわけ。食い意地悪いから」「じゃ、車掃除してから行きますよ」「りゃ、俺、あっ、車で帰らないと明日、早朝なんだよな。飲めないわけか? 裕さんだけ飲めば・・・」「九時ぐらいになりますよ、行くの」「ちと、遅いわな。じゃ、来週にしよう。俺もおしっこ」「なんか、自己愛弁当の食べ過ぎ、ご飯ばかりで大の方が出んのですよ」「裕さん、それをね、日本語で、ゴホンっ・・・・・・・・・・・・・・・・、大問題ってゆうのお————、あはあはあは」「羽毛お——っ、いい年こいて、また、始まったっ!」

大体、社長、火曜日の睡眠不足飲み会フォアグラレストランの前のカフェのカリントウの話、思い出しては爆笑」。女の子の家のトイレにカリントウ。「ねえ、トイレになんか浮かんでるよ」。こういう馬鹿話をしている時の社長の顔は群馬県のいたずら少年そのもの。本当に嬉しそうなのである。

もちろん、私は社長とは呼ばない。名字にさん付け。火曜日、二人とも睡眠不足なのにお客様へ紹介できるフォアグラ専門店の探索兼飲み会を強行。我々は真面目だから自分で食さないレストランにお客様のご案内はできないのだ。パリ、レ・アール。二十年振りなのだ二人とも。まったく違う風景。東京の渋谷である。私の方がかなり早く来た。昔、良く来たジャズクラブの偵察に行く。サンセット、サンサイド、デュック ドゥ ランバート。店内とプログラムを見る。観光客相手、バックのプロモーター、レコード会社、ラジオと完全なるコマーシャル。私が出演することはないだろうと確信する。ジャズは場末で蠢いているものと再認識する。元気になった。

十時間ぐらい寝た。娘から電話。ワンちゃんを火曜日まで預かっているから「パパ、おとなしくしてる?」。今週末はマドリッド旅行にアドリアン君の誕生日プレゼント旅行。アドリアンのご両親のプレゼント。「ママは?」。私は二階に上がる。いない。あれっ、電話電話、こっち、寝室、気分でも悪いの? 違う違う、電話頂戴。顔のパックをしていて動けないのだ。ぎゃはははあ——、お化けっ、はい、電話。

ここまで書いたらワンちゃんVoyou=チンピラがお爺ちゃん=私に飛び付いて来た。ところで、久保の兄貴にご教示頂きたいのだけれど、ワンちゃんの餌。ドックフードのみと言う娘の指示を破っているのは唯一、「私のみ」なのですけど。さっき、フラドポテトをあげてしまった。また、娘に叱られる。内緒にしているのに浮気みたいにばれるところが超面白い。ワンちゃんの反応でばれるのだ。

以前、一度だけ書いた。私は幼少期、秋田犬の「富士」と一緒に過ごした。小学六年まで。ヒグマのような大型犬だった。彼が家の中に入ることはなかった。物置と犬小屋と庭のみ。富士の食事はすべて「余りもの」だった。ドックフードなんてなかった。どうして私たちが食べているものを犬に食べさせてはいけないのか、この超絶的に素朴な疑問が高年にはどうしても浮かぶ。

また、涙が込み上げて来る。堪える。十二歳の私を道の向こう側で待つ母。私は咄嗟に母の顔を見て道に飛び出そうとした。ほんの数秒先に富士が飛び出した。車に激突した。道の真ん中で横たわる。数分後、立ち上がり普通に家まで歩いた。六日後に物置の中で動かない富士を見た。死というものを私は初めて認識した。辛い、本当に生きている側に。今でも、「身代わり」と言う言葉が脳裏を過る。私は慢性的鬱ではあるけれど、自殺には反対。富士が身代わりで自死を選んだ。残された私は生きるしか、当然にしてないということになる。もしかすると、彼を語ることが生者の務めとも思えるのだ。

分からない。こういうことをブログ記事にする意味があるのかどうか。うーーん、私自身の脳内の整理という意味はあるかも知れない。しかし、他者に報告する必然性はない。以前、一人のブロガーが実の父親の死顔の写真を記事に載せていて衝撃というより非常識という印象を受けた。インターネットにアップする意味が分からない。でも、彼の追悼の文章は素晴らしかった。作家志望の方だったので、実父の死も記事にした気概ということで私は一応違和感を和らげた。当然、私はそんなことはしない。作家なのであれば「写真は要らない」はずだ。と、思う。死とかエロスや神という概念と同じ。写真には写らない。結局、ここまで書いて書く気力がなくなった。私の父の入退院の繰り返しという現状。こういう時にパリでプータローをしている私という人がなんなのか分からなくなる。本物のプータローならまだしも真面目な意図的なそれだから辛くなるのだ。

芸術芸能の道は親の死目には会えないと昔はいわれた。それぐらいの覚悟は確かにある。けれど、体温のない「もの」。これでは会うということにはならない。私個人は長寿願望は一切ない。けれど、私の両親は生存していて欲しい。記憶になって欲しくない。なにもする必要はない。いるという意味は大きい。墓石に「ごめん、心配ばかりで・・・」。これでは意味がないのだ。

こういうことは私には稀なのだけれど、少し、混乱しているのだと思う。そして、どうして詩的ではなく私的なことをブログとして書くのかもなんか良く分からない。結局、混乱しているということになる。そうすると書くという行為は無駄ではなくなる。どうして混乱しているのか？

日本への再帰国が必要になってきたからだ。父の容態の悪化。

フェルナンド・ペソアの膨大な断章のことを考える。なんとなく凄くブログに似ている気がする。ヘンリ・ミラーの「北回帰線」も途轍もなく長い断章という風にも見えるからブログに似ている。アナイス・ニンの日記も同様。ブログという形式が文学というものに抵触できるのか分からないのだけれど、考えてみたら「内容次第」という当たり前の結論になる。「公にされることを前提とした書き物」。これは書籍もブログも同じベクトルにある。

私は、私自身が父親でもある。私の幼少期、両親の私の設計図とレールはできていた。田舎には良くある話で、その局地的な地域では大変に優秀な子供ということになる。相対的なものに過ぎない。でも、両親からすればそんな俯瞰図なんぞいらない。ポジティブな映像しか映らないのだ親には。私は自分の子供たちに真逆の対応をした。自由にさせた。それだけだ。

両親の設計図、レールをすべて無視というより暴力的に破壊という感じがする。そういう人生になってしまった。もう少し、私の別の能力を引き出して欲しかった？ そんな贅沢はいわない。十分に私は今日まで守られてきた。私の馬鹿脳を理解して欲しいとは一切思わない。第一、常磐炭田の炭鉱街で五歳からピアノ教室になんぞ私は通っていたのだ。あれ、これがそもそもの両親のミスイクにずっと後になった。裕イサオが誕生してしまった。

まあ、心配ばかり掛けて来たことは良く分かる。「お父さん、僕が医者ですか？ 病気なのは僕です。他人の治療なんかできません」「どうしたいんだ？」「詩人になりたい」「それは職業ではない」「僕は、職業ではないもっと別のものと思います」「それは一理ある。天才は芸術家、哲学者、数学者の三つ。医者なんぞ二流の頭で十分」「お父さん、じゃ、僕はその一番最初のものになります」「詩では食って行けない」

「じゃ、小説書きます」「ダメだ」、なんかその時閃いた、「じゃ、絵描き」。なぜかというのか、父は頷くしかなかったのだ鬱病の四十九キロのキリストのような私には。

こういった願望の定義があるのか分からない。動物には元々あると推測する。私には珍しく熟考していること。単純な疑問「私には長寿願望はない」。でも、これは58歳という年齢上の願望？ 仮に90歳の私が「そう」思うのかが分からない。むしろ、余命が短くなれば生への執着心が強まるようにも思えて来た。

私は芸術家とはいわないけれど、芸術の世界に長年携わっては来た。そのベクトルでは長寿という時間はあまり問題にされない。夭折が非常に多い。スポーツ選手と同じで芸術家生命みたいなものはあると考える。年齢的にはほぼスポーツ選手と同じ。科学者とか数学者の基礎理論は20代で構築される。それから研磨され完成は30代半ばぐらいという印象がある。芸術もほぼ同じチーム。デュシャンができあがったものの繰り返し=商売。これは本質的なことではないと考え美術界から消えたのが33歳の時だ。自分に厳しい人というより芸術至上主義者なのだ。

仮に私の人生を80とすると。4分の3を消化？した。残り4分の1。これが長いのか短いのか？ 私の芸術家生命はとうに終わっていると仮定すれば、クリエイターというベクトルで考えればあまり意味のある余生ではない。とはいえ本当に私見なのだけれど、文学という世界はこの芸術家生命の期間と別のものという感じが強い。金子光春の晩年の三部作。これは高齢者にしか書けない。凝縮した穏やかな凄みは途轍もなく迫ってくる。仮に、もし、私にまだクリエイターとしての余力があるとすればピアノではなく、この分野であろうと推定している。ピアノはデュシャンのチェスに酷似している。暇潰しなのだ。でも本気の。クリエイションというよりゲームという感じなのではと思う。

三島由紀夫が自決したのが45歳。阿部薫は29歳。バン・ゴッホは36歳。芸術という非日常の世界へ旅立ってしまった人々の亡くなった年齢を考えると、私は十分に長生きしたという気もする。

昨晚、家内と飲んだ。「俺さ、まあ、いわゆる芸術家生命はとうに終わってるけれどさ、あと、20年ぐらいの余生。まあ、いつ消滅してもいいんだけど・・・」「あら、あたしが困るし息子も娘も困るわよ。おじいちゃん業が残っているからそれは困ります」だって。「ふむ、おじいちゃんとして生きる。うーん、なんかいい感じだよな。お前、なんかちょこちょこ最近作品作り出したよな」「重苦しいのは嫌になった。軽い軽やかな作品を作りたいわけ。天使がキーワードかしらね」。

あまり書きたくはないことを書く。いや、一般論としてならいいと思う。

遺産相続。このごたごたは無量大。いろんなケースを私は見させてもらった。

もっとも醜いと思うのは、両親の死を望んでいるハイエナのような感覚。このハイエナ感は嘔吐する。醜い。両親は自分で稼いだお金を使い切って清々と旅立ってくれるのがとても美しい。兄弟間のごたごたもなくなる。

私の父が末期であること。心臓内科の権威の弟のメールですべて把握した。

唯一、私ができることは、生きている内に会いたい。それだけだ。

父が残すであろう遺産。兄弟間ですべて話が付いている。こういうことは本当に美しいと思う。醜くない。これは、長い間、芸術という世界に私がいたという遺産なのだ。そして、そういうことになったというのか、それができたという、つまり、恵まれた環境、家庭に育ったという、これこそが父が私に刻み込んだ遺産。心の遺産と申し上げる。っても、持って欲しい。第一孫のうちの息子が大学教授になるまで、持って欲しい。もう少しなのだ。私の息子が、親父の息子である私が勉学を放棄したこの放棄を私の息子が親父の学歴に迫っている。もう少し、生きていて欲しい。

こういうブログを書く意味が自分でも分からない。いや、生きている内に書きたい。読めないことは知っている。医者にならない名義が芸術家だった。結局、大成しなかった局地的な神童的長男。すいませんとしかいいようがないのだけれど……。文学はすべて過去から来るような気がする。親父の死というここからしか書かれないのだろう。どうして生前に書けないのだ？ 人間の性なんですか？

理論とか論理とか分析とか「そういうもの」が絶対的とは思わないけれど、そういう数字という客観的なものは必要だと思う。感情とか感傷とか人間的なものを一旦排除することも鳥瞰的に世界を見るということで考えれば必要かも知れない。とはいえ、別に世界を鳥瞰する必要はない、けれど、鳥瞰するというこの脳内の自由は凄まじく素敵。神目線かも知れない。脳という臓器のキャパシティーは半端ではないと思う。人間と呼ばれる動物しかこれはできない？ うーん、イルカの方が上の気もする。

以前にも書いたけれど……。一昨日、最寄駅に降りた。若い人たちが声を掛けて来た。アンケートかと思い「結構です」と足早に家路。だれかが追って来た。日本語が突然聞こえた。「あなたは日本の方ではないですか？」。かなり正確な発音だった。

「えっ、そうですけどそれで？」。日本語のパンフレット。「人類の将来は」。ここで意図が分かった。「ごめんね、寒い中、私は一切の信仰はありません」。

これは本当に嘘なのだ。私は信仰というものは大切だと思っている。フリー、ジャズ、沖師匠、真師匠、オリビア……。私は仲間たちを信じている。それから大が付く自然。アニミズムだろう。巨木、巨石、圧倒的に信じている。でも、既成のものは必要ない。ブランドは私だと言っている馬鹿にそれ以上必要ありますか？ でも、自信過剰ではなく、実際にそうなのだ。いや、皆、ブランドなのだというユートピック人間。なんか不思議に仏教的な精神状態にいつの間にならっている。変な例えかも知れない。独学で仏教哲学を覚えたと言うより、生きて来た実感と私の論理脳が仏教的なものとの近似値を描いた。だから、私自身の信仰なのだろう。

昨晩はコンサート。二日酔い。少し久しぶりという感じでバビロ。パトロンのシィファルの弟のイケン。体格の良さに今更ながら驚く。胸筋、ぶっとい腕。ガスボンベを片手で階下まで持って来た。私がお会場のセッティング中に。ライティングとか終わった時に真師匠、沖師匠が順番に入ってくる。沖師匠「どもども。今日は昼から飲んじゃって、ちと、ブレイクな」真師匠「沖さんっ、今日もでしょっ！」「まあな」。真師匠のドラムのセッティングが終わった。ケイが入ってくる。わっ、女連れだ。一目で彼女と分かる。真師匠「はい、皆で中華中華」。いつもの美人三姉妹のお店へ。安くて美味しい。焼きそば、つくね、鶏の辛煮。ワイン二本開けた。会場に戻る。ありゃ、結構、人が来ている。日本人女性が多い。沖師匠のガールフレンド軍団。今回は各自が何人か連れて来たから結構な観客数。沖師匠が最近、賞を取ったクラシックピアニストを紹介してくれる。「わっ、俺のピアノ聴いたら倒れちゃうんじゃないの？」「えっ、そんなことはないですよ。最近、ジャズの勉強始めたんで」「おい、ジャズはよ、勉強するもんじゃねえー」。少し絡んだかしら？ コンサートの後、もう、目が少女漫画目に彼女はなっていて、なんか親密になった。やっ、やばいっ！ 「ええーっ、イサオさん、帰っちゃうのおーっ」「うん」横の女友達「彼ってさ、自分で愛妻家とかいってるわけ、恐妻家なんじゃないのおーっ」「あのね、俺は恐妻家ではないよ」。

結局、女の子たちにお酒をおごり捲り、赤字となった。帰り際、沖師匠が「あれ、イサオ、帰っちゃうの。まだ、終電まで間があるよ。お袋さんと親父さん、元気してる？」「あっ、師匠、お袋は元気です・・・」「イサオのお袋、すげえーっんだよ、綺麗だし、朗読から司会、プロのいかしたお袋だよな。親父さんは無口だけれどいかしたお医者さんだよな」「まあ、じゃ、師匠、すみません、お先です」。雨の中、ぼーっとう傘を差して裕センセはパリの夜道へ。家路に着いた。脳内に蠢いた過去の映像的なものは書かないことにする。

昨晩のコンサートの編集をしながらこれを書いた。



親父は半分定年しているような感じである。ジャズのピアノ弾きでは食えないからリムジーンドライバーをやっている。どちらも大した収入にはならない。でも、住宅ローンはない。借金もない、妾もない。要は酒代と煙草銭があれば粗食だからなんとかなる。

娘が青い顔でレストランをやっている。親父が昼間っから酒ではなんかバランスが悪い。レストランの掃除に行く。満席だったから、先日食べ損ねた手打ちラーメン屋。なんとなく焼きそばが気になっていた。注文する。美味しかった。けれど、手打ち麺、シンプルな鶏ガラスープの方に分があると思った。ぎしぎしのお店に一人で入るのは営業妨害的ではある。まあ、いい。入口近くの窓側に一人席があった。中華店の窓に東洋人が座っている。これは絶対に客引きにはベター。

ロレット教会のメトロまで煙草を吸いながら歩く。ここは娼婦たちが集まる教会。マグダラのマドレーヌが守護神だからである。ジャズメン的になんかイカしていると思う。まあ、俺たちに立派な建物はいらんなあー。音の大聖堂かな。と昔みたいに詩人目になる。あれ、サマーズの大竹さん、この前に立ってたよな・・・。

メトロ十四番。サンラザールで乗り換える。サンラザール駅はヘンリ・ミラーが恋人のモナを待っていた駅だ。毎々、思い出す。十三番へ。娘たちのアパートの掃除とワンちゃんの散歩に行く。親父が娘のアパートの掃除？ 考えられないiiiiiiiiっ！ という親父は私のブログを読む必要はないし、読まん。

と、世代交代の時期が迫って来たのだろう。

昨日、私の師匠沖至から23日のコンサートのお褒めメールが来た。これは、凄い事なのだ。ジャズ史を築いて来た巨人の一人から褒められる。うーん、私も三流は脱出したんだろう。まあ、よくぞっ、このレベルまで来たどおーっ、俺っ！ とやはり嬉しい。

なんか本当に変なドクターX的笑い話。90歳の仙台の母方の伯父さん。画家。先日、賞を貰い東京の授賞式に母と行ったばかりだったらしい。妹の旦那が末期と聞いてホンダシビックに喪服と香典を積んでいわきに駆け付けた。母方の私のおじいちゃんは小説家というよりエッセストかな。河北新報にエッセイを連載したりしていた人。私の本名の名付け親。「光孝(みつたか)」、光孝(こうこう)天皇かららしい。長男は東映の俳優だった。次男、画家。お袋、オペラ歌手、司会、朗読、キルトアーティスト、料理はプロ級のマルチ人間。伯父さん、青汁以外薬ゼロ。毎日、神社の階段上り下り。仙台市内は徒歩。モンスターと私は畏敬と共に呼ばせて頂いている。私のピアノの良き理解者。みつたか君、バン・ゴッホみたいだね。

90歳の伯父さんが、毎々、親父の足揉みをしてくれたりと仙台から駆け付ける。うちの親父は86だ。この体力差は凄い。

沖師匠のメール。その前後に妹、弟からのメール。主治医から弟へのメール。なんか良く分からないから弟に質問する。返信が来る。妹にお袋の状況、素人目から見た親父の状態を聞く。すぐに返信が来る。妹も弟も超多忙なのに日本人は凄いと毎々思う。返信が凄まじく早い。とんでもない時間に返信が来る。日本午前5時とかに。ありがと  
うっ！ 遠距離の苦しみを彼らは理解しているのだ。うるうる。

裕センセの家族。親父、弟、義弟(中高の私の同級生)、義妹が医者だ。当然、主治医も医者だ。えっ、なに言ってんの？ 俺、弟、主治医の高校の先輩。しかも、弟は主治医と同じ心臓内科の日本名医10選に選ばれている男。出身大学も格上。しかも、その馬鹿長男は地元では「その馬鹿振り」で名を知られている。ちょっと、違うな？ うちのお袋は地元で一番有名なおばあちゃん。そう言えば、いわきのコンサート案内に「なんと、なんとっ、あの人の息子さんですうーっ！」って書いてあったな。

主治医の気持ち、皆さん、分かります？ おまけに義弟がいる。こちらも格上。高校の先輩。地元で知らない人はいない。その嫁の妹がいる。実に良くできた妹だから腰の低さは凄い。まあ、馬鹿長男ストーリーも含めて地元の軋轢で鍛え抜かれたのだと思う。それと、見た感じがパンダそのものだから愛され癒し見てくれが上手く作用していると「診断」する。

と、パリのジャズ屋、俺だけじゃないけど、諸々の人に迷惑を掛けながら吸血鬼のように生き

延びる。

でね、我々の医者家族の中で、一番の格上が親父なのだ。これは主治医が可哀そ過ぎ。弟が末期の告知に駆け付けた。

親父自体が診断を下したのだ。「お前ら、俺は、まだ、大丈夫。心配性だな」。違うな、これは裕センセの文体。

「大丈夫だよ。彼(主治医)は少し心配性だな。いいよ、光孝、急いで来なくて」と言ったと推測する。弟からのメール。50年間、無数の死亡診断書を書いて来た親父がそう言うので大丈夫という判断をするしかないと思います。親父の診断に任せようと思います。サンドイッチの主治医。すいませんっ！ 本当にっ！ ミュージシャンだから良く分かる。演奏し難いだらなぁー。

なんか、段々、日経新聞の「私の履歴書」みたいなブログになって来た？ 「私の履歴書」を読んでいつも違和感。たとえば、「あまり勉強のできなかつた私が、辛うじて東京大学法学部に入学した頃・・・」、こういう文章が散りばめられていて一般人が読むと？ 謙虚自慢文体。もしかすると私のブログもそんな感じになって来ている？ そうなのかしら？ 私自身の自慢話なんぞ一つもない。唯一、地元でも少し有名「馬鹿長男として」。わっ、裏自慢太郎っ！ 羽毛っ、めんどくせいなあーっ！ そういうことならそれでいい。読み手の問題というより、うん、自慢話なんだろう、本当に。表裏含めて。ただし、自分の位置は客観的に把握しているのでご安心下さいっ、パンツは履いてます。私は私のピアノの技量を自慢したりはしない。そういうレベルではないからだ。でも、息子と娘・・・、鼻の下が伸び切り馬鹿顔になり垂れ目。親馬鹿の子亀になる。どうせどうやってもお自慢になるのであれば、そのまま書く。

本日、小田原高校で二番だった南足柄山の神童と呼ばれた親父が奇跡的に退院した。東北大学医学部大学院研究室、高血圧の研究を三十三歳までやっていた。国費留学生として世界一周を二度やっている。突然、研究が嫌になり臨床医になった。東北大学医局の派閥の一つである常磐内郷病院の内科医となる。すぐに副院長。院長。引退時は理事長。院内の医者はずべて東北大学出身ということになっていた。外科の先生だけ、そうではなかった。この上下関係は私には分からない。というより、子供心によく分かっていた。おませだったのだ。

常磐炭鉱従業員の長屋が盆地の窪みにあった。親父の病院は小山の上。私たちの家も小山の上。上から目線そのままの立地になっていた。フランス建築を模した木造のオシャレな病院でNHKの朝ドラの撮影が行われた。中卒の入れ墨親父たちの家族が住む長屋。そこを通過して私はピアノ教室へ。この違和感。

そして、究極の自慢。私は、その違和感を一度も上から目線的に分析したことはない。人に上下はないと幼少期に感じた。そして、今持ってそのスタンスを貫いているところが、素晴らしい人だと思う。病院、看護婦さんたち、ちやほやされた。しかし、それは私の位置がそうだけで、私自身へ対するものではないと理解していた。中二からジャズばかり聴いていた。そのベース音になっている。頭のいい子供が社会を上から見たりはしない。鳥瞰する。そして、位置を客観的に把握する。すべての世界の一番は局地的なもの。ビル・ゲイツの富も地球に限られる。そういう風に私は当時から理解していた。

お袋。日本の最高学府を出た人が毎日延々とテレビを見ている。おかしいんじゃないですか？ 親父、「えっ」。私、「お母さん、そんなもんというのか、そうであればいいんじゃないの」「あんたを、音大に行かせていればって少し後悔するけど」「あっはははっ、お母さん、音大に行っていたら裕イサオは存在していないよ」。

どうして、金のごたごたが起きるのか私には理解できない。ブランド品。私は必要ない。唯一、Isao YUと書かれたTシャツを着るかも知れない。本気で作ろうかと思っている。現在、ピアノ、ブログ、もし、小説第十一作が書かれる時、美術家としての新作と言うのか過去の未完の作品が発表される時の名前は、芸名の裕イサオになる。本名は既に存在していない。本名の私はリズムジャンドライバー。たぶん、私の家内も息子も娘も、私は裕イサオになっているはずだ。呼称は別だけれど。家内は「タカ」。子供たちは、わっ、当然、「パパ」。アドリアン君の方の義理孫は「パピピアノ」。一晩一番小さい部屋で1300eurosのパリのパラスホテル。フランス人の普通の人たちの月収と同じなのだ。まったくもって泊まりたいとは思わない。もちろん、お金持ちの方にとっては大した金額ではない。でも、私は普通の金銭感覚がなくなった時、高圧的態度とか、上から目線とか、こういう病気が始まると思っている。仮に私が泊まる金を持っているとする。でも、泊まらない。私は迷わず、一晩36eurosのホテルへ行く。外からフロントを通らずに出入りできる。煙草を吸いやすい。だれが泊まっているのかまったく皆関知しない。家族の時は更に楽しい。パーキングの横にピクニックテーブルがある。スーパーに買い出しに行き、外でわいわいやる。最高。

でね、おっ、私が毎々、ぎょっ、てなるのは・・・。

当然にして、「私のような貧乏人が泊まっている」と思う。そもそも、貧乏な人が旅行なんてしない。それはそうだけれど、私は貧乏。本当に貧乏なのか自分でもよく分からん。しばしば、煙草が買えない。八百円。貧乏定義して問題ないと思う。でね、その安ホテルのパーキング・・・。BMWとかベンツの四駆とかが止まっている。これぞ、フランス。見栄がない。泊まるだけならこれで十分と思っている富裕層。日本は遅れている。金持ちが高級品、高級ホテル・・・、金持ちを見せないことがフランス流の粋という域に早くなって下さいというのか、無理だわな、文化の成熟度があまりに違う。明治乳業のプロセスチーズのままなら、うん、それはそれでいい。水戸納豆があるから。だから、安易なおフランスは止めた方がパリ症候群患者は減るだろう。それでも、もちろん、構わない。それぞれがブランドなんだというユートピックな裕センセの意見。たまには、ちゃんと聞いた方がいいどおーっ！

私自身が医者の子、しかも、長男。医者の世界は非常に狭い。子供たちが「他の仕事」、この構図はないところが多い。どうしてなのか今以て分からない。社会的ステータス、安定した、しかも、高給。そういうところは分かるけれど、正直、私には詰まらない仕事。ヒューマニストではない人間が医者になるなんて言う方が本末転倒しているからダメダメだろう。

ここで、お笑いなのが、家業を継ぐ優秀な子供たちと、やくざもん系と別れる。私の高校の番長がうちの親父と大学の同窓。あいつはやくざになり、私はジャズ屋になった。我々は馬鹿ですと言いたいんだけど、なんか、少し違う。医者「だけ」が職業では世界は破滅する。そう言うことです。

わっ、本当に不謹慎で申し訳ないのだけれど、すいません。私は人間の修理より車の修理をしたい。ちょっと、違うな。心の修理。うーん、ちょっと、ある。でも違う。未来、そう、未来の子供たちを助けたい。分かり難いかも知れない。医者じゃ無理です。

あら？ そう、米倉涼子さん。超格好いい。凄く綺麗な方。でも、あまり色気を感じない。そこに嵌った私。理科系とは言わないけれど、なんか美貌とさばさばした男感のアンバランスって超素敵。結婚したいぐらいです。バシッ。

「うざい」、私は高年だから使わない。でも、あまり綺麗な音でないからこそ、その意図が非常に分かり易い。「マジ」も私は使わない。でも、二文字の音楽的なリズム感は悪くないと思う。毎々、私が奇妙に感じるのは「全然」、この後には否定形が日本語では来るはず。「全然、オーケーです」。短調と長調が一緒になった。音楽のm-5M7に似ている。

昨日は、少し奇妙な感じだった。娘たちのレストランの掃除。息子のアパートで姿見の設置、掃除機ホースの修繕。息子と昼食。娘たちのアパートの掃除。ワンちゃんの散歩。サンラザール駅で家内のコートを購入。近所にサイズがなかったからだ。「パリっとしたコンビニパパ」というブログ記事を書こうと考えた。起床後に一つのメール。私が諸々をしている間に複数のメール。そのすべてが、死にかかわる内容だった。寒波のパリをワンちゃんと一緒に私自身がお散歩した。死、高年、夫婦・・・、嫌でも諸々の事を考えるしかなかった。

マルセル・デュシャンの墓碑銘「死ぬのはいつも他人なり」。暗号のようだけれど、私は死の認識、それを考えること、それは生者にしかできないと解釈している。死と書くと文学的な観念論みたいな感じになる。でも、現実。ただ、自分のそれではない。生々しい現実なのだけれど、どこか詩的で文学的だし、官能的でさえある。我々は生きている間に複数の死者を見る。自分のそれを生きている内に分析しておくことは悪い事ではないと思う。インターネットでのアンケート。曖昧な記述になるけれど、二十代から四十代。(自分の)長寿は困るみたいな回答が凄く多いのに驚いた。ついでに早死にしたいみたいなブログも沢山出て来た。現在の私は長寿願望も早死にしたい願望も、どちらも無い。「マルセル・デュシャンさん、ご自身の死について考えますか?」。八十歳の老人へなんという質問なんだろう。「はい、この年では考えます。自分が消滅することに快感さえ覚えます。私は元気です」。自分の死。他人のそれではなく自分のそれは生きている内にきちんと設計するべきと私個人は思う。川端康成の老年の自殺は少し怖かった。私が若かったから。作家という人間は、それぐらいの気概がいる。と、私はずっと思っている。

すでに、この記事自体が「うざい」。極論すると文学とか、とりわけ、文学と限定する。言葉が素材だから心に直撃する。それ自体がすでにうざい。そして、文学を志向するみたいな意識はさらにうざい。となる。当然だろう。

私は頭の固い人間ではまったくない。ただ、詩神経になにかが抵触すると「うざい男」に急変するのだ。お詫びも込めて以下、記する。

先日、賞を取られたピアニストの方が私にピアノが必要ならどうぞと言ってくれた。私は日取り、ベーシスト、オリビア・セママとのデュオのビデオを撮りたかった。打診のメールを打つ

。丁寧な返信。どうぞ、特殊な変則的な演奏はしない方にはお貸しします。大切なピアノですので。それへ対する私の返信。ご厚意を踏みにじる「うざい男」からのものだ。要約する。

ピアノをお借りすることは中止致します。あなたがあなたのピアノを大切になさっている気持ちが良い分かりました。

私が私のピアノを大切にしている。同じことです。私のピアノは特殊な変則的な奏法に耐えてくれています。

ピアノが音楽ではなく、弾き手が音楽を作ります。この、私見では、もっとも歌わない楽器。だからこそ、私が歌わせたい。

私は私のピアノの中に永眠したいぐらいです。

折角のご厚意を踏みにじる私という「うざい男」。自分で少しうんざりする。でも、パリの日本人ジャズメンの背骨なのだ。

帰宅後、家内に諸々を伝える。「あのね、俺、小説十一作目を書こうと考え出した」「タイトルは？」「十一番目、これだけ」。家内が、そのタイトル、途轍もなく素敵だと頷いた。



ピアノの練習をしていたら、突然、思い付いた。「小説サイトを立ち上げる」。来年。

私も私の家族も皆元気だ。父も退院した。でも、なにか不思議な空気。死を凝視しないといけないようなことが起きている。親族ではないにしても、非常に重い。私の中の詩神経に強烈に触れて来る。この神経に触れるものはブログ記事にはどうしてなのかならない。スナップ写真と記念写真の違いみたいな感じで、後者はどうしても小説とは言わないけれど文学と言う額縁に入れたい。などと言いつつ、私は額縁は破壊するのみとしか思っていない。タイトルも突然のように決まった。「11e」フランス語のオン

ジェム=十一番目。単純に脱稿するであろう小説とすれば十一作目になるからだ。

文学賞に何度も応募した。一次選考で九作が落選。一作のみ引っ掛かった。以上なのだ。それ自体はそれでいいし、才能がないと言ってしまうと納得できる。問題は九作はお蔵入り。お蔵入りする小説を日本語でフランスで寒波の中黙々と書く。鬱病が再発するだろう。しかし、書きたい。じゃ、最初からインターネット化すればいいとなる。読者がいてもいなくてもいいのだ。開かれている。私にとっては初めての執筆になる。おもしろそうだった次第。私が書きたい小説？ ヘンリ・ミラー、フェルナンド・ペソア、以上なのだ。ストーリーはない。長大な思索の断章と談笑。これだけなのだ。そして、それを書く体力気力気概がまだ残っている。ならば書けばいいのだ。

ピアノ弾きながらこう言うことを考えているって不気味。ピアノ？ わっはははあ——、黒帯に着々とにじり寄っている。本当に私は「うざい男」だとしみじみ思う。だから、私のブログも小説も読まれないし、音楽も聴かれない。でも、うざいから折れない。馬鹿じゃね。

私のブログの唯一に近い読者の方からメッセージを頂いた。「うざい＝折れない。そんな風に読んで来ました」。自分の二つの記事を読み返してみた。私が意図していないのに、その通りの文章になっていた。流石だと思った。

私のピアノの持ち味。ある意味の短所でもあるという構図。激しい演奏、エモーショナル、挑発的……。フリージャズ自体が「うざい音楽」。その上にこういう更なる要素が来るから、私は相当に「うざい男」となる。客観的にもそう思う。でも、「そういう時代＝草食系男子」という「うざい」の対極にある男たち。私は好きでも嫌いでもない。「うざい＝負けず嫌い」という公式も成り立つように思う。そうなのかも知れない。私はだれに負けたくないのか？ 私自身である。他者はどうでもいいのだ。自分に負けた他人なんぞ、私には興味がない。社会、会社、結婚……。諸々の歯車の一つになる。別に構わない。いや、大切なことなのだ。私が言いたいのは納得せずにそうなる男子。女子のことは分からない。そういう輩の愚痴なんぞいらん。あんたの負け、以上。

セルジー・ポントワーズの巨大ショッピングモール。家内の買い物に散歩を兼ねて付き合う。流石のフランスもクリスマス前は日曜日も店舗を開けるところが増えた。カトリックの教えとグローバリゼーションのせめぎあいなのだ。それと、行政の認可。かなりの人出である。試着室で高年旦那の前でファッションショー。ウインクしたり、モデル歩きしたり……。やはり、家内は芸術家と言ってしまうと分かり易くて癪である。可愛い人だ。高校の国語の先生とか保母さんとか幼稚園の園長先生に見える。

私が二十代の頃、白いスモーキングに黒い蝶ネクタイ。「アラン・ドロンとパリでお会いする会」。この仕事を会社が請け負った。社員としてボーイをしなければいけなかった。その姿を先輩方は「おっ、場末の中華屋のボーイ」と評した。自分で鏡を見る。その通りだった。家内と腕を組んでショッピングモールを歩く「場末の中華屋のボーイの三十年後」を考えてみた。ジャズメンには見えない。ジャズっぽい格好は私はしない。音と生き様しかないからだ。外見は必要がないという「うざい男特有」の理論である。アルジェリア出身の床屋家族と出くわす。いい感じだった。彼には、私はリムジーンドライバーと云ってある。

巨大ショッピングモール。私、家内を含めてクリスマス前のプレゼントの物色で蠢く。この平穏な生活、庶民的な時間。家内が物凄く愛おしい。でも、ごめんな、もう一つの非と言う日常もある。私はそっちの世界「にも」いる。分かって欲しいなと思った。家内はそうは思っていない。すでに、旦那との日常の中に非があるからである。家内の中にも。だからこそ、家内にとっては芸術なんぞ些末なことなのだと思う。だからこそ、芸術家。私が辞表を出した世界に家内はいる。

ほとんど年末前の家内との小旅行が年中行事の一つになって来た。去年は？ 風呂の中で考えた。寒い中歩いた記憶がない。わっ、俺もある通のハイマーさんの兆候？ 私は認知症にならないほとんど極北にいるタイプ。私になつては医師会が困るはずだ。うなわけねえーって！

アル中ではあり得る。確かにピアニストの認知症、聞いたことがない。風呂から上がり家内に聞いた。「昨年、どこ行ったっけ？」「マルセイユからアルル、サンレミ・・・」「おっ、そうだった。暖かくて冬に行った記憶にはなかったわけね」。テラスで食事をしてたのだ。

出不精の私は前日まで御託を並べ、できれば行きたくない。今回は、なんか諸々あったし、ピアノの黒帯化は確実に始まったし、秋口、ドライバーの仕事、結構したし、旅行でも行くかとなっている。非常に珍しい。下調べまでした。脳の洗濯初期化。たまにはいいだろう。

寒い時期に北へ。寒いから避ける。家内の提案でバスク地方となった。出張で空港には何度か行っている。ビュアリッツの海岸にもフライトまでの残り時間で行った。なんかモナコみたいだった記憶。金持ちの集積地。私の嫌いな空気だ。でも、海岸線の風景は素晴らしかった。砂浜も本当に素晴らしかった。再度、確認しに行ってみる。バイヨンヌの町は行ったことがない。それからスペインのサンセバスチャンへ海岸沿いにレンタカーで走る。

バスク地方。フランスの一部なのだけれど、スペインのカタルーニャ地方と同じく独立精神が強い地方。何度か書いた、ちょっと「うざい」感じもする。バスク地方と言うと私が一番最初に脳内に浮かぶもの。サッカー選手のベクサン・イザラズ。日本語の表記が分からない。165cmの世界チャンピオンフランスチームのデファンス。こんな小さなデファンスも珍しい。まあ、バイキングみたいな精悍な顔。猛牛のような筋肉。人体鎧みたいな人でなんかバスク地方＝闘士というイメージに相応しい感じ。

昔、ドゥゴール空港の入国審査で、高校生ぐらいの女の子が「国籍は？」「はい、バスクです」。横にいた私は「うざいっ」と思った。独立とか地方とかその気概は分かる。でも、こういう場所での返事ではねえーだろっ、馬鹿っ！ と思った。私が羽田で「国籍は？」「東北です」。同じことだ。でも、その地方の教育なんだろう。それは分かる。でも行き過ぎると極東の国々のまったく進展しない国民感情という停滞を招く。自由と孤立は意味が違う。独立と自由も違う。世界情勢はそんなに単純ではない。

と、そんなことを考えるけれど・・・。三泊四日、「行ってきまあーっすっ！」。米倉涼子さんの声音で。いやあー、もう、彼女のドラマ見捲り。バラエティー見捲り。本当に超美女なのだけれど、あのさばさば感、色気を感じない。超美形のおばさん。この感じが本当に素敵な女優さん。「はい、四年連続で一番なりたいプロポーション女優に選ばれた米倉涼子さんでえーっすっ！」「あっ、どうも・・・。あたし、見せられないの。裸になると酷いの」。まあ、想像は付くけれど、なんか格好いいのに普通のおばさん感が視聴率女王の秘密だと思います。

バスク地方の小旅行から昨晚深夜に帰宅。バスク地方については脳内で風景が消化昇華してからゆっくりと書く。と言うのかやはり小説サイトを新設しそちらに書こうかと考えている。「ピアノは私だ3」。これはジャズ屋のブログ。元小説を書いていた親父になった私。この文学親父は別のものにまとめたくなった。と言うのか「ピアノは私だ3」、これこそ万華鏡的文学とも考えられるから難しい。でも、記念写真的なものは別のサイトにしようと考え始めた。少し、ブログ内容を限定した方が数少ない読者の方々にも、わっ、偉そうに・・・、分かり易いはずなのだ。なんなんだろう、もう少し分かり易いブログ、もう少し分かり易い音楽ができないの？ ともなんとなく考え始めた。

手短にする。旅行中、フランスの高名な作家(12月5日)、国民的スター歌手(12月6日)が亡くなった。テレビは四六時中、その報道。12月5日、私の古い同僚だった方が亡くなった。10年以上、お会いしていなかった。12月7日、複数回お会いしたことのある方のお葬式があった。

あまり詳しくは書けない。3番目の方のリムジーン手配を私は小旅行の前にさせて頂いた。行き先はチューリッヒ。その意味はワンウェイドライブとだけ書いて置く。この手配が心の中の鉄アレイになった。

日が沈む頃、家内と腕を組んでビィアリッツの突端にあるマリア様像を見に行った。正確には礼拝に行った。黒い空、打ち寄せる大西洋の波、そのサウンド。その中に立つ白いマリア様。なんと言うのだろうか？ 美しい？ 生死の境目にいらっしゃると言う少し怖い風景だった。足摺岬、行ったことはない。脳内でダブルイメージになる。

旅行中、社長からチューリッヒへの手配はキャンセルになったとメールが入った。無宗教の私が、なんか、マリア様のお顔をすぐに思った。

一時間半、ピアノを弾いた。まあ、私のピアノ、良く歌っている。かなり難しいテクニックを駆使しても歌っている。これはやはり黒帯化が始まっている証。何度も書いている。ピアノと言う楽器はあまり歌わない。パソコンみたいな感じだからなかなかホトトギスしない。これにエモーションとスピードとスイングを合体させると歌う。西洋理念の権化をジャズ屋は歌わせないといけないのだ。ジャズピアノは少し愛憎劇みたいなものかも知れない。西洋理念、白人社会の理知の集大成をジャズ屋は別のエモショナルな音楽に変える。もちろん、変えなくてもいい。どうしても、私はジャズに拘る。うーん、誤解を受けると困るのだけれど、私はどうしたって日本人。白人ではない。ジャズは黒人芸術の一つ。白人ではない。このレベルで日本人は繋がる。そして、我々もエモショナルな民族なのだと思う。泣いたり笑ったりと感情的なところがある。理知より感情が先に来る傾向があるように思う。そのせいなのかも知れない、心を静めるために禅思想が生まれたりする。

私が日本を旅立った三十七年前。日本で生まれた男が世界レベルの芸術の世界で何ができるのか。これだけしか考えていなかった。まあ、凄い大志。何かできたのか、なにもできなかったのか？ これは歴史と言う鳥瞰図の中でしか分析できないから私本人には無理。沖至師匠がパリのジャズシーンに与えた衝撃は物凄い。私のようなあまり出来の良くない弟子までいるのだ。

フェアリーさんの本日の記事の中に「結界」という言葉が出て来る。初めて知った。とても美しい。聖と俗の狭間。私にとって、間違いなくピアノが参道なのだと理解した。

村長さんよりメール。「ブログとは？ ブログの魅力とは？」。村長さん初めブログ村のスタッフの方々には大変お世話になっているから、私は毎々、アンケートに返信します。第一、無料でなんか私のライフワークみたいになって来たブログ記事の執筆をさせて頂いている。凄いことだ。深謝です。

文学賞の落選記録更新と言う中々できないことを延々とやっていたは、どうしたってめげる。そんな中にブログ村が私の前に現れた。めげた文学親父に再び執筆意欲を喚起して下さった。そして、毎日、文章トレーニングとなった。凄いことだ。

フランスで日本語で他愛もないことを書く孤独に疲れていた。いや、フランスじゃなくてもいいのだ。日本国内でも同じことである。

他者へ何かを文章で発信する。世界とコネクトする。これは大切だと思う。インターネットの弊害も多い。でも、弊害だけではないと思います。ヘンリ・ミラー、とりわけ、フェルナンド・ペソアは絶対にブログに嵌ったと確信する。詩とか文学のもう一つの地平線にブログと言う方法はなっている実感する。携帯小説もしかり。

村長さんにも書いた。

著名人、有名人の書物、記事、コラム……。有名と言うレベルだけで内容は大したことはないものがほとんどである。でも、もちろん、有名になる。これ自体は大変なことでもあるから庶民は拝聴拝読となる。これも当然の成り行きである。でも、どこか腑に落ちない、私には。

久保の兄貴。万華鏡的文学者。

蝶姉さん。エッセストである。

サクライ君。天性の小説家。

フェアリーさん。随筆の名手。

私の父。医師会の後の飲み会。想像が付く。「ご長男は？」。父、下を向き無口な人だから、「医者嫌だと言って日本を出て・・・」もじもじ。私の母、社交家だから、たぶん、「ええーっ、パリで芸術家、素敵ーっ、さすがねえー、あなたの息子ねえー」と心配しつつも女子会では盛り上がっていたはずだ。でも、相当、父も母も心配していたはず。ほとんど行方不明状態だったのである。すいません、本当に。

記憶が薄れているのだけれど、今の内の息子の年だったような気がする。カミサンと二人展をしに郷里に帰った。打ち上げの時、父が泣いた。父が私の前で泣いたのはその時のみ。相当の心労だったことが芸術家目でぎらつく私にも分かった。再度、すいません。

そう言うろくでもない私がフランスで父親になった。

昨日は、息子の博士号取得のための審査委員会に行ってきた。二十八歳。高校大学と中の上程度の学生だったから、息子には申し訳ないけれど学業の方は一切期待していなかった。俳優か看護師さんがいいんじゃないとカミサンと何度も話した。パリ第八大学の一室。推薦する担任教授。国家機関から送られてきた審査団五名。名立たる教授連だ。傍聴席約二十名。息子の高校の同級生。リール大学法学部の同級生。すでに暫時的教授職にあるから教え子。来週以降審査に掛かる人たちの探り。オランダから友達。ロンドンから高校時代の友達・・・。この人脈に驚く。

ほとんど、カフカの世界みたいだった。疑似裁判のような感じ。息子の七百ページの論文へ容赦のない質問が飛ぶ。どうして、何年の法律については触れていないのか？ どうしてその単語を選んだのか？ どうして〇〇については触れていないのか？ 素人の私にはちんぷんかんぷん。カミサンはどうも雲行きが良くないと思ひ込み涙目になっている。私はミュージシャンだからインテリの絡み、ジャムセッションと理解したところがフリージャズも無駄ではないのだ。息子はまったく動じずすらすらと答える。審査団が頷いている。絶対に悪い雰囲気ではないとジャズメンは読んだ。

三時間に渡る超絶的インテリの言葉と論理のコンサートだった。と、私は感じた。審査会の後、結果発表のため会場に戻る。

評価は四段階。当然、四が一番。ただし、事前調査で四はほぼ不可能と聞いていた。ただ、大学教授になるには三以上とも聞いた。カミサンとあわよくば三っ！ とはらはらどきどき。審査委員長のおじいちゃん教授が立ち上がる。「審査員全員、エクセレントと言う評価をさせていただきました。医療法学と言う難しい課題に文学的哲学的詩的な文章が散りばめられ博士論文としては大変に稀である上、非常に斬新な視点を評価させていただきました。彼の輝かしい教授生活を審査団は心から祝福致します。皆さん、彼に拍手を」。

私は意味が分からなかった。会場のざわつきの意味がなんなのか。娘とアドリアン、レストラン、デトウールからのカナッペ、シャンパン、ワイン……。審査団と歓談。「お父様ですか？ あなたの息子さんは素晴らしい。丁寧で穏やかで論文も完璧でした。大いに自慢して下さい」「ありがとうございます」。担任教授は涙目。娘にすり寄る。わざわざレストランを閉店して来ているのだ。「ねえ、パパ、良く分からないのだけれど、評価はなんだったの？」「パパ。四。こんなことは本当に稀みたい」「えっ、四？」「審査員五名が満点を付けたと言う意味。稀だと思う」。

その夜、娘たちのレストランで打ち上げ。アドリアンが素晴らしい料理を作ってくれた。皆、べろべろ。

息子の旧友たちが嫉妬と言う気持ちの悪いベクトルには一切行かないことに実父は感嘆した。息子の人徳であり人格でもある。皆、息子の快挙を自分のことのように喜んでいる。サッカーのサポーターみたいに単純で、私の方がむしろ浮いた。フランス人の友情の厚さに驚いた。善良な友達たちだ。皆、自分の身の丈を弁えている。二十代の連中なのに……。

他人であるアドリアンが物凄く喜んだ。娘は涙目。カミサン涙目。

日本を出てと言うのか追われたみたいならくでもない男の子供たちが、パリと言うジャングルで活躍し始めている。私は究極の反面教師だったのかも知れない。終電が近付き、息子とハグしている時、突然。福島風景が、自分の二十代の風景が、鬱病だったこと諸々が込み上げて来た。ラグビーマンのような息子の体に触れた時、涙が止めどなく零れて来た。私の父が同じことをしたな、と泣きながら思った。



私は自慢にも色々なスタイルがあると思っている。直撃自慢、嫉妬を煽る挑発自慢、まあ、普通の表自慢、それからちょっと込み入った裏自慢。謙虚を装う陰湿な裏裏自慢。でも、自慢と受けるのか結局は受け手のアンテナ次第でもある。たとえば、一年前、家の息子が暫時的な教授になった。これを、沖師匠と真師匠にコンサート前に話した。

「沖師匠、真さん、直撃自慢していいですか？」

「えっ、なにになに？」

「俺の息子、たぁーりりいーんっ、パリ12大学法学部の暫時的なんですけど、でも、教授になった」

両師匠。

「わっ、ずげえーっ！」

「イサオの奥さん優秀だもんなぁー」なんなのだこのリアクションは？

嫉妬の欠片もないから、これでは自慢にならんのだ。ミュージシャンの世界は音のみ。自慢は演奏でやれよな。以上となる。

第一、他人の自慢してなんかなるの？ 自分の音を磨けばぁーか。以上。

そこで分からなくなる。私は息子の自慢をしたいのか？ 父親は辞任している。大体、息子が優秀でえーすってのは、その親である私が優秀とか教育方針を間違っていなかったとか、そういうことを言いたいのか？ 否である。私は自慢をしたいのではなく、単純にずげえーっと思っているのだ。たまたま、実父ただだけ。しかも、家の息子の脳構造は私と真逆。カミサンのそれだ。私の日本での最終学歴は高卒。ロンドンで美術学校に2年間行った。それだけだ。勉強を17歳で放棄しているのだ。この最低な学生だった私から見れば、家の息子の学歴は殿上人。もう、単純にずげえーっとなる。教授連に「お父様ですか？」「一瞬、えっ、俺、裕イサオですけど」と本気で言いそうになっていたところも凄い。

私はフリージャズのピアノ弾き。つまり、子供たちに親の作った譜面なんぞを宛がわない。放任あるのみ。個性を伸ばす？ 馬鹿言っちゃいけない。個性のない人間はいない。伸ばすのではなく封印しない。それだけである。学業とか学歴が問題なのではない。なんでもいいのだ。究極まで行く人間は凄いと思うだけである。義理の息子のアドリアン・カショーの料理、パリの、フランス料理の次世代を担う一人と目されている。凄いと思う。家の息子は学業のほとんど頂点に近いところまで来た。これはやはり凄いと思う。子供自慢をする前に・・・、あっ、教授の一人に私は言ってしまった。「自慢の息子さんでしょうね」「えっ、彼の快拳は凄いと思いますよ。他人みたいに本当に凄いと思います。でも、私は自分の自慢しかしませんよ」。高名な教授の首が少し傾いだのか、流石、お父さんと感じたのか私には分からない。

エッヘン、私の自慢をする。フランスに来て三十四年。フランス語力、高校二年生。えっ、失礼かも知らん。読解、中学一年生。書く、小学二年生。フランス語の勉強は、結構流暢になってから独学でと言うのか日本語のフランス語の基礎文法を三回ぐらい読んだ。後は、すべて、私の家内の愛、わっ、の賜物なのだ。ちょっと、私の独学ピアノに似ているけれど、ピアノはやはり勉強中。大学四年生から大学院へちゅうレベルになっちょる、流石に。ジャズピアノと言う意味です。

ふむ、外人の旦那とかパパと言うのはなんなのだ？ 子供たちの宿題を見れないから、家内がやる。家内は専業主婦ではない。もう、めどうだからまとめてしまう。フランス生活の総務的なものはすべて家内がやる。旦那兼パパは外人。で、私は一日中酒飲んでピアノ弾いてブログ書いて……。とはならんのだ。その負担を旦那として緩和せんといかんから会社に行き、お給金を持って帰り家を買ったのである。パパとしては、フランス語が絡まないものは見た。結局、大工仕事とか料理とかピアノとか美術とかとなる。幸い、私は前者二つはちょっとセミプロ。後者二つはプロだ。

いつの間にか家内と私の分業が成立していた。まとまったお給金、大工仕事、料理、掃除……。これを旦那がやると家内の子供たちへの時間が増える。それと、旦那である私は当時芸術家だったから、「教育？ そんなものは存在しない。戯言です。子供たちの好きにさせる。その本来の姿を封印しない。以上。なんか文句あつか？」こういう野蛮人的教育観の持ち主であるから、家内が「巨人の星」のアキコ姉さん役をやらざるを得なかったと推測する。ある意味、私は星一徹なのだ。根性ではなく自由へ向かえっ！ みたいな。真逆星一徹。家内が密かに子供たちを操縦と言うのか舵を取っていた。ふらふらするから。星一徹はふらふらするならふらふらさせろ、以上。頑ななのだ。

まあ、頑なな外人旦那。立ち悪いよねえ——っ！ 自分で税金申告さえでけんののに。と、私は理科系真面目人間。家内ができること、できないことを分析。それから、私ができることできないことを分析。これが見事にパズルのようにカチツとなっているところが我々夫婦の強靱なところ。

本日は、暇な外人パパ。デトゥールのお掃除、娘たちのアパートのお掃除、ワンちゃん散歩。娘にゆっくりでいいからパパが全部やとくからと言ってあった。「わっ、すべてが綺麗になってるっ！ ありがとう、パパ」。そう、私は家政夫の裕。わっははははあ——。ここだけの話、掃除、大好きなのだ、私は。運動にもなるし……。なんで皆さん？ 嫌いなのか理解できない。気持ちいいスポーツ。

と、私の自慢。自慢の中にすでに私が入っているけれど。でもね、七百ページの息子の論文を家内は推敲したのだ。娘がレイアウト。ずけえ——っ、このバンドっ！ バンドマスター？

はい、家内です。

先日、一人で人工のクリスマスツリーを組み立てた。組み立てながら、うーーん、今年ねえー、考えたら色々あったなあー、と。

娘とアドリアンのレストランのオフィシャルなオープンは3月15日だったはず。その内装工事だ飾り付けだは、すべて、我々とアドリアンのファミリーでやった。アドリアンのファミリーは皆ボルドー在。余程嬉しかったのだろう。ご両親、自慢の息子って言ってた。この結束は素晴らしい。レストランが暇だったのは2週間のみ。現在は、電話鳴りっぱなし予約さえ取れないのだ。昨日、レストランの掃除をしていたら、高年の男性が入って来た。私をスタッフと勘違いしたのだろう。「すみませんっ、なんかね、近所に住んでんだけれど、お宅の記事、諸々で拝見。すべて絶賛記事。凄いねえー、予約入れたいのですけど・・・」「すみません、私、スタッフではないのでシェフにお聞き下さい」。野武士のような大男不愛想、なんかテレビに出て来る日本の偏屈板前そのままだあいつは。めんどくさそうにと言うのか、仕込み中にうるさいなあーと言うのが顔に丸出し。「ウイ」「来週一杯満席」。「えっ、やっぱり、出直して来ます」。私の方が立ち上がり「申し訳ございません。早目のご予約、今後ともよろしくお願い致します」。なんで家政夫がこんなことを言うのだ？ 前回もフィガロの高名なジャーナリストがいかに「俺、有名なんだけど・・・」と言う態度で午前中入って来た。アドリアン、挨拶もしない。黙々と仕込み。「おい、アドリアンっ、取材の方だぞってっ」。ムツとした顔で「ウイ」「やあー、君、前回の記事読んでくれたよね？ 来週の水曜日にカメラ連れて来るけどいいよね？」。あいつは一言「ウイ」。以上。私が「まあまあ、お掛け下さい。コーヒーいかがですか？」「いや、ありがとう、私も急いでいるので失敬」「今後ともよろしくお願い致します」。どう見ても私を本物の掃除夫と思っていた感じ。私はあいつの不愛想を愛している。ジャズメンそのもの。音出している時に声を掛けんなばあーかと我々もなるから同じことだ。美味しいものを作る。あいつの頭の中にはそれしかない。だからこそ、凄いシェフになるだろう。すでに十分凄いけど。野武士の大男に細身理科系の娘。ミスマッチのようでマッチしているのだ。このカップルの結束が大盛況に繋がっている。

そして、何度か書いた。息子がとうとう学生生活と決別した。まあ、長いなんのってっ！ 留年した訳じゃないのに大学、大学院、博士課程と計9年のはずだ。でも、4年前から講師、教授と自分でちゃんと稼いでいるところも凄い野郎だ。はい、自慢じゃなくて・・・、自慢って自分のことを、と理解しているから、「私は彼を誇りに思う」と言う英語式にしました。文句あつか？ セロニアス・モンクちゅうジャズピアノの巨人がいる。関係ないけど。

ところで、カミサンと私は高年だから、なあ———————んの飛躍も、そのための秘薬もない。

カミサン、今年からなんか知らんけれど最上階のアトリエで美術の新作を作り始めている。

私、おっ、今年の秋からピアノ黒帯化が始まっている。うっしっしっしっ。妹にもメールしたんだけど、定年したらピアノ弾きは道具は持って歩けないから世界を手ぶらでぶらぶらコンサート旅行。当然、カミサンとだ。この定年ぶらぶらピアノ弾きには若干予想より早い黒帯化は願ってもないことなのだ。人生の残りの大漁節に繋がる。お金じゃないよ。うで、ぶらぶらとお墓に入る。棺桶はなんなら俺のピアノがいいって、書いた。「お兄ちゃん、それ、凄い斬新い————っ」て返信が来た。妹はピアノの先生なのだ。私のお墓の設計はできている。バン・ゴッホとテオのそれだ。墓石は重苦しいからいらん。十字架も無宗教だから変だ。わっ、そうになると、ちっこいピアノの形のなんか風雪に耐える素材に、私の芸名の後にカッコ本名。以上だろう。自分の葬式なんぞ、私自身はまったく悲しくないから一番安上がりに越したことはない。生きている人たちのために金はある。とは言え、生きている側の都合もあるからお任せだけれど、お墓のイメージは折れないのだ。ジャズメンらしくと言うより、私の言動と掛け離れては私自身に失礼でしょ？

バスク地方。日本と言う国の立地からすると不思議な所である。仮にバスクと言う一つの国があるとすると、その小さな国がフランスとスペインと言う二つの国に跨っている。小さな国の中にフランスとスペイン、二つの大国の国境がある。あまり今回の旅行では感じなかったけれど、バスク地方、生粋のバスク人にはバスクは一つと言う意識が強いはずだ。フランスでもスペインでもないと言う。実際に二つの国を跨って一つの自治体の様になっている。交通機関も自治体の様にまとまっていた。この立地の構造は少し現代小説のそれに似ている気がする。観念的な入れ子の様な。

私が旅した町。バイヨンヌ、サン・ジャン・ピエ・ド・ポル、スペインに位置するサン・セバスティアン、ビアリッツ・・・。

街並みはフランスと言うより私にはスペインに来ている様な錯覚を覚えた。しかも、スペイン側の学校のバカンスと重なっていたらしくフランス領の町を闊歩する人々、皆、スペイン語だった。マドリッドでも家内と驚いたのだけれど、サン・セバスティアン。通りに溢れかえる人々。昼間からタパスとビール、白ワイン。闊歩するあらゆる世代の人々。バカンスの季節ではなかったのだ。素朴な疑問「彼らは仕事をしているのか?」。今回のサン・セバスティアンは学校のバカンス中だったからなんとなく分かる。それでも凄い人だった。フランスではあまりこう言う風景を見ない。単純に南国の人々はいつも外にいるということなのか? 考えてみると、パリの北アフリカ出身者の多い界限。いつも歩道に男たちが溢れているのと少し似ているのかも知れない。ただし、女性と子供を見掛けないところはスペインと違う。スペインの町々はフランスのそれと比べて活気、人の話し声、笑いと人の活力で溢れている。スペインの魅力でもある。そして、なんかどこか懐かしい。この懐かしい感じはポルトガルに行くとき更に強まる。栄華盛衰の臭いの様にも思われる。かつての栄華の名残り。名残りであるからどこか懐かしいのだろう。皮肉っぽいフランス人とはどこかが違う。根底に楽天的なものがあるのだろう。

バスク地方の名産品。ハムの燻製。イベリコ豚。唐辛子。チョコレート。バスクケーキ。美食の地方としても知られている。闘牛、サッカー、ラグビー、そしてバスク特有のスクワット。

今回の旅行で最も印象に残ったのは「人いきれ」と言う日本語と、ビアリッツの大西洋の突端に立つマリア様像である。強面の男女が非常に多い。でも、話し掛けると実に丁寧でお話し好き。どこかが熱い人たちと言う印象を受けた。凄く旅らしい旅だった様に思うのだ。一つだけ残念と言うのか私個人とすれば、まったくフリージャズが似合わない。演奏しに来ることはないだろうと感じた。フリージャズはブルーな冷えた炎の様な音楽だと思うから、彼等には似合わない。燃え盛るギターがやはり風景に似合う。

今、「バスク地方」と言う午前中に書いた記事をアップした。久し振りの素面記事。まあ、飲んでばかりいるせいなのかも知れない。とは言え、アル中と言うのはちょっと本物のプロのアル中の方々に失礼だろう。軽度の依存症ぐらいなんだと思う。主治医が自己申告しているのに認めなかったから本当だ。

米倉涼子さんの大ファン。嵐の番組を見た。翌日、米倉さんのいつものさばさばした感じで桜井君に辛辣な発言の連続。最後に、桜井君がカメラ目線で泣いた。と言う正夢的な夢を見たのだと思う。起床後、「なんか彼女って上から目線のサディストセレブ。もう、ドラマ見ないっ！不愉快っ！」と本気で思った。半日ぐらい経って米倉さんってそう言う感じの人だったか？ 昨晚、その番組をもう一度見た。私のアル中の脳内の幻影だったことが分かった。安心した。付き合ってもいない女優さんと別れ話をするところであった。日本にいたら追っ掛けになっていたかも知れん。だって、さばさばした美女で酒飲み。いいねえー、素敵だ。色気を感じないのはどうしてなんだろう。「うるさいわねっ、ばしいーん」と言う感じだな。

うーん、本当に申し訳ないのだけれど、私は、どうしても西洋の、つまり、クラシックと呼ばれる音楽に感応しない。それと、日本人の私が「それ」をするという根源的な理由が分からない。それと、もう一つの理由が、日本での実態を知っている。教養とか富の象徴みたいな感じがトラウマになっている。金持ちの音楽と言う印象がどうしても拭えない。申し訳ないと思う。

武満徹に怒鳴られるだろう。

クラシックと呼ばれる音楽は、美術の世界も同じで、宮廷の中のもの。庶民のものでは、そもそもない。一つの金持ち、暇を持て余した人たちの楽しみなのだ。だからこそ、究極の文化と言える。ラボラトリーの中で熟成されてきた。当然にして、ワイン、シャンパンと同じく高度な熟成の歴史の上にある。ヨーロッパと言う白人世界が築き上げたものは現代社会のピラミッドのようにも見える。

アインシュタインの相対性理論と同じで、こう言うラボラトリーの中で生まれたものが現在の私たちを支える。もちろん、虐げられた黒人音楽、ブルース、ジャズも、このアンチがあったから生まれたとも言える。

宮廷美術の崩壊はゴヤ辺りからと思われる。衝撃的な個人、つまり、アーティストの誕生は、やはり、印象派からだと思う。クラシック音楽より歴史は短い。でも、これがなんか美術として蔓延した。モネもピサロもセザンヌも凄い人たちだ。歴史を変えた。音楽も美術も前衛の歴史であることをどうして理解できないのか、私の方が理解に苦しむ。

と、分析すると、伝統芸能と言う後世に引き継ぐ文化は大切である。ただ、「それ」を芸術と勘違いしてはいけないと思う。新しい音楽は常に生まれて来る。芸術とか芸能とか伝統芸能とか、きちんと把握しないと、すべてがアーティストになる。芸術と言う世界は、そんなものではないと断言してしまう。

たとえば、痩せた馬面の私がモーニングを着て蝶タイをしてモーツァルトを弾く。常磐炭田の長屋の入れ墨親父たちはゲラゲラ笑うはずだ。猿、西洋の猿回しの猿。これこそ、屈辱的に恥ずかしいから私はやらない。西洋世界はお伽の国と言うことで解釈なさっているのなら、ジャングルと申し上げる。モーツァルト、あんまり、出る幕ないと思う。合わない、空気にね。



ピアノの調子がとてもいい。ピアノ自体の機能の調子ではもちろんなく、弾き手の私の調子がいいのである。何度か書いた、入らない入らないと嘆いていた残りのコードが体内に注入され始めたから、格段に上手くなった。ヘッドホーンで自分の演奏を聴いて、凄いいーって自分で思ったりする。もちろん、落語の「欲耳」なのかと言う疑惑もある。でも、理科系脳分析しても格段に上手くなっている。

来年は、私のピアノトリオはもちろんだけれど、DJマクサンスとの新しいユニットを始動させたい。それと、ジャズフェスティバルとか、もう少し規模の大きいライブに参加したい気がする。そんなに規模が大きくななくてもいいのだけれど、日本へトリオとして行きたいなあーとも思う。パリのフリージャズシーンでは知らない人はいない佐藤真師匠のドラムス。パリ芸大出身のオリビア・セママ、ベース。こういう凄いメンバーに私は支えられているから、パリから直送したい気がする。もちろん、ソロピアノというエコ路線もあるし、ギャラ独り占めだから効率は当然いい。でも、ジャズは一人でやる音楽ではないと思っている。複数の人間のうねり。こうこなくっちゃ。

ところで、私のブログのアクセス数なのだけれど、ブログ内のカウンターはいつも一桁。でも、別のアクセス解析を見ると全く違う数字。30とか出て来る。凄い時は3桁。なんか以前、ブログをなさっている方に聞いたら「その一桁の数字ってFC経由のアクセス数だと思いますよ」と言われた。考えてみると、私のブログを読んだ方からデ  
ツールに予約が入ったりしている。やはり、そう言うことなのかも知れない。いくらブロ愚とは言え、世界中に開かれているのにアクセス3ちゅうのも、えっえっえっ？ となる。手紙とかファックスの方が早いと言うことではねえー。

ユーチューブの方は、チャンネル登録して下さった方が28。総再生数は20000回に近付いている。ありがとうございます。

私は自己顕示欲の塊ではない。でも、フリージャズのピアノ弾き。知名度の低い、とは言え、基本はやはり芸能人なのである。無名の芸術家とか芸能人、これは論理矛盾。うーん、芸術家はありえるなあー。孤高の芸術家が無名でも芸術家たりえる。でも、芸能人が無名ではお話にならん。と、発信し続けるしかないのだろうね。そうだ  
ねえー、私はいいんだけど、オリビアとか若い世代のお役には立ちたいよな。日本ライブツアーはパリのフランス人の仲間たちには魅惑魅惑。なんなら女装ピアニストとかで売り込む？  
でも、昨日、自分の顔を見て鼻から下が دونالدダックみてえーに弛んでいる。やっぱ、無理だわなあー、これじゃ。細い顎の三角が崩壊し、変な四角形になり始めている。顔の筋トレ？ め  
どうだねえー。整形する？ 年取ると全体が小さくなるのに顔だけ、少し大きくなるみたいです。糊代ってんだっけ？ 糊を付ける白紙部分みたいなもやもや領域が増えている。ギャ。

狼顔がいつの間にかセントバーナード これって俳句なの？

なんか十回ぐらい書いているのだけれど・・・。

私の自作ジャズピアノメソッド。50のコードx24音階=1200のコード。現在、血肉化しているのは800。口笛を吹くように繰り出せると言う意味。残り400が入らない。と、秋口まで嘆いていた。コード進行表を見てもできなかったのだ。それが、進行表を見ながらだと320はできるようになった。血肉化したとは言えないから実践では出て来ない。とは言え、半分、諦め掛けていた。もう、高年脳にはインプットは無理なのかしら？ っ。もういいかあー、800で。もう十分ちゅうことにしちゃおうかあーとか考えた。しかし、ここで折れると長い老後ピアノのレベルが2.7流ぐらいでストップしたままになる。私のフランス語力と同じになってしまう。なんか少し悔しい。第一、ミュージシャンに水平飛行なんかあるのかよおーっ！ 延々とレベルアップするのがミュージシャンの宿命なんじゃね？ とか脳内逡巡。

とは言え、あまりに入らないから、ピアノを弾くことさえ段々嫌になってくる。私は別に根性系ではないし、自分に滅多矢鱈厳しい訳でもない。うーん、楽しくやろうぜえーっ、裕センセなどとも考えた。しかし、800だけでは楽しさにリミットが出る。もっと進歩したら更に楽しくなるとも考えた。で、嘆きながら、とにかく延々とできないことを繰り返し繰り返し練習する。イライラしてくる。自分に。うもおーっ、とっつあんっ、しっかりせんかいつ！ 何度やってもできないのだ。もう、泣き濡れて蟹さんと撓むしかないのおーって言う感じになってくる。もともと酷い肩凝りが更に悪化。首が借金がないのに回らない。ピアノのせいなのだ。

でも、あら、不思議。進行表を見ながらやると、かなり、すらすらとできるようになって来ている。それと、ルートレスのコードばかりなのにルート音が脳内で鳴っている。音の組み立てが鮮明に聴こえる。ブルーノートに磨きが掛かっていることが聴きながら分かる。うーん、やはり、やればできるという結論なんだろうな。

今更ながらなのだけれど、なんとなく日本でジャズミュージシャンが所属している芸能プロダクションがあるのか検索してみた。もちろん、なくはない。フリージャズはない。そしたら色々出て来た。簡単に言ってしまうと「私レベルのプロ」の推定年収と言うのが出て来た。実に面白い。年間二百回のコンサートをライブハウスでやったと仮定すると、年収130万円だそうです。それと、ライブハウスでの一回のギャラは3000円ぐらいとも出て来た。やはり、パリとほぼ一緒。要するに食べて行けないから皆、音楽の先生とか、まったく違う仕事で稼ぐしかないという構図。そして、ジャズ屋は僻む。クラシックの人たちは違うだろうと……。同じなのだ。お金の出入りの金額が少し大きくなるだけで懐具合は同じとなる。

まあ、もう、他人事のように友情を感じます、本当に。我々は馬鹿だ。愛おしいねえー、今時ね。

あ——っ、良かったよ、家の子供たちがミュージシャンにならなくて……。もちろん、なってもかめへん。

そうなる、まったくいい加減ではない理科系の裕センセは計算する。「お金を稼げないプロと言う変種」と定義する。そうなる、年金の重みは増す。リムジードライバーのライセンスの価値も増す。要は専業は不可能であるならば兼業プロしかあり得ない。音のラボラトリーの研究員だから薄給は仕方がないということになる。でもね、心が錦と言うとんでもない恩恵を受けるのである。長いのだ余生。よせやいっ！ っの。あら？ 私がボケることはないと診断しているけれど性欲から解放され、悟りを開き、清貧生活もまったく苦にならない。こう言う爺さんって、私的には相当格好いいと思う。なんか長生きしそうな気もするんだけどねえー。まっ、いいか。

私が敬愛するブロガーさんから、要約すると「自慢と他者を誇りに思うことは違う」という示唆に富んだコメントを頂いた。なんかその通りと思う前に、意外と忘れていてドキリともした。

本日、暇な親父は娘たちのレストランの掃除。ワンちゃんケアとやってきた。たぶん、娘の仕業のはずだ。二席のテーブルを親父のために開けていた。予約なしのお客様が次々と入ってくる。電話鳴りっぱなし。娘は「本日は満席です」と何度も言う。

「ねえ、パパはいいよおー、その辺で適当に食べるから・・・」「えっ、満席なのよ、今日は」。ありがたい話だ。

本日のデトウールで食したもの。

ファアグラの海苔挟み お餅の磯辺焼きのミニ版みたいな感じ 海苔とファアグラの絶妙のシンフォニー

トリフのペーストのビスケット挟み すべて自家製 悶絶するぐらい美味しい

焼きアンディーブ 砕いたナッツ パルメザンソース サクサクする緑の葉っぱが乗っていた 口腔オーケストラ

豚の背肉の唐辛子のマリネ カリフラワーを粉末にしたもの シトロンソース 肉の本当の中心だけピンク色 綺麗な焦げ目

参りました しょっぱい 辛い シトロン カリフラワーのサクサク ほんの少しの甘味 なんてこんなことができるのだ？

デザート ココナッツソース 自家製チョコレート バナナ よく分からない、たぶん、ナッツを砕いたのちに作ったビスケットを更に砕いたもの

最後にコーヒー

私が掃除のために到着するなり、アドリアン君。「見て見てっ、フィガロマガジン」。2017フィガロマガジンが選ぶパリの最も美味しいお店二十選。ばっちり記事が載っている。写真、わっ、スーツ姿の息子、私の音楽の相棒マクサンス、ウエイトレスの娘。息子の博士号取得の打ち上げの時の写真。

確実に世代交代が始まっていると思った。

どうでもいいタイトル。爺参上のアリアでも、爺洗淨でも、なんでもよいのだ。ピアノの調子がいいから気分もいい。1200コードの血肉化は可能と言うベクトルになった。こりゃ、私の余生に相当なものをもたらすはず。お金ではないけれどね。お金で心が豊かになる人たちもいる。私は、おっ、フランス的皮肉の嫌味のアイロニー、私は贅沢だからならないのだ。

クリスマス。フランス語だとノエル。カトリックの国に住んでいるし、家内息子娘は洗礼を受けている。私だけだ日本国籍の無宗教は。家庭内異邦人。私は偏屈だけれど、狂信的ではないその国々の慣わしがある。それに異論はなにもない。もちろん、私にも日本のそれが注入されている。わっ、難しい話は止めとく。

クリスマスが近付くとプレゼントの購入。

息子 スマホ 分かり易い

家内 写真の撮れる携帯 後で説明する

娘 なにもなし

私 なにもなし

このなにもなし組に皆苦労する。私は、酒煙草、強いてあげるならば豚もつの腸詰ソーセージ。以上。または、ヤマハのグランドピアノ。以上。または、四六時中音の出せる音楽室。以上。考える側は大変。

家内。2000円の携帯を二台持っている。ガラケー中のガラケー。写真を撮り子供たちに送りたいと言い出した。ここで娘と私は首を傾げる。まず、SMS、MMSの違いの説明に二年は要する。息子はそんな高級ではないスマホで十分だと思うけれど……。娘と相談する。ママがスマホ？ ちょっと、大袈裟に書く。土人が初めてテレビを見た時、どうして画面を人が横切るのか理解できなかった。液晶パネルと家内はこれに近い。うーん、となる。結局、却下となった。

娘。毎年、化粧品、香水なんて言う感じだった。レストラン業に没頭してから化粧ゼロ。ひつつめ女将。こうなるとなにを買えばいいのか？ 家内と頭を抱えた。

でね、ほおほおほお、さっき、私が見付けた。フランスに住んでいるから考えなかったのだと思う。

電動指圧クッション。私と同じ超絶肩凝り人間。これ以上のプレゼントはないけれど……。

おい、おばさん化は、まだ、早いぞってっ！ これぞっ、直撃自慢っ！ 化粧してボディコン着た娘が米倉涼子の横にいたら、娘の勝ちだろう。アリヤリヤ、書いちゃったよ。

本日は、午後からドライバーの仕事。

とうとうジャズメンと同じくリムジーンドライバーも専門では食べて行けない事態になって来た。その理由ははっきりしているのだけれど、あえて曖昧にしておく。例えば大手スーパーの進出で町の老舗テーラーが継続困難になった、同じ構図である。料金は高いけれど上質なサービスが売り物だった。ドライバーを辞める人、会社を畳む人たちが目立ってきた。でも、幸い、「高額＝上質」この公式はレストランとかブランド品の世界では生きている。ドライバーの世界では崩壊しつつあると言うことなのだけれど、結局、交通手段にそんな上質なサービスを求めていると言うことにもなる。時流もあるのかも知れない。消えて行くものは消えて行くしかないだろう。

どうしてなのか、私がリムジーンドライバーライセンス取得のために二か月半、政府指定の学校に通ったのだけれど、私を入れて生徒は十二名。空港とかホテルとかモン・サンミッシェルとかでばったり会った同級生は一名のみ。他の生徒たちは今どうしているのか？ たぶん、老舗テーラーでは食べて行けないから大手スーパーの方へ。噂では一日十一時間ぐらい運転しないと聞けないと聞いた。たぶん、そちらで仕事と言うことであれば、私のルートと重なることはない。第一、その唯一の同級生も先日はホテルマンとしてばったり。ドライバーは辞めたと言っていたのだ。



皆さん、メリークリスマス！

私はカトリックの国に住んでいるので、クリスマスイブは年越しみたいな日。

なんか、凄く久し振りの気がするのだけれど、今夜は家族四人とワンちゃん。裕センセ一家勢揃いです。

ワールドオーダーを聴きながら。

うーーん、なんか今年は記念すべき年だったと今思う。子供たちがです。

私？ うなもんはないと言いたけれど、実は私にとっても、だと思う。

裕センセ一家。私、カミサン、息子、娘、ワンちゃん=4+one  
義理の妹一家。年長の義弟、義妹、長男、次男、三男、孫娘=6  
義弟のお姉さん二人。次女の旦那=3

Total 13+one

裕センセのフランスのファミリーも随分と増えた。

定年組4 次期定年3 次代を担う若者5 その次世代を担うのは1+oneちゃん

小食組 裕センセ 裕センセの娘 義妹の長男 三男

小食と言うのか日本人の私からすれば「普通」だと思うのだけれど・・・

あっ、忘れていた。昨日のお昼のクリスマスパーティーのお話です。近藤等則の「今」を聴きながら書いているのです。

塩味クレップ 野菜のペースト ファグラ メキシカンチップス うずらの卵

私と娘は、ほとんど、「これで」十分

クレップの中にハム、エビ それから、九キロの生ガキ 一人十個は食べないと終わらない

雉四羽の丸焼き 詰め物入り すでにお腹パンパカパン

サラダ チーズの盛り合わせ 十二種類ぐらいあったなあー 義弟が「これっ、美味しいぞっ」 半分無理矢理食べさせられたチーズ 分かり易い描写 くさやのペースト(すかと路地ストの丸木戸佐渡)だっ それから、ケーキとフルーツサラダ

私の胃は、かき揚げそばぐらいでほぼ満杯。と言う状態に「これ」だよ？

でも、物凄く美味しかったし大家族と言うこの感じは、うーん、孤高のジャズピアニスト？ と言う私のような偏屈人間にはむしろ心地よかった。

そろそろ今年のブログを電子書籍にまとめようと急に思い付いた。ついでに、いつから始めたのか確認。2012年の9月12日。会社を辞めたのが同年の5月だったはず。初めての自分のコンピュータを6月に購入したのだと思う。パソコン操作の勉強も少しやった。それからブログを立ち上げた。

今、わざと下書き保存してみたらこの記事の番号1517と出て来た。まあ、よく続くもんだと自分で思う。もちろん、無内容であるにしても、まあ、よくぞと思います。基本的に私は「毎日更新系」。

ブログと共に私のピアノは格段に進化した。ずばり、沖至師匠が以前なんども言っていた「イサオ、おまえ、ブロックコード覚えろ。それだけで食って行ける」と。このブロックコードを5年間で800血肉化したのである。私のピアノは格段にパワーアップした。

と、ここまで今朝書いた。近藤等則「東京ローズ」を掛ける。沖至、日野皓正、近藤等則、スタイルはまったく違うけれど日本ジャズ史上の三大トランペッター。沖至は私の師匠。日野さんは主流派の大御所。トランペットのテクは世界一の一人だろう。近藤さん。実にユニークな人だ。私「も」、と言うのは失礼だとは思っただけけれど、テクの前になんか混然としたもやもやがある。そう言う意味で私も似ている。体質としては私は近藤さんが一番近い。坂田明先輩も含めて。

師走？ だから、ドライバーもピアノも暇だ。暇なのは私だけだから今日は一日、ワンちゃん守り。

快晴。それほど寒くない。画家ピサロが間違いなく歩いた道々をワンちゃんで行く。霜に濡れた芝がキラキラしている。私の住む丘の上の真下に広大な公園がある。セザンヌが描いた水車小屋。小川。佇む男1。ワンちゃん散歩中年女性1。広大な公園に以上+我々。この人のいない空間は素晴らしい。地球の表面を占領している錯覚。まあ、ピサロもセザンヌもゴッホも、「それ」に惹かれてこの辺りに住んでいたのだ。そう、フリージャズなんちゅう挑発音楽をやっているからこそ、私にはこう言う空間と静寂が必要なのだと思う。年だし。

あっ、もう一つ書きたくなった。嫌味アイロニー皮肉……。印象派は美術史上初の超前衛芸術だった。観賞するものではない。スタイルじゃないよ。彼らの前衛精神を守る。そう私個人は理解しているから、わっ、どう考えても芸術家ナノ？ テクテクと路地。土の道。

ポール・セザンヌ「赤いチョッキの少年」1888-1890年

マルセル・デュシャン「彼女の独身者たちによって裸にされた花嫁、さえも」1915-1923年(未完)

この二つの作品の間は27年しかない。

デュシャンは「芸術は定義できない」と定義した人である。これはゼロ次元とか絶対とか極北と日本語で呼ばれるものだ。数学的にこれ以上は不可能レベルに達している。こうなると後続部隊はどうしたらいいの？ となる。

自分なりに解釈し仮定義をする方法がある。私の場合は「自由脳」と定義した。社会的な自由は存在しない。私は脳内の自由こそ、本当の自由であり、それを芸術と呼んで構わないと思っている。マルキ・ド・サドは刑務所の中で執筆していたのだ。そういうことだ。

ゴッホのような絵を描く ショパンの曲を弾く 三島由紀夫張りの小説を書く これを芸術していると勘違いする人々が多過ぎる。すべてその形は過去のもの。しかし、彼らの偉大さになんの変りもない。時代人間史の最先端、つまり、前衛でない芸術は存在しない。美術、音楽、文学と呼ばれる潮流はそういうものだ。後追いはありえない。もし、その世界に生きるのであれば、「その先に行くしかない」という科学者の世界になる。

ここに矛盾が生じる。美術音楽文学、数学的な論理レベルでは「すでにすべてが極北へ」来ている。新しいものの構築は論理矛盾。サイエンスの世界はもちろん無限大。

フリージャズの三流ピアノ弾きを芸術家とは呼ばない。問題は、若い時分にその世界にいた。だからこそ、仮再定義をしないと余生が破滅してしまう。論理矛盾が起きる。

と、年末に難しいことを考えたりする。うーん、一つの例えを以下書いてみる。二人の男たち、58歳。

A フリージャズピアニスト リムジーンドライバー 元芸術家だから偏屈 のように 見えるでも、頭の中には新しいコードの習得以外にはない 阿保 好々爺 固定観念がないから脳は自由だ 嫉妬もない つまり、性欲まで制圧したから完璧な赤貧の人格者になった そもそもから物欲がないのだ

B 大変な家柄に生まれ家業を継ぎ結婚で失敗し諸々の悩みを抱えながらも社長 俺はバン・ゴ

ッホのようになりたかったとずっと思っている 俺は、本当は芸術家になりたかった しかし・・・

ついでにCまで行く。具体的に書くと拙いから「なんか権威のある画家の団体」とする。その会長の独り言。

俺はゴッホのように生きたかった。しかし、会長になるには「そう」はいかなかった。

はい、皆さん、Aが一番正しい。つまり、私。でも、BCの葛藤は芸術的だと思うし、脳内は自由と定義するから優しくしたいと悟りを開くとそう思うようになった。つまり、爺さん予備軍かしらね？ でも、芸術という崇高なものとの葛藤がBCにあるのであれば、それは素敵なことだ。その社会的な立場に脳が固まっていないから・・・。

皆さん、良いお年をっ！ お付き合い、深謝致しますっ！